

山岳時報

時 報

No. 11

1994年5月

京都大学学士山岳会

時報11号発行によせて

高村 奉樹

目次

巻頭言	高村 奉樹	
AACKの動き—ナムナニから崑崙へ	酒井 敏明	
1988年崑崙学術登山隊報告		
地図		
ごあいさつ	中島暢太郎	1
写真		2
崑崙学術登山隊成立の経緯	能田成・伊藤宏範	23
中国西域キャラバンそして初登頂	能田成・毛利尚樹	29
6903m峰登攀概要	人見 五郎	92
チオン・ムズターグ偵察行	乙藤洋一郎	95
帰路のキャラバンと学術班のホータン旅行	能田 成	107
崑崙山脈北麓・アルティンターク断層に沿って	能田成・乙藤洋一郎	
分布する第四紀火山岩の特徴	王暁春	112
チベット高原北縁のアルチンターグ大断層に沿って分布	乙藤洋一郎・板谷徹丸	
する更新世の火山岩の年代学と古地磁気学的研究	王暁春・能田成	116
崑崙魚捕り紀行	寺島 彰	118
食糧報告	睦好 正治	129
装備報告	毛利 尚樹	134
梱包・輸送報告	白井 秀友	139
医療・薬品について	三輪 佳宏	140
白井隊員の肺水腫の経過について	三輪 佳宏	141
高山病発病と経過	白井 秀友	144
1885年日中友好ナムナニ峰合同登山隊報告		
日中友好ナムナニ峰合同登山隊の成立について	斎藤 惇生	151
納木那尼峰先遣隊報告	山田 和人	161
ナムナニ峰登攀記録	吹田啓一郎	164
土壤研究調査報告	岩坪 五郎	175
ナムナニ合同登山に学術隊員として参加して	西山 孝	184

— この表紙の“AACK”の文字はカスティラオによってイタリア語に訳され、セビアにて1503年に出版されたマルコ・ポーロ著『東方見聞録』より採写したものである— 京都大学付属図書館蔵

AACK時報は10号が1987年5月に発行されたのち、ここしばらくとだえていた。毎年の事業報告や計画は届けられているが、時報はどうなったのかと、いぶかしく思われた会員も多いと思う。10号の巻頭言では、当時の近藤良夫会長が、カンペンチンに始まったAACKの中国における活動の成果として、日中合同登山隊（京都大、同志社大および中国登山協会合同）が、ナムナニ峰の初登頂に成功したことを報告し、また、学士山岳会のみならず、山岳部をはじめ若い世代の人びとの活躍が高まりつつあることに、大きな期待を寄せた。事実、その後数年の動きは、本号に酒井敏明が総括して記しているとおりで、まことにめざましいものがあった。時報はそれらのひとつひとつについて、登高の記録だけでなく、それぞれのチームが新しくきりひらいていったフィールドワークの成果についても記載を続けるはずであった。ところが、1991年1月に中国雲南省での日中合同梅里雪山学術登山隊が予期しない大きな事故に遭遇して、われわれは多くの中堅、若手メンバーを失ってしまった。その後の時報刊行の遅滞はこのことが大きくかかわっている。

この間に、AACKは梅里雪山事故調査委員会を設け、近藤良夫委員長のもとに、半年をかけて隊の成立から行動、自然条件など、当面考えられるあらゆる角度から、事故の原因についての調査検討をかさね、1991年11月に堀了平会長がこれを報告書として刊行した。その後、1992年5月から私が酒井、木村雅昭両副会長の協力を得て会長をひきうけることになったが、1993年2月には予備調査にはじまる梅里雪山での学術登山の報告書を編集し

て、総隊長左右田健次が刊行している。

日本側登山隊員のすべてが帰らぬ人となった不幸を背負いつつ、事故調査をつづけ、報告書を編むのはまことに重く苦しいことであった。多くの会員の協力によってこれらの作業がすすめられたことは、当然の責務とはいえ、その労に対して心より感謝したい。しかし、一方では、梅里雪山での遭難について、その原因はまだ十分に究明されたとはいえないことを、われわれは忘れてはならないだろう。近藤良夫委員長は事故報告書の末尾を「われわれは人間の行うことが必ずしも完全ではないことを知っている。われわれに可能なのは不幸な結果を活かし、今後の計画を限りなく「完全」に近づけることであって、本報告書がそのための助けとなれば幸いである」と結んでいる。では残されたわれわれが、この大きな課題にとり組むには、どうすればよいのか。すでに先進的登山からはなれて久しい私にとっては、まことに難しい設問ではあるが、今後会員諸氏とともにさらに考えていかななくてはならないと思う。

最近、『山岳』1993年号（日本山岳会刊）に「今西錦司さんの山」と題して田口二郎さんが記された文章を読んだ。この課題へのひとつのアプローチが示唆されていると思うので、紹介しておきたい（以下敬称略）。田口は、今西の志した山岳学について述べているのだが、今西が登山における直観の重要性を大切にしたことによつて、「今西にとっての山は静止したものではなかった。動いている山、いきている山、と人間＝登山者、との交流、（自然からの情報の）発信と受信の諸相を究めることが、日本の登山の体系化であり、

ナムナニから崑崙へ —AACKの動き—

酒井敏明

そのためには山人と居を共にし、山人から学び、自分自身を鍛えていかなければならない。(今西の)山岳学とはこのように体を張った全人格的な営みであったといえる。」と記した。私は山岳部学生の時、1955年のカラコルム学術調査から帰った今西が、京都大学西部講堂でひらかれた報告会で話したことを思い起こす。すでに、エベレスト登頂のあとであったが、かれは山に向かう人の立場について述べ、ヨーロッパではcouquest of Everestという表現にもみられるように伝統的にagainstであるが、われわれは山に対してtowardの気持ちであると述べたのだ。一方が挑む、であるとするれば、他方は帰依といっていよいよだろう。地球上の未踏の地域、山岳に対するたゆまぬパイオニアの立場を堅持しながらも、西欧と日本人びとの自然観のちがいを、今西はわれわれに伝えたかったのであろう。

1993年5月、われわれ山岳会の有志は梅里雪山に逝った多くの若い友を慰霊するよすがとして、比叡山横川に鎮嶺碑を建立した。碑前の法要にあたって、霜柱の立つ杉木立の中で天台座主山田恵諦師から説法を拝聴した。梅里雪山に逝った人びとは、仏教説話の中にある自ら身を捧げて法を問うた「施身問法」を身をもって実践したのである、と。しかし、山への帰依をのぞみつつ、なお自然のきびしいこたえを身に負うことになった日中のすぐれた友人たちの無念さを思うとき、かれらが残した無言の教示をおろそかにしてはならない、と思うのである。

再びさきに紹介した田口によれば、今西は山を歩くときに山のたたずまいはもとより、木々の葉が照りかえす光のありさまからも自然の動的な変化を読みとり、受信してそれに呼応することができることを登山者に求めた、ということになる。また最近、本山岳会の会員斎藤清明は今西錦司初期山岳著作集『初登山』(ナカニシヤ出版刊)を編集した。そこには、若き日の今西の次のことばが紹介

されている。「冬山は動く。天候が動く。雪崩が動く。スキーが動く。この動中にあって泰然として自己の道を切り開いて行くもの、それがわれらの冬期登山者だ。」詩的でさえある表現の中に、われわれが考えなければならない“すべて”がこめられているのではないだろうか。

山々の初登頂が地理的な空白をうずめる情熱によって支えられる時代はすぎた。しかし、一方では、なお、会員によって、学術的なフロンティアを中国の各地やネパールに求める活動はさかんである。折りにふれて会員に送付している『ヒマラヤ学誌』はその活動の一端を報告したものである。山岳会として、会員による日頃の登山活動や日常の情報交換について、さらにその活性化をはかることが必要である、という声も多い。たとえば、東京ではAACK会員の集いが折りにふれて開かれており、参加者は40名をくだらず年を追って増えている。

また日本山岳会の活動についても、古くから松方三郎、西堀栄三郎、加藤泰安らの貢献をはじめ、今西錦司、今西寿雄も会長として、その活性化に力をつくしてきた。現会長はチョゴリザ登頂者の藤平正夫で、京都支部長は斎藤惇生であり、新しい時代の日本の登山界の展望を開くために、活躍している。わが学士山岳会の会員は山岳研究の分野にかぎらず過去多くのパイオニア的な役割をはたしてきたことはいままでもない。現在では国立民族学博物館を開設しその発展に寄与した梅棹忠夫、民族植物学の学問的基礎をきずいた中尾佐助、人類学者として、日本・ネパールのきずなを深めている川喜田二郎、アフリカ研究のパイオニア伊谷純一郎など枚挙にいとまがない。しかし、時代によって学術登山の内容も大きく変化した。アクティブな次世代を担う会員によって、本会の活動がさらに深められ、多様な発展がなされることを期待したい。

本誌前号に「カンペンチンからナムナニまで」を執筆してから6年ほどが経過した。今となっては少し旧聞に属することになるが、標題に従って、記憶をたどりつつ書いてみよう。

1. 日中合同隊としてのナムナニ

1982年3月～5月のカンペンチン遠征はAACKの第6次ヒマラヤ遠征であり、それまでネパール・ヒマラヤに2回、パキスタン領のカラコラムに2回、アフガニスタン領のヒンズークシに1回遠征隊を送り出していた本会としては、最初のチベットへの旅であった。それまで事実上の鎖国政策を取り続けていた中国政府が外国登山界に対して自国領内の山の一部を開放することを決定したのが1978年である。AACKは創立50周年記念事業としてグルラ・マンダータ(現在の呼称はナムナニ)登頂を計画し、その許可取得までの期間を利用して、7281mのカンペンチンに学術登山活動を展開したという意味があった。

ナムナニ計画は周知のように、同志社山岳会(DAC)と共同して取り組むことになり、AACKとDACがさらに中国登山協会と合同登山隊を編成するという、われわれとしては過去に経験のない、大がかりで複雑な事業主体が実行したものである。AACKは会員9人をこの合同隊に参加させ、未踏峰としては第2位の高峰7694mのナムナニ山頂に足跡を印すことができた。また、当然のことながら、同志社山岳会との協力関係はもとよりのこと、中国登山協

会をはじめ中国各界との友好親善の実をあげることにより、この後の緊密な協調関係を確立できたことは大きな財産として残るものである。

2. 崑崙計画

中国が登山についての開放政策を進めるにつれて、日本を筆頭として諸外国の山岳団体があいついで中国の新疆維吾爾(ウイグル)自治区、西藏自治区はては四川省の奥地にある山々に入域許可を申請し、さまざまな活動をするようになった。AACKの一部の会員たちもそれぞれが個人として属する機関の踏査や学術調査の計画に参画し、実績をあげるものが多く出てきた。たとえば、名古屋大学水圏科学研究所は中国蘭州市にある氷川凍土研究所との共同で天山、崑崙の山岳地域の氷河調査をおこなっているが、樋口敬二、上田豊、中尾正義などがこの調査活動の主要なメンバーとして活躍している。

崑崙山脈の名は三高逍遥歌の一節く通える夢は崑崙の高嶺のこなたゴビの原に歌われていて、コンロンはわれわれの少年時代から僻遠の中央アジアの代名詞として誰しもの胸の奥底深く秘められていた、久恋の山といっても良い。その崑崙の最高峰はウルグ・ムスターグ7723mとしておよそ東経90度線のあたりに位置するものと地図上にあらわされ(1984年6月発行の『中華人民共和国分省地図集』第2版にはカラミラン峠の東に木孜塔格峰7723の標記がある)、ほかにも数座の7000m峰がこの東西約

2500kmにおよぶ長大な山脈には聳えているものと考えられていた。ところが、中国科学者による測量・調査が進行するにつれていつのまにかこれらの幻の高峰群の標高は低くなり、木孜塔格峰の高度は6973mに訂正され、東部崑崙の最高峰に格下げされた。86年8月には7167mの崑崙最高峰が東京農業大学隊により初登頂されたという新聞発表に驚かされるという始末である。

AACKでは崑崙未踏の最高峰チオン・ムズターグ6962mにねらいをしばり、この山に学術登山隊を派遣することになった。会員有志がコンロンの会をつくり、その第1回会合が開かれたのは86年10月30日である。中国側では中国登山協会(CMA)、新疆登山協会、武漢地質学院などに相談する一方、東京農業大学、名大水圏研究所などに情報提供を依頼するなどの準備が始まる。1987年2月には登山許可申請書をCMAに提出し、同年5月の理事会、総会での決定をみて、早ければ同年夏に実施を計画したのであるが、結局は1988年夏に遠征することになった。コンロンの会およびヒマラヤ委員会をたびたび開き、登攀の実行計画を作成し、学術調査計画の細部を詰める作業が続いた。中国側との折衝にはナムナニ計画で接点の重役をつとめた国際交流協会の吉田與和氏の協力をも得、幾人もの会員が訪中して交渉を続けた末、87年8月初めには88年7月～8月にチオン・ムズターグ峰の初登頂と周辺地域の学術調査をおこなうため8～10人の遠征隊を派遣することについて、CMAの許可を得るめどがついたのである。この隊の活動の詳細は本誌の報告によって知ることができる。

3. ヒマラヤ医学学術登山計画

AACKが今まで派遣してきた遠征隊には医師が隊員として参加するのが原則であり、かれらが登山隊員としてだけではなく

医師としても大活躍したことは今さらいうまでもない。日本における高所医学研究者の多くが私たちの仲間から出ていて、活発な研究活動を展開しているし、本会以外の組織が送り出した遠征隊に請われて医師として参加した例もあり、高所医学研究会にも関係者が多い。このことはわれわれが誇りとするところである。

崑崙計画の準備が精力的に進められていたところ、1988年秋に、京都大学医学部付属病院院長戸部隆吉教授を総隊長とする京都大学医学学術調査登山隊が組織された。この隊を組織するのに中心的役割を担ったのはいずれも本会会員であるし、会員以外でこの隊の隊員になった人の多くも後にAACKに入会してきたので、この後数次にわたって派遣された医学学術登山隊のほとんど大部分は本会会員である。堀了平会長自身を含め重要な構成員は本会会員によって占められている。

AACKはシシャパンマ峰8027mにおいて低酸素環境における人体の生理的適応の研究を中心とする学術調査をおこなうことを決定した。当初はチベットの政治情勢が良くなく、1989年春新疆ウイグル自治区領のムズターグアタ峰7546mに向かい、シシャパンマは他日を期することになった。本誌次号にその報告があらわれる筈である。

4. 雲南省の最高峰梅里雪山

中国雲南省西北部には金沙江(長江の上流)、瀾滄江(メコン河)、怒江(サルウィン河)の三大河が作る大峡谷地帯があり、前世紀末以来イギリスの植物学者キングドン・ウォードをはじめ幾人もの探検家の注目を集めてきた。雲南省の西に接するビルマの最北部にはカカボラジ峰5885mがそびえ、一時期われわれの仲間にかかボラジ遠征が構想されたこともある。日中国交回復が成ってから、動植物、地質などの学術調

査隊を雲南に送る計画も、AACK独自のものだけではなく京大ではたてられていた。

1988年5月京大探検部部長高谷好一教授から雲南省最高峰で未踏の梅里雪山6740mの登山許可を中国から得ているが、どうかという問い合わせがあった。京大探検部から中国登山協会宛に提出していた申請に対して許可する旨の連絡があったが、同部としては直ちに対応することができないのでとの申し出である。本会としてヒマラヤ委員会で検討し、最終的には1988年5月22日の理事会でこれを受け入れることに決定した。未開放地域に属する山岳であり、入域はもとより接近にも地元の同意、協力が不可欠なので、中国登山協会および雲南省の山岳関係者と十分な事前協議をすることが必要であり、日中合同隊を編成することになる。早速到北京および昆明に交渉団を派遣することから、この梅里雪山計画は始まった。

5. 50年史の刊行その他

AACKの創立50年記念出版のための編集委員会は1978年に発足し、関係者への取材、刊行資料の収集や記録の整理は直ちに開始された。私も最初からの委員の一人として会員に対するアンケートの作成とデータ収集などの実務にあたったのだが、いかんせん、肝心の書き手に人材を見いだすことが難しく、いたずらに時が流れるばかりである。

ついに87年になって、毎日新聞紙上に「北山からヒマラヤへ」の連載記事を書くなど、この面で精力的な取材をしていた同社記者で会員の斎藤清明が全面協力を引き受けてくれたので、懸案が片づくことになった。

今西錦司編『ヒマラヤへの道—京都大学学士山岳会の五十年』は1988年5月に中央公論社から刊行された。四六判427ページの同書は会創立の前史から85年のナムナニ合同遠征隊および同年の京大山岳部マサコ

ン隊までの本会の歴史を語るものである。

会の動きとして特筆すべきはおよそ以上の通りであるが、個々の会員のレベルで考えれば、各方面で多彩な活動を展開したことは例によって例の如くである。その一部だけを掲げておきたい。東南アジアやアフリカなどにおける登山探検とは直接関連をもたないものは到底紹介不可能であり、すべて割愛せざるを得ないことはお許し願わねばならない。

ナムナニ合同登山の成功を一つの機縁として、中国・日本・ネパール1988年チョモランマ/サガルマタ友好登山隊が成立することになった。地球上第三の極に南北両側から同時に登頂し、一部隊員が交差縦走するという企画で、同行のテレビ隊が現場からその模様を実況中継するという。1988年2月～5月の同隊に本会から今西壽雄、斎藤惇生、平田和男、神園泰比古が参加した。

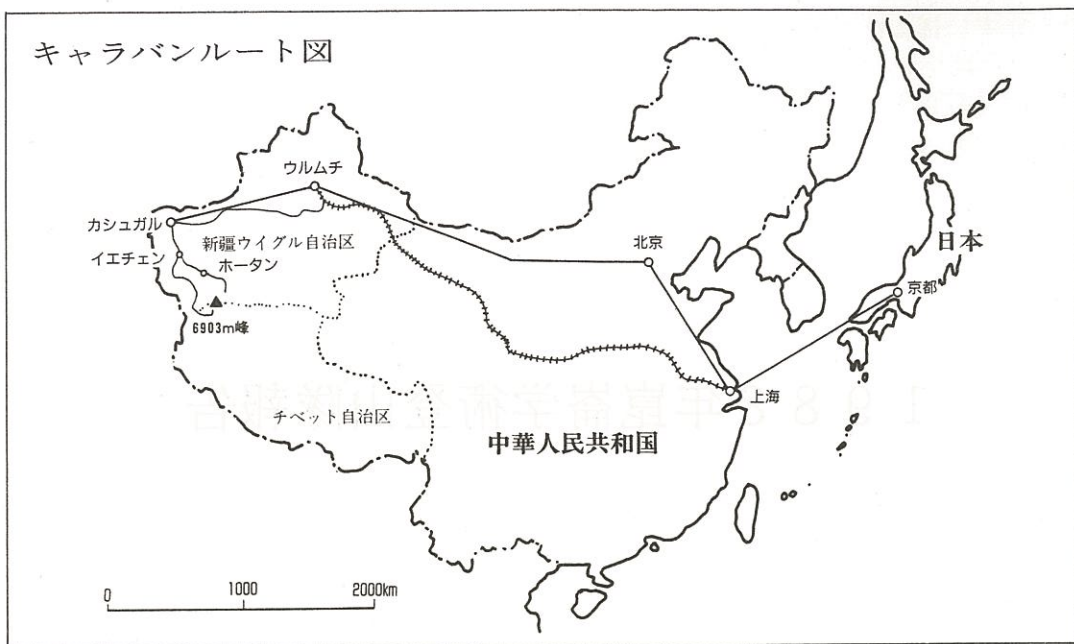
氷河地域の水文気象学的調査の分野では、中島暢太郎、安仁屋政武、井上治郎、近藤裕史が南米のパタゴニアに出かけ(85年9月～86年3月)、樋口敬二、上田豊、中尾正義、幸島司郎が日中共同事業の西崑崙氷河調査に参加した(87年6月～9月)。

平井一正は神戸大学西藏学術登山隊を指揮してクーラカンリ峰7554m初登頂に成功している(87年6月～9月)。同隊は帰途に拉薩から林芝・波密・八宿・巴塘・康定を経由して成都に至るいわゆる川蔵公路2409kmを日本隊としては初めて踏査した。

本多勝一と沖津文雄はヒンズーラジのシャハートク6320mに試登した(87年7月～8月)。日数不足で登頂には失敗したが、2人にとっては30年ぶりの再訪であり、未踏の6000m峰に6人の小パーティーで取り組むのはおもしろい試みであろう。会員の中から今後この種の企てがもっともって出てきてもよいのではないかと思う。

(文中、敬称を省略させていただいた)

キャラバンルート図



ごあいさつ

京都大学崑崙山学術登山隊総隊長
京都大学名誉教授

理学博士 中島 暢太郎

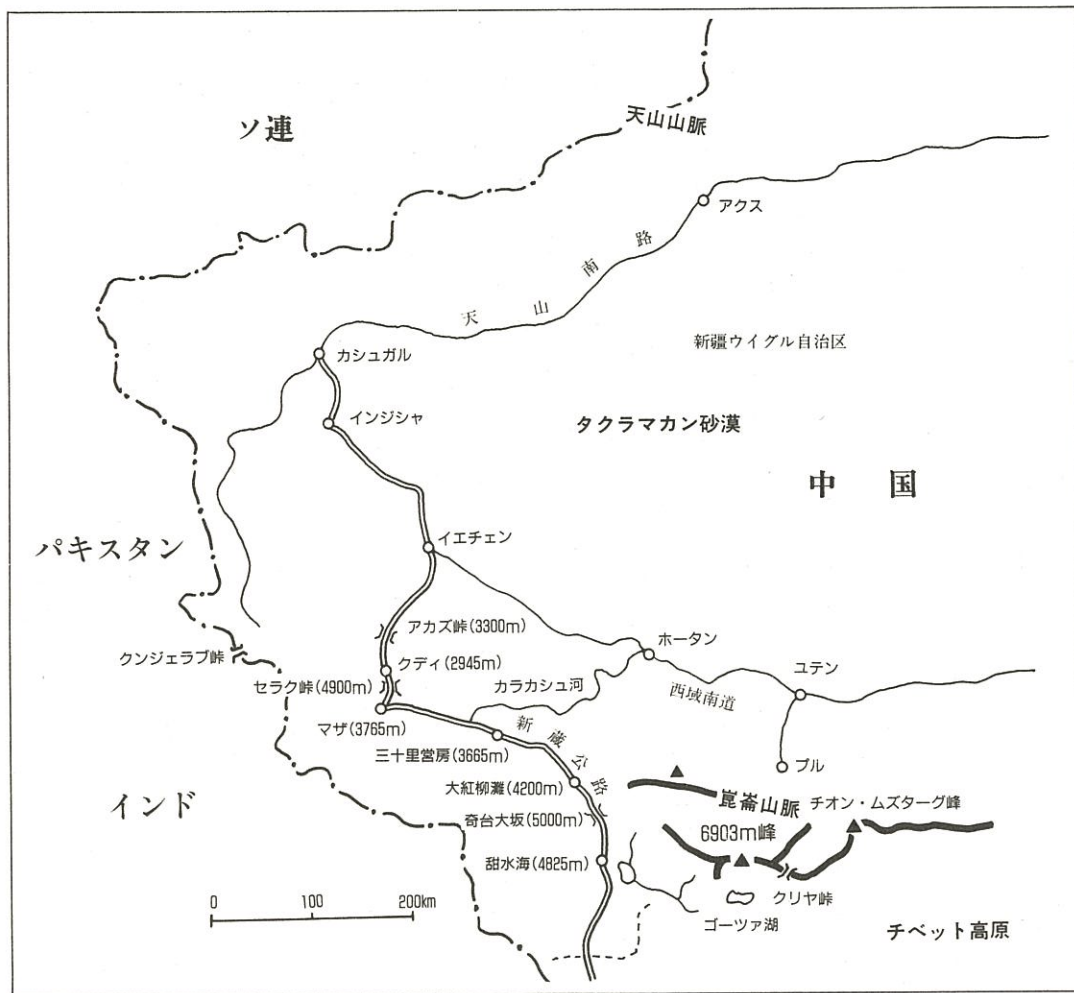
1988年8月22日に、京都大学崑崙山学術登山隊は、西崑崙山の6903m峰の初登頂に成功しました。帰国後、写真を主とするパンフレットを速報として出しましたが、5年余り経った今ようやく報告書を完成して皆様に見ていただく運びとなりました。

私たちが最初目標とした山はチオン・ムズターグ峰(6962m)でした。しかし、隊員および同行した中国科学院の学術調査班の中から病人が出たことや、雪解け出水のために自動車が発着が困難なことなどから、期限内にこの山に近づくことが不可能となり、同行の中国登山協会の連絡官の許可を得て同峰の約100キロ西方にある未踏峰(6903m)に目標を変更しました。隊員が雪崩に遭うなどの困難がありましたが、初登頂に成功しました。

次々と発生するトラブルのために、日程が押し詰まり、学術隊員が登頂隊員の荷物の荷揚げを手伝うことにもなりました。これらの事情で、学術調査の日程がかなり圧迫されました。しかし、貴重な魚や岩石の

採集などの成果が得られました。これらの標本の国外持ち出しにも中国側との折衝が数年かかるというようなこともありました。ようやくすべてが完了してほっとしているところです。この報告書は広い範囲の読者に読んでいただけるよう柔らかい表現を用いましたが、報告書らしくないというご批判や、エピソードも分かって良いという反応もあるかと思えます。ご意見を下されば幸いです。

今回の登山については、当時の京都大学西島安則総長を会長とする後援会をはじめ、学内外の多くの団体・個人より温かいご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。また、中国登山協会、中国科学院をはじめ、中国各地の関係者の皆様の熱烈なご支援がなければ成功できなかったことを思い起こすとともに、日中親善に少しでも役立つことをうれしく思う次第です。今回の当初の目標だったチオン・ムズターグ峰の頂上いつの日にかAACKの旗が立つことを夢みて、ごあいさつとします。



キャラバン

先発隊が乗った上海-ウルムチの列車の中から天山山脈のボゴダ峰を望む。トルファンをすぎてこの山が見えだすとまもなくウルムチに到着する。



行動概要

1988年

- 6月28日 先発隊神戸港出発
- 30日 同 上海着
- 7月9日 本隊大阪空港出発
- 11日 先発隊カシュガル着
- 13日 本隊カシュガル着
- 15日 全員カシュガル出発
- 23日 甜水海通過、チベット高原にはいる
- 27日 白井発病
- 29日 三十里営房に引き返す

- 8月5日 三十里営房から再び出発
- 11日 ベースキャンプ建設 (5300m)
- 13日 第1キャンプ設営 (5600m)
- 19日 第2キャンプ設営 (6000m)
- 21日 第3キャンプ設営 (6400m)
- 22日 6903m峰初登頂
- 25日 ベースキャンプ帰着
- 26日 ベースキャンプ撤収
- 28日 イエチエン着
- 31日 プル方面へ学術調査に出発
- 9月12日 北京から大阪へ

ウイグル帽



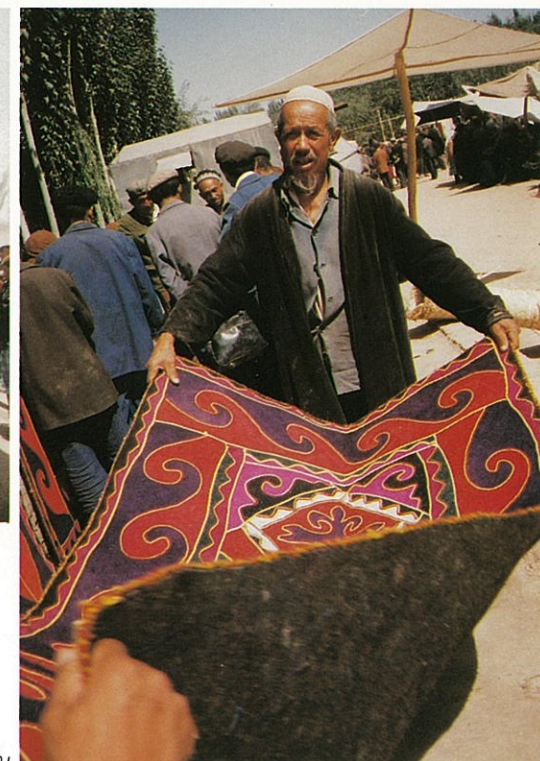
バザール

カシュガルのバザール。食べ物から身に着けるもの、住まいのものまでなんでも売っている。

西域に豊富な果物

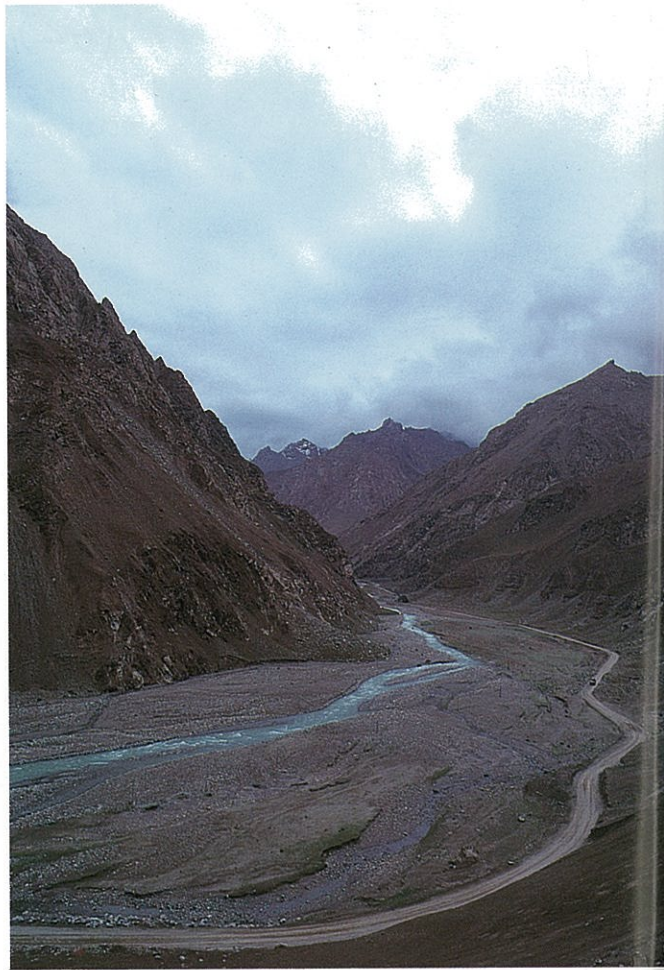


ウイグルうどん食堂



毛のじゅうたん

標高1300mのタクラマカン砂漠から崑崙山脈の西を横断する。3300mのアカズ峠を越えるといっきに寒くなる。



高山植物 セラク峠の高さで体をならすため車から下りて歩いて越える。遠くから見ると砂と岩だけのようだったが、よく近づいて見れば高山植物が今まっ盛りだ。

中国西域のキャラバン

先発隊は、上海から4日間の列車の旅のあと、ウルムチから今度は自動車の旅に出た。天山山脈の山あいを南にぬけ、天山南路を走る。オアシスのまちを経て、7月11日カシュガルに着いた。すみわたった青空に小さな綿雲が浮かび、まちなかには緑のポプラが並ぶ。バザールには初めて見るウイグル料理と果物があふれていた。2日後、飛行機で本隊が到着した。

15日カシュガルをたち、タクラマカン砂漠の西端を南下して、砂塵が舞うイエチエンへ。アカズ峠(3300m)を越え、クディに向かうと隊員はTシャツからセーターに着替えた。高温乾燥地域からいっきに冷涼地域に入った

のである。セラク峠(4900m)を越えるとき、高さに体をならすため、車から下りて歩く。小さな花をつけた高山植物が盛りで、あたり一面じゅうたんを敷きつめたように華やかだ。甜水海から先は道を外れ、標高5000mのチベット高原のまっただなかを走る。高原にはほとんど人が入ってこないで、野生のロバ、ガゼル、ヤクのなかがゆたかだ。クッションプラントも花をつけ、高原を彩る。

高原を走って5日目、テント地で突然、白井が高山病で倒れた。高度を下げるため、2日かけて全員三十里営房まで戻った。日本での治療が望ましいとの医師の診断

から、白井を日本に送るはずをととのえ、再び三十里営房を出たのは8月5日である。

雪解けて増水した河川の渡渉やぬかるみに難渋しながら、連日夕暮れまで行動する。夕日に照らされた崑崙の嶺峰は、刻々と幻想的な姿をかえ、1日の疲れを忘れさせてくれた。

(毛利 尚樹)



甜水海で新蔵公路を離れ、道のないチベット高原を走る。北をみれば雪をいただいた崑崙の山々が見え、いよいよ始まると緊張した。



まっ青なアクサイチン湖。乾燥したところをずっと走っていたので、のどがカラカラだったが、この水は塩水で飲めない。

野生動物

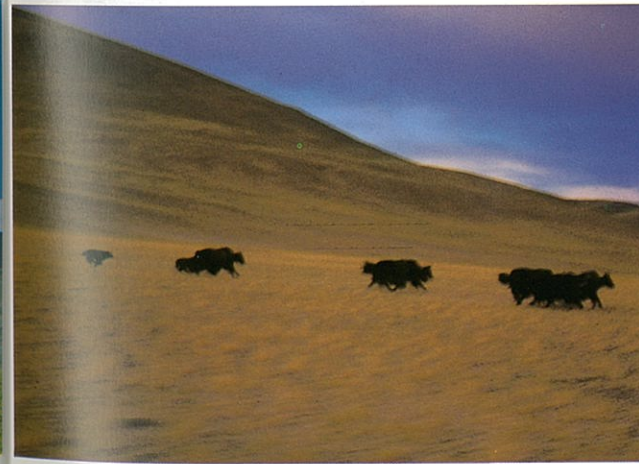
チベット高原にはいたるところに野生動物がいる。車といっしょに走りだし、すぐ前を横ぎっていく。



チルー



チベットガゼル



ヤク



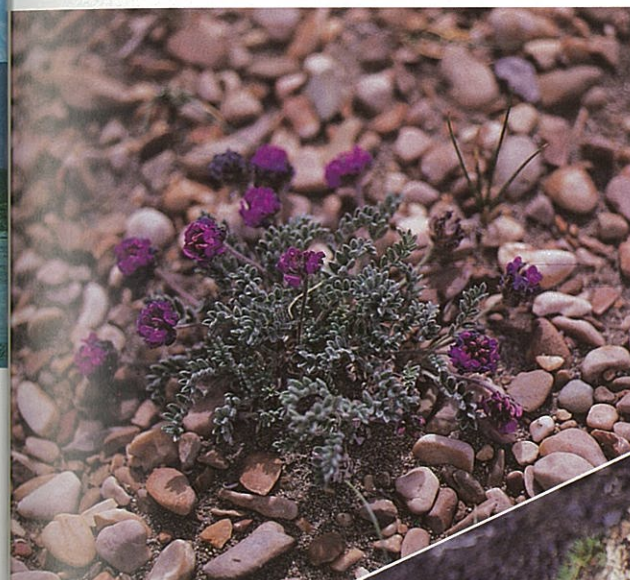
チベットノロバ



崑崙の雪解け水がアクサイチン湖に向かって
いくつも流れている。うまく渡らないと重い
トラックは中で立ち往生。



トラックが通ったあとでも車高の低い車では
水が窓の近くまで迫ってくる。



高山植物

高原に点々とあるクッションプラント





長時間、車にゆられて走ると相当まいってしまうが、崑崙の夕暮れのながめでなんとかいやされる。



正面には崇測氷河がみえる。このときはチオン・ムズターグ峰へ向かっていたが、崇測河の増水で前進できなくて、急きょ氷河源頭の6903m峰に目標を変更した。

登山

氷河の下部はとても歩けるところではないので、横の斜面をすすむ。6903m峰はまだ正面の山に、くれている見えない。



崇測氷河の横にベースキャンプ（5300m）を建設。大型テントは日本人用と中国人用。小型テントは隊長用とドクター用。

第1キャンプからの荷揚げ。学術隊員も応援。



吹雪のなかでの荷揚げもまた楽し。

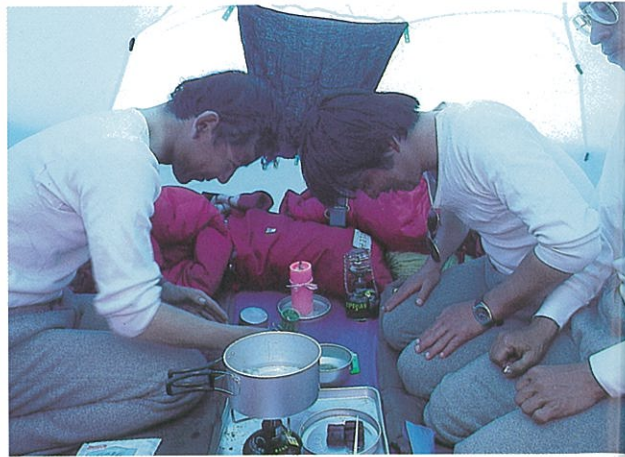


荷揚げのときは氷河が登りやすいように崩壊していて簡単に登ることができたが、頂上アタック終了後、第2キャンプを撤収して来ると、完全に崩れ去って垂壁になっていた。

氷河の上に「水」が流れ、絶好の休憩地だ。



第1キャンプでお茶の「お点前」。



第3キャンプ建設 (6400m)。
6903m峰がやっと見えた。頂上は右手奥にかくれている。



6903m峰の南にある6820m峰。
人見と睦好がアタックしたが、雪崩に流され撤退。



荷揚げはやっぱりしんどい。



雪が降ってきた。結晶がキラキラと光る。



氷河をとことんつめるとようやく頂上が見えたらと見えた。
左手の稜線をルートにとる。



稜線を頂上めざして登る。

6903m峰登頂

チベット高原を走り、チオン・ムズターグ峰へ至るクリヤ峠をめざしたが、崇測河の増水でキャラバンの進行を阻まれる。高度障害による病人の手当てにおわれたため、これ以上の時間のロスには許されない。急きょ登山対象を崇測氷河源頭に位置する無名の6903m峰に変更する。

8月11日、崇測氷河末端にベースキャンプを設営し、登山活動開始。キャラバンでのゴタゴタは高度順応には幸いしたようで、全員の体調はすこぶる快調だ。残された登山期間は2週間余り。学術隊員もできる限り登山活動を支援する。

広大な氷河はえんえんと続き、行けども行けども源頭

は近づいてくれない。登山隊員は、ある時は日差しにあえぎながら、ある時は吹雪の中で動けなくなりながら、連日明け方から日没までルート工作と荷揚げに明け暮れた。苦しくとも、高所で自分たちの力をフルに発揮するのはとてもうれしいことだ。

21日、6400m地点に第3キャンプ設営。翌22日、アタックを開始した。伊藤、毛利が6903m峰に向かう。高度が上がるにつれて息は苦しくなり、不安定な雪に手こずりながらピークをめざす。ザイルに確保され、毛利が最後のピッチを踏みしめる。18時30分、毛利がいまだだれも到達したことのない頂上にたどり着いた。

頂上に達した瞬間、表層雪崩が発生し、毛利は約100m流され、伊藤のザイル確保で停止するというアクシデントにあう。不安定な雪は、これ以上のアタック活動を許さないように思われた。短い登攀期間ではあったが、初登頂という所期の目的は達せられた。全員で登頂したいという心残りはあるものの、あえて危険をおかさず前進キャンプを撤収する。

24日、能田隊長の待つ第1キャンプに下った。

(人見 五郎)



頂上のすぐ下からみる崑崙の山なみ。

学術調査



頂上まであと少し。



頂上から雪崩に流される。



第3キャンプに下るとき、きれいに6903m峰がみえた。



ベースキャンプを撤収



あわただしい登山を終え、夕焼けの崑崙をあとにした。

プル集落周辺。岩石試料を採取する。



地球科学と生物学を専攻する日本人3人、中国人3人の研究者からなりたった学術班は、次のような調査および試料採集を行った。

【地球科学】

地球科学の分野では、①ユーラシア大陸のまん中に発生する火山の成因を明らかにすること、②インド大陸衝突による大陸変形の様子を知ることを目的として各種の岩石を採取した。チオン・ムズターグ峰へのキャラバンの途中で岩石採取を試みたが、新鮮な岩石にであわなかった。6903m峰登頂後、イエチ

エンで登山班と別れ、崑崙山脈北側で岩石試料採取を試みた。ユテンの南にあるプル集落周辺で新鮮な岩石を180kgとることができた。

一方、GPS（人口衛星から測定点の位置を決定するシステム）を用いて、ベースキャンプの位置を求めたところ、

東経 81° 09.577' ±0.012'

北緯 35° 12.061' ±0.003'

高度 5277m±16m

であった。

（能田 成、乙藤洋一郎）

隊員名簿

投網で魚の採集。



裂腹魚。ほとんどホルマリン漬けとなる。



やっと新鮮な岩石が見つかった。



石をじっと見つめる能田隊長。

【生物学】

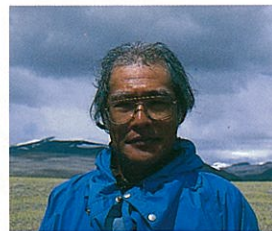
ユーラシア大陸のまん中に位置する崑崙地域の河川・湖沼には、世界でもっとも高地にまで分布している裂腹魚とよばれるコイやドジョウのなかがまが生息している。生物学の分野では、これらの魚の進化のようすやその生

息環境をさぐることを目的にして試料採集を行った。崑崙核心部に向かうキャラバンの途中の河川で投網採集を行い、約300個体の魚を採集した。

(寺島 彰)



総隊長
中島 暢太郎 (66歳)
京都大学名誉教授



隊長
能田 成 (47歳)
京都産業大学教授



登攀隊長
人見 五郎 (32歳)
京都大学大学院農学研究科



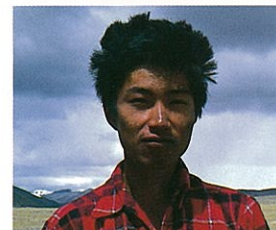
事務局長
伊藤 宏範 (30歳)
㈱シー・ディー・アイ



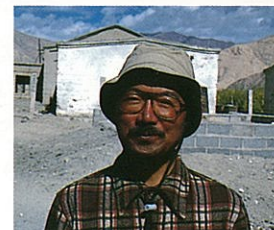
登攀
毛利 尚樹 (24歳)
京都大学大学院農学研究科



登攀
白井 秀友 (23歳)
京都大学大学院工学研究科



登攀
睦好 正治 (21歳)
京都大学農学部学生



学術
寺島 彰 (39歳)
京都大学理学部研修員



学術
乙藤 洋一郎 (38歳)
神戸大学理学部助手



医師
三輪 佳宏 (40歳)
吉田病院医師



通訳
浅野 純一 (30歳)
京都大学大学院文学研究科
中国・上海復旦大学留学生



通訳
遠山 仁 (36歳)
高知新聞論説委員



同行記者
福島 申二 (32歳)
朝日新聞社会部記者

崑崙學術登山隊成立の経緯

能田 成・伊藤宏範

中国側



張江掇 (35歳)
連絡官・中国登山協会



孫建章 (33歳)
案内、運転・新疆登山協会



王家春 (40歳)
案内、運転・葉城登山協会



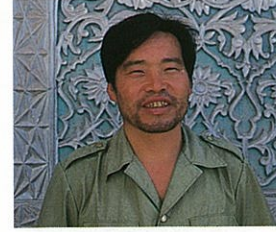
王志堅 (25歳)
炊事員・葉城登山協会



沈曉民 (26歳)
運転手・喀什旅行社



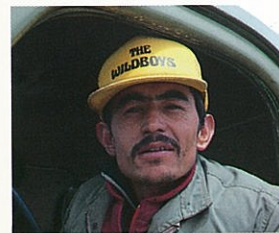
楊建軍 (24歳)
運転手・喀什旅行社



化建業 (37歳)
運転手・新疆地質磁産局



王新明 (25歳)
運転手・新疆地質磁産局



ヘニーチャン (26歳)
運転手・葉城登山協会



ジュレットイ (24歳)
運転手・新疆登山協会



劉鍵関
連絡官・中国科学院



張春光
魚類・中国科学院



王晓春
地質・中国科学院



王燕



王志愛
運転手

この発端から登山許可申請書提出

AACKでは日中友好ナムナニ峰合同登山隊の本隊を1985年4月から7月にかけて派遣し、5月26日初登頂に成功、多くの学術調査を並行して行い、予想を上回る成果をあげて無事終了した。中国科学院地質研究所や蘭州氷河凍土研究所などとの合同で行った調査は、引き続き両国で分析が行われ、論文が発表されることになった。一方、登山隊は本隊が帰国する前に日本から成功を祝う会員をはじめとする大部隊が中国入りし、帰国後すぐ、こんどは中国から成功を祝う大部隊を迎えた。ちょうど1年後、86年6月に報告書『ナムナニ』（毎日新聞社）が出版された。その間、京都大学山岳部では長年の夢であったブータン王国の未踏峰マサ・コンに初登頂していた。

そのめまぐるしく動いていた会の内外の活動がようやく落ちつきを取り戻した86年9月ヒマラヤ委員会が開かれた。AACKの活動は正式には理事会と総会で決定されるが、意見交換や懇談のために適宜ヒマラヤ委員会が開かれてきた。そのときの話題のひとつに“崑崙學術調査・登山”があがった。ナムナニで合同した機関のひとつ武漢地質学院から崑崙の西部で学術調査と登山をしてはどうかという手紙が届いたからであった。地球科学を専攻する者としては願ってもないことである。中国の地質図には崑崙のど真ん中に火山の印があることがよく知られていたからである。本当かどうか確かめてみたい。もし確認できれば新たな知見があるかもしれない。とりあえず、まだどうとなるのかははっきりしないまでも、いっしょにやりましょうという返

事を出すことになった。

数日後の9月19日付朝日新聞夕刊に「東京農業大学隊、崑崙の無名最高峰（7167m）に初登頂（16日）」の記事が大きな写真とともに載った。ほかに崑崙山脈ではこれまで85年10月21日アメリカ隊がウルグ・ムズターグ（6973m）に初登頂している。7000メートル以上の未踏峰は崑崙にもうないが、まだチオン・ムズターグ（6962m）、モノマハ（新青峰・6860m）、ムズターグ（6638m、1985年に日本ヒマラヤ協会隊がめざすが断念し、8月24日近くの5850m峰“八花氷山”に初登頂）ほか、無名の6000メートル峰もたくさん残されていた。

正直な話、私たちは崑崙といっても、何という名前の山があるのか確としたことはいえなかった。が、学生のころから「かよへる夢はコンロンの高嶺此方ゴビの原」と何かにつけて酒を飲んだときに「逍遙の歌」を歌っている。“崑崙”という地名はすっばりと心の中に住み着いていた。その崑崙に行くことに異論があろうはずはない。まずはこの行ってみたいというあこがれからこの計画は始められたのであった。

行こうと決めてから資料を探るといふ、相手もあることでありながら順序が逆の行動をしていた。ただ、登山と学術調査の許可がおりない限り、私たちだけで計画を進めることはできない。相手の出方次第という要素も初めからあり、まだ行けるかどうかもわからない雲をつかむようなものであった。

資料を持ち寄って第1回崑崙の会を能田らAACK会員と山岳部員が数名集まって10月30日に開き、翌月関東在住の会員が、帰国し

た東京農業大学隊の報告会に出かけた。この段階では、それぞれが行こうとは思っていても「確実に参加できる」と表明する者はなかった。そのまま数か月が過ぎた。

明けて1987年2月、岩坪五郎さん、井上治郎さん、能田成、人見五郎、伊藤宏範の5人が京都川端二条の「赤垣屋」に集まった。なかなか計画が進まない“崑崙”を動かそうと岩坪さん、井上さんがはっぱをかける。能田隊長、人見登攀隊長、伊藤事務局長と「長」ばかりつけられて3人はここで決心したのであった。それも今年の夏行こうとするものであった。

急いで具体的計画を立て、ちょうど開かれたヒマラヤ委員会でも報告した。めざすはチオン・ムズターグ(6962m)。ナムナニ隊は大がかりな合同隊であったが、今回はこぢんまりとした合同隊にしよう。半年間の助走があったおかげで計画はすぐに具体化される。日本側8人(学術隊員含む)、中国側6人(学術隊員除く)。期間は7、8月。予算は当初2100万円であったが、のち登山料金の改訂、隊員の増加(結果的には日本側13人、中国側15人)などもあり3050万円と修正された。募金を考えねばなるまい。こうなればとってつけたような「長」では今ひとつ迫力がない。

総隊長に中島暢太郎の登場となったのである。

登山申請書を作成し、折から中国を訪問する斎藤惇生さんに託し、中国登山協会に提出してもらうことにした。ただ、このときは書類に不備があり、斎藤さんが帰国後改めて郵送するという不手際があった。斎藤さんは翌88年日本山岳会などが主催する日本・中国・ネパール3国合同によるチョモランマ/サガルマータ登山隊の調印式に出かけるところであった。のちこの大きな隊は8848メートルの世界最高峰を北から南へ、南から北へと交差縦走し、頂上からの生中継を予定通り1988年5月5日祝日に届けるのである。

登山許可取得

申請書を出したからといっても、すぐにはことは運ばない。しかし、いつ許可書が届いても対応できるようにしておかなければならない。3月にあるAACK理事会に報告し、正式に山岳会の学術登山隊として承認を受け、募金活動、隊員募集、隊荷の収集・梱包・発送、詳細な登山計画の立案、学術調査の計画、5月の総会での報告・承認など考えただけでうんざりするぐらいの質と量である。

1987年3月初め、核となる3人を中心に第2回崑崙の会を開く。第1回めよりも具体化したので人数が増えた。仕事の分担を決め、急いでとりかかえることにする。資料には85年夏、7167m峰周辺への名古屋大学・中国科学院・蘭州氷河凍土研究所合同の西崑崙氷河学術調査偵察隊の概要と87年夏の本隊の計画概要が加わった。この隊には偵察隊に会員の中尾正義さんらが参加し、またこの夏出発する本隊には隊長として会員の樋口敬二さんらが参加することになっている。

下鴨の今西錦司さん宅を酒井敏明さん、斎藤清明さん、伊藤が訪れ、崑崙をめざすことを報告する。この日の訪問の目的は近く出版される『ヒマラヤへの道—京都大学学術山岳会の五十年』(今西錦司編・中央公論社)の序文の依頼であった。のち、今西さんは序の中で

さて、これからのAACKのことだが、もちろん初登頂主義をつづけていくべきである。

高い山は次々になくなっていくであろうが、それならもっと学術面を取り上げたらどうだろうか。崑崙とかチベットの無名峰でもよい、科学のメスをぶちこんだら、まだまだ、仕事がある。

初登頂をねらうことは、AACKの人間ならば誰でも意識していることであろう。それがあかざりAACKは存在する。

と述べている。今西さんはこの日、崑崙計画の報告をする私(伊藤)を目の前にして「伊藤宏範というものは知らんな」というぐらいだったが、計画には興味を示されたのだろう。私はこの大先輩の夢高きことを感じ、「よし、登ろう」と決意を新たにす。

理事会では正式に隊の活動が認められ、遠征基金から初動金を借りる。

さて、ようやく本格的に動き始めたばかりのある日、隊長をつとめる能田の体調がおかしくなり、しゃれにもならない。急性肝炎の疑いで即入院というピンチに見舞われた。急ぎ病院に見舞いにいくと、かなり消耗している。ここは十分静養して完治してもらわないことにはどうにもならない。

チオン・ムズターグへのアプローチとして申請時には北回りと南回りの2つのルートを考えていた。北回りルートは、タクラマカン砂漠の南側にあるホータン(和田)の東ユテン(于田、ケリヤ)から南に進路をとり、集落プルからラクダを使って4000メートル級の峠を越えてベースキャンプに達しようというもの。南回りルートは、新疆ウイグル自治区とチベット(西藏)自治区の西側を結び崑崙山脈を横断する新蔵公路を使って、いったん崑崙山脈を越え、公路を甜水海で離れ、崑崙山脈の南端をぬうようにトラックでベースキャンプへ向かおうというもの。後者のルートは途中までであれば85年の名大・中国合同隊、86年の東京農大隊がトレースしている。であれば、めざすは北ルートしかない。ラクダに乗って歩くのをひたすら夢見る。

中国登山協会の事情に詳しく、ナムナニ峰合同登山隊でも大きな推進力であった吉田與和さんに申請後の状況を尋ねてみると、チオン・ムズターグほか崑崙山脈の未踏峰には日本を始め世界中から申請がきているという。ルートとしては北回りは困難なことが多く、南回りのほうが可能性が高く、東京農大隊ベースキャンプよりさらに数日トラックでのキ

ャラバンが必要かもしれない。ただ、どのルートにしても中国登山協会としてはまだ行ったことがないという。まだ許可をもらったわけではないが、ラクダの夢は遠くなった。

核のひとりが病気になり、5月この時点でどこにも許可されていないということは、今年の夏の出発は無理ということになる。来年めざして改めて計画の練り直しである。しかしながら、あまりにも慌ただしい日々であったので、1年のびてほっとしたところがあった。

5月の理事会、総会で来年夏の学術登山隊計画の報告、承認を受ける。近藤会長が定年退官のため、堀新会長のもとでのスタートである。6月、南回りルートで来年の計画であれば許可がおりるかもしれないとの情報が入る。にわかには活気だってきた。隊員希望者による地域研究が進み、タクティクス、食糧、装備、梱包、輸送のそれぞれの計画も固まってきた。学術隊員希望者の学術調査計画も出そろった。京大山岳部の現役学生が興味をずいぶんと示してくれるのが何よりもありがたい。

この間、ウルムチにある新疆登山協会から文書が届いた。詳しい計画を知らせよというもの。私たちとしては北京の中国登山協会とずっと連絡をとってきたので、少なからず戸惑ったが、中国登山協会とも連絡して窓口を北京一本に絞ってもらうことにした。7月、名大・中国合同氷河調査隊が出発するので、もしチオン・ムズターグが見えるようであれば写真を撮ってきてもらいたいと会員でもある上田豊さんに依頼する。

8月、ナムナニ登山隊の実行委員長であった四手井綱英さんを団長とする内蒙古探検旅行団に伊藤が北京まで同行し、そこであらためて中国登山協会の史占春主席に登山許可を出して下さるようお願いにいった。席上、史占春主席は私たちの登山申請に対し、原則的に来年夏の活動を認めるが、国境付近を通

ることになるので軍との確認をしなければならぬと表明。これでゴーサインが出たと考えてよいだろう。翌日、汪鉄銘交流部長と詳細をつめた。2年ぶりの中国は実質2日間の滞在であり、ホテルと登山協会の往復だけであったが、使命を果たせて充実したものとなった。

月末に第6回崑崙の会を開き、いよいよもって、来年の夏、初登頂と学術調査に向かうことになったと報告した。この時期に福岡山の会がユテンの南にある6699m峰“コシトシ・ムズターグ”をめざしていたが、悪天候のため断念し、5740m峰に初登頂して帰国した。

後援会結成と隊員決定

9月にはいると募金を進めるべく後援会の結成の準備にかかった。AACK会長の堀了平さん、前会長の近藤良夫さん、それに中島、能田が中心となり、西島安則京都大学総長を後援会長とする後援会をつくることの提案がある。また、隊員選考も行い登山隊員には人見、伊藤、毛利尚樹、白井秀友、陸好正治、学術隊員に寺島彰、乙藤洋一郎が選ばれた。ほかに医者、通訳を同行することにし、後日決定することとした。それぞれのプロフィールはキャラバン登山記録の欄にゆずろう。

隊員が決まれば、計画書の作成である。写真は名大・中国科学院合同氷河調査隊からお借りした。同隊はプルから崑崙山脈を横断する計画でいたが、途中悪天などに遭い、引き返さざるをえなかったという。また、チオン・ムズターグが見えるクリヤ峠まで四輪駆動車で行けたが、そこから先は進めなかった。

新聞発表もしなければいけないが、学術調査では中国との合同でもあり、まだその時期でない。

一方ナムナニ峰で合同した同志社大学山岳会がチベットの未踏峰カント(7055m)をめざしているが、チベットの状況変化で延期を余儀なくされている。

学術調査を合同で行う中国科学院とも本格的に交渉を始めた。

10月末には西島総長の後援会会長就任の快諾を得、関係の方がたの後援会会員就任の了解も得られた。募金は12月下旬開始と決まる。中国側学術隊員分の負担増、トラックで大きく迂回することによるルートの変更などで、予算額を3050万円と定めた。後援の新聞社も固まりつつあった。4月には荷物を中国に送らなければならない。山の装備や学術調査用具、食糧など集め始めるため、隊員には「京都大学崑崙学術登山隊 隊員 ○○○○」と印刷した名刺を渡した。お金やもの集めで日常生活のテンポがかき乱されることになり、だんだん神経がとがってくる。これも過ぎてしまえばなんてことはないと経験した者はわかっているはずであるが、つい声が荒々しくなる。ましてや初めて加わる隊員たちにとってみれば、電話のかけ方から始まり、毎日が不慣れなことばかりである。いきおいいつもとは逆に本業の仕事や研究、勉強でストレス発散となる。

12月、中国上海の復旦大学に留学中の浅野純一の通訳としての隊員決定。2年前、伊藤が85年7月にナムナニ合同登山隊から帰った後、京大の近くでばったりと会ったとき、「こんど行くときは連れてってよ」

「それはいいねえ」

といった軽い約束が実現したことになる。吉田寮で騒いでいた仲間であり、探検部、それに中国語堪能とくればもういうことはない。ただ、この中国語、中国人が聞けば、上海人だろうというくらいに“ナマリ”があるらしい。

募金は12月下旬に始まった。会員の多摩勝一さんの紹介で朝日新聞社の後援も決まり、記者も1人同行することになる。

中国登山協会からは連絡官が1人同行することになるが、私としてはナムナニで同じパーティーにいた尚子平さんが来てくれれば心

強いと思って打診していたが、クラウン峰登山隊の連絡官としての仕事が終了したばかりであるにもかかわらず、資料集めなどいろいろと骨を折っているという手紙を年末に受け取り、うれしくなってしまった。

議定書調印

明けて1988年1月14日から18日にかけて、中島、能田、ナムナニ隊員で医師の松林公蔵さん、それに吉田與和さんが北京に出かけた。北京では浅野が通訳としての初仕事のため上海から向かった。中島、能田の仕事は、議定書の調印・交換、連絡官の交渉、中国科学院との交渉などである。連絡官は尚子平さんも候補のひとりだが、まだ決定はしていない。議定書は16日、中国登山協会史占春主席、中島総隊長、そして中国科学院地質研究所の劉東生教授立ち会いのもと調印が行われた。中国科学院との実質協議はナムナニ学術隊員であった鄭錫瀾さんとの間で行ったが、まだ十分には合意にいたらなかった。浅野の活躍は期待以上であったと初めて北京で会った中島、能田が喜んでた。

月末には朝日新聞社から派遣の大阪社会部、福島申二記者が決まった。ダウラギリV峰(7618m)、マッキンリー、キリマンジャロなどの登頂経験者である。私たちの隊の中ではもっとも高いところに登っている。

2月5日、京大記者クラブで堀会長、中島総隊長、能田、伊藤、寺島がこの計画の発表を行った。中島はベースキャンプまでは行かず、崑崙山脈を横断する新蔵公路の途中まで行くこととなっているが、随行の通訳として遠山仁が参加することになった。先発隊には浅野がついていくことになるので、本隊が日本を出て先発隊とカシュガルで合流するまでには通訳がいなかった。また途中で帰る中島も最後はひとりになるはずであった。ところが、意外なところから強力な助っ人が加わることになり、ひとつ不安材料が消えた。中島

の“隠し玉”であった。

日本山岳会などが主催するチョモランマ三国合同登山隊の隊員発表も数日後行われ、会員では今西寿雄さんを日本側総隊長に、ほか斎藤惇生さん、神園泰比古さん、平田和男さんが参加することになった。中国側では史占春中国登山協会主席が総隊長、曾曙生さんが登山隊長を務めるほか、ナムナニ隊の尚子平さんが登攀隊長になるはずであったが、急病に倒れ、宋子義さんが代わった。ほかにナムナニ隊ではツェリンドルジ、チミ、ジャブーのチベット3人組、楊久輝、李致新、王勇峰、曹安さんらたくさん参加している。

延期になっていた同志社大学隊も中国側の準備が整い出発することになった。ナムナニ隊の活躍する年となった。

新聞発表を機に募金活動も広く展開することになった。中国科学院との合同調査はまだまだ折り合いがつかない。悩みの1つである。

3月にはいると装備や食糧がAACKルームに集まりだし、梱包にとりかかった。医師として脳神経外科医の三輪佳宏が参加することになった。これで日本側隊員が全員出そろったことになる。隊長以下全員が集まる「崑崙の会」もすでに25回を重ねている。タクティクス面では人見が苦勞していた。名大・中国科学院合同調査隊の写真だけではチオン・ムズターグの姿がほとんどわからない。正確な地図はもちろん手元にない。頼りになるのはフランスから手にいれる予定の高価な衛星写真だけである。早く届かないものかと待っている。

3月24日、同志社大学隊がカント峰に初登頂した。上海では列車事故があり、なかに日本の修学旅行の高校生が多く乗っていたことから日本のマスコミは取材におおわらわになり、上海にいる留学生も多くかりだされ、浅野もその一員であった。

大づめの出発準備

4月には募金がほぼ予定の額まで達した。船で運ぶ危険物としてガスカートリッジ250キログラムは3月なかばに渡し、大半を占める食糧・装備など2.5トンは4月中旬に通関業者に渡した。荷物の発送により、AACKルーム内はやや片付き、気分も楽になる。あと荷物は学術用に間に合わなかったもの100キログラムを5月上旬に航空便で出せば手持ち分を除いてすべて終了となる。先発隊（寺島、伊藤、毛利、睦好）出発は6月28日神戸港から鑑真号で、本隊（中島、能田、人見、白井、乙藤、三輪、遠山、福島）は7月9日大阪国際空港からJAL便で、浅野は先発隊と上海で合流することになった。

4月21日悲しい知らせが届いた。中国登山協会の尚子平さんが亡くなったという。いっしょに崑崙山へ行きたかったのに……。

4月下旬には中国科学院から鄭錫瀾さんらが別用で来日し、時間をもらってまだ煮詰まっていなかった合同学術調査について協議する。中国側参加人数、科学院に支払う費用などで若干の歩み寄りがみられた。しかし、帰国後、鄭さんからファクシミリが届き、中国科学院からの要求がまたふりだしに戻ってしまう。

5月の連休に北アルプス剣岳で合宿トレーニングをする。5月らしいいい天気、雷鳥沢ではパラグライダーが舞っている。来年からはアレでいこうと話す。合宿から帰ったあとの5月5日は朝10時から夜9時までチョモランマ登頂の報道でテレビの前に座りっぱなしの日を過ごす。

AACK 50年史『ヒマラヤへの道』（今西錦司編、中央公論社）が苦勞の末、結成58年目にして出版される。

定例の理事会、総会で崑崙山の出発直前の状況を報告。また中国雲南省にある未踏峰・梅里雪山（6740m）とチベットにあるシシャバンマ（8012m）の両計画が報告、承認された。

6月に入り、名古屋大学環境医学研究所に

ある低圧実験室にはいる。予定では7000メートルまで上がるようになっていたが、6000メートルまでとなり安心。

事務的なつめのため6月10日から13日まで実質2日間、私（伊藤）は北京へ向かい、浅野は上海から飛んできた。連絡官に張江援さんが決まった。帰りの学術調査でチオン・ムズターグから北へ崑崙山脈を横断する計画は現地で判断するので今は決められない。また中国科学院の鄭さんとも交渉。中国登山協会の王鳳桐さんの仲介もあり、なんとか費用面ではおりあいがついた。これで大きな問題はルートのみとなった。一方、モノマハ（新青峰）をめざしていた日本ヒマラヤ協会隊は主峰登頂を断念し、周囲の山に登頂したという。

衛星写真はコンピューター分析し、ランドサットの写真よりはるかに鮮明に地形がわかるようになる。人見は何度もながめ、弱点を探す。前進ベースキャンプを5300メートル地点におき、以後5900メートルに第1キャンプ、6400メートルに第2キャンプを定め、頂上アタックするという実働12日間、予備9日間という計画である。出発から帰国まで60日間もとっているのに本格的な登山期間がその3分の1という短さである。いかに深いところに行くのかがわかっていく。

6月25日、第39回崑崙山の会をひらく。夕方にはAACK主催の壮行会である。先発隊出発までのあと数日。日本でできることはすべてやった。会社の仕事のほうもこれだけ山に時間をとられたにもかかわらず、なんとかこなし2か月間の「休職願」も了承された。私は3人の隊員とともに先発隊として神戸をたつた。

中国西域キャラバンそして初登頂

能田 成・毛利尚樹

先発隊神戸出発

6月30日

目覚めてから小一時間も乗っているのに、長江はほとんど海のような大きさのまま。片岸が遙か彼方に見えるだけである。

この茶色の流れに入ってから大きなうねりがなくなり、船の揺れは収まった。朝食をとり再び甲板に出ると、もう上海の町並みをはっきりと目に見ることが出来る。

大型の客船や、石炭運搬船、木材をつないで筏を組んで下流に牽引していく船、すっかり減価償却を済ませた小さな漁船、たくさんの勤め人を乗せて兩岸を行き来する渡し船、さらには軍艦や潜水艦、いろいろなものが行き交い停泊している。

上海はもうすぐだ。

私たちの登山はここ上海から始まる。

2日前の6月28日、神戸港から家族や友人に見送られ、私たちは定期貨客船「鑑真号」で上海に向けて出発した。

チベット高原とタクラマカン砂漠を区切るような格好で位置する崑崙山脈の未踏の山に登り、この地域を研究しようと集まった京都大学崑崙山学術登山隊。現在、船に乗っているのは4人で先発隊である。中国で調達できる食料の買い出しや日本から送った登山・学術用品の整理のため、一足先に中国に向かっている。

ここで、先発隊のメンバーの紹介をしよう。

先発隊での最年長者は寺島彰、39歳。魚類の研究を専門とする京都大学理学部研修員。これまでもネパールなどで調査を進め新種

の魚を発見している。今回はチベット高原に生息するアジア固有の魚について、詳しい生態を解明しようとしている。髭をはやし、人なつこい顔立ちをしている。隊員からは漫画家の黒鉄ヒロシのようだと評されている。

伊藤宏範は、登山隊の事務局長を務める。事務処理能力は目を見張るほどのものがあって、特に大学でのんびりとした毎日を過ごす隊員には絶大な信頼をおかれている。1985年、チベット自治区のナムナニ峰（7694m）の登山隊に参加、同じ年にブータンヒマラヤのマサコン峰（7200m）にも初登頂した、脂ののった30歳。現在はあるシンクタンクの主任研究員で、今回は休職しての参加である。あだ名を「クルンパ」という。由来はしれない。

睦好正治は、今回の登山隊の最年少者である。海外での登山は初めてで、船の中ではまだ少し緊張気味の21歳。農学部林学科の3回生である。海外での登山や研究で場数を踏んだいささか注文の多い隊員のお母さん役として食糧係を任じられた。テンポの速い高い声で話すさまから「ヒョホホ」というあだ名がついていたが、食糧準備の段階で「ボンロク」という名を賜ってしまった。大塚食品(株)から行動用食料「カロリーメイト」などたくさんの寄付をいただいたが、その中で彼は60個の「ボンカレー」も依頼した。しかし、世話になる中国側のスタッフと日本側隊員の数を考えると、これは少しばかり数が足りず、早速、「ボンカレー60個の依頼をした男」となったわけだ。

毛利尚樹は、大学院農学研究科の2年目の学生で、装備・記録係を任されている。84年に初めてブータンヒマラヤの偵察行に参加し

てから、すっかり海外のスケールの大きい山に魅せられてしまった。今回で3回目の海外での登山である。山登りの技術以外にも気を配らなければならないことの多い海外登山にも、要領が何となくつかめてきて、張り切っている。帰ってから修士論文を仕上げなくてはいけない状況にあるが、船に乗り込んでからはすっかり忘れてしまった。怒っていても怒っていなくても、こめかみには青筋が出ている。あだ名は「アオスジ」。24歳。

おかしなことと思われるかもしれないが、京大山岳部では互いの名前をあだ名で呼び合う習わしになっている。卒業してからも変わらない。

山深い地方で狩猟をしたりして生計を立てるマタギとよばれる人々は、里での生活用語を山に入るときには使わない習わしがある。隠語で言い替えるのだ。彼らが山で使う言葉は「マタギ言葉」といわれるが、これとは無関係であろう。

上回生が下回生を名字で呼び捨てにし、下回生が上回生を「さん」付けで呼ぶ関係は、ともすると露骨な上下関係をイメージさせる。下回生が上回生に思うところを話しかけにくくなりやすい状況を、あだ名で呼ぶことがやんわり変質させているのではなかろうか。言い替えれば、率直な意見交換を促す手段のひとつになっているのではないと思う。

「自分の命は自分で守る」という当たり前の原則の下、状況判断が生命にかかわってることがあるような山の中では、自分の思った判断を表明することは大切になる。つまり安全システムとしてあだ名は採用されているのではなかろうか。名字で呼び捨てにされるのと、あだ名を言われるのとの違い、また、「〇〇さん」と名字で呼ぶのと、あだ名に「さん」づけにして呼ぶことの違いは、精神的にはけっこう大きな違いのように思える。

ただし、なぜあだ名なのかは、本当のとは

ろだれもしらない。

10時過ぎに、船は上海港に接岸した。

筆で書いたような‘上海’という文字の大きな金プレートが入国管理事務所の建物の上に堂々と掲げられている。

入国者でごった返す港の税関では、テレビやビデオといった電気製品を携える人が多い中で、プラスチック製の段ボール詰めされた私たちの手荷物は人目を引いたらしい。税関職員が目止まってしまったようだ。

このプラスチック段ボール箱（プラダン）は、過去の海外登山の経験の中から、耐久性、持ち運びの便利さに優れたものとして工夫・改良された。サイズを指定して特別注文で作ってもらったものである。ついながら、装備を入れる箱は、この段ボール箱のほかにもう1種類用意してある。上から蓋をかぶせるスタイルのプラスチック製の丈夫な箱（プラスチック・コンテナ＝プラコン）だ。開けたり閉めたりの作業がプラダンよりも容易にできる。個人のこまごました荷物はこのプラコンに納める。

さて、まず手始めに税関職員が目をつけたのは手提げ袋の中のタバコ。免税のはずの3カートンのタバコのうち一部について、税金を支払わされることになった。

続いて、たまたま開封を命ぜられたプラスチック段ボールの中身に、医療用の器具が入っていて、

「これは何に使うのだ」

と問い詰められるうち、寺島のパスポートに、

「心電計 NO. ×××××-×××」

と記載されてしまった。やっかいなことになった。

出国の際にパスポートに記載された物品を持っていないと、外国製品を国内で売りさばいたとみなされ、高額のお金を支払わされることになる。もちろん持ち帰る予定ではあるが、登山が終わった後、ふもとの町で現地解

散を考えているので、特定の人のパスポートに持ち出し義務を課した記載は不都合なのだ。

伊藤は入国カードに記入した所持金100万円を、

「ここで取り出して見せろ」

などと詰問されている。税関職員と入国者が入り乱れている中で、現金を懐から取り出すなんていう物騒なことはできない。中国語、日本語、英語のちゃんぽんでの押し問答が続く。片言の中国語で説明してもらちがあかない。日本語がつつい口にできるが、雰囲気は伝わっても、状況は良くならない。

つたない英語でまくしたてると、どういう訳かこれが効を奏した。納得して頂いたというのではなく、何となく口をつぐんでしまったという様子だ。英語で話している内容よりも、英語に対する言語コンプレックスによって矛を納めたような気がするのだが、本当はどうなのだろう。

どたばたしながらも、なんとか税関を通過。出たところで、浅野純一が出迎えてくれた。やれやれ、これでもう汗だくになって交渉をしなくて済む。この隊員も紹介しておかなければいけない。

浅野純一は現在、大学院の文学研究科を休学して、名門の上海復旦大学に留学している。通訳としての参加となる。今回の計画が具体化し始めたころから、中国から通訳を引き受けたい旨の手紙が届いていた。難しい会話や登山用語は知らないと付記してあるものの、頼もしいメンバーが加わることになる。元探検部部員。30歳。

上海の町の中心地にあるホテルに荷物をおろし、町の南東部にある食料品の市場に出かける。登山の食料の中で乾物類を調達しようというわけだ。

‘十六舗農副産品市場’という垂れ幕が入り口にかかり、蒲鉾型のアーケードの下には間口の狭い店や露店がぎっしりと並んでい

る。

干しナマコ。縁日の夜店のように洗面器をはいまわる亀。ウナギにしては丸ぶとな名の知れない魚。干した豚の臍。金たらいの中をぐるぐると泳ぎまわるライギョ。1メートル以上もある鯉。……。

人びとの食卓を飾るであろう、これらの見慣れぬ材料が並ぶ店を、一軒一軒のぞき込んで歩き回る。

この時期の上海は、Tシャツが汗でぐっしょりとなるほどの暑さ。京都の夏も顔負けだ。カメラのファインダーも汗で濡れる。

24ミリの広角レンズを付けたカメラのファインダーからながめる店先の様子は、どれも絵になるようだ。この広角レンズを使って撮るのが、目に入ってくる市場の様子を捕らえるのに、最も気持ちとぴったりくる。市場の中は、一つ一つの品物の良さというよりも、いくつもの品物が集まって作り出す空間自体が興味深い。ファインダーに雑多なものを盛り込みすぎず、かといって一つの物にだけ焦点を合わせてしまうことのない、この24ミリという焦点距離のレンズは、いってみれば調和を表現してくれるのだ。

乾物やお茶を買い込んで、両手いっぱいビニール袋を下げ、習いたての中国語をさっそく操りながら、中国語会話の実践。ひとときの語らいに興じる。

身振り手振りを交えて話をするうちに、どうにも注意がそれてしまうことが起きた。すらりと伸びたきめの細かい白い女性の腕の付け根にある、目のやり場に困ってしまうような堂々とした毛が目に入ってくるのだ。

仮に京都の町中で、タンクトップを着た女性100人にバンザイをしてもらってもふさふさした腋毛を見ることはないんじゃないだろうか。夏になれば、つるつるの子供の腋の下になっているはずだ。

当たり前のものが生えているといっても、日ごろ見慣れないものを見たものだから、平

常心がゆらぐ。「むだ毛処理というのは、どこでも一般的というわけじゃあないんだ。これも風俗文化の一つなんだなあ」と思う。かつてアラブ圏では、結婚に臨む際、女性は頭髪を除いてすべての体毛を除去する習わしがあったという。娘はレモン汁を砂糖と共に煮て水飴状にしたものをおばあさんに肌に塗ってもらい、その水飴が固まったところで肌からはがしてもらおうと、体毛と一緒に抜けるという。レモン汁は毛穴を開き毛が抜けるときの痛みを緩和する働きがあるらしい。大切なところの毛が水飴と共にはがされると思うだけで痛みが走るようで緊張するが。

まあ、そういう文化もある、という話です。

上海での初めての夕食は、少しぜいたくをして高級ホテルで先発隊の結団式をとりおこなう。

京都大学山岳部では山に行く前に、一緒に行くことになったメンバーが集まって町で酒を飲む儀式がある。ある山に行こうと集まったメンバーとその山の危険度との力関係が他の山岳部員によって検討される。行こうとしている人たちの技術力や判断力を、山の危険度が上回っていると判断される時には、山岳部として彼らの山行を拒絶する。検討は1週間に1回ずつ、3回行われる。夏の沢登りでも、冬の雪山の前にもだ。

団結式ではない。結団式という。日本で準備をしているときだって、1日の作業に区切りがつけば、やっぱり同じようなメンバーで酒を飲みに行っていたわけだが、今日から先発隊の行動がスタートするというので、また士気の高め直しである。私たちにっては大義名分のある宴会である。出発まで何かと準備に走り回った。1本しかないネクタイをしめて企業や、登山用品店との交渉をし、慣れない話術で対応した隊員もいる。やっとこれから目的の山に向かうスタートに立ったことで、リラックスしたのだろう。皆とっても陽気になって飲みかつ食らう。和洋飯店にジャ

ズも聴きに行く。

「あんな雰囲気のところだと知ってたなら、明るいノクトニッコールF1.2でも持ってくれば良かった。明日は、TRY-XのISO400を1600で増感してフラッシュなしで写そう」

寺島は、雰囲気にすっかり魅せられてしまったようだった。

私はさまざまなことからの開放感からハイになっている。伊藤に言わせると、

「アオスジ(毛利のあだ名)のノリは、ナムナニ峰遠征の時のポール(京大山岳部の仲間のあだ名)のノリと同じや。おまえ今24歳やろ。ポールもあのとき24歳やった。変に気負ったところもなく、冷めたところもない」

そうかもしれないと思う。初めて海外の登山にいったころは、目新しいことばかりに囲まれ、その場の雰囲気に飲まれてしまっていた。観察することに追われて、それでもう手いっぱいといった状況だったのが、今回は新しい経験を積極的に楽しもうという気持ちで一杯だ。

7月1日

朝7時の上海は水色の空にうろこ雲を浮かべて始まる。

町のあちらこちらのビルでは改築が行われている。舗道もこれから補修されて行くのだろうが、いたるところでコンクリートブロックが剥がされている。インフラ整備を推し進めている最中なのだろう。

古い洋風建築と新しい高層ビルが同居しているのが今この町の風景となっている。イギリス風建築が町中にはいくつもある。かつての上海の華やかさを語りかけるような立派な石材をふんだんに使ったしっかりした造りだ。近年、外資系のホテルも建ち始めた。突出した高層ビルがそういったホテルである。

一方それらの建物から程近いところには、裏通りに入らなくても2階建ての民家やアパートが立ち並ぶ。その窓という窓からは竹材

の物干し竿が道にまっすぐ突き出されていて、舗道から見上げると、大人や子供の、男や女の上着も下着も頭の上にはためいている。

ホテルの前の路上では闇の両替商人の男たちがたむろしている。

夕暮れ時、ホテル近くのバンド(外灘)とよばれている黄浦江の川岸を散歩道にとり歩いてみた。

入場料5角を払って公園の中に入る。

昼間の暑さは閉口するほどのものだが、夜になってもむっとする暑さは続く。川岸でも熱風が体を覆い包む。

川岸には数限りないアベックがいる。昼間見た物干し風景から思うに、上海の居住環境は日本の都会の窮屈な住宅事情以上かもしれない。

「シャンハイダ レンコウ ピー トンチン チャープドー」(上海の人口は東京と同じくらいです)

中国語のテキストに書いてあった例文が頭に浮かんでくる。

熱心に男に何かを語りかける女、目の前を過ぎて行く船のライトを網膜に残影として残しつつ、2人だけの世界に没入しているもの、遅くになってやってきて、すでに他のカップルによって占拠された川辺に2人分のスペースだけでいいからいかと探して歩く男と女、……。私たちは、まわりの男や女から発散されるからみつような人間の香りと上海の町自体の暑さにむせ返るような気がして裏手の雑木林のなかの小路へと分かれた。

体長5ミリほどの小さな螢が風に流されるように舞っている。

恋焦がれても泣けぬ螢は身を焦がす普通の人たちが生活して、螢の舞う町である。

7月2日

出発は明日である。

どこでの手違いからか、ホテルから今夜は泊められない旨の連絡を突然受けた。

私たちが今日出発する話になっているのか、あるいは要人が急遽泊まることになったためか、理由ははっきりしない。

当然この突然の通告に「はい、そうですか。再見」というわけにはいかない。抗議することになったが、フロント係を務める男の対応が興味を引いた。

上海で合流した通訳の浅野も一緒にホテルに泊まっていたので宿泊当事者として中国語で交渉する。

「今晚までの宿泊を予約してあったはずだ。なんとか部屋を都合してくれ」

「(部屋が)ないものはない。早く出てゆけ」

こんな調子で話がかみあわない。問答無用。毛利と浅野を残し、他の者は明日からの3泊4日のウルムチ(烏魯木齊)行きの汽車でつまむ嗜好品を求めに出かけた。

残った2人は作戦を変更した。毛利が内心穏やかならぬ気持ちでいっぱいなのを耐え、意識的に落ちついた振りをして、日本語で再度掛け合う。私たちの予定の再通知と、先方の突然の退去通告がいかに不当であるか。それと一番大事なことなのだが、今夜のホテルを先方の責任で手配するよう要求したのである。

浅野がそれを通訳する。

フロント係とは先ほどと同じように浅野が話しているのだが、今度は少なくとも話だけは聞いてくれている。やがて今年4月に新装開店した新亜大酒店という近くのホテルに移ることに決まった。登山用の荷物を持って移動するのは手間だから、今日一日ホテルで預かるように、などといった要求も次々主張する。毛利が日本語で言って、浅野が中国語で通訳する。要求は通って行く。つまり、これで格好からいえば、通訳付きの宿泊客がクレームをつけるという構図ができあがったこと

になる。

しゃべっていることははじめに浅野が一人中国語で話していたことと同じことなのだ。自分で役回りを演じていて、今夜の宿が決まった安堵感を抱きつつ、こんな茶番が通ってしまうことがおかしくてならなかった。

個人の荷物だけを持って新しいホテルに移動する。飛び入りの仕事は片付いた。

昼食は南国飯店で広東料理を食べる。いわゆるゲテモノと偏見で見られている材料を使った料理もおいしく食べられる。こちらにきてから規則正しく3度の食事を食べる生活になって、食が太くなったらしい。確かに下宿での暮らしよりもよほど健康的だ。旅先で水が変わって体調が崩れたというような言い回しは、私たちにはいらぬようだ。

ウルムチまでの汽車の行程は大変かも知れないと、蛇のスープを意気込んで食べたが、思ったよりも淡泊、鶏肉のようで、肩透かしを食ったような感じだった。

シャツにぼつぼつとしみをつくっていた汗が、歩数の増加と歩調を合わせるように次第にそのしみを拡大させ、べつとりとシャツを濡らすころ、浅野が面白いところへ連れて行ってやるという。

古めかしい大きな建物の入り口左手には、ボイラー用の燃料に使うのか石炭が山積みされている。白色電球の光の下、廊下を進む。風呂だという。2階へはエレベーターが通じるが、たまたま乗り合わせた中国人には健全な雰囲気といったものが感じられない。エレベーターを降りると、琥珀色の光に包まれた重厚な感じの部屋があって、入浴料金を支払う仕組みになっていた。

導かれるままに一室に通される。

4つあるリクライニングシートのうちの1つには既に先客がおり、タオル1枚を腰に巻いてマッサージを受けている。

ジャスミンティーの香りがかすかに漂う部屋で、アヘンを飲む者のように男はすっかり

体を弛緩させていた。細身の体は既にじっくり風呂で蒸されてむだな水分を絞り出し、“三助”に念入りに擦られたのだろう。肌の色は柔らかな紅色になり無為の状態にあるようだ。

私たちにベッドに横になるように命じた店の男は、私たちの脱いだ衣類を木製のロッカーにしまいこみ鍵を掛ける。財布や時計はベッドの傍らの木製の引き出しに入れて、これまたジャラジャラと持っている鍵の1つで鍵をしてしまう。一切合切を取り上げられて生まれたままの姿にタオル1枚で横になっている私たちに何もいわずに施錠係は部屋を出て行く。

「これじゃあ逃げ出すわけにもいきませんね」

「なるようにしかならんね」

「次何が始まるんでしょうね」

「まただれか呼びにきてくれるんでしょうね」

ほどなくライトと耳かきをもった男がやってきて、上半身をリクライニングシートごと起こして、おもむろに耳の掃除を始める。初めて顔を合わせる男に耳に棒を突っ込まれて、初めは緊張で体がこわばり、手に力がはいる。

しかし、気持ちいい。耳掃除にテクニックがあると思ったことなどついぞなかったが、初めて体験した。しだいに体がとけてゆく。

「ワンラ(完了)」「終わったよ」

といわれて、夢見心地から我にかえる。入れ替わり別の男が入ってきて身振りで「こっちにこい」という。

同じフロアにあるサウナに入る。だれもない。足元では火がどんどん焚かれている。ごま粒大の汗が結合しツルリツルリと流れ出す。もう少し我慢するのが上海流かとも思い、出ようか、もうちょっと待とうかと考えていた頭も熱さでまいってきた。外に出た。男は「次はこっち」と何事もないかのように向か

いの扉を指さす。熱さでふらりとしつつ、つまらぬことで考えこんでいた自分におかしくなる。

湯けむりの中で何人かの男たちが仰向けになり、うつ伏せになり、“三助”に垢を落とさせている。「入れ」と示された浴槽はとろんとした湯をたたえている。湯舟の縁は寝そべることができるだけの幅があり、そこでふやけた肌から垢が剥がされ、消しゴムくずのような灰色のカスが赤くなった肌に残される。

時折湯舟から湯を汲んで流す。

つるんとした赤い肌が湯舟の縁に残り、消しゴムくずは、湯舟の外へ、湯舟の中へ。そんな上海の男たちの垢と石鹸が混ざりあっているんだろう。湯の花のようなものがまざった湯は肌には柔らかい。障子紙をさかいにして分けられた真水と塩水がいつしか混ざって塩水となるように、身体に上海のにおいが染み込んでくるようだ。自分の持っているおののけを超えて入ってきた上海のにおいを感じとったとき、外国人であることの気負いが弱くなった気になり、湯舟の中で大きく息を吐いた。

浴槽の縁で、指の先から始めて隅々までの垢を擦られる。見事なまでに擦りとられた垢に見とれているうちにも、陰部のすぐ近くや尻の割れ目まで、あっけらかんとタオルで擦られる。湯を掛けられて、私の垢の一部も湯と共に湯舟の中に加わっていった。

軽くなった身体を部屋に戻ってベッドに横たえる。小気味良く身体を打つマッサージの音と共に身体がほぐれて行く。快樂物質エピネフリンが放出されるのか、穏やかな多幸感が支配する。マッサージのあと、別の男が入ってきて爪を切ってくれる。パチンパチンとじゃない。メスのような鋭利な刃物で肉との境をそいでゆく。すっかりそがれた爪は美しいカーブを描いて、ピンク色に染まった爪の下の肉にはめ込まれたような感じに落ちつ

く。

ジャスミンの香りを楽しみつつ、茶を口にす。私たちが部屋に入ってきたときマッサージを受けていた男のように、私たちもまた身体を弛緩させてまどろみのなかにいた。

上海—ウルムチ汽車の旅

7月3日

「ウルムチ行きの汽車はしんどいぞ」

「汽車の飯はまずいぞ」

こんな話をきいていたので、ホテルの朝食はかなりのボリュームを平らげる。コンチネンタルスタイルのブレックファストを1人前と中国式の朝食を1人前、それに中華まんじゅうをおまけにつけた。

ウルムチ行きの汽車は18両編成。

これから乗り込むのは日本から出発した4人と、Tシャツに短パン、小さなザックを背負って水筒をたすき掛けにして駅に現れたOさん。Oさんは浅野の知人で日本人留学生である。夏休みを利用して新疆からチベットを旅行するというので、ウルムチまで同行して頂くことになった。2年間OLをしたあと退職して私費で上海の大学に留学しているという。通訳の浅野は少し遅れてウルムチ入りすることになっている。

予約してあったコンパートメント(個室)に他の人たちも二重に予約されていて、いったん運び入れた荷物を別の個室に入れ直すというような、ごく些細なトラブルはあったにせよ、ともかく、やがて汽車はガッタンと車輪を回し始めた。

サウナのように、じっとしていても汗が吹き出してくる。個室の温度計は36度をさしている。加えて、湿度も相当高い。内心少々うろたえる。

「とんでもないハードな旅になりそうだ」

中国人乗客も廊下側の窓にへばりついている。2回の夕立があって、すごし易くなった。ホーナン(河南)省のシャンチウ(商丘)ま

で進んだあたりで日が暮れる。日没は9時ごろ。

7月4日

シャンシー（陝西）省のシーアン（西安）付近を通ってカンスー（甘肅）省のティエンシュイ（天水）まで。

朝8時前に三門峽西（河南省）を通過する。雨が降ったりやんだり。雨は夜中から降っていて、窓のすきまから吹き込んでいた。枕元付近に水しぶきがかかっていて寒気がするので目が覚める。かといって、乗り込んでいる汽車はそんなに老朽化したものではない。たまたまたつけが悪かったものと思われる。

特に私たちの乗っている客車は、最上等のクラスである。

硬座とよばれる椅子席の車両。

軟座という上等な椅子席の車両。

硬臥という日本でいうところの3段式寝台車両。

それと私たちが乗っている軟臥。クッションの利いた2段式ベッドの豪華個室寝台車両である。乗務員によるお茶のポットでのサービスまでである。

1つの個室にはベッドが4つあるので先発隊の4人だけで部屋を占有できる。昼間でも眠たくなると上の段のベッドに登り、目が覚めると降りてくる。荷物の入ったプラダンはテーブル代わりになって、ベッドの間に積まれている。その分だけ窮屈だが、皆雪山で狭いテントの中でも役割分担をきめて生活するようなことには慣れているので、窮屈といっても身動きのできる個室には何の不満もない。

雪山でのテントの中は本当に狭い。寝袋を互い違いに隙間なく敷き詰める。そうしておいて自分の荷物は足元か枕元にかためておき、上半身だけ起こしてご飯を作ったり、コンロに燃料を入れたり、お茶を沸かししたりする。上半身だけ動かすだけで必要なものは手

に取れてしまうが、ナイフでも、箸でも、手袋でもいったんどこかに紛れてしまうと、まあ見つからない。テント生地の上にはマットが敷かれ、荷物を取り出したザックが敷かれ（これらは断熱材の役目をはたす）、寝袋が敷かれるという垂直構造と、自分の身体の幅をはみ出したところには他の人の荷物や共同の登攀具が広がるという水平構造の中でのものをなくすのだから。

ウェイシュイ（渭水）のほとりを走るあたりの風景は水墨画のようである。

食事が変わったためか、伊藤のおならがひっきりなしに響き、臭い。

7月5日

起きると外の景色が一変しているのに気付く。丈の高い樹木は姿を消して、麦畑と薄い水色の花をつけた細長い草の畑や牧草地が広がる。降水量が少なくなってきたことが、こうした植生で一目瞭然に分かる。

草木が生えていないため黄土色に見える山は、山肌の侵食が進んでないようだ。山の中腹から麓にかけて、彫刻用の三角刀で削ったかのような深い谷の溝ができていく。その溝は山頂までには達していない。

日本ではみたことのない山の形になっている。山肌の黄土色と、麓の牧草地と、そこに群れる羊のコントラストが気分をさわやかにしてくれる。

昼間、1人の男性がコンパートメントにやってきて話しかけてくる。海南島の新聞社の社会部記者をしているという。どこで聞きつけたのか登山計画の取材をしてゆく。Oさんが途中から起きてきて通訳をしてくれる。

話が終わったころには、外の風景は茶色一色に変わっている。

時刻表に照らし合わせると、そろそろカンスー省のチャンイエ（張掖）のあたりまで来ている。進行方向右手はゴビ砂漠に連なり、左手側はタクラマカン砂漠に続いていく。辺りに

なる。

ちょうど汽車が走っている道筋あたりは、かつて唐の時代には隊商路になっていて、河西回廊とよばれていたところにあたる。南側のチーリエン（祁連）山脈の雪解け水が山の麓にオアシスをつくり、そこにキャラバン・サライ（隊商宿）が発達した。かつては賑わったところだ。

夜8時をすぎてジュウチュエン（酒泉）のあたりで万里の長城の一端を汽車が突ききって通っていった。平坦なゴビの大地の色と変わらない色の低い土壁だ。それが今、夕陽を浴びて影を延ばして、右から左へ果てしなく連なっている。

北京あたりから続いてきたこの長城も酒泉の少し先、ジアイウグァン（嘉峪関）あたりで終わる。したがって、今通っているのは長城の本当に西の端っこになる。

煉瓦を積むのに駆り出された人の数はどれほどにのぼるのか。それ以上に、長城をつくらせようとした男の心情については、あごの筋肉をゆるめて驚くばかりである。遥かな距離の乾いた土地まで、延々と、造るなんて。たとえ大いなる愚行としても。

夕陽を浴びて、汽車の旅で砂漠の長城に出合うというのは、人を感傷的にするのに、あまりに都合の良い設定なのかも知れない。

食堂車で働くコックが、個室を通りすがりに声をかけ、話を始める。この列車について教えてくれる。

「この路線は1960年代の初めに拓かれました。乗員は車掌、コック、整備士などを合わせて65人が乗っています。乗客は約1500人くらいですね。乗務員はほとんどが上海人ですが、上海-ウルムチ列車にはウイグル人の乗務員も乗っています。コックの仕事は朝6時から始まりますが、食堂車の夕食時間は8時前には終わってしまうから、日が暮れるまでの2-3時間は自由な時間で、こうして話したりできるんです」

ウルムチまで乗って行くと、1泊してすぐ上海に戻るそうだ。

「上海の方が休めるからね。ウルムチではあまり町に出て行きません」

「昔は軍人だったけど、今はこうしてコックをやっています」

奥さんは今も軍に勤めているという。こうして夫婦わかれて暮らすことが多くて事情は大変だと思う。

「わたしの一番大切なものは仕事で、その次が妻です」

このあたり外国人向けに気を使っての言葉なのか、そういう教育が浸透しているためなのか？

7月6日

このところ2日ほど眠たさと食欲不振のため朝食をとっていない。つまり汽車に乗って1回目の朝食以降、朝は食べていないのだ。特に体調が悪いというわけではなく、これまでの食べ過ぎによる反動か、脂気の多いものばかり食べてきたので胃が重くなっているのかもしれない。というわけで、窓から見える朝日を写真に撮るなどしつつ、再びごろごろ横になる。

景色はときどき、草原になったり、パッチワークのような草を配置したり、家屋なんかをやり過ごしたりする。でも、目に入ってくるのはほとんどが寂莫としたゴビの原である。

“地平線が見える”という表現は、私たちににとってみれば決して誇張ではない。

伊藤は汽車に乗ってから司馬遼太郎の『モンゴル紀行』を読んでいる。一緒に外の風景をながめっていると、伊藤がつぶやく。

「モンゴルだとなあ、馬に乗った人がいるとするやろう。するとな、その人が、何にもないように見える草原を突然馬を走らせ始めることがあるんや。そいつは、行く手、遙か遠くのほうに馬に乗った人がもう1人いるの

を見つけてるんや。相手も同じようにこちらを見つかるんよ。それから、かれこれ半時間も2人が馬を駆けさせて、この2人が知り合いたと、2人は馬の上で抱擁することになるんや。そう書いたんで。この本に」

ここの風景も、モンゴルの人の目の解像度をもってすると、もっと他の多くのものが見えているかもしれない。

トルファン（吐魯蕃）を過ぎて、列車は天山山脈を打ち抜いて山中を走る。トンネル、トンネル、トンネル、トンネル。

いくつも越えて天山北面に出ると、今までとは風景が違って来る。一面が緑の草に覆われている。

ボゴダ峰（5445m）を右手にみて汽車は走る。定刻にウルムチ着。

町外れのホテルに着いてから、新疆登山協会の孫建章さんとこれからの打ち合わせをする。

（会話の内容）

船便で送った登山隊の荷物116個は全部トラックでカシュガル（喀什）へ運ばれた。

食糧、鍋のたぐいは中国側と共同でカシュガルにおいて購入する。

ウルムチからカシュガルへは四駆の乗用車と1トントラックの2台で移動する。

崑崙をユータン（于田、ケリヤ）から入って北から南へ抜けるのは、荷物をロバに運ばせることで可能であろう。ただ、ロバは個人の所有なので多くの荷物を積むことはできないだろう。

孫さんは5月にチオン・ムズターグ（瓊木孜塔格）峰の南側を通ったことがあるとのこと。6月ごろが通過するのに最適な時期だろう。7月から8月は水が多いかも知れない。

夜間地面が凍結することはない（から、ぬかるんでいれば難渋することもありうる）。しかし大型の車で行けば通過可能だろう。

中国側は出力の大きいトランシーバーを持

っている。K2（8611m）からイエチエン（葉城）まで届くほどの出力があるが、これを持って行くかどうかは連絡官と相談しよう。使えるとしてもけがなどの緊急の場合だけになる。

ガソリンはカシュガルかイエチエンで用意できる。それを過ぎても手に入れることができるだろう。

全部の荷物を積むとなると、トラック2台では積みきれないことも有り得る。行きはトラック3台になる可能性がある。というのは今日カシュガルに向けて送り出したものだけでいっぱいだったからである。

7月7日

ウルムチまでの間、通訳をしてくれたOさんと別れる。

ウルムチの町は自動車で行くとあっけなく町外れまでいってしまう。歩くには広すぎる。

町の市場にはハミウリをはじめとした野菜、香辛料などが並んでいる。

ウイグル帽をかぶり髭を伸ばしたおじさんや、赤や黄色の薄手のスカーフを頭に巻いたおばさん、漢民族のおじさん、いろんな顔つき風体の人たちがいりまじって、それなりの活況を呈している。

市場の奥の方は香ばしい香りと白い煙でおおわれている。カワープを売る店が並んでいるのだ。カワープはウイグル語、漢語では烤肉串（カオロウチュアン）という。シシカバブという名前の方が一般的になっているかもしれない。串に刺した肉にスパイスを振りかけて炭火で焼いたものである。

赤みがかった肉や、白っぽい肉やレバーなどを串に刺して、各種の香辛料が振りかけてある。塩、唐辛子、フェンネル（ウイグル名：ジラ）などが使われているようだ。フェンネルはセリ科の植物で、漢方では胃の薬として知られている。

近くに並ぶ肉屋の店頭にぶら下げてある枝

肉（皮を剥ぎ、内臓などを取り除いただけのもの。家畜の大きさや形が想像できる）から判断するに、羊とヤク、それにヤクと牛の雑種がカワープ用の肉に使われているらしい。

1本2角。唇が金串にあたらないように口を横に大きく広げて頬張ると、表面が炭火でコンガリと焼けた肉から、熱い肉汁が口の中に広がる。

うまい。視覚としては焼き鳥に近い。

このあたりから西の方、ずっとトルコあたりまで、羊を使った焼き肉料理は広く分布している。大ざっぱな言い方をすれば、どれも肉を小さな塊やミンチにして、串に刺して、炭火や高温のかまどで焼き上げる。

ウルムチーカシュガル車の旅

7月8日

10時すぎにウルムチからコルラ（庫爾勒）に向けて出発する。

今朝は食べ過ぎか、連日の脂っ気の多い料理による消化管のくたびれによるためなのか、はたまた昨日買ったロイヤルゼリーを一度に3本も飲んだためか、下痢。おならをしようものならば、黄金の液体が滴り落ちそうなほどのありさまである。止痢剤のロベミンを1粒服用。

食欲が落ちたわけでもないのに、腹の調子が悪いということで朝食を控えめにしたので、自動車に乗ってから空腹感が訪れる。これを紛らすために中国製のキャンディーをなめてごまかす。お菓子の類では上品な味のものが少ないと先入観で思いこんでいたので、口にしたら餡が日本製のように食べやすいのが驚きだった。疲れもたまってきたので、車の中でしばらく寝て行く。

郊外に出ると、茶けた岩の原っぱの岩砂漠が広がる。日差しも強い。トルファンの方へいったん南下して天山山脈の山間をぬって走る。赤茶けた岩山、ワジ（涸れた川。雨が降ったあとなどには水の流れがみられるがふだ

んは水が流れていない）を横目でみながら、座席から数センチも飛び上がるようなでこぼこ道を走る。左に右に道路にできた大きな穴ぼこを避けながらかなりのスピードで走る。爆弾が落ちたわけでもなかりうに、なぜか道が所々えぐれている。

途中の街道筋でウイグル人の経営する食堂で昼飯を食べる。焼きそばならぬ手打ち麺の焼きうどんが皿に盛ってある。その上に羊の肉とトマトのぶつ切りを油で炒めて香辛料で味付けたものがかけてある。麺の歯ごたえといい、具の味付けといい、とても口に良く合う。

やがて大きなビルの立ち並ぶ町にたどりつく。カラシャール（喀喇沙尔）という。現在正式には焉耆（えんき）回族自治区の県都になる。古くにはコルラあたりまでを含めて焉耆と総称していたということだ。

露店で皆でスイカを食べる。赤くて、甘くて、みずみずしい。冷蔵庫に入れてあったわけではないけれど、暑い砂漠を走ってきた身にはそれは清涼感のかたまりである。身体の細胞に、スイカの水分がそのまま吸い込まれてゆくようだ。生き返った心地というのはこういうことをいうのかと思う。

透明感のある空と、照り返す砂漠の風景と、その境目あたりを歩き交う原色のカラフルな薄手の衣装を身にまとった女性の姿は実に眩しく美しい。

カラシャールから50キロほど南下してコルラに到着する。ウルムチからコルラまでは350キロほどの直線距離。走行距離は470キロである。

コルラでのホテルは町外れに位置しているらしく、あたりは割と閑散としている。

このコルラという町は、かつてスウェーデンの著名な探検家スウェン・ヘディンが、これまた「さまよえる湖」としてすっかり有名になったロブノールへの探検に行く途中に足止めを食ったところだ。彼は、革命を夢見た

当時25歳のイスラム教徒（回族）の將軍馬仲英の起こした内乱に巻き込まれて、トラックなどを略奪された上、1カ月間ほど幽閉されてしまう。

新疆を「探検」していた人たちは、ヘディンのような「地理学者」だけではなかった。あとでも出てくることになろうが、ウェルビーやデーシー、ローリングといった崑崙付近を踏査した人たちは皆、大佐などの肩書を持つ軍人だった。彼らがこの地域を歩き回ることができたのは純粋に未知への探求心だけではなかった。彼らの所属する国の「領土的野心」が大きな原動力になっているはずだ。

もっとも個人についていえば、未知なるものへの好奇心がないような人だったならば、さまざまな苦難が訪れる、生活するにはとても大変な環境の下で、測量をしたり多くの記録を残すようなまねは続かなかったのであろうが。

さて、コルラでの夕食はモンゴル風の味付けがされているらしい。インゲンマメ、トマト、羊肉をふんだんに使った薄味の料理がおいしい。

食べ物についての「嗜好性」を話題としたとき、一つの物差しとして以下のことを挙げたい。材料をいろんな風に料理できるかどうか、つまり同じ材料をつかって幾通りもの料理が作られているかどうかである。

特にトマトの完熟のものを使った炒めものに私たちは皆感激する。

「ヘンハオ」

「ハオチー」

ごくごく簡単な中国語が単語で口に出る。

「このインゲンマメは肉厚だね。きっと、さっとゆでて、かつおぶしと醤油でもかけたらもう最高にうまいよ」

寺島が箸を休めることもなくつぶやく。

「この完熟トマトの深みのある赤さと甘みは筆舌に尽くしがたいですね」

私も箸を動かしながらだ。

「炒めてもシャキッとしているキャベツや甘みのあるトマトは最高だね」

陸好が皿に手をのぼしながら身を乗り出して言う。

「生のにんにくは腸に強く作用するからなあ。食べ過ぎるとピーピーやで」

説得力のある物言いの伊藤に脅かされつつも、にんにくの利いたおいしい料理を前におなかの調子を忘れてしまう。

デザートはトマトの砂糖がけとスイカ。前者は後で聞くとよければ日本でも食べると言う。その珍なる組み合わせに驚く。が、食べてみるとおかしな味ではない。味覚の初体験だった。

食後に整腸剤、止痢剤、殺菌剤を飲む。にんにくの威力か、また下痢。

7月9日

快い目覚めだ。ベッドの中から、空の明るくなって行く様をながめ、気に入りの音楽を聞きながら歌を口ずさむ。コルラの透き通った青空に、小さな綿雲の浮かぶのが、町に広がる街路樹の緑と共に、心をなごませてくれる。オアシスの街道沿いのポプラ並木のつくる影と緑の壁は強烈な日差しからのシェルターになっている。

朝食から、にんにくの利いたモンゴル風料理が卓を彩る。腹の調子はまだ回復していないが、相変わらず食欲は旺盛でついつい食べ過ぎてしまう。目新しいところでは、焼いたばかりだが固い丸形パン、蜂蜜がメニューに増えた。

伊藤が昨晚から風邪気味だ。今朝は37.6度の熱があるという。腫れぼったい熱っぽい顔をしていて元気がない様子で、心配である。日本を出発してから10日あまり。出発間際の忙しさによる疲れが現れてきたのだろう。伊藤にはトヨタのランドクルーザーの前部座席でゆっくり休んでもらう。

今日の行程はコルラからクチャ（庫車）ま

でだ。距離にして二百数十キロになる。4時間ほどで到着するとにらんでいたが、道路は未舗装の部分が多く、思うようには進まない。

途中、バスの発着所で昼食をとる。何軒もの食堂が軒を並べ、ひしめいている。漢民族の経営する店とウイグル族の経営する店が混在している。

漢民族のスタッフと共に行動しているためだろう、食事といえば必ず漢民族の経営する食堂に連れて行かれる。食べ慣れたものがよいのだろう。私たちにとっては漢、ウイグル共によその料理である。どちらかといえば、せつかくここまで来ているのだし、ウイグル料理を食べたい。ところが悲しいかな、どんなものも好き嫌いなくおいしいと思う性のため、漢民族の店でおなかいっぱいにしてしまい、はしごする余力がない。結局、ウイグル料理屋を見回って冷やかすだけにとどまる。

麵を作る店、ナンを焼く店、シシカバブを焼く店などが軒を連ねる。ウイグル料理もうまそうだ。どの店も客で賑わっている。

ナンの作り方を見た。

まず、全粒小麦粉をこぶしよりひとまわり大きく練って丸めた塊を偏平型にする。つぎに、円の縁に近い部分を指で薄くのぼし、中心部が厚みをもった形に整える。ちょうどUFOのような形にのぼすのだ。それからまん中の厚い部分も押ししてしまい大きな円盤を作り上げる。この段階で厚さは8ミリぐらいだろうか。その上に道具を使って模様をつける。ゴムスタンプのゴムの部分を丸い剣山に置き換えたような形をした道具だ。生地に剣山の針先が刺さることで模様ができ、ガスぬき穴にもなる。ナンはふだん私たちが食べているパンと同じように発酵パンの一種にあたる。

ここまで形ができた生地は、手のひら3つぶんくらいの四角い布張りの台にのせられる。模様は下側、台に接して置く。この台ごと片手でかまどの内壁にペタンと張り付ける。張り付けた後、布張りの台は外す。かま

どはトヌールとかタヌールとか呼ばれるもので、内部は壺型になっている。生地をかまどの内壁に張り付ける人はタヌールの上に乗っているのだから、張り付けるときには足元のかまどの穴に上腕部まで腕を突っ込むような格好になる。インド料理で有名なタンドリーチキンを作るタンドリーも、いってみればこのトヌールと同じようなオープンである。へばりついた生地はまもなく焼き上がる。

余談になるが、トルファン時代の古墳から、いくつかの小麦粉から作った食品が腐ることなく発見されたが、ナンも含まれていたそうである。

結局、クチャに着いたのは午後4時になった。一見すると乾いてほこりっぽい感じがする。ウイグル人の民家が、周りを土壁で囲っているためだ。

ところが、街中を路に沿って用水路が流れていて、土の溝の中を流れているにもかかわらず水は澄んでいる。さらさらと豊かな水量だ。子供たちは、素裸でその用水で水浴びを楽しんでいる。また、道路と庭を隔てている土壁の向こう側には花が咲き、果実が実っている。中庭は土がかたく突き固められており、土間のようにになっている。そこはきれいに掃き清められていて、稟としたみずみずしさすら感じられる。

きょう本隊が日本を出発したはずだ。ついでに本隊のメンバーを紹介しておきたいと思う。

本隊は総隊長以下8人である。それに同行する新聞記者が1名。

総隊長は京都大学名誉教授、中島暢太郎である。1986年に京都大学防災研究所を定年退官するまで京都大学山岳部の部長を務めた。チリのパタゴニアに氷河調査隊長として3回、ネパール・ヒマラヤに氷河調査副隊長として2回調査隊を率いた研究者である。

京大の前身、旧制三高の出身である。永年一般にも愛唱されてきた寮歌の中に「紅萌ゆ

る……」で始まる旧制三高の寮歌「逍遙の歌」がある。

その中に次の一節がある。

銀漢空に 冴ゆる時
かよへる夢は 崑崙の

旧制高校世代の京大出身者にとって、崑崙はたいへんな思い出がある場所なのだ。今回、荷物の中に三高の校章のはいた鉢巻きをしのばせている。崑崙の眺められる場所でそれを締め、逍遙の歌を吟じることだろう。

「チョータローさん」と呼ばれる、66歳。

隊長は京都産業大学教授、能田成である。農学部を卒業した後理学部に入りなおし、地球科学の研究を続けている。このように書くといへんまじめな学者然とした人に思われるが、実際はとても気さくな隊長である。若い隊員は能田のもとで自由に意見が主張できる。1974年にはカラコルムのK12峰へ学術隊員として参加したことがある。今回は隊長任務のほか、ユーラシア大陸の真ん中にある火山の成因を明らかにし、またユーラシア大陸とインド亜大陸の衝突による大陸変形の様子を調べるといふ。素人が聞いても胸のすくような大変スケールの大きいことを目的としている。

日本側隊員から「能田さん」「能田隊長」と呼ばれるのを聞いたことがない。いつも「ノーチンさん」、47歳。

登攀隊長は人見五郎が務める。京大大学院農学研究科の博士課程にいる研究者の卵である。1982年にチベットのカンペンチン峰(7281m)、85年にブータン・ヒマラヤのマサ・コン峰(7200m)の初登頂を果たしている。経験豊かで、対外折衝に才能を発揮し、登山隊の意思決定に関しての発言力は大きい。凄いところは集団の中の雰囲気をもり立てるすべを心得ていることだろう。「ハイガ」、32歳。

白井秀友は登攀隊員である。京大大学院工学研究科の修士課程の学生。初めての海外登

山参加だ。国内の山登りに比べると、何かとわずらわしく感じる人が多いようである。不満を漏らしながらも、合理的に装備の梱包輸送係を務めている。「メサキ」と呼ばれる。23歳。

乙藤洋一郎は学術隊員である。38歳。神戸大学理学部で助手を務めている。隊長の能田と同じく地球科学の研究を目的としている。1986年に神戸大学がチベットのブータン国境近くに位置するクーラ・カンリ峰(7254m)に学術登山隊を派遣した際にも学術隊員として参加した。

彼らが研究用のサンプルを持ち帰るとき、荷物運搬に雇った現地の人たちはあまりいい顔をしなかったという。何しろ荷物は石ころばかりなのである。石を詰めた箱は、見た目には小さいのに、持ち上げようとすると肩が外れるくらいに重い。同じ労賃をもらって担ぐのだったら軽いほうがいい。同じ重さなら「意味」のあるものを運ぶ方が運び甲斐がある。ところが、小さな箱には、そこで暮らす人に見れば足で蹴飛ばすくらいどこにでもある石がいっぱい詰まっているのである。結局、石が語ってくれる地球の変化について土地の言葉で説明するのに十分な語彙を持っていない学者は、中に何が入っているのかには口を閉ざし、こっそり運んでもらうことにするのだ。今回は採集した後、トラックで運んでしまう予定になっている。学者にしてもその点では気が楽であろう。

三輪佳宏はドクターである。京大在学中は医学部山岳会に所属していた(医学部は卒業までに6年かかることもあり、4年サイクルでシステムが組まれている山岳部よりも独自の組織で活動したほうがやりやすい面があるようだ)。現在、脳神経外科が専門で、神戸の吉田病院に勤務している。

「薬はいっぱいありますから、何とかなるでしょう」
言葉には、隊員は頼もしいやら、不安やら

複雑である。40歳。

遠山仁は高知新聞の論説委員だが、今回は中島総隊長の専属通訳としての参加である。実は、彼の妻は中島の娘、つまり中島からいえば娘婿だ。中島は途中で本隊とは分かれる予定なので、以前北京に留学していた遠山に通訳を頼むことになったのである。36歳。

福島申二は朝日新聞大阪本社の社会部記者である。今回の私たちの登山計画に賛同をいただき、後援についてくれた同社から派遣された。79年にカモシカ同人ダウラギリ縦走登山隊員としてダウラギリV峰(7618m)に登頂するなどのクライマーでもある。

(本隊日記＝能田成)

9時20分、大阪国際空港発のJL785便にて中島総隊長以下8人の本隊が出発。近藤良夫先生をはじめ多くの先輩や友人に送られた。中でも三輪ドクターの勤務する病院の看護婦さんたちがひととき華やかで、花束までドクターに贈っていた。この花束はウルムチまで私たちと行動をともにすることになる。

機内は存外空席があり、ゆったりした旅である。JALには珍しく、アルコール類が無料サービスの路線だ。ふだんならば大いに飲むところだが、今回は隊長である故、缶ビール2本にとめた。この日の日記に「腹の調子はかなりよい」とあるのは、出発前の多忙で相当へばっていたのかもしれない。

12時30分、北京首都空港着。北京は大阪よりもはるかに暑い。空港には中国登山協会(CMA)の人たちが出迎えてくれた。中国科学院の鄭錫瀾氏も現れたが、いつの間にか消えてしまった。私は彼が猛烈に苦手である。彼の無教養な風ぼうと、お金以外には興味も示さない態度に接すると、途端にうつ病になってしまう。もし彼がこの遠征に同行することになったらどうしよう。ありがたいことに、多忙で崑崙には行けぬという。

空港では、梅里雪山の交渉で北京に来てい

た吉田、倉智、佐々木の3氏に会う。崑崙での健闘を祈るとのエールを贈られた。

ホテルまでの車中、いつの間にか寝てしまったらしい。宿舎の北緯飯店はいささかさえぬ建物だ。

ホテルに着いて、CMAの人たちから崑崙隊についての現状報告を受けた。科学院から参加する3名は既にウルムチに向けて出発したとのことだ。

夕食はリザーブなしで北京ダックにトライしたが、「時間切れ」とかで振られてしまった。遠山の中国語会話能力をもってしても、らちは明かず。暑いのに腹ばかり減り、面倒な第1夜だ。

7月10日

日の出とともに目覚め、日の入りとともに眠りに着く毎日だ。

今日は日曜日。バザール(市場)が開かれるという。さっそく出かけることにした。

異国の街でこうした市場を見て回るのは楽しい。デパートをぐるっと一回りしてみると同じように興味深い。暮らしに密接に関係した品物を集めた場所は、風俗習慣を知るのに大いに役にたつ。

勢い込んで出かけた割には、店が十分に開店していないし、客の出も少ない。最も人が多く集まってくるのが、昼過ぎの3時から4時だということだった。

クチャでのバザールはあらかじめ、アクス(阿克蘇)でバザール見物をしようということにした。バザールの案内をしてくれた体育協会の方々には申し訳ないのだが、バザール見物から引き揚げ、アクスに出発したい旨を伝えようとした。浅野に通訳をしてもらうことになる。

「せっかく案内してくれているんだから、ここのバザールをもう少し見よう」

浅野は相手のことを思いやってなのか、押しが弱い性分なのか、すぐには意向を伝えて

くれない。平衡感覚に優れた人なのかもしれない。私たちは折角ここまで来たのだから、見たいこと、やりたいことをやろうという思いに基づいて意見し主張する。

大事なことは、それぞれの人のポジションに応じた主張をすればいいということだ。つまり集団の中で若くて元気の良い人が積極的な行動を主張し、集団を司る役にある人は、その意見を聞いてバランスの良い判断を最終的に行うのがよい。若い者がものの分かったような中庸の意見をいっていたら、集団の活性はなくなってしまうだろう。リーダーの位置にある人やそれに準じる人にも思い切った行動をとりたい気持ちがあるだろう。けれどもリーダーがいきなり決定してしまったり、それが最終判断になる。集団の動く方向は一元的に決められてしまう。そうなれば、集団としての力の真価は発揮されないだろう。年少の毛利や睦好の役割は、この集団の中にあってはある程度の“やんちゃ”であることだと割り切る。

アクスの手前では、北の山なみに雪の山が見える。トムール峰(7444m)らしい。

アクスという地名はウイグル語で“白い水”の意味がある。ウイグル語では白はAK、水はSUという。AK・SUなのである。

宿泊はイスラムモスク風の招待所になる。居住性はすこぶる良い。湿度が低いので、外は日射病になるほどの暑さにもかかわらず、部屋の中を涼風が通り抜ける。ベッドのシーツも白くパリッと乾いている。強い日差しを受けた身体にシャワーを浴びて、砂ぼこりを洗い流してからしばしベッドにもぐり込む。至福の一刻。

昼寝のあと、バザールを見に行く。インゲンマメ、トマト、セリ、コリアンダー(香葉)カリフラワー、ニガウリ、スイカ、スモモ、ニンニクといった果物、野菜が店先に豊富に並べられている。ナンや挽き肉を詰めたピロシキ風のパンを焼く店もいくつかある。

スイカ1切れが1角(0.1元)。パン1個が1角。タバコ1盛りが1角。こんな具合だ。このタバコはなかなかの商品だ。ほうじ茶を砕いたような、あるいは細かい木屑のような感じの葉っぱである。刻みタバコなので、タバコの箱ほどの大きさに切った新聞紙に葉っぱを巻いて、最後、紙のはしっこに唾をチョイとつけてシガレットにする。葉っぱは細長くカットしてあるわけではないから紙に巻きにくい。喉ごしは軽く、吸い易い。そしてかなり強い。

伊藤の体調も良好になってきた。

夕飯に出てきたヨーグルトは粘り気があって濃厚な味がする。スプーンですくうと糸を引くほどである。味も良い。「ヨーグルト」とひと口にいても、本当にいろいろと種類があるものだ。

かつてヒマラヤの王国ブータンを歩いていたとき、牧畜を営んでいる人たちからヤクの乳から作ったヨーグルトを分けてもらったことがあった。日本のヨーグルトよりも酸味が強く、口当たりがさわやかだったと記憶する。

原料になる乳がどの動物のものか? 乳の種類は、成分を変えない全乳か脱脂乳か? 乳酸菌の種類は? どの程度まで発酵させたものか? それらの違いによっていろいろなバリエーションが作られるのだろう。

毎日おいしいものを食べているためだろうか。脈拍を測ったら54回/分だった。

(本隊日記)

午前中、故宮を見学した後、CMAの王鳳桐副主席招待の昼食である。山東料理とか。何が出てくるかと思いきや、サソリの空揚げであった。身構えて食ったが、何のことはない、カニのカラを食っているようなものだ。史占春主席は入院中で、見舞いに行くと、なんとビールを出してもてなしてくれた。一体どこが悪いのだろう。

きょうこそ本物の北京ダックに挑戦すべ

く、早々に遠山が和平門の全聚徳に予約を入れ、私たちは夕方に備えて1時間も昼寝をした。さてそのお目当ての料理はうまかったが、遠山によると少し頼みすぎたらしく、ダックでゲップとなった。

7月11日

アクスの朝は8時でまだ暗い。

広い中国が、統一した北京時間を採用しているものだからこういうことになる。北京とこのあたりでは経度にして35~40度も違う。したがって、北京で日が昇ってから2時間半経ってようやくこのあたりでは日の出を見る。

8時半。窓の外のポプラ並木が遥か朝焼けの空をバックにして見える。朝御飯であることを告げられて、気持ちの良いシーツから身を起こす。野菜中心の料理が卓を彩る。

9時にアクスからカシュガルに向けて発つ。この辺りの山の斜面に生える草は生え方が面白い。ルンゼ(斜面が侵食されてできた小さな谷状地形)の中だけに草が茂っていて、尾根の部分には一本も生えていないのだ。日本で見慣れた山の植生とは逆になっている。この乾燥地域では、大量の雨でも降れば根こそぎルンゼに生える草が流されてしまうこともあるのだろうが、ふだんはむしろ、ルンゼの中は水気の多い部分として植物の育ちやすい特徴が優勢なのだろう。見事なまでに、ルンゼというルンゼが緑色に彩られている。

やがてにぎやかなカシュガルの町についてた。

(本隊日記)

ウルムチへ移動する。北京は朝から暑い。空港で出発直前になって、科学院の鄭氏が30歳くらいの女性と長身の若者を伴って現れた。先日、科学院の3名がウルムチへ既に出発したというのはニセ情報で、この女性と若者が参加するという。彼らの言うことには、

理解できないことが多い。一体何を信用したらよいのだろうか。

飛行機はソ連製である。機内に乗り込んだものの、一向に出発の気配がない。おまけにクーラーが全く作動せず、機内は蒸し風呂状態である。ようやく飛び立ち、上空で水平飛行に入ると、今度は天井に結露した水分がポタポタと頭上に落ちてくる。飛行機をつくったソ連が悪いのか、メンテナンス側の中国が怪しからぬのかは、当方の知ったことではないが、バラエティに富んだ飛行だ。窓から見える下界はどの辺りか見当もつかぬが、砂漠のようだ。

途中、うまくもないランチボックスと飲み物が出たが、お茶はヤカンに入っているし、ビールはぬるいし、食の文化というのはどうも容易には妥協が成立し難いようだ。着陸前に配られたドライフルーツはウルムチ名物なのか、これは下手なキャンディよりよほど上等のアイデアである。着陸は猛烈に下手なパイロットのお陰で、危うく天井に飛び上がって頭を打つところであった。

初めて見るウルムチの町は、ポプラ並木が美しい。砂漠の中の大オアシスといったところか。

夕食後、新疆登山協会の孫建章氏、連絡官の張江援氏(私たちは張飛と呼んでいた)らと今後の予定について話し合う。高所で予定していた宿泊地の1つでコレラが流行しているとかで、その地での宿泊をなるべく避けるべしとの意見は尊重すべきか。その話し合いはスムーズかつ友好的であったが、科学院のR氏、張飛と日本側隊員と、登山ルート、学術調査計画の話し合いになると、途端に雰囲気はよくない。張飛が150万分の1の地図を広げても、Rは部外秘密資料を外国人に見せることはならぬと、文句を言う始末である。この程度の地図は日本でも買えるのと言っても、出来の悪い官僚には通用しない。張飛は登山ルートの検討は、Rのいないところで

やろうと建設的なことを言う。

たとえ私たちの意見が100パーセント正しいとしても、何とかこのやっかいな連中と妥協しながらやっていく以外に道はない。特に私が先頭をきって頭にきてしまったのではどうしようもない。このことは百も承知のつもりだが、常に冷静な気持ちでいるのは本当に難しい。とりあえず反省して、ウイスキーをひっかけて寝た。

7月12日

町の東の外れにあるカシュガル賓館（新賓館）で、先に日本から発送していた登山用の荷物の整理を行う。

荷物が無事全部着いているかの確認と、キャラバンの途中で必要なものと登山の開始まで開封する必要のないものを分けるのが目的である。キャラバン途中で食べる日本食や、途中の川での魚の採取、標本セット、それに薬などはすぐに取り出せるようにしておこうというわけだ。

プラスチック段ボールに箱詰めされた荷物はトラック2台分。箱には食糧、登攀、学術、生活用具が別々に詰められている。それぞれの箱には番号がつけてあり、食糧パックならばFOODの頭文字“F”で始まる3桁の数字が書いてある。この要領で登攀はCLIMBINGの“C”、学術はACADEMICの“A”、生活用具はそのまま“S”の番号体系にしてある。

この整理とは関係ないことだが、段ボールにはさらに小さい段ボールが2つ収められている。その小箱は1つの重さが平均すると5キロほどにしてある。登山が始まれば、段ボールを開封することなくそのまま担ぎあげればよいように、との工夫だ。

「Fの015」

寺島がトラックから箱を下ろす際に番号をいう。

「キャラバン用です」

食糧係の睦好が梱包明細の一覧表を見なが

ら指示を出す。

伊藤が汗を流しながら箱を運ぶ。こんなふうに箱を平積みにしてチェックしているうち、庭の一角は白い段ボールで埋まってしまった。それでも日が高くなる前には確認を終えた。

午後から馬車に乗って街へ出かけた。街の中心部にはエイティガール寺院がある。新疆最大のモスクだという。その周辺のバザールはとても賑わっている。両肩が擦れ合うほどの細い小道が迷路のように広がり、小さな露店がびっしりと両側に店を出している。モスクの北側にはひと際目を引く華やかな路地がある。

ウイグル族の女性は民族のコスチュームなのだろうが、頭に薄手のスカーフを巻いている。持ち上げると向こうが透けて見えるような薄いふんわりとしたもので、赤や黄色や水色の原色のものをはじめとして、生地に金ラメの模様はいったスカーフなどもある。服装も黒やベージュといった地味なものは見かけない。明るい派手な色使いが多い。ピンクや鮮やかな赤色のブラウスやスカートも多い。

これらの衣類を売る店が狭い路地に店を連ねている。それぞれ店の中いっばいに商品を並べ、それだけではまだ足りないのか、天井からもスカーフを吊るしている。通りは客であふれかえり、客の女たちも商品と同じようなカラフルな衣装に身を包んでいる。強い太陽の光に照らされて、より鮮やかに揺れ動く、女たちを飾る色の集まりを商う一角は、網膜に刺激的で魅惑的に映る。

モスクを挟んで反対側に楽器屋を見かけた。

「なあなあ、おっちゃん。この楽器弾かせてえな」

壁に吊られているラバープという弦楽器を指さす。取ってもらい弾いてみるが上手に音が出せない。

「おっちゃん、弾いてみしてくれる」

店の主人はやおら外にいる人と呼んで、何やらウイグル語で話を始める。話しかけられた男が弦をチューニングして、音を奏でてくれた。なかなか聞きごたえのあるいい音が出る。

カッコの中の言葉は日本語で済ませてしまう。浅野も同行しているけれど、わざわざ通訳してもらうのも面倒だ。店の主人は特に日本語で話しかけられても当惑した様子はない。日本語が分かるわけでもないのに、自然にコミュニケーションをとっていた。

確かに楽器を指さして何かいえば、取っで見せてくれと言っているのは想像できるだろうし、うまく音が出せなかった後で楽器を渡して何かしゃべれば、弾いてみってくれと要求しているだろうと推測は可能だろう。だからこちらが日本語を話したって店の人が対応してくれるのはさほど不思議なことではなからう。ただし、知らない言葉を話しかけられたにも関わらず、ごく自然な対応ぶりは驚きだった。

推測にすぎないが、古くからの交易の要所だったカシュガルの伝統は、言葉が通じない相手にも物おじすることなく、商売をするすべてを伝えているのだろうか。

隣の露店ではタンバリンを売っている。直径が60センチほどの大きなものもある。しっかりと山羊の革が張ってある。店の主人の試し打つ音は張りがあって、リズムは新鮮な響きだ。

近くにはシャーベットの売店もある。氷は、天山山脈の氷河から切り出されたものだという。風流だ。天然の氷室から取ってきた氷でシャーベットを作るとは。

「確かに氷の下の方の部分に泥が混じってた」

という者がいた。

うまさうだったが、食べるのは控えた。

「生水飲むと、肝炎になるで。氷河の下流

の氷なんて特に危ないで」

理性ある人にさんざん脅かされたのである。

カワープ（シシカバブ）を売る店の並ぶ通りでは、羊の脂の燃える煙が通りを埋め尽くし、もうもうとしている。

モスクと通りを隔てたバザールはさらに規模が大きい。さまざまなサイズの蹄鉄、動物の毛でできた帽子、山羊や羊や狼や雪ひょうの毛皮、ウイグル族などの男の人が頭に載せている小さな民族帽子、ナンの表面に文様をつける道具、香辛料、駄菓子、スカーフ、ピアス、ナイフ。

（本隊日記）

8時前によく目が覚める。とはいえ朝食は10時ごろである。この広い国で北京標準時間しか通用しない。従って16時昼食などという変なことになる。こういう現地の人々を無視した社会主義というのは、どこまで正義であり得るのか、とつい余計なことを考えてしまう。そのくせ、いやそのためか、食堂でいかにも中央アジアの美人ウェイトレスがいると、ついニコニコしてしまい、写真を一緒に撮り、大阪から持参のややしばみかけの花束をプレゼントし、実にめでたしである。

科学院の連中は朝7時にカシュガルへ出発したそうだ。昨夜はそういう気配は全くなかった。夜、科学院の要求する計画書を作る。その最中に鄭氏から電報が届き、多忙につき今回は遠征に参加できないとある。来ないことぐらい、日本を出る前から分かっていたことだ。何を今更と思う。さらに科学院のR氏は自分のガールフレンドを連れて行くという。全体何を考えているのだろうか。どうやら暑い北京を逃れて、避暑兼物見遊山のつもりか。

下らない話はさておき、連絡官・張飛の10万分の1の地形図を見ると、目指すチオン・ムズターグは予定の氷河の最奥にあり、稜線

通しに行けば、6945メートルまで登って300メートルも下り、再び300メートル以上登ることになりそう。コルからトラバースするのが得策と思えるが、この判断は現地に着いてからのことだ。いずれにせよ、そう容易な登山ではなさそうだ。健闘を誓い合い、きょうもまた乾杯。よく飲んだ。

本隊と合流、西域キャラバン出発

7月13日

床屋にいった、スポーツ刈りにする。
夜には、本隊の人たちが到着して全員が顔を合わせた。

(本隊日記)

カシュガルへの移動日である。フライトは夕方7時。随分遅い変な時間の出発のように感じるが、何のことはない、真昼間の3時ごろと思えばよろしい。

1日暇なので、天山山脈のふもとの天池と

いう観光地へ遊びに行く。この池は恐らく氷河湖起源のものであろう。気分のよいところだ。

カシュガルへはわずか1時間くらいで着いた。伊藤と浅野の出迎えを受け、ホテルに入る。この町はウルムチよりもさらに中央アジアの雰囲気強い。パキスタンのラホールの感じといってもよい。そう感じるのも当然で、ちよいと峠を越えれば、そこはウルドゥー語の世界だ。

7月14日

きのう北京ーウルムチ経由、飛行機で到着した本隊の人たちは、元気良く街に繰り出して行く。

それまでごちんまりと行動していた先発隊の5人にとっては、賑やかになって楽しい半面、急に人が増えてなにかしら疲れてしまった。

(能田独白)

夕食後、科学院の3人と話し合うが、友好的なものとは言えない。そもそもこの遠征では、こと學術班の活動に対しては不当と思われる金銭的要求を受け入れないというのが私たちの基本的態度であった。従来、中国で同様の活動をした多くの外国隊、特に日本隊は、計画の達成のためには相手方の要求をウノミにしてしまう傾向があったように思われる。そのような交渉のやり方は、その遠征隊の成功のためという観点だけからは一応評価はされはしよう。しかし、日中双方にとって決して好ましいことではないと思われるのだ。

特に中国を訪れた諸外国の隊の人たちが、心の底に焼き付けられた不信感と引き換えに、中国側は外貨を手に入れるのだとしたら、長い目でみればその外貨によって得るものよりも、むしろ失うものの方が多いと思うのである。

そうは言っても、もうここまで来てしまったのだから、私たちとしても何とかこの遠征の登山はもちろん、學術調査も計画通りにやりたいものだ。そのためには、耐えるべきは耐えて、結果オーライにもっていかねば。

7月15日

荷物を積んだトラック2台と、隊員たちを乗せた四輪駆動車3台がカシュガルのホテルを出発した。この時のために、先発隊がバザールで景気付けのために買っておいた爆竹を鳴らした。途中で一度消えてしまったが、再度点火してすべて音になった。

「これは、これから難儀なことがいろいろ出てくるかもしれんけれども、それを見事に解決していけるということを暗示してるものですか」

すかさず隊長の能田がいう。この後、いろいろなことが実際に起きるとは予想もできず、

「ノーチンさん、うまいこというなあ」

隊員と中国側スタッフは、そんなふうには思っただけだった。

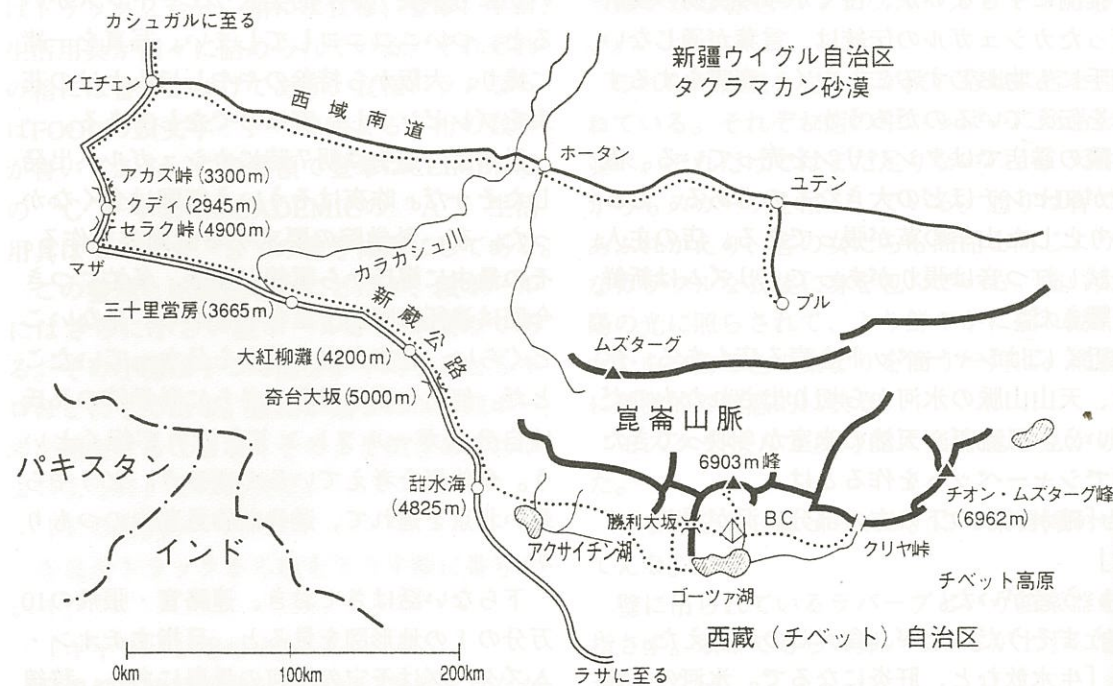
カシュガルから南は50キロ近く緑の豊かな土地が続く。このように水利が良く、草が広がる場所もあるが、地形を概観すると天山山脈の南北で土地の豊かさは大変違っている。

一般的な話として、高い山があるような場所を考えてみよう。ある一方から湿った空気を含んだ風が吹くと、山の麓で湿潤な大気は雨を降らせ、高い山の尾根を越えてゆくときにはすっかり乾いた空気になってしまっている。天山山脈の付近の場合は、夏の時期にはソ連(ロシア)側から風が吹く。オビ川やエニセイ川流域を通して吹いてくる。シベリア低地を進んできた空気はカザフ・ステップを慈しみ、天山山脈にぶち当たるまでの間、緑地を育む。ところが、この恵みは天山までで終わる。天山を越えるために上昇した空気は冷却されて、含んでいた水分の多くは雨に変わってしまうのである。天山を越えたときにはカラカラの空気になっているわけだ。こうして天山山脈の南側に乾燥した地域ができあがる。

広大なタクラマカン砂漠は、北に天山山脈、西にパミール高原やカラコルム山脈、南に崑崙山、チベット高原、ヒマラヤ山脈によって囲まれている。周りを自然の壁に囲まれて、それぞれの壁の外で水分が振り落とされることを考えれば、ここがいかに水の供給源に乏しいか、おわかりになるだろう。

この乾燥もプラスに働くことがある。草が生えないことが付加価値の高いものを生み出すのである。

コートやセーターの原料としてご存じのカシミヤはこのような地域の産品である。「カシミヤ山羊」の毛から紡がれる、と思っている人が多いようだが、カシミヤは品種としては存在しない。話は逆だ。カシミヤとして通用する毛を産する山羊をカシミヤ山羊と呼ん



でいるのにすぎない。

そもそもカシミヤの語源は、ムガル帝国が栄えたころ、中央アジアで産出した細い良質の山羊の毛を、カシミール地方に集め、そこで紡ぎ、製品を送り出していたことに由来する。カシミヤとは一体どんなものなのか？

山羊の毛には2種類ある。雨をはじく長い上毛と、その下に生えるふわふわした肌触りの保温力に優れた下毛である。カシミヤとして利用されるのは下毛の方である。この下毛は1頭あたり1年に150~200グラムほどしか採ることができない。カシミヤの値段が高いのはどうやらこのあたりに原因がある。

さて、顕微鏡で見ると、毛の太さは10~15ミクロンで、一本一本の毛が波打っているのが分かる。これが柔らかで暖かい獣毛繊維であるわけだ。ふつうの羊毛の太さが20~30ミクロン。人の髪の毛は50~80ミクロンである。いかに細いかがわかる。

もっと草をたくさん食べさせれば、栄養状態が良くなって、たくさん下毛が生えるのではないかと？ そうすればもっとカシミヤを採ることができるのではないかと？

ところが、ただ栄養を良くすると、「細さ」が命のカシミヤはあろうことか太い毛になってしまう。生産者にとってはジレンマが起きるのだ。食わせないと多く採れないし、食わせると太くなる。最近、何とか毛の太さを変化させないで量を増やせないものかという研究が日中共同で始まった。カシミヤは北朝鮮からイランに至るまでの乾燥地域で産する。その中で中国産の品質は概して良い。さらにいえば、いまのところ天山山脈南側の緑が少ない地域で産出されたものの方が、北側の緑が多いところのものより、より良質なのだ。

家畜についてつけ加えると、このあたりの道端では羊の群れに多く出会う。1つの群れはせいぜい30頭ほどで構成されており、身体の色は黒、白、まだらとさまざまである。角の形も放物線型あり、螺旋型ありである。た

ぶん品種、系統などというものは皆無であろう。ただし共通しているのは、羊のお尻に、コロンとした肉のかたまりがくっついてぶら下がっていることだ。これを専門的には脂尾(しび)羊と呼ぶ。お尻のかたまりは脂肪分だ。ラクダのこぶや、熱帯地方に暮らすゼブ牛という背中にこぶを持った牛のこぶと同じようなものだ。予備のエネルギータンクをぶら下げて乾燥地域に生きているのである。

ナイフの産地として名高いインジシャ(英吉沙)を通過してイエチエン(葉城)にて泊まる。この時期にはこのあたりの街ではどこでも同じだと思うが、少し風が吹くと街中には砂ぼこりが舞い上がる。視界は200mほどに落ちてしまう。街行く女性は風下に顔をそむけて、スカーフで顔を覆い歩いている。例の綺麗なスカーフは実用的でもあることが良くわかった。コンタクトレンズを使っている私は砂塵がひっきりなしに目に入り、涙して街を歩く羽目になる。

トラックに乗ってイエチエンに向かった人見と白井は車両トラブルで午前1時半すぎにやっと到着した。

トラックは六輪駆動でしっかりした車両に見える。しかし、カシュガルを出発してそれほど進まないうちに1台のラジエーターが故障した。冷却水はラジエーターからちょびちょび漏れている。運転手にしてみればこの程度の故障はどうってことのない類のものらしい。インジシャの自動車修理工場に寄ったものの、結局はバンパーの前にタイヤチューブを2つに切ったものをぶら下げて、中に水をいれて走り、途中くみ出しては少なくなった。ラジエーターに水を足してきたという。

途中までトラックにつき合った中島総隊長によれば、びちょびちょ水をたらして走る様子はさながら、

「ロバが小便をしながら走っているみたい」だったという。

私たちは人見たちを迎えに外に出た。あた

りはにぎやかで、夜店も出ている。近くの建物の壁には大きく映画のヒーローが大写しになって何やらしゃべっていた。野外映画館というものはじめてみた。

人見と白井は暑い中を長時間車に揺られて少し脱水気味になっていた。

7月16日

イエチエンからアカズ(阿卡子)峠を越えてクデイ(庫地)まで

イエチエンから先は山の斜面に登る道が始まる。今日の移動距離は大したことなく時間にして4時間ほどである。移動しようと思えばもっと先まで行くことができる。高度に身体を慣らしてゆくために、急に高い高度のところまでは上がらないのだ。とりあえず今日の行程には3300mの峠越えがある。

クデイには人民解放軍の兵站があり、ここに泊めてもらう。峠からしばらく下ったここは、周りを岩山に囲まれて夕方にはすぐに暗くなってしまふ。近くには食堂が1軒と簡易家屋がある程度の寂しいところだ。

私たちの到着したのを見ていた子どもたちが、珍しそうに兵站に寄ってきた。ここはサービスをして印象づけよう。毛利はペンを取り出した。ピンク色をした不透明の油性マーカーだ。

人なつこそうに近くに寄ってきた小さな女の子の手をとり、小さな爪にマーカーを塗ってあげた。即席のマニキュアのつもりである。ほこりと脂垢でお世辞にも清潔とはいえない手だったが、ピンクのマニキュアをした爪が薄暗くなりかけた夕暮れの中で輝いた。この爪よりも明るい色をしたものはこの村には見あたらなかった。

やがて、じっと見ていた子どもたちからまっすぐのばした指が次々に差し出されてきて、周りは子どもたちで一杯になった。

草の根の民間外交家を気取る人見もあまりの賑わいを見て、

「アオスジ、俺にもペンないか？」

とマーカーをねだりにきた。人見も地質学者が仕事用に持っていたマーカーを取りあげて、2人して皆の爪をせっせとピンクにしてしまった。もともとはこのマーカー、地質学者が採取した岩石に番号などを書き入れるのに使うために持ってきたものだった。

一方では、隊員の中には、そろそろ都会生活ほどの便利さ、快適さが得られなくなったことに不満を持つものが現れてきた。ここの宿泊所が汚いとか、便所の臭いが漂ってくるとか、夕飯に出してもらったうどんが柔らかすぎるとかいった具合である。こんな辺境の地で、屋根つきの建物の中で、ベッドに入って眠れるだけでもとんでもなくありがたい。まして黙っていても食べさせてくれる温かいうどんがあるだけでもありがたいことだと思うのだが、不平が出るのは疲れがたまってきたせいだろうか。

7月17日

高度順化のために滞る

寺島は近くの川で投網を打つ。20センチほどの魚が数匹とれる。

能田隊長や乙藤、遠山らが人民解放軍の軍人とバスケットボールを始めた。結果は惨敗だった。標高2900mと高度がある程度高くなったために、ちょっと激しい運動をすると息切れしてしまい、身体の動きが鈍くなっている。

この先の宿泊施設でも人民解放軍の兵站にはなんども世話になったが、不思議に思ったのは、どこの兵站にもバスケットコートが備えてあったことである。兵士が時間の空いたときに、1人ででもシュートの練習をして楽しめるからか？ どういった理由からなのだろう。

寺島と毛利は近くを流れる幅3メートルほどの川で、投網で魚とりをする。小川とはいうものの土を溶かして茶色に濁り、水の中は

何も見えない。そんな川の中から網を引き上げると20センチ大の魚がひと投げごとに2尾、3尾とかかる。

私もはじめて投網を使わせてもらった。

網は蚊帳のようになっている。左手にちょうど網の頂点のところを持ち3分の1ほどをたぐって左腕に掛ける。さらに3分の1を右手で握る。この時右手はスカートをたくし上げるように網の底のほうから3分の1を手にとるといいますが、この表現は分かる人には分かるらしい。

右足を前に出して、上半身をいったん右に振る。その反動で次に左へ逆に大きく身体を振る。次の瞬間、再度右に身体を振ると同時に、右手に持った網を弧を描くようにして投げる。その時視線もその弧をトレースするように移動させると網は大きく広がる、そうな寺島はよどみの形に合わせて横長に広げたり、縦長に広げたり、大きく広く広げたりして自由に網を操って投げている。

隊員の羨望の中、この日の釣果のうちの1尾を除いたすべてはホルマリン漬けとなる。煮ても焼いても食べやしないとはこのことだ。1尾だけが中島総隊長の昼御飯の塩焼きとなった。魚を焼くところまで寺島が責任を持って担当する。魚の研究者は料理の腕も確かだ。

味わった感想は、

「泥臭くもなく、うまい」

中国科学院の生物学者は発熱を訴え、三輪医師の治療を受けることになる。白井は不機嫌そうな顔をして、死んだようにベッドに横になっている。2人とも高度障害が出てきたらしい。

昼食後、帰国の途につく中島総隊長と遠山、案内役の新疆登山協会の孫建章氏、そして福島の4人がクディを出発する。

7月18日

セラク峠(4880m)を越えてマザ(麻扎)

まで

峠の下150メートルほどの所から車を降りてゆっくりと歩いて登る。これも高度に対して身体を順化させることを目的とした行動である。

足元には高山植物がじゅうたんのようになっていて。シオガマギクやトウヒレンなど5種類ほどの植物はちょうど今の時期に花を咲かせている。のんびり花の写真を撮ったり、中国人科学者と話をしたりして登る。話をしても息切れしない。身体がうまく高度に慣れてきているのだろうか。

峠を登りきってからは再び車に乗り込んでマザに向かうが、この間の記憶はない。というのも、すぐに眠りに入ってしまったからだ。疲れがたまってきたのと、高所における自然な生理反応の両方なのだろう。

再び目を覚ましたときにはマザの兵站到っていた。

出発前にカシュガルで聞いた情報ではマザでは疑似コレラが流行しているとのことだった。現地では特に伝染病の流行に対応するような動きは見られなかった。

「まあ、大丈夫でしょうが、食事する前に食器と箸をアルコールで消毒しときましょか」

「念のため、抗生物質を配るときですから、心配な人は飲んでいてください」

「三共胃腸薬も渡しときましょう」

さすがにドクターはこんな時にも落ちついたものである。

一方、隊員はせつせと自分の食器と箸をアルコール綿で拭き、食事の麺をかき込んだ後は、抗生物質と胃腸薬を配られた分だけしっかりと飲んでいく。

体調の思わしくない白井は、ぶどう糖点滴1000ミリリットルを受けると見違えるほど回復した。あれやこれやといろいろ不満をしゃべりだす。彼一流の“マイナスからの発想”が見事に展開し始め、皆に安堵をもたらした。

「えらい彼は元気になりましたね。これで、“プラスからの発想”に切り替わればということはないですね」

7月19日

マザから三十里営房まで

疲労のためか、移動中はぐっすり眠っていて記憶がない。三十里営房は山間に作られた人民解放軍の施設である。河原が広がった自然の地形を利用して数々の施設が建設されている。私見であるが、中印国境に近い場所だけに、僻地の割に兵力がさかれているのだろう。

兵站の2階建ての宿舎に部屋を割りあてられた。部屋の壁は下半分が緑色に、残りの上半分が白く塗られている。広さは8畳敷きほど。ベッドは3つずつ置いてある。シーツはきれいに洗濯されている。床もきれいに掃き清められている。一服していると、私たちの部屋を担当してくれることになったらしい若い兵士がお湯の入った魔法瓶を運んできてくれた。

その部屋の南側の窓から何十キロか離れた所に雪の山が望まれる。久しぶりにみる雪山らしい雪山に、隊員は肉眼で、単眼鏡で、双眼鏡で、あるいは2000ミリのレンズを使ってあれこれ眺めを楽しむ。雪底の張り出しやヒマラヤひだ、雪崩の跡も手にとるように分かる。双眼鏡や望遠レンズなどは株式会社ニコンのご好意により借用させていただいているもので、機材の調整をして使い勝手を確認しておく必要もあった。

三脚で固定して観測するよりも両手に持って使うことの多い双眼鏡は、登山や天体観測には7倍から10倍のものが使いやすい。また、のぞいたとき明るく見える方がよい。

明るさ=(対物レンズ径÷倍率)の2乗という関係がある。同じ倍率だったら、のぞきこむのと反対側のレンズが大きければ大きいほど明るいというわけだ。今回手元にある

のは対物レンズ径50ミリ、倍率7倍のものでかなり明るい。さらに防水加工が施されていて使いやすい。

2000ミリのレンズというのは、正確には1000ミリ反射式レンズにテレコンバーター2倍をつけたもので、きゃしゃな三脚ではブレてしまう。

「しっかりしたつくりの三脚にセットして、レリーズ使用じゃないと(きれいに写りませぬね)」

こうして確認が進む。

7月20日

三十里営房にて滞在

宿舎の窓から見える小さな山に登る。木が1本も生えておらず、全体が砂岩のように風化した赤茶けた山である。高所順応のための身体慣らしが目的だ。隊員は思い思いの速さで登って降りた。

降りたところの河原には「風成石」が無数に転がっている。

風成石は岩の表面に小さな穴が不自然に空いている。岩のちょっとしたくぼみの上にあった小石が、風に吹かれてころころ回っているうちにこすれあって岩に穴が空いてしまったのだという。

これを聞いて私の故郷にも似たようなものがあるのを思いだした。飛騨川の凹穴である。川の中の渦巻いているところにたまたま流れ込んだ小石が回転しているうちに川床に穴をうがってしまったもので、大きいものは子供がすっぽりはいつてしまうほどだ。

三十里営房の風成石はゴルフボールほどの穴が空いたものが多い。

「日本だったら盆栽好きの人たちが奇岩としてめぐるかもしれないですね」

「中国人もこてこてした石はけっこう好きですよ」

小山登りから戻って、寺島と連れだって宿舎裏手の小川で頭を洗う。今までの汚れがシ

ジャンパーの泡と共に流れ去り、すすいだ髪を涼しげな風と強烈な日射がすぐに乾かしてくれるのに味をしめた私たちは、

「身体も洗っちゃおう」

「服も洗おう」

という話になる。

洗面器に洗濯石鹸、洗顔用石鹸をとりに戻り、パンツ一枚になって身体にまとっていたものを清める。砂漠を流れる水は、頭がチンチンしてくるくらい冷たい。これを見ていた能田隊長、浅野、乙藤も加わった。

5人の男が砂漠の小川で洗濯屋と化した。

7月21日

三十里営房から大紅柳灘まで

今日はトラックに乗って移動する。

座席が十分に広くないのでカメラ、水筒、トランシーバーなど最小限のものだけを持って乗り込む。四輪駆動車に比べて車体が長いために、四駆が大きくバウンドするようなかばこ道も揺れが少なく感じる。座席が高い位置にあることや、走るスピードが四駆にくらべて遅いことも乗り心地に関係してくるようだ。

前日にトラックに乗って移動した人見は、

「砂漠の中をトラックに乗ってゆっくりと走っていると、なんや、流れ者の人生を感じまっせ」

と感想を漏らしていたが、道すがら道路補修工事をしている道班の男たちと手を振りあって、ゆっくりとそれが視野から消えてゆくのを見たり、トラックのバイブレーションを感じていると、

「ハイガさん、おもしろい例えを言うけど、うまいこと言うなあ」

と感心する。

のんびりしているように書いているが、そんなに良いことばかりではない。座席の下からは熱風が吹き上げてくる。結果、唇がひび割れる、鼻の穴からじわじわと鼻血が滲み出

てくる。気密性のある車内ではないからとにかく乾燥が著しい。舗装していない道が続くだけに、砂ぼこりもすさまじい。

四駆に乗って先を進む地球科学屋の能田隊長と乙藤は、途中で車を降りて、岩石採取を試みているが、目当ての岩石はなかなか見つからぬ様子である。彼らの研究にとっては、

「河原に転がっている石はバツ。大きいだけでもダメ」

「地球に根っこをおろして、初めっからそこにありました、というような岩じゃないとダメ」

つまり「岩壁みたいのところ」がないと「商売はあがったり」らしい。しかも、

「風化したのはダメ」

古い岩でも新鮮なものじゃないとダメなのだそう。

寺島はカラカシュ川でポイントを探して投網を試みている。瀬もあり、淀みもあり、いかにも魚が居そうな所も多いのだが、どうしたわけかプロの魚屋のもとに魚は来ない。

トラック部隊のほうはそれらを眺めるだけでゆるりゆるりと進む。そのうち、後ろのほうからあつという間に追いついてきた四駆に抜かれてしまう。

トラックに乗っている何よりの楽しみは休憩の時間だ。ときどき停車したときにトラックの下にできる日陰にうずくまって、タイヤを背もたれにしてみずみずしいスイカを頬張るのだ。エンジンを止めたトラックの下の日陰は涼しい。トラックの下にもぐり込んでいて思うのも変な気がするが、さわやかな涼しさだ。

大紅柳灘の宿舎につくと羊の臭いのようなものが鼻をついた。

伊藤と私はトラックに乗っていたために暑気に当てられたのか体調不調だ。私は昼飯をとる元気がなく、薄暗い兵站の部屋のベッドに敷いたシュラフにもぐり込んだままになっている。軽い高度障害がでている、とのドク

ターの判断で夜になって点滴を受けることになった。

500ミリリットルのリンゲル液にビタミンとラシックス（利尿剤）を加えて静脈に注入された。11時40分より開始。早くも11時45分に1回目の小便を催した。右手に針を刺したまま、リンゲルの容器を人に持ってもらい、ヘッドランプで足元を照らし外に出る。満天に星が輝くなかで、

「じょんがらじょんじょんじょん」

と音が響く。身体は元気なくしんどいが、ラシックスのおかげで小便の出方だけは勢いがよいのだ。「部屋に戻る間がない」と思うほどひんぱんに尿意が訪れる。ほぼ15分ごとに小便に行くことになる。

「壊れた水道みたいだ」
というような気分になる。

私が点滴を受けている途中から、伊藤も疲労を訴えて点滴を受ける。伊藤は、

「空気が薄い。空気が薄い」

と繰り返し、かなり辛い高度障害が出ているようだ。ドクターが気管を広げて空気の通りを良くする作用がある気管支拡張剤を吸わせる。

私の記憶はそのころからなくなり、眠りにおちた。夜中に猛烈に喉が乾いて起きる。携帯用ガスコンロでお茶を作って一口二口と口に含む。血行が良くなったのか、どうしたものか、両手足がジーンと痺れて動かなくなる。胃は不快感が起こり吐き気がした。シュラフにもぐり込むこともできずしばらく倒れ込んでいた。そのうち胃の痛みも収まり、うとうとしつつ朝を迎えた。ドクターにたずねても、何故そうなったのかは分からなかった。

7月22日

大紅柳灘にて滞在

喉が非常に乾いているものの、昨夜の悲劇的状况とはうってかわり、平常な体調を取り戻している。

ちょっとした岩屑でできた高みに1人で登る。そこで雲固をする。今日も快適な排泄を済ます。大量にして形状も申し分ない。

体調を知る1つの尺度として有効であり、これには気を配る。必ず検分するのだ。調子が良ければ自信になる。そうでなければ自己管理に努める。こんな所に来てしまえば何より頼りになるのは自分の体調だから、下品でも何でもないことだ。第一、広々した野原で排泄することは胸がすっとするほどの快感である。

ここの部分を読んで額にしわ寄せている方がいることと想像がつくが容赦していただきたい。屋外での排泄は本当にぜいたくなひとときだと思えることがあるのだから。

例えば、インドのラジャースタン砂漠で、水を汲んだ空き缶をぶら下げて、背丈を越すサボテンの疎林を通り歩く。場所を決め、沈む夕陽を満身に浴びて、あたりも自分も朱色に染まる中、地平線に沈んでゆく太陽を見ながら、雲固をする。空き缶に汲んだ水を尻にちろちろ垂らして、左指でちょちょちよと尻の穴を洗う。濡れた尻がやがて気化熱を奪われてさらさらに乾いてゆく。

あるいは、ヒマラヤで、真っ白な雪をまとった山を仰ぎ見て、雪の照り返しを眩しく感じながら、突風を用心して、少しばかり風向きを気にしつつ、ズボンやヤッケを気にしつつ、雲固をする。寒冷な大気の中、日差しを浴びる側はほんのり暖かく、下腹部は爽快感に満ちる。

また、プータンの農村で、猪かと間違うほどに元気良く走り回る豚に囲まれて、青々とした草の上で、雲固をする。立ち上がったときには、雲固はダッシュしてきた豚の腹に収められて、草の上はもとのまま青々としているのを見る。雲固をしたのかどうかすら不確かな気分になりながらも、すっきりしたおなかを感じ、なんとなくおかしみを覚える。

つまり、白いタイルやしっくい壁に囲まれ

た狭い小部屋で、小さくしゃがみこみ、出すや否や水に流してしまえばかりが、雲固ではないのだ。

昼前に大紅柳灘の兵駅の北側の岩山に高所順応のために登る。

足元に転がる石はカンブリア紀のものだ。海では三葉虫がはい回っていたころの石である。化石が入っているわけでもなく愛想のない石だ。専門家にとってもめざす石はないらしく、ひょっこりひょっこりと歩き回っている。隊員の他にも登ってくる者がいた。兵駅の軍人が5人ほど。私たちの行動を監視するためだろう。彼らはこの高度で暮らしているためだろうが、目を見張る速さで登ってくる。

このあたりは、1962年にインド軍と中国軍との国境紛争があったところである。いわゆる中印紛争の舞台である。現在は中国側が実効支配しているが、インド製の地図を見るとインド領として記載されている。今も紛争の火種なのだ。

当時インド軍はこの高度での戦闘には悩まされたらしい。これに対して中国側はチベット高地からの出撃のため、兵士の戦闘能力は高度障害に悩まされることなく十分だった、という話がある。これが原因かどうか、紛争は中国側の勝利に終わり今に至っている。

寺島は、午後から兵駅の南を流れるカラカシュ川へ投網を打ちに出かける。カラ・カシュとはウイグル語で「黒い川」という意味である。河原は茶色一色でこぼし大から人の頭大の石と砂泥の原が広がっていて草は生えていない。荒涼とした風景が続く。

やがて彼は数十匹の裂腹魚とどじょうの仲間をバケツにいれて戻ってきた。大漁だ。夕食とティータイムをはさんで寺島について投網打ちに出かける。

まず浅瀬を選んで、流れが少し緩やかに落ちついているところに1投目。大小の裂腹魚が数十匹網にかかる。2投目。同じくらい。寺島の手を離れると網は意思が伝わるかのよ

うに浅瀬の形に沿って広がる。丸く広がったり、細長く広がったり。

標本として十分に採れたところで、私も網を打たせてもらう。

投網といっても糸の太さ、網目の大きさ、網自体の大きさがさまざまだ。今日使っているのは、先日クディで使った網よりも目が細かく、糸も細く軽いので、腕への負担が少ない。六畳ほどの大きさに広がる。「これならうまくいくかも」と右に上半身をゆっくり振り、反動で左に十分に戻し、腰と腕で教えられたようになめらかな弧をえがいて、前方に網を投げる。腕の先から放射状に網が開いて広がってゆき、水面を切りとるようにザバンツと水しぶきの輪ができる。

網をずるずると岸に引き寄せると。ぴかりと光る魚の腹が見える。寺島がほおっという顔をして微笑んでくれる。3投して20匹ほどとらえる。2人とも優秀な生徒のような歩きっぷりで宿舎に戻る。

しばしば出てくる裂腹魚という名前はなじみの少ない言葉である。この魚は鯉科裂腹魚亜科に属し、ユーラシア大陸の中央部の高地にだけ分布している。裂腹魚亜科には100種近い種、亜種が報告されている。共通した特徴は、名前の由来になっているように、腹が裂けているように見えることである。

どういうことか。からだの側面に鱗がなく、腹のあたりにだけ少し残っている。このため中線に沿って腹部が裂けているように見えるのである。何故鱗がないのか、何故一部にだけ鱗が残っているのか、こうしたことについて細かいことは分かっていない。そればかりか、どのようにして茶色に濁った川の中で餌を食べ、繁殖しているのか、詳しい生態は未知の点が多い。寺島は、このアジアの高地に住む魚の知られざる姿を探求している。

ちなみに味は淡泊な白身。身が締まっているというよりももったりとしている。くせのない味。卵には毒があるものがあるという。

公路を離れチベット高原を東進

7月23日

大紅柳灘からティエンシュエハイ（甜水海）をへてアクサイチン（阿克賽欽）まで

5000メートルを超す峠、奇台大坂を越えて南下し、甜水海へ。幹線道路だが舗装はしていない。そこを時速60キロを超えるスピードで走る。そのため、前を走る車がいると後続の車は土ぼこりの煙幕の中を走っているようなものになる。

甜水海まで進むとちょうど崑崙山脈の西の端を北から南に越えたことになる。

「越えたことになる」と書いたのは、どこから山越えがはじまってどこが分水嶺を作る崑崙山脈の背骨になっているのか、など視覚だけではとらえきれないものがあるからだ。それほど崑崙山脈は長大である。

そもそも崑崙山脈という名称がどこからどこまでをさすものなのか。

よく知られたヒマラヤ山脈がチベット高原の南側を縁どっている、と表現するならば、チベット高原の北側を縁どっているのが崑崙山脈といっても良いだろう。崑崙の北は様子が一変してタクラマカンの砂漠が広がっている。

西の方はカラコルム、ヒンズークシュへとつながってゆき、東の端ではメコン、メナム、長江（揚子江）の源流部を横切っていく。

具体的な位置としてはヤルカンド川の上流部付近の東経76度からチーリエン（祁連）山脈の南東端およびバヤンカラ（巴顔喀拉）山脈東端の東経102度までの全長2400キロほどといっただろうか。崑崙山脈の話をしていのにチーリエン山脈とかバヤンカラ山脈という言葉が出てくるのはおかしいと思われるかもしれないが、崑崙山脈は主山脈と、いくつもの支山脈を随伴して「崑崙山脈」という名称を与えられているのである。

これは、西部、中部、東部の三部に区分され、西部はヤルカンド川上流部からユルンカ

シュ川源頭までの600キロ、中部はウルグ・ムズターグ峰の西に位置するコラムルン峠付近までの600キロ、そして、東部はさらに東の1200キロに分けられる。

ちなみに19世紀のアジア地理の碩学リヒトホーフエンは、1877年に出版した『シナ』という著作の中で、崑崙山脈を東経76度から東経113度まで、と規定している。ここまで大きく崑崙山脈の定義範囲を広げると、黄河・長江上流部の山々はすべて崑崙山脈になることになる。

このリヒトホーフエンという人はシルクロードの名付け親であり、弟子の一人に、中央アジア探検で著名なスウェン・ヘディンがいる。

ヘディンというストックホルム生まれの男は、いくつもの地理学上の重要な発見をしたことで知られる。さまよえる湖ロプノールの問題の解決、ヒマラヤ山脈と崑崙山脈の間にあるトランス・ヒマラヤ山脈の発見、インダス川、ブラマプトラ川の源流の確定などは彼の業績である。その彼は崑崙山の踏査もしている。

彼の著作を京大文学部の図書館であさったことがある。おびただしい量の著書に驚いた。彼のスケッチを集めた本などは、毎日の移動先ごとに描いた何枚かの360度の風景スケッチが収められていた（ATLAS OF TIBETAN PANORAMAS）。前人未到の地理学上の空白地域を踏査し、測量をしながら、552図もの膨大な数のパノラマスケッチを残しているあたりの精力的な活動にはため息が出してしまうほどであった。

崑崙山脈の地理上の探検が行われたのは19世紀の終わりから20世紀初頭にかけてである。何人かは精力的に活動し、詳しい情報を残している。しかしながら彼らの通った軌跡を外れてしまうと情報はきわめて乏しい。この広大な地域の中では、彼らの足跡は細い線である。

中西部崑崙地域に入域した探検者と時期はヘディンを含めて次の通りである。

- 1893年 ドットルイユ・ド・ラン
1896年 ウェルビー、H・H・H・デーシー
1898年 H・H・P・デーシー
1902年 ローリング & ハーグレーブス
1906年 S・ヘディン、A・スタイン
東部崑崙地域については次の通りである。
1884年 プルジュワルスキー トグルサイ川からアヤクム湖へ、後にバシクルガン、紅柳溝ルートでアルトゥン山脈を越えてロプノールまで。
1885年 A・D・ケーリー アルトゥン山脈を南下しチマンターグの西を通りアルカタグを越えてチベットへ。
1889年 ピエツォフ、ロボロフスキーら 和田から東方に向かい、アルトゥン山脈を越えてアルカタグを調査。
1889年 G・ボンヴァロ、A・ドルレアン チャルクリクを南下しアルトゥン山脈を越えて、アヤクム湖とアチクム湖の間を通りアルカタグへ。

崑崙山脈における登山活動は始まってから間もない。これまでに報告のあったものは次の通りである。

1. 5850m峰（八花氷山と命名）

1985年8月24日 日中婦人友好登山隊（隊長・森美枝子）初登頂。ムーシュ・ムズターグ峰（慕士山・6638m）を断念し、東隣の無名峰に登頂した。和田から南下し皮夏、台堤を経てアクス・ダリヤ川沿いにアプローチした。

2. ウルグ・ムズターグ（木孜塔格・6973m）

1985年10月21日 中米合同登山隊（隊長・甄希林、N・クリンチ）初登頂。コルラ、チ

ャルクリクを経てマンナイ、アチクム経由でアプローチ。

3. 7167m峰（崑崙最高峰）

1986年8月16日 東京農業大学登山隊（隊長・早坂敬二郎）初登頂。イエチェン、アクサイチン湖を経てBCへ。私たちの今回のルートはゴーツァツォまでこれと同じである。

4. コシ・トシ・ムズターグ（6699m）

1987年8月 福岡山の会隊（隊長・諸岡久四郎）5970メートルにて撤退。和田、于田を経て南東のアチャンへ。増水でルート変更をした。

そもそも崑崙というのはいつごろから知られているのか。具体的な現在の地理的位置の話をする前に、古代中国の神話、伝説中の崑崙の説明をした方がよいだろう。この伝説中の崑崙は、現在の崑崙山脈と同じものを指しているわけではない。現実と非現実が混在している。ともあれ、記録として崑崙ということばが現れるのは紀元前200年ころ、つまり戦国末期から前漢のころに編さんされたといわれる『山海経』や淮南王劉安が編集させた『淮南子』がはじめである。『山海経』は各地の神怪変異を記した空想的地理書である。

崑崙山の真上は神の居る場所であり（山海経）、崑崙が地上と神のいる天上とを結ぶ唯一の通路となっている（淮南子）、とされる。山は3つの層に分けられ、中ほどまで登ると不死が得られ、頂に達すると霊になる。さらに頂の上空を極めると神になるのである（淮南子）。この崑崙の麓には河が流れており（山海経）、渡ることは困難である。渡る方法は2つ。崑崙には高さ8メートルほどの梨のような木が生えていて、黄色い花が咲き赤い実が成る。味はスモモのようであり、種はない。この実を食べると溺れずに済むのである（山海経）。もう一つには、龍に乗って河を渡る方法である。龍には角の有るのと無いのがある。河を渡って崑崙に登るには、それぞれ2匹の引っ張る4頭立て龍車が必要であった

（史記）。古代の地理書である『水経』では、崑崙山が1万1千里の高さでそびえ、その北東の隅が黄河の源流になっているとしている。

こういう具合にかなり詳しく、神話伝説といいつながら、話は掘り下げられて構築されている崑崙の姿が浮かび上がってきた。

では現在の実際の位置と崑崙の名称の結び付きはいつのころからできあがったのであろう。『史記』の成立は紀元前97年である。この中の「大宛伝」に紀元前139年から126年にかけて西域に出かけた張騫の報告が載っている。そこにはこんなくだりがある。

漢の使は河源（黄河の源流）を窮む。河源は于寘より出づ。その山、玉石多し。采り来る。天子、古の図書を案じ河の出づるところの山を名付けて、崑崙と曰うという。

つまり黄河の源流部付近の玉石を産する山を崑崙だとするのである。とすると、漢の時代には、崑崙の名称と現在の崑崙山脈の地理的位置とは「漫然と」一致し始めていたといってもよさそうである。

そもそも張騫の西域行は漢が匈奴を潰すためだった。秦の始皇帝が万里の長城を増築した大きな理由は匈奴対策だった。秦から統一中国を引き継いだ漢は、高祖、文帝、景帝に続く武帝の時代には国力も充実し、辺境への勢力の拡大を目指した。そういった中で、地理的な認識力が高まってきていたことは不思議でない。

武帝は正面からでは匈奴が強くて攻められないというので、匈奴の背後に位置して、匈奴に恨みをもつスキタイ人の国、月氏国と手を組んで挟み打ちにしようという策を考えた。月氏国は旧ソ連のブハラ～サマルカンド付近に中心があった。匈奴の勢力範囲である現在の新疆～甘粛を通って月氏国と同盟を結ぶのはたやすくはない。使者を送って話を進めようと、武帝は使者を探した。そして張騫が名乗りを上げた。長安から出発した張騫は

匈奴の支配地域に踏み込んでからまもなく匈奴に捕まって抑留された。そこから先がスケールの大きな話になるのだが、張騫は抑留地で結婚をし、子供を作る。そして10年ほど過ぎた。匈奴が張騫の監視にこれまでほど注意深くななくなったところを見計らって、抑留地を抜け出し月氏国を目指した。10年、機が熟すのを待っていたのだ。月氏国で漢・月氏同盟を画策したがうまく行かなかった。帰路は崑崙の北側の西域南道を通った。長安を出てから13年目にして再び長安の土を踏んだ。同盟は不成功だったものの、張騫の入手した西域情報はその後の匈奴への侵攻につながっていった。

話がそれだが、そのような時代の中で崑崙は地理的に認識されていったのであろう。

私たちは「崑崙」ということばを「コンロン」と発音することが多い。漢字を音読みしているわけだ。中国語ではカタカナで表記すれば「クンロン」になる。現在中国語の発音はローマ字を使って表記（併音＝ピンイン）するが、それによると「Kun Lun」になる。

崑崙の表記は過去の探検家の記載にばらつきがある。ヘディンはKUEN LUN。デーシーはKWEN LUEN。ローリングはKUAN LUAN。ロングスタッフはKUEN LUEN。ジョンソンはKIUN LUN、といった具合である。発音の記述の仕方だからどれが正しいというものでもなかろう。ここでは「崑崙」「コンロン」「KUN LUN」といういずれかの表記で記載していくことにする。

さて、甜水海からは新蔵公路（新疆と西藏を結ぶ幹線道路）を外れ、赤茶けた岩屑の平原を走る。道路はない。

キラキラと輝く湖面が見えてきた。空よりも海よりも青い湖である。アクサイチン湖という。湖畔でテントを張り行動を打ち切ろうとするが湖水は塩分、ソーダ分が多く飲用にはできない。しょっぱくて、苦いのだ。水が確保できなくては泊まることができないので

先に進む。

そのころから私は発熱と頭痛に襲われる。セデス、バファリン、パンピタン、ダイアモックスなどの対処薬や予防薬を飲み下す。やがて眠りに落ちた。

同乗者が横でみていると「大丈夫だろうか」と思うほど大きく船を漕いでいたそうである。そういえば、気がついたとき後部座席に乗っていた寺島に右袖をつかまれていた。運転手のほうに倒れ込まないようにである。

車の周りにはいつしか野生動物の姿が多くみられるようになっていく。チベットレイヨウ、チベットノロバの群れが近くを伴走している。野生のヤクも数頭の群れをつくっているのが遠くに認められた。

ようやく水場のある場所をテント地に決めた時には午後11時を回っていた。

7月24日

ゴーツァツォ（郭扎錯＝湖）まで

ひと晩をすごしたテント地の目の前には川が広がる。その川の渡渉に難渋する。水は澄んでいる。平地を流れ、流れが幾筋にも分かれている。せいぜい膝程度の深さの川なのだが、玉石がころがる河原ではなく砂泥が堆積している。やわらかな地面のため、いざ渡ろうとするとタイヤがもぐり込んで前進できなくなってしまう。車高が高い六輪駆動のトラックがギアを低速に入れて、浅瀬を選んで一気に渡り終える。運転手の王さんが金属ワイヤを手にも、膝まで浸って再度川を戻り渡る。金属ワイヤでトラックと四駆を連結する。スタック（タイヤがもぐり込んでしまうこと）した四駆の後ろに私たちは回り込んで押し動かす。膝まくりして裸足になって。

向こう岸に渡ったトラックで四駆を引っ張って、何とかすべての車両を通過させた。

思いがけない重労働に、軽い高度障害の出ている頭が痛くなる。

非常に緩やかな起伏の草原を走り続ける。

ひと気は全くない。幼いころ大好きだったテレビ番組「野生の王国」にでてくるようなどこかの草原の中にいる気分だ。実際、野生動物をいたるところで見つけることができる。

今から90年ほど前に、このあたりを踏査した一人にC・G・ローリング大尉というイギリス人がいる。その著作『THE GREAT PLATEAU』には、少なくとも2万頭もの仔連れの雌のアンテロープの大群が見渡す限りを埋め尽くしている、という記述がある。成獣は草を食み、仔獣は横になったり休んだりして、草を求めてゆっくりと西に進んでいたという。

その5年前にデーシー大尉もおびたしい数のアンテロープを目撃し、見つけた場所をアンテロープ平原と名付けている。今日でもアメリカ国防総省の管理しているこの地域のナビゲーション・チャート（航空地図）にはその名前を見ることができる。

これまでさまざまな人たちにより報告されたものを集めてみると、多くの種類の動物がいるようだ。チベットノロバ、チベットガゼル、モウコガゼル、バーラル、チルー、ヤク、クチグロナキウサギ、ラサノウサギ、チベットマツネズミ、チベットキヌゲネズミ、タカネズミ、オオヤマネコ、コンロンヒグマ、タカネイタチ、ユキヒョウ、ドール、オオカミ、キツネ、ムナジロテン、オオツキノワグマなど。

鳥類では、オグロツル、ヒメジカケス、チャガシラカモメ、ギンボシマシコ、インドガン、アカツクシガモ、アジサシ、チベットセッケイ、ベニバシガラス、シバシガラス、ヒゲワシ、ユキバトなど。

やがてゴーツァ湖のほとりにてテントを張る。ここには丈が20センチほどの短い草が広がる草原が続く。地面は砂地である。

着いて早々に素手で足元を掘ってみると、たやすく15センチほど掘れた。その下は湿っていて砂が重い。それを調べるためにいきな

り地面を掘ったわけではない。実は草にまじってキノコが生えているのをみつけ、何から養分をとっているのかを確かめようと掘ってみたのだった。キノコのもとまで掘ってみたが、栄養源となるようなフンなり動物の死骸はなかった。

さて目の前に広がる景色の方である。山に來たつもりが海に來たようである。湖が海であるかのような錯覚にとられる。広い湖面である。幅が20キロに及ぶ湖が標高5000メートルの高地にあることに奇異な感じもする。

乾燥したチベット高原の風にあたりながらこの湖を眺めつつ、

「さて、コーヒーでも一杯」

と水を汲む。ところがどうだ。飲めない。どうにもいけない。塩っぽくて、苦くて、くせのある昆布茶のような味がする。

Na⁺、Mg²⁺、Fe²⁺、Al³⁺、K⁺、Cl⁻、SO⁴⁻……いろいろな成分が入りすぎている。海水の癖の強いものがあつたらまさにそれがこの水の味になるだろう。

5000メートル近い高原に降った雨や雪は、高原のここかこの窪地に流れ込むだけ流れ込む。しかし、例えば琵琶湖が淀川を従えているようには出て行く先を持っていない。ただ空気中へと蒸発していく。流れ込む水は高原の大地をめぐる、岩に含まれる鉱物を少しずつ溶かし出す。鉱物を溶かし込んだ水はいったん湖に流れ込み、やがて水分だけが蒸発する。長い間の繰り返しである。さまざまな鉱物イオンを含んだ水はこうして瑠璃色の水をたたえるのだろう。

ところで、水が中身とするなら、この湖の“器”である大地の凹みは、なぜ凹まなければならなかったのか。

チベットの湖の形は、詳しい地図をよく眺めているとうなずけてくるのだが、北緯35度までの北部に位置する湖は東西に長く、南部に位置するものは南北に細長いものが多い。もちろん自然の地形であるから、凸凹してい

たりでいろんな形のものが存在するが、概してそんな特徴がある。

これら高地にある湖は、チベットが高地になってゆく過程で必然的にできたものだという。となるとチベット、ヒマラヤの成因を知らねばならない。

二畳紀とよばれるいまから3億年ほど前には、インド亜大陸は南半球にあった。ジュラ紀とよばれる2億年ほど前には、ゴンドワナ大陸が動き始めた。恐竜が繁栄しているころの話だ。白亜紀とよばれる1億3000万年前には、アフリカと南米が分かれて大西洋が動き始めた。始新世後期とよばれる4500万年前には、それまで1年に10～18センチ北上していたインド亜大陸がユーラシア大陸にぶつかり始めた。直接的なチベット、ヒマラヤの成立はこのあたりから始まる。

ぶつかってからも更にユーラシア大陸の抵抗に打ち勝ってインド亜大陸は2000キロも北へ動いた。ぶつかるまでの期間、インドとユーラシアのあいだにあったテチス海という海の底の地殻は、両大陸の接近、衝突の間にユーラシア大陸の下にもぐり込んでいった。

このためにチベットの地殻の下部では大量のマグマができ、それがまた固まって、深成岩や火山岩をつくり地殻は分厚くなっていった。すると分厚く大きくなった地殻に浮力が働いて、地殻が隆起し始めたというわけだ。

こんなふうにしてチベット高原は2000万年前ころにはある程度の高さにまで隆起してきた。このころまだヒマラヤはない。

どんどんインド亜大陸が北へ移動すると、ユーラシアへ押しつける圧縮力によって地殻は褶曲して分厚くなったり、北上する南のインド亜大陸の地殻に北のユーラシアの地殻が断層をつくって乗り上げてしまい、特にチベット南縁のヒマラヤ付近は高く隆起した。これが500万年から数十万年前にかけて起こった。

さらに、隆起によって雨量が増加し侵食が

進むと、鋭利に尖ったヒマラヤは地球規模でみて、侵食されて山肌が削られた分だけ軽くなり、ヒマラヤの地殻全体が浮力で浮き上がり、侵食されていない山頂はさらに高くなった。

こうしてチベットとヒマラヤはできあがった。実のところ、分からない点はたくさんあり、地球を相手にしている科学者の課題もたくさんあるのだが、ここに述べた仮説は少なからず支持されているものの一つだ。

さて、4500万年前にインド亜大陸がユーラシア大陸にぶつかり、ぶつかった後も2000キロもインド亜大陸が北に動く間に、硬いながらも比較としてはほかよりも軟らかかったユーラシア大陸の南西部の地殻（ちょうどチベット付近）は東方へ押し出された。その過程でチベットの北部では東西方向に横ずれ断層ができ、南部では、もともとあった地殻と東へ押し出された地殻とがぶつかる南北方向の圧縮力の作用で縦ずれ断層ができた。

そうした断層によってできた落ち込み部分が、湖の“器”たる大地の凹部になったというわけである。ずいぶんスケールの大きな話ではないか。

プレートとして知られている地殻の表層をつくる岩盤が移動する速度は、人間の爪が伸びるのとはほぼ同じ速度にあたるという。

青藏高原には表面積1平方キロ以上の湖が500ほどあるという。そのうちの一つが目の前の湖である。

中央アジアの湖については別の意味でスケールの大きな夢のような話が伝えられたことがある。1985年に新疆北部のアルタイ山脈の山中にあるハナス湖で体長が10メートルもある魚の存在が報告され、新聞をにぎわした。新疆大学の生物学者によって60匹以上の巨大な赤い魚が観察されたというものだった。本当にいるのかどうか、つかまえられるまでは結論はでまい。話の面白さはそんな話がある種真実味を帯びて伝えられる神秘をその湖が

持っている点であろう。

隊員はあした以降のルートの偵察について中国側隊員と打ち合わせをする。

(能田日記)

昨日からいよいよ5000メートルの高原に入ったが、トラックの調子が悪く、隊が分散してしまう傾向になる。もう少しルートをしっかり見定めて走らないと時間の無駄だ。科学院の劉君は完全にダウンしてしまった。熱も38度ある。昨夜のテント地への到着がいかにも遅れたとはいえ、14時30分に出発とは何たることか。

気温は高く、そのためか氷河からの融水量が多い。あちこちに川となって流れている。渡河の都度、車の何台かがもたつき、そのたびにワイヤで引っ張らねばならない。

ゴーツァ湖にテントを張るも、劉君は完全にアウトである。下界に降ろす以外に手はないようだ。彼の本意はどうであれ、ガールフレンドなどを連れて避暑気分でやってくるから、こういうことになっても、だれも同情しない。この間抜けのために、私たちの行動予定はめちゃくちゃである。

しかも、四駆やトラックの運転手たちが、そろってこれ以上前進したがらず、このままでは逃亡してしまいそうな状況になってきた。よく話を聞いてみると、バジェロは中国登山協会にカシュガルで8日間だけ雇われたものだし、科学院の連中が使っている四駆は新疆科学院が個人タクシーを雇ったもの、トラック2台はウルムチの新疆地質鉱産局のもの、といった調子で中国登山協会のもは何もないのだ。

このゴーツァ湖は、強い塩分を含んでいてとても飲用にはできない。ともかくきょうはルートの偵察と水場へ移動するだけの1日であった。その間病人は相変わらず不調で、一時意識もおかしくなった。

7月25日

ゴーツァ湖を北から回り込むルートの人見、連絡官の張さんとともに偵察にゆく。広い谷沿いの進路は快調ではない。

「4WDでないと進めない」

「車が重いと行けない」

「大きな石が多くて進めない」

こうした言葉が運転手の口から漏れる。中国側がこれ以上の前進に対して慎重になっていることを直感した人見は筆談で説得する。

「今することは進路の偵察である」

「もう少し先に行こう」

テント地から18キロほど進んだところまでで偵察は打ち切りとなる。今後の方針について意見の相違があるので少し気まずい雰囲気になる。特に私たち日本側の若手隊員の目には中国側の主張が消極的に映りもどかしい。

科学院連絡官の劉さんが体の不調を訴える。

ここにきて高所環境に嫌気がさしはじめたドライバー3人も帰るといい始める。夕食後、能田隊長、張連絡官をはじめとした日中双方の実力者会議が行われた。

会議では次の方針がまとめられた。

1. 明日、劉さんを安全な低地へおろす。
2. 四駆2台とトラック2台をサポートに出す。
3. トラックは甜水海まで下ってガソリンの補給をする。

先に進みたいのに、希望通りには進まない。

晩、テントの中で友人たちに手紙を書く。伊藤、寺島は既に隣りで寝息を立てている。ひとりランタンのもとでつづるが、何枚も書かないうちに睡魔に襲われてしまった。

7月26日

また問題が起きた。

科学院の運転手までが帰りたいと言い出した。能田隊長が直接運転手の説得に向かう。また会議。

その間、私たちは朝飯を作る。短気を起こしたり、心配をしても何の効果もない。仕方がない。食事を作ることで感情のコントロールを図る。フリーズドライ食品の材料を使って食事を作るが本当にうまい。おいしくできた。きょうのご飯は山菜風味の雑炊に梅干しが各自1つずつだ。あまりのうまさに若手だけで1回目の飯を食い尽くしてしまう。

ティータイムを挟んで、もう1回飯作りをする。こんどは皆の分を含めた量だ。

会議を終えた伊藤から内容の説明があった。沈着冷静で事務能力に優れた彼も、私たちに説明しながら腹の中では収まりがつかない様子だ。

1. 四駆2台は高度障害のある劉さんとともに甜水海へ下る。
2. トラックは1台のみでサポートを行い、23日のテント地までゆく。
3. 科学院は運転手と王曉春女史がとどまる。
4. トラックの運転手の化さんも肺の痛みがあるため下山する。ということになる。

話が決着するまでに、王女史が日本側の意向を支持する発言をし、中国側のスタッフに強い調子で説得を働きかけてくれたという。

そんなわけで今日は行動休止である。下りて行く人たちは下りていった。

能田、人見、白井は洗濯をしている。

王女史は洗髪をしている。

人見と陸好はマウンテンバイクで走り始めた。幅広い人脈を持つ人見が自転車メーカーの人からぜひ崑崙を走ってきてくださいともらったものだという。彼はこの登山が終わったらカシュガルからクンジェラフ峠を越えてパキスタンに自転車で行こうと計画している。走り心地はよさそうだが、この高度でしばらく走り回ると息切れを起こしてしまう。

乙藤と白井が6時過ぎからテントで昼寝をしている。白井の寝姿をのぞいた陸好は、

「メサキさんが苦しそうに寝てますよ」と感想を漏らす。

夕飯は中国側がウイグル料理を作ってくれという。ここまでトラックの荷台に乗せて連れてこられた羊の屠殺から料理が始まる。

コーランの第5章4節には「食べてはいけないものは……絞め殺した動物、撲殺した動物……」というきまりがある。したがってまず、逆さまに羊を吊るして頸動脈をナイフで切り、十分に放血させて屠殺する。

羊を地面に下ろして、後肢に切れ目を入れる。その切れ目に口をつけて空気を吹き込む。ちょうど自転車のタイヤにポンプで空気を入れるような感じである。肉と皮のあいだに空気がどんどん吹き込まれてゆく。ある程度空気がたまって後肢がぷっくりと膨らんだあたりで、吹き込み口を一方の手で押さえて空気が漏れないようにしておいて、膨らんだ部分をもう片方の手でぐいぐいと押す。そうすると中の空気には高い圧力がかかって、まだくっついていられる皮と肉の間に入り込んでゆくことになるので、皮と肉は空気によってはがされてしまう。ナイフを使わずに皮と肉が離れてしまうのだ。そしてまた空気を吹き込むことを繰り返す。そのうち羊の皮の下には十分な空気がたまり、風船のようにパンパンになる。こうしておいてはじめて腹の部分の皮を切ると、皮がはがれた丸のままの羊がころんと出てくる。

見事な皮はぎ技術であった。

その羊のスペアリブを使って炊き込みご飯を作ってくれた。ウイグル族の主食は既に書いたナンというパンで、トルコ系の人に共通する主食である。しかしながらこのように米食もする。

作り方は実際にみていなかった。羊肉と人参が入っている。薄い味付けなのでどんな調味料をつかっているのかは分からない。ただ羊の脂が非常に多くはいつているようで、テカテカとご飯が光っている。

聞くところでは生米を羊の脂で炒めて炊くやり方、水に羊脂を混ぜて炊くやり方、炊きあがった飯に羊脂を混ぜるやり方というように作り方はさまざまあるようだ。羊の臭いも強かったが私たちの食欲をそそる料理だ。皆おかわりをする。

このウイグル風の炊き込みご飯はウイグル語でポロとかブルと呼ばれる。レーズンが追加されたりすることもあるようだ。

親指と他の3本の指をつかっつまんで食べるのがマナーだという。つまんで食べる飯ということで、漢語では手抓飯（ショウジュアファン）とか抓飯（ジュアファン）と呼んでいる。ついでながらブルはピラフと同じ語源の言葉だということだ。

食後、のんびりとくつろいでいるとテント地近くにノロバが来ているのが見える。人見と2人で1000ミリの望遠レンズをつかって撮影する。セルフタイマーを使ったりレリーズを使ったり、露出を変えたりシャッタースピードを変えたりしてあれこれ試して撮影を楽しむ。

じきに夕陽があたりを包みこむ。私たちはカメラを片手に交換レンズをもう片手にして夕暮れのテント地の周りの写真を撮って時間をすごす。

崑崙の大草原は陽が暮れると急速に冷え込む。1日のうちで変化する温度差が大きい点では砂漠にも似ている。太陽が姿を消し、青かった空が一方では次第に暗くなり、もう一方方向では赤みを増して黄昏てゆくころ、私たちはその刻々と変わりゆく空の色を見つめていた。地平線より少しばかりあがったところには雪を頂いた山が連なっている。この連山が端っこの方で頭上の空をギザギザに切りとり、地面との境をつくっていた。

あとは遮るものが何もない。電線もない。木の枝もない。堤防もない。野球場のフェンスもない。遠くの街からもれてくる光もない。

この景色を自分の網膜と脳に焼き付ける。

空と山肌の雪の斜面が創りなす微妙な色合いと、一面の草原が朱色に染まり風に揺れる情景は息をのむほどの美しさである。私たちはこの風景のただ中であって、とても歯がゆいことにこの色のさまを表現する語彙を持ち合わせていない。暮れゆく風景の中で私たちは立ち尽くした。

「少し前なんです、恐竜が何故いなくなってしまったのかというのを説明するのに面白い話をいう人がいましたね」

と空を見上げながら乙藤が話を始めた。

「白亜紀の終わりに突然恐竜はいなくなってしまったんです。この原因がね、巨大な彗星が地球に衝突したっていうんです」

「その時の地球にぶつかった衝撃で塵が空高く舞い上がって、空が塵でおおわれてしまっていて、それで光が地上には全くとどかなくなり、気温が下がって皆死んでしまったというのですよ。彗星が衝突して生物が死んでしまったことは今までも何度かあって、2600万年に1回ずつくらい起こって、その度にごっそりと死んだらしいんです。この彗星が何で降ってくるのかを説明するのに、ネメシスっていう、まだ見つかっていない太陽の伴星があるんじゃないか、という予想がされたんです」

「あれなあ、カリフォルニア（大学）のバークレーのおっちゃんが言い出しよったやっちゃろ」

能田隊長も加わる。

「まだ発見されてない太陽みたいな恒星があって、太陽の周りを大きな楕円軌道を描いて回ってるんです。こういうのを伴星というんですが、これが太陽に近づいてきたときに、太陽の周りを回るとる彗星に影響を与え、このうちの何個かが軌道を乱されて地球にぶつかるというんですね」

「そのおっちゃんら、イリジウムを調べよって言い出したんや」

「ええ、イリジウムというのはもともと地

上にはあまりないもんですから、たくさんあるとすれば空から降ってきたというわけなんです。ちょうど恐竜がいなくなったところの地層にこれが多く含まれとったのですよ」

どれもが全くの素人にとってはあぜんとするような話だった。ふだんの思考のスケールを時間的にも空間的にも超えてしまっている。

大自然の歴史的ドラマを大自然の中で科学者が語り部となって書きほぐして話してくれるのだ。こんな話を期せずして自然のまっただ中で満天に星を仰ぎながら、崑崙の大草原の中で聞かせてもらえることをありがたいと思う。満天の星はさらに輝きを増してきた。

（能田日記）

いざ病人を降ろす段になって、四駆は3台とも逃亡する。トラックの運転手もへばっているの、イエチェンに戻り、元気のよいドライバーを連れて帰ってくる。それまで1週間ここで待っておれなどと張飛が言い出した。そんなアホな。こんな下手なことをしていたら、山登りなどできないではないか。かなり激しいやりとりをしているところへ、それまでほとんど口をきかなかった科学院の王さんが、猛烈な剣幕で張飛に食ってかかった。そのすさまじさはア然とするほどであった。内容は全く理解できぬが、どうやら「それでもお前たち、中国人として恥ずかしくないのか。きっちりやるべきことを放り出すとは、何事か」といった類のことだったらしい。話は急転して、四駆2台で病人を降ろす。トラック1台は渡河地点まで四駆を送る。科学院の四駆はこのまま残り、ベースへ向かう、ということになった。現在の状況では、これ以上を望むのは無理だ。

きょう1日休養日として明日からは残った全員で目標を目指して頑張るとしよう。

羊を1頭やっつけて、全員でこれを食し、

明日からに備える。ところが夜半、白井の様子がただごとでない。ドクターに来てもらう。ほぼ確実に肺炎であるらしい。この夜は私も少々寝苦しく、頭痛があったのだが、そんなものは一気にどこかへ飛んでいってしまった。ドクターは夜を徹して点滴を続け、治療に当たる。隊員も助手として寝るどころではない。

白井発病、一時撤退

7月27日

未明、陸好がドクターを起こしに来た声で目を覚ました。

「メサキさんの寝息に雑音が聞こえ、せき込む音が変なんです」

私は尿意を覚え、外に出て放尿する。顔がむくんでいるようだ。加えて、喉の乾きを強く感じる。我慢せずに茶を作ることにした。EPIガスコンロで湯を沸かす。ガスバーナーの音を聞きつけて陸好が隣のテントから

「こっちのテントでも湯があるので分けてください」とやってくる。

私は1杯分の湯を自分の食器に取り、残りをやかんと陸好にわたして、茶を飲むだけ飲んで寝てしまった。

白井の隣で寝ていた陸好によると、白井は寝つけない様子で半時間に一度ずつくらい起きては水を飲んでた。その間隔は徐々に短くなって6時ころには上半身を起こしてゼイゼイと苦しそうだったという。

白井自身は後日このことを聞かされたが、彼の記憶からは欠落してしまっている。

息苦しいとか頭が痛いという不調を白井が訴えているが、多少の程度はあっても皆高度による影響で頭痛を感じていたのだ、しばらくは放っておかれた。

午前6時、やはりどうも白井がおかしいというので、ドクターが白井の様子を聴診器を使って診る。ここで白井は肺炎であると診断

された。彼専用中国側のテントが設営されて、そこで点滴を受ける。

午前中は意識がしっかりしているように見受けられたが、午後からは意識が曖昧になり、加えて運動能力も低下し始めた。

午後6時30分と8時30分、毎分1リットルの酸素吸入が行われた。

私たちはトラックの下にもぐり込み、強い太陽の日差しを避けていた。

一面草原が広がっていて、背の高い木は生えていない。人が隠れるほど広さの日陰はそこぐらいしかないのだ。湿度は非常に低く、日陰での体感温度は低い。日陰で羽毛服を羽織っているくらいがちょうどいい。

テントの中は温室のように暑くなりとてもいられたものではない。

だれかの大声で呼ばれた。

テントの外で白井が転倒し腕から血を流している。

白井は小便に立とうとした。そこで寺島に肩を借りて起きあがった。テントを出たところでバランスを崩して転倒し、そのはずみで点滴の針が折れて血が吹き出していたのである。出血自体は大したものではなかったが、これを見た隊員たちは相当に白井が衰弱している事態を認識した。

白井を標高の低いところまで下ろすこと。

これが、事態をこれ以上に悪くしない方法だ。高い標高に長く留まれば留まるほど高度障害は重くなる。白井の命に関わってくるのである。だれかが責任を持ち付き添って下りることになる。となればすみやかに対応と交渉が可能な医者と隊長と通訳が少なくとも同行することになる。その3人が不在の状況で偵察をはじめ登攀の意思決定が可能だろうか。何か事故があったときに安全が確保されるだろうか。

日本側隊員の間で話し合いがなされ、中国側連絡官の張江援さんに日本側の方針を提案した。

「私たちは白井を三十里営房まで下ろすことを決めた。しかし今回のエクスペディションを諦めたわけではありません。明日よりわれわれは登山装備を当地に残して全員三十里営房まで下る。それから先の予定は不確定な要素が多いが、三十里営房で白井の様子をみて、すみやかにイエチエン経由、日本に移送したい。三十里営房より先、イエチエンまで下りるのは、白井、三輪医師、通訳の浅野、ドライバー、イエチエン登山協会の王さん、そして能田の6名とする」と能田隊長が説明をする。

「白井を日本に帰す段取りを確認した上でのことだが、ここに戻ってきたときに荷物を回収し再出発するために2台のトラックと3台の4WD、それを運転する強力なドライバーの手配をしてほしい。この間の状況をCMA（中国登山協会）と日本へ連絡したい」

「イエチエンからは電話が日本に通じます」電話が繋がれば、それに越したことはない。うまくいかなかったときには、私たちは日本の留守本部に対して電報を打つことにした。

事態の報告と北京あるいは大阪まで白井を迎えにきてもらう要請の電報である。文書は英語と中国語でそれぞれ2通ずつ発信する。日本での受取人も複数に宛てる。さらに時間的にどちらが早くなるかは分からないが、朝日新聞北京支局へも打電し、それを日本へ転送してくれるようお願いすることにした。こうすることで確実にだれかに連絡がとれ、白井の身柄の引き取りを間違いなく行うことができるだろう。

「いま話したことは、イエチエンで白井の病状が悪化していないときについてである。白井の状況がイエチエン、カシュガルで良くならないとき、わたし（能田）の判断で登山活動を行うかどうか決定します」

「イエチエンから先、北京まで白井を連れてゆくのはCMAが責任を持ってやってくれ

るのですね」

「そうです」

「ありがとう。では張さんの意見をおうかがいたい」

「チオン・ムズターグ峰は登らなければなりません。私はここにとどまります。みなさんが戻ってくるのをここで待っています」

張さんは話を聞き終えるとうとういった。彼にしてみると、日本側が全員いったん退却すればこのまま計画全体が中止になるかもしれないことを懸念してくれているに違いない。私たちとて状況が許されるのならばひと態勢を立て直して目標としていることを成就させたい。

「三十里営房でいろいろと手配をする際に張さんが必要です。だから一緒に下りてください。われわれとて必ずここへ戻ってきますから」

「私がここにいれば、みなさんがここに戻ってくるのがより確実になるから」と冗談めかしている。

「ということはわれわれの主張には同意してくれますね」

「おおむね同意します。これからやらなければならぬことは多くありますよ」

「それでは明日どうするか？ 具体的には」
「今夜のうちに（荷物のうちでここに置いてゆくために）下ろすものは（トラックから）下ろし、載せるものは載せましょう。ところで日本側の（健康の）状況はどうか？」

「おおむね良好で、むくみ、頭痛がある程度です」

「甜水海や三十里営房に戻ったときわれわれの食事は用意してもらえるのでしょうか」

「三十里営房では可能でしょう。あした朝早く出発すれば三十里営房までゆけるだろう。白井の状態によっては夜を徹して走ってもイエチエンまで戻れます。イエチエンでは高所医学の専門家もいるから三輪ドクターと相談もできるでしょう。では早めに寝、あ

したは早く出発しましょう」

(能田日記)

白井は相変わらず重症である。彼を下山させることについては異論はないが、隊全体をいかにすべきか。半数は不調ではないが、他の者にはいささか不安がつきまとう。こんな状態でここに滞在するよりも、いっそ三十里営房に下山すべきだ。まず重病人を何とかする。隊全体の今後のことは、それからのことだ。

7月28日

午前中、トラックの荷台に積んである全部の荷物を中国側の大型テントに運び入れ、引き揚げの準備をする。登山装備や食糧の入った箱はそれぞれが20~30キロの重量がある。それを2人がかりで運び入れる。この作業は箱の数が多いだけに体にこたえる。まして前進するための荷揚げならともかく、下におりるためにデポ（荷物を置いておくこと、DEPOSIT）するとなると気分が晴れない。

気分はそうでも、皆手際よく作業を進める。今何をなすべきなのかは皆十分に理解をしているからだ。

白井は今日も回復せず、酸素マスクを口にあてたまま、半分死んだように衰弱している。顔色は悪く、話しかけても顔を歪めるのが精いっぱいといった状態である。口が動かさない。食べ物をとっておらず、水分は点滴に頼っている。小便はほとんど出ていない。何人かで4WDの中に白井を運び入れる。自力では体を起こすこともできなくなっている。

テントの中では中国製の酸素ボンベが使われていたが、車の中ではフランス製の酸素ボンベを使う。中国製のボンベが大きくフランス製のボンベは小型であるためだ。今回の登山では酸素ボンベを常用することは考えていない。酸素ボンベは医療用の、いわば「お守り」としての位置づけである。さらにベース

キャンプまでは車で移動できるであろうと考えられた。したがって酸素ボンベの大きさには特にこだわらなかった。使い勝手からいけば200気圧まで酸素を詰めた小型のフランス製酸素ボンベの方が便利である。中国製のボンベを4WDに積み込んでいたら狭くて身動きがままならなかっただろう。

先日の渡渉でも苦労した甜水海までの道のある川では今日も苦労させられた。氷河を水源とする川の水量は日較差が激しい。日射によって氷が解けるので日中は水位が高くなる。

白井を乗せた4WDは先行して走っていたが、川を渡っている途中で、車の半分ほどが水に浸かりストップしてしまった。川の流れと直交する形になって、横転する危険もある。水の底とタイヤが接しているところが流れによってえぐられてきている。窓ガラスのところまで水がかぶり始めた。

一番先頭を走っていたトラックからワイヤをのばし、4WDに連結して引きだそうとするが、動かない。トラックに乗っていた人が車から下りて、ワイヤで引っ張るトラックの後ろを押して手伝う。「イー、アル、サン(1、2、3)」とかけ声を掛けて3回、4回と弾みをつけてやっているうちによやく抜け出した。

白井を乗せた4WDの内部はシートまで水に浸かり、同乗していた王女史、三輪ドクターは驚いた様子を隠せない。

「ほんとね、どうなるかと思いました」

後で振り返ってドクターがいった。

「座席シートにまで水がかぶるでしょう、メサキはあんなふうだし、外に出ようにもドアが(水圧で)あかないんですわ」

「もうこれは、あかんかと思いましたわ」

水で濡れた白井を河原で着替えさせて、4WDはマフラーから入った水を吐き出し、エンジンの調整を図り、皆それぞれの濡れてしまったものを乾かして小休止を取る。

ドクターが白井の状態を判断するために「ここはどこか」

と質問をした。

「大清水の土産物屋の前」

との答えが返ってきた。

大清水というのは、後で聞くところでは、白井の実家近くの街の名前だそうである。幻想の中をさまよっている。

乙藤、人見、睦好、毛利に加え、水責めにあった王女史もトラックの荷台に乗って移動する。トラックの荷台に乗っての移動は快適だ。座席に座っているよりも。白井の食糧や、皆の生活用具を詰め込んだザックを床に敷き詰めて、各人が心地よい場所を決めて、寝ころがる。

ゆっくりとしたスピードで走るトラックの振動が快いバイブレーションとして伝わってくる。ときどき溝を乗り越えたり、小岩を乗り越えたりして、尾底骨をいやというほど床に叩きつけられる、なんていうことがあってもだ。あるいは下に敷いてあるザックの硬い部分に頭をしこたま打ちつけられるということがあっても。

左右の視界のうち170度は青空が広がる。残りの左右5度ずつのところを崑崙の冠雪した山なみが占めている。

草の上に残る私たちのわだちの向こうには蜃気楼さえ現れている。

陽光はさんさんと、どころか、さらした肌があればそれを射抜くほどの強烈さを持って降り注ぐ。

揺られ揺られた荷台の上で、スイカも人も同様に、たたきつけられ転がされる。ひびの入ったスイカは割られて、皆の口へと運ばれる。驚くほどのみずみずしさ。ズボンの上に点々と、こぼれるスイカの果汁。後に残るは血痕のようなしみの数々。いくら汚れても、さほど気にならない。

気取りや体面や既成の習慣を、変化した状況に合わせて投げ捨ててしまえば、割とどこ

でもその場所にあった生き方ができるような気がする。そんなふうにしてまわりと同化できていると感じるときが楽しく、高揚し、心おだやかな自分を発見するときだ。

一方、睦好は今朝から様子がおかしい。やけにいらいらしている。食糧係の彼に白井の食糧の用意を頼んでも「何でおれが、せなあかんのや」という視線を返してくる。

しかも頼まれたこととは別のことを我流で行う。しかもそれが満足にできない、そういった具合である。ふだんはよく動いてくれる男なのに。高所に滞在している時間のなせるわざなのかも知れない。

いま、彼は荷台の最後尾でずっとあぐらをかいたまま、通ってきたわだちの方向に向かって座っている。無口で。惚けたように。

アクサイチン湖が見えてきたころ、大気は急に冷え込んできた。王女史は再び4WDへ移る。荷台組は伊藤を新たに加えて、羽毛服を着込み、シュラフに入って防寒を完璧にして横になる。新蔵公路に出てからも走り続け、夜中の2時ごろに大紅柳灘についた。

私はジャンピングベッドの上で不思議なほど熟睡していた。

大紅柳灘に着いて開口一番、寝ぼけて、

「今日は野宿ですか？」

ときいて、伊藤から、

「あほか、大紅柳灘や」

といわれる。そのあと再び目が閉じてしまった。しばらくして能田隊長から

「はよ、荷物をおろさんかい」

と怒鳴られるが、何であんなにカリカリしてはるんやろ？ とボーッとしたままであった。

兵站では夜遅いにもかかわらず食事を出してもらえた。

その場で寺島が強い語調で口を切った。

「食糧係はドライバーに満足な食糧も出せないのか。あんなに頑張ってくれているのにお茶やビスケットも満足になかったじゃない

か]

私の観察では、今日の陸好には気の利いた用意は無理だっただろう。たとえ出発の前に十分に内容と目的を説明されていたとしても。

皆に疲れが溜まってきて、気持ちに余裕の部分、すなわちクッション材のようにふわっと緩衝効果をつくる部分がなくなってきたように思える。

そういえば、アクサイチン湖を過ぎて新蔵公路を私たちの車が走りはじめたときには、こんな会話もあった。

伊藤が、

「三十里営房まで今日は進んだほうがいいでしょう」

といったのに対して、

「道路を走り続けるしんどさと、高度による疲れとの兼ね合いを考えろ。一次方程式だけ解いていてもあかんのや」と強い口調で反論する隊長。

あるいは伊藤が、

「メサキがこんな状態になったり、他の隊員の顔がどれもむくんでしまったのは、今回4000メートルの高度順応に失敗したのが原因やろなあ（4000メートルは高度障害が現れやすい高度である）」

と言い切ると、それに対して人見が、

「おまえ、4000メートルのアクリマ（アクリマタイゼーション：高所順応のこと）に失敗したのが原因やいうけど、メサキがああなったのは、あいつの高所に対する体質によるだけやないか。ほかの連中はみんな飯も食べてるし、十分に動けてるやないか。おれはアクリマに失敗したとは思わんよ」

と主張する。やや雲行きが陰悪になってきたので私は口をはさんだ。

「確かに今回の遠征では、ラシックスを多用したりして、薬に頼って上がってしまった面はあるやろう、と思いますよ。ブータンに行ったときには、2回の遠征で、ラシックス

半錠しか、僕自身飲んでなかったんやから。それが今回はこれまでにラシックスを何粒も服用して、点滴でも静注してる。こういった違いはあるけど、そもそも『高所に対する順応』なんていったい何がどうなって起こっているか、その発生機構は分かってへんやないですか。せやから今、4000のアクリマに失敗したなんて言い切るのはおかしいでしょ。また、だからといって、薬に頼ってごまかされてた面の可能性も、否定できへんでしょ」

ここはケンカ両成敗のことをいって、なんとなく話を収めた。

そんなふうに隊員の気持ちに余裕の少なくなってきたのを感じていた。ともかく今夜は兵站のベッドにもぐり込む。

(能田日記)

下山すべく荷物の整理をする。再度ここへ戻り登山活動をすべく、多くのものは残していく。

12時30分、出発したが、たちまち渡河地点で、あわや白井を乗せた四駆が横転しかかる。必死の努力で四駆を救出し、この後は順調である。ここで結局大休止の後はひたすら甜水海—大紅柳灘へ急行する。高度が下がったためか、白井の状態はやや回復してきたようだ。

「ほっとしました。ひょっとしたら最悪の事態も覚悟していました」

と三輪ドクターに言われたときには、私も改めて事の重大さに気付くとともに、危機を脱してほっとした気分になった。それにしても三輪という人は、医者とはいえ、すさまじい気力と体力の持ち主である。科学院の劉君が倒れてから、きょうまでほとんど休む間もなく働きづめである。のんびりと夏を崑崙の旅ですごそうと云って、この隊への参加を誘ったのだが、とんでもない事態になったものだ。

夜とはいえ何となく薄明るい感じのする

甜水海に10時に着いた。休む間もなく大紅柳灘へと向かう。さすがに冷える。トラックの荷台に乗っているのも大いに疲れるものだ。真っ暗闇の中を病人を乗せた四駆はただひたすら走る。この時間、対向車は1台もない。大紅柳灘には2時15分によく着いた。トラックの荷台組は疲れ果ててぐっすり寝ている。つい大声を出し、起こす。とにかく、病人を安静にさせることが先決だ。私たちは少々疲れても食うものさえあれば、何とかなる。寝ることはこの次だ。白井は少量のお茶を飲んだのみ。エネルギーの補給はすべて点滴である。

7月29日

白井の容体は思わしくない。酸素の吸入は中止されている。服を着替えさせるのも2人がかりで行う。靴下をはかせるのにも苦勞する。発声もきわめて不明瞭で聞き取りにくい。

大紅柳灘から三十里営房までの間の移動はやはりトラックの荷台で行く。

高度が下がるにつれて、私たちの体調はますます良好になっている。身体の切れが違う。

ユルンカシュ川兩岸にそびえる草の生えていない山なみを両側に眺めつつ、私たちはザックを荷台に敷き詰めて、その上に寝ころがって、揺られて進む。

強い日差しの下で、すばらしい景色のただ中であって、すっかりナチュラル・ハイになって歌を張り叫んだりする。

4WDで先行していた白井は、私たちが三十里営房に到着すると、すでにベッドに寝かされている。

「きょうのメサキの状態はどんな状況ですか」と尋ねる。

「ずっと車の中で寝たきり。ときどき私が質問すると『その質問には答えたくありません』とか、トンチンカンの答えが返ってくる。君の家はどこか？」と聞くと、「豊橋……」

までは答えられてもその先はいえない」

ひとごち着いてから、今後の予定について打ち合わせをした。

「メサキの現状をみて、あさって、しあさってのうちに正気に戻る可能性は2対8でだめなんじゃないだろうか。とても一人で日本に帰すことはできない」

「そうするとイエチエンかカシュガルで入院し続けるということですか」

「カシュガルで日本語のできる人に頼んで、AACKの人に来てもらうとか……」

「そうまでして、ぼくらは登山を続けていいものでしょうか」

「人命に対して“可”とでた今、意識の上では多少のマイナスがあっても、われわれは、そこで登山を中止するには至らないのではないか」

「少なくともメサキが自分で飯を食べて、というところまで回復しないと……」

「メサキにだれか付き添いをつけるというときに、ドクターをつけるのは反対だ。もしこの先だれかが同じようなことになったときのことを考えると絶対にできない」

「つけるとしたら通訳の浅野が考えられる。でもこの話も明日メサキをしたに下ろせたらということだが」

「登山を続けるとすると、メサキをだれかに預けることになる。登山をやめるとすると、メサキに全力を注ぎ、資金をセーブして次回にまわす、ということでしょう」

白井を連れて病院で診察を受けさせていた三輪医師が戻ってきた。

「この病院でX線撮影をしたので1時間ほどで結果が分かるでしょう。まだ、一人では立てませんね。ですからこの状態では一人で戻るは無理です。点滴をしても2000キロカロリーまで入れることはできません。つまり口から栄養を取れないと栄養不足なわけです。食べれば、身体もしっかりしてくる。意識も回復するでしょう」

「意識はこの先はつきりするのでしょうか」
「良くなるでしょう。この先悪くなることはないでしょう。ただ、2、3日のうちに一人で帰れる可能性は少ないですね」

「では、だれが彼を連れて行くかですね」

「やはり、カシュガルまでゲロペー（AA CKの会員のあだ名）かだれかに来てもらうことでしょうか。さもないとこの登山隊はつぶれる」

「そうする場合でも、だれかがそれまでついでいないと」

「だれもいないと分かったときには、彼は動揺するでしょう」

「隊長がしたまで下りて状況を見て、（計画自体を）続行するか中止するか決めることになるでしょう」

「やめるとなったときでも、偵察はしないんですか。できることはしておかないと」

「したに下りる3人（隊長、医者、通訳）のうち一人がことによると、メサキと一緒に日本へ帰ることも考えられる」

「ここに残ったわれわれが動き出せるのはメサキの元気もどって、四駆2台とトラック2台が三十里営房まで来てからになる」

「命の確保はする、登山もする、という建て前を崩さずに、たとえばメサキを担架に乗せて大阪空港に運んでもいいじゃないですか。あるいは隊長がメサキに付き添い、隊長の委任を受けて登攀隊長が決定権を持つても。つまり実利をとる方策を取ることはできないんですか」

「メサキが回復せず、日数ばかりかかって、何も残らなかつたら、どうなるんですか。このチャンスと資金を無駄にするのは残念だ」

「こうしてわれわれが行っている過程が大切であって、仮に登山の過程で何も残せなくても仕方ないのではないか」

「たとえば、三十里営房の病院にメサキを放り込んでおいて、山に出かけるのも可能だが、しかしそれはしたくない」

夕食をはさんで、さらに議論は続いた。結論として、白井の状況をイエチェン、カシュガルでみて、隊長が最終判断を下すということで意見が一致した。

（能田日記）

朝になって、白井はみそ汁とミルクティを飲む。意識はほとんどないようだが、もう危機は過ぎたようだ。12時25分、三十里営房へ向けて出発。来るときには一滴の水もなかった谷に濁流が流れている。それだけ高温晴天が続いているのだ。今が登山には最適の時期なのだろうが、私たちにとっての急務は別のところにある。四駆には浅野、三輪、白井と私が乗り、他は2台のトラックに乗る。三十里営房に15時45分着。きょうはここで白井をゆっくり寝かせて、レントゲンも撮る。

隊員は今後のことを話し合う。いろいろな意見が出るも、結局は白井を日本に帰すことを第一とする。その後のことは、場合によって、さまざまに分かれていき、今それらのすべてについての解答を考えることは意味があるとは思えない。悪くいえば行きあたりばつたりの、出たところ勝負といえなくもないが、よくいえば臨機応変ということだ。いずれにせよ明日以降もやらねばならないことが山ほどある。

白井はここへ着いてから急速によくなってきた。おかゆを少量食べた。しかし明確な意識があるようではない。いつになったら、それがはっきりと戻ってくるのか。

7月30日

日本側は病人となった白井に付き添って隊長、医師、通訳、中国側は張連絡官、登山協会の王さん、ドライバーがイエチェンに向かった。

彼らが戻ってくるまでには時間がある。この時間を利用して高度障害についてふれてお

こう。

標高の高いところでは気圧が低くなり、したがって空気、つまり酸素の濃さも薄くなる。こういった高度の影響によりヒトの体に現れる変化・反応を総称して、俗に「高度障害」と呼んでいる。

倦怠感、めまい、頭痛、息切れ、むくみ、視野狭窄、吐き気、食欲減退、眠気、無力感、耳鳴り、下痢といった諸症状が起きることが知られている。さらに状態が悪化すると、記憶力の減弱、意識混濁、錯乱、幻覚、昏睡、呼吸困難、眼底出血、肺水腫、脳浮腫を引き起こし、死亡に至ることもある。

ヒトが低酸素の環境の下に置かれたならば、呼吸を盛んにするか、血の巡りを盛んにでもしない限り、体の隅々に平常と同じだけの酸素を運ぶことはできないだろうと思いがちだ。ところが私たちの体は、新たに赤血球をたくさん作りだし血液を濃くするような反応を体の中で行ってしまふ。そうすることで一回の呼吸でも肺からは多くの酸素が血液に取り込め、普通程度の速さで血液が血管の中を流れても隅々の細胞にまで十分な酸素を供給できる。

「高所トレーニング」という言葉がある。マラソンをはじめとした陸上競技や水泳の選手が試合前に高地で練習を積むトレーニング方法のことである。持久力を高めるのに効果があるとされる。高所で負荷がかかることによって赤血球の数も増えるのではあるまいか。この方法ではトレーニングの利点、欠点を分かっていると、体への負担が大きいので逆に体調を崩してしまうこともある。

高所で起こる体の反応は、先に列記したように頭痛や息切れといった症状などが起きるため高度「障害」と呼ばれている。確かにその状況だけをとらえると「障害」なのだろうが、高所という環境の中において、体が対応してゆく変化だという見方をすれば、高所での体の反応は「適応」反応とでもいうことが

できよう。もし現れる変化が、苦もなく持久力を高めるような効果があるだけだったならば、「高所効果」とでも呼ばれていただろう。

高所への適応度は、初めてある高度に上がっていきなりそこで滞在してしまうのと、ある高度に上がってからいったんは低い所に下りた後、再びその高度に上がって滞在するのでは、適応の順調さに違いが出るとも言われる。アルパイン・スタイルでひんぱんに高峰に登る人が、高度障害にあまり悩まされず登ってしまうことができるのは、からだが高さを覚えているうちに、次の山に登るからだとも言われる。もちろん頻繁に行ってさえいればいいというものではないのはいままでの。

そういったことが頭にあって、私たちは登山へ出発する前に「高所」を経験してみることにした。

「高所」といっても実際に登るわけではない。

出発の準備もひと区切りついたらこの6月のある日、私たちは名古屋大学の環境医学研究所の木田光郎教授を訪ねた。木田教授の研究室では低圧の下での生体の変化についても研究をしておられる。研究室の中には小部屋が設けられ、小部屋そのものがひとつの密閉容器になっている。この部屋から空気を徐々に抜いてゆく。そうするとヒマラヤのように冷たい風が吹いたりはしないものの、空気のぬき具合で何千メートルかの高さにいるのと同じ気圧条件になる。「高所を経験する」というのは、この部屋に入って何千メートルかの高さと同じ低圧状態に身を置くということなのである。予定では7000メートルまで上がって下りてくることになった。

部屋の中には長椅子と心電計などの機器が置いてある。中に座った私たちは、ファミコンのモグラ叩きゲームを1台ずつ持たされてゲームをする。反応速度と正確さを試験するのである。

真空ポンプで空気を減らしてゆき、その結果、気圧が低くなり酸素が薄くなると、脳の働きは低下し反射反応は鈍くなる。モグラが出てきたことを目が認識してから、指でスイッチボタンを押すまでの時間も長くなるようになる。また間違ってもボタンを押すことも多くなる。頭に酸素がまわりにくくなるためだろうか。眠くなってくる。ボタンを押し間違えても、モグラが引っ込んで、気分的にイライラしたり熱くなったりしない。

5000メートルを超えたあたりで、部屋がすっと薄暗くなってきた。ごく普通の蛍光灯の光が黄色っぽく見える。頭に孫悟空の輪のようなものがはめられたようになってきた。ぎゅっと締め付けられるような感じがする。それに何だか視野も狭くなって、斜め前方を見るにも首を動かして見ないとよく見えない。実際には蛍光灯の明るさが変わったわけではない。低酸素に反応して、あるいは低酸素になって「正常」には反応できなくなって、私の方が変化したのだ。

この時、隊員のひとり気分が悪くなって、リタイアした。天井に収納されていた酸素マスクがするするとおりてきた。これをびったり口に着けて酸素を吸って、彼は「平地」のひとに戻っていった。その人が白井だった。今にして思えば、今回こうした事態になることの伏線は既に張られていたともいえる。

ところで実際の高所登山と実験室での「高所」は、その高さに達するまでの時間が全く違う。私たちは時間をかけて上がってゆく過程で、順化をしていこうと初めから思っている。だから急激に高度を上げる実験室での結果で、調子が悪くなった人が見つかったからといって、その人とは高いところの山登りに一緒に行かない、というような論理展開にはならない。

ただ、私たちは現在ひとつの事実を知った。実験室「高所」で調子を悪くしたヒトと、実際の高所で高度障害をひどくおこしたヒトが

同一であったこと、である。今後高所登山を計画される人で、低圧実験室に入ってみようというヒトは、もし低圧室で具合が悪くなるような結果になったならば、計画自体を再考してみてもいいかもしれない。

低圧室でトラブルがあったからといって、必ずしも高所でトラブルに見舞われることになるとは思わない。この件だけで方向づけや仮説を述べるのも危険だろう。ただ、「高所で高度障害が深刻な状況になった人は、低圧実験室でもその兆候が認められた」という事実の確認は繰り返ししてもしすぎではない。

さて、また実験室。

部屋に空気が再び入れられはじめると、私たちは今度は逆に「下降」をはじめることになる。「高度」が下がると、部屋は再び明るくなり、視野も広がってきた。低圧室を出た直後には、体に少しだるい感じがあるが、あとはなんともない。いや、なんともないと思いたい。実際には脳細胞が非可逆的にダメージを受けているらしい。つまりいくらかの脳細胞が死んでしまい、ある程度「おバカさん」になっているというのだ。これは聞かなかつたことにしておきたい。

再び崑崙に戻る。

今朝から、ここ人民解放軍の兵站である三十里営房では豚、鶏、羊が屋外で何頭も屠殺されている。首に刃物を突き立てられ血に染まってゆく家畜を見て、うまい肉の相伴にあずかれることを期待して喜びながらも、複雑な気持ちになる。屠殺の仕方に対してではない。私たちはこの料理の準備目的をどういうわけか、かつての抗日戦勝利を記念したもの、と思ひ込んだからである。歴史好きの隊員が早とちりして解説したのが皆に信じられてしまったのだ。乙藤は豚に、人見は羊に、毛利は鶏に自分の姿を重ね合わせ、ほふられてゆく動物を前に、冗談にならない冗談を言い合う。

実のところ、8月1日は1927年に国民革命

軍が蒋介石総司令官に反乱を起こした日で、これが今日の人民解放軍発祥日として、建军節という名前で記念されている。今日はその記念日前日で準備をしているのだった。

(能田日記)

12時、三十里営房を出発。順調にマザ、クディを経て、無事イエチエンに着いた。そこには科学院の落伍組もいた。彼らは白井の高山病のことは知らない。北京へなかなか電話が通じず焦ったが、ようやく王中国登山協会副主席と話ができ、日本への連絡を依頼した。

白井はクディで焼きそばを食ったし、夕食もかなり食った。しかしいまだ言語不明確。

7月31日

「日曜日」だそうである。すっかり曜日の感覚はなくなっている。

先日、白井がレントゲン写真を撮ってもらった病院を訪問する。ちょうどタイミングよく、高度障害のために体調を崩して途中で帰っていった科学院の張研究員から電話連絡が入る。彼は現在イエチエンにいるそうだ。通信回線は軍用施設であるためか、先方の話とはとてもはっきりと聞き取れる。彼からの連絡により、次のことが確認できた。

本日白井をはじめ全員がカシュガルに向かった。白井は栄養不足のため、まだ立つことはできないが、意識ははっきりしてきた。あした浅野と白井はウルムチまで飛び、白井を通訳ができる人物に引き渡す。その後速やかにカシュガルに戻る。四駆とトラックは手配中。

つまり、早ければ4日にも、一行は三十里営房まで戻ってくるだろう。(白井の様子や行動は医療報告の項で詳述する)

私たちには朗報だ。

晩には、とりあえず再出発の兆しが見えて

きたことを祝って、ビールで乾杯する。科学院の王女史がおごってくれた。おつまみは殻付きのヒマワリの種。インコが餌を食べるように前歯で殻を割り、中身だけ取り出して、殻は床に捨てるのが当地の作法だそうである。

食後、なじみになった兵士から兵站のステレオとスピーカーを借りてきて、宿舎の部屋で音楽を聴く。邦楽、洋楽のリズムが人を引きつけたようだ。いつのまにか若い兵士も中年の兵士も交えてディスコと化した。ふだん規律正しく行動している兵士たちだが、こういう時に楽しんで加わるあたり、なかなか野暮じゃない。宿舎はコンクリート造りである。派手に騒いでも壊れる心配はない。

ヒマワリの殻が床一面に撒き散らかされるまで飲んで寝る。

(能田日記)

京都との連絡が今一つうまくいかないのが気になるが、とにかくカシュガルへ急行する。なぜか電話、電報ともに不調で北京とすら連絡ができない。あわよくばきょうのフライトでウルムチへ白井を送るプランは残念ながら明日へ持ち越しとなった。

8月1～3日

三十里営房に滞在

周りの山は標高4500メートル付近から上で冠雪している。悪天候は1週間ほどの周期でめぐってきて2、3日続くようである。周りが雪景色になると、ぐっと秋が近づいてきたように感じられ、待機している身に、ちらりと焦りがよぎる。

焦ってみてもどうしようもないことは分かっているのだから、食事をして昼寝。やがて昼食にまた起こされる。1日に2回も寝起きの食事をして、食事をした気にならない。

ドライバーを誘って玉(ぎょく)探しに上流に出かけた。

崑崙の南麓はとても古い時代から玉石の産地として知られてきた。玉は白色から碧色まであって、高級品はなめらかな少し透明があった白のもので羊脂玉と呼ばれる。夏季に雪解けで増水した川の流れが、上流部の山肌から、和田（ホータン）など麓の街まで玉を運んできた。そのため毎年秋になると河原で玉が拾えたという。今では良質の玉は山奥の採掘場で発破を使って採掘されている。

さてわれわれの玉探しである。

河原の石を丹念にみてまわり、それらしい石を手にとって表面に水をつけてみる。緑がかかった石を採取したが、玉と呼べるものであるのかどうか。当たり前なことだが、「磨けば光る玉」も河原に転がっているときから磨かれた玉として鎮座しているわけではない。慣れない私たちには「玉石混交」の河原で玉を見つけるのは簡単なことではない。

寺島は付近の川で魚類の採取。下流部にしかいないといわれてきた全身に鱗のある30センチを超す魚をとらえ、新たな知的興味を覚え満足している様子だ。既に述べたようにヒマラヤから中央アジアにかけての高地は、裂腹魚と呼ばれる鱗が一部にしかないか、全くない魚の生息域になっているからだ。

(能田日記)

1日、朝から何回も電話を申し込むが、その都度駄目である。白井は頭は回転しているものの、失語気味で自分でもいらついている。しかし何とか自分で帰れそうなのでほっとする。ウルムチからはCMAの人も出迎え、見送りをしてくれる手配ができたので、心配ではあるが1人で帰ってもらうことにした。夜、ウルムチにいた朝日新聞の福島記者と連絡がとれ、彼が白井の面倒をみてくれた。北京のCMAとの連絡もようやくうまくいくようになり、心配の種は1つ減った。

ほっとしたら私たちも大いに疲れている

ことに気がついた。浅野、三輪と私の3人で長城ワインという甘味の強いワインを飲み、そして青島ビールを飲み、ベッドに入ったのは3時半であった。

2日、ようやく山へ戻るができる。出発前にやるべきことを幾つか片付ける。酸素ボンベの詰め直し、北京の旅行会社への連絡等々。カシュガルとイエチエンの間の道はのんびりしていてポプラ並木が美しい。

3日、早朝、ウルムチの福島記者に電話する。白井は既に無事北京に着いたとのこと。日本から出迎えを出すか否かは、北京と京都で判断するとのことである。

私たちはもういつでも出発可能だが、四駆のドライバーの手配ができないのだ。結局この日は終日完全休養日とする。昼寝をし、町を散歩し、ひたすら食う。

8月4日

ここ三十里営房での滞在は6日目になる。

科学院の王女史と私たちは、軍人一人をとって宿舎の裏手の扇状地に人參を探しに行く。軍人は私たちが一緒にゆきましようと言ったのではない。勝手についてきたのだ。いってみれば私たちの監視をしていることになろうか。探しにゆくのは、いわゆる野生の高麗人參である。ビタミンBやサポニン配糖体を含み、新陳代謝機能を高める薬効があるとされる。王女史によれば栽培された太い大きなものよりも天然もののほうが薬用作用が強いという。栽培ものでは6年もの太くて重いものが珍重される。

兵站には鉢植えの人參があったので、地上部分の葉の形は知った上で出かけた。私たちの収穫物は、草丈20センチほどにくっついた小さな唐がらし程度の人參だった。小川沿いの草地で見つけた。天然ものでは日本で酒の中に浸っているような大きな物はなかなかないのである。

これもまた素人には探すのが難しい。

昼食後、近くの川へ魚取りに行く。今日は投網と「かいほり」をしようということに話がまとまった。

ここまで記録をワープロでおこしてきて振り返ると、毎日毎日よくもこれだけ「遊び」をしたな、と思う。富士山程度の標高とはいえ、いったん5000メートルの標高での滞在を経験した身体が、4000メートル以下のところに戻ってくると、はじめて4000メートルまで上がったときとは比べものにならないほど身体への負担は軽い。5000メートルでの辛さを思い出して比べて4000メートルが楽、というのではなく、絶対値として楽になっている。それだけ楽になったから、これだけ動くことができた。そしてここでこうして楽しみながら身体を動かしたことが、後に日の出から日没までの長時間行動を可能にした、といえるだろう。

ふたたび現場。

スコップ、バケツを手手に宿舎から上流のカラカシュ川に向かう。

いままでに実際に「かいほり」をしたことがあるという人見と魚類学者の寺島が、まず場所を選定する。カラカシュ川本流は広く流れも強すぎるので、中州と岸のあいだにできた幅の狭いところを吟味する。比較的流れの緩い2~3メートル幅の流れに決まった。上流部と下流部にそれぞれ水を堰止める場所を決める。長さにして15メートルほどが、堰止めるとプール状になる計画だ。

「かいほり」はそのプールのなかの水をすくいだして水を減らし、水溜まりのようになったところに残された、動きが鈍くなった魚をつかまえる漁法である。

二手に分かれて上流部、下流部の堰を作るために河原の石をどんどん川底に沈める。4000メートルの標高で頭ほどの大きさの石を何十と持ち上げ運ぶ作業は身体にこたえ、すぐに息切れさえする。ところが気持ちはず

を止めさせない。泥水に膝まで浸かりながら水の中で石積み築くこと自体が無性に楽しくてたまらないのだ。

上流部が堰止められると、下流からは、何人が川につかって両足でじゃばじゃば水を騒ぎ立て、上流に魚を追い込む役をする。下流の堤は、上流部に向かって石堤の中央が突き出た形になっていて、追い込んでいるときには突き出たところだけは、まだ石積みを作らないで置く。下流の堤よりもさらに下流側にいた魚は、足で水をかきまぜ騒ぎ立てたことに驚いて上流に泳ぎ、堤の切れ目からプール状のところに逃げ込む。結果、このふたつの石堰によって作られたプールにはたくさんの魚が入っているはずになる。入ったことを見越して下流側の堰を閉じてしまう。

あとはプールの水をバケツでかきだせば、浅くなったプールで魚が手づかみできるはずだが、上流の堤からの水の流入は思いのほか激しかった。石の間から水が吹き出してくる。石積みをした後のバケツでの水かき作業もかなりの運動だ。水が少しばかり減って、水をくみ出す気力も少し減ったころ、上流から声にならない声が上がった。人見が、上流部の石の堰をジャンプして越えようとする30センチ大の魚を手づかみにしている。

「かいほり」での収穫は、それが貴重な「手づかみ」による1匹だった。あとには7人の大人の作ったひときわ色の濃い泥水の水たまりが残った。

寺島が水たまりに投網をいれて、そこそこの収穫が得られた。

バケツにいっぱい魚を持ち、肩や腰にボカボカとした疲労感を感じながら、7時すぎに帰り支度をする。遅い時間になると、風が強くなり砂塵が舞いはじめる。目が開けられなくなることもある。

(能田日記)

きょうこそ山へ帰る。11時30分出発。ハ

ミウリを買う。四駆の床はハミウリとスイカがゴロついている。もと来た道をどんどん飛ばし、アカズ峠を越え、クディに15時30分、セラク峠に17時25分。このころ、小雪がちらちらしていた。マザで昼食。風が強く、地の果てのようなところだ。朝から合計ほぼ12時間も走って、22時すぎ三十里営房に着き、隊員と再会。明日からの再出発を期し、ビールで乾杯。

再び毛利記録。

9時すぎに、能田隊長ら白井を町に下ろした一行が戻ってきた。

白井は2日に北京に戻ったとのこと。ウルムチでは朝日新聞の福島記者に白井のことで世話になり、一行の行動は遅れることなく対応できたらしい。帰国に際して意識が戻ってきた白井は、隊長からことの次第の説明を受けたとき、残念そうな表情を作ったという。一行は彼が身体的にも精神的にも回復することを祈って別れた。

私たちは再会を祝い、明日からの再出発を祝して乾杯した。高所でのアルコール摂取は身体に影響があると言われているので、これがビールの飲みおさめになろう。三十里営房に残されていた日本人隊員の顔には笑みが自然とこぼれ、そんなに大きな遅れとならなかつたことを喜んでいるのが分かる。穏やかな顔は、魚とりが大漁でも、きれいな玉石が採れても見るができない顔である。

1時すぎに消灯になってお開き。

再び前進

8月5日

三十里営房から甜水海まで

甜水海の宿舎は連絡官の張さんが衛生的ではないといっていたとおりの臭いが漂ってくる。このため私はいつになく食欲がなく、食事を抜いた。

8月6日

再び新蔵公路を外れて道のないところを進む。とはいっても既に往復しており、また雨も降らないところなので、わだちが残り、道みたいなおものである。

トラックの運転を代わってもらい、初めての左ハンドルを運転する。初めてのなのはハンドルが逆なことだけではない。トラックの運転、4800メートルでの運転、六輪駆動車の運転という点においてもまた初めてである。ギアチェンジが難しい。クラッチの上に立ちこむように大きく1回踏んでニュートラルに。もう1回踏んで目的のギアへ変速することになる。ハンドル操作も大変である。特に力が要するという意味で。パワーステアリングとはほど遠い。また、ごろごろ転がっている石を乗り越す際に、前輪が大きく揺れるのと同時に、ハンドルが2回転ほど高速で回ったりする。ハンドルとハンドル軸の連結部も同様に回転するので、指が当たりでもしたら骨折はまず避けられないだろう。うっかりと親指の腹をハンドルが高速で回転してかすめていったときには、我が身の幸運に安堵したほどだった。

車の両側にはチベットレイヨウの親子の走る姿を何度も見る。狼の姿もある。

まもなく白井が倒れた地点にたどりつく。この日のうちに先日置いておいた荷物をトラック2台に積みなおす。

8月7日

ここから先、私たちはルートを探しながら進むことになる。身軽で小回りのきく4WDが先行して走り進路を偵察する。4WDとトラックとの間はトランシーバーを使って連絡を取り合う。毎時の定時交信を始めたが、2度目で連絡がとれなくなってしまう。1時間ほども待たせようか。それでも来ない。引き返してみると、走り始めて1時間ほどのところで、トラック1台が泥の中にタイヤを沈

めている。

見たところでは均一な一面の草原が広がっているのだが、実はちょっとした低地状のところにはこうした柔らかい部分が隠れているのだ。

10人がかりで車輪の前後を掘る。素手やアルミ製食器を使って。スコップは荷物を解けば出てくるが、梱包された荷物の中から取り出すのは時間がかかる。トラックが前後に動いて脱出できるように土方作業に全力を注ぐ。スタックしていない方のトラックとをワイヤで結び、手作業でつくったタイヤ周りのすきまを利用して反動をつけて引っ張り、ようやく泥から抜け出す。

ひと仕事終えて、スイカで喉を潤す。ここは5300メートルの高度である。

勝利大坂とよばれる峠については午後6時。立派な構造土が一面に広がっている。風化して細かく割れた岩の破片が、規則正しく亀の甲のような模様をつくって並んでいるのである。長い年月にわたって土壌中の水分が凍結したり融解したりすることを繰り返す間に、対流現象で石や土の粒子の大きさの同じ物が寄せ集められたのである。

峠からの下降路は谷底の河原のようになった地形になる。水にじゃぶじゃぶ入ったりして下るが、石の大きさは手のひらほどなので、車がスタックしてしまうことはない。標高5200メートル付近までさざると沢に支流が合流して沢の幅は広くなる。さらに100メートルほどさざると沢の幅は50メートル以上になる。

ゴルジュ帯に入り沢は7回ほど屈曲を繰り返す。2時間ほど下ったところで突如視界が開けゴーツァ湖のほとりにつく。

夕方の微妙な光が作りだす風景の色合いは壮大なスケールとともにすばらしい。当時の記録にはこう記してある。

「自然は一瞬一瞬が芸術だ。この風景は文字にはできない。……写真で伝わらない部分

は俺の網膜が覚えている。忘れるな。この日々を」

自然の力が感動家になってしまう。

ゴーツァ湖の北岸を東に進む。走り始めたときには岸辺に沿って車がちょうど走るのに都合のいい平坦な部分が続いているように見えていた。ドクターなどは

「自然はうまいこと道を作ってくれますね」といっている。ところがなんのことはない。先頭を走って偵察をしていた車から10分ほどして

「これより前には進めない」

と連絡が入る。いったん元の場所まで引き返した。

スコップをとりだしゴルジュの左岸側の末端の段差を切り崩し車が通れるように工事をした。こうして車を一段上の平地に乗り入れた。ちょうど河岸段丘のようなところを一段上がったようなものだと思っただけがいい。上がったところはこれまでの風景とは一変した景色となっている。緩やかな斜面が一面の大草原で、強い風になびく様は草原の海かと思う。

ウイグル人のヘイニーチャンの運転するトラックの調子が悪い。ガソリンに水が混じってしまっているのが原因らしい。何度も停車し調整をしている。状況は思わしくないのだが、それでも暮れ行きたそがれの草原の風景に気を取られずにはいられない。

午後11時になって正常に動くトラックに引かれてヘイニーチャンのトラックが4WDのところまで到着した。慌ただしく食事をすませて休む。

8月8日

未明には降雨があった。ゴーツァ湖を挟んで対岸の(湖の南側の)山々は雪に覆われてしまった。私たちのいる草原の高いところもうっすらと雪化粧をしている。9時に起きる。おかゆにマヨネーズ、シーチキン、醤油、胡

麻でご飯とする。

故障のトラックは3時間ほどかけてエンジンの分解修理をして、動くようになった。12時5分に全車両が出発した。

ところが、12時25分にはトラックが再度故障する。現在地はアメリカ航空局の地図で確認するとゴーツァ湖の北側を流れる2本の大きな川のうち西側の川の付近にいることになる。ほとんど前進できていないのだ。

14時現在、いまだ修理中。この間、4WDは先のルートを偵察しに行っている。偵察隊の人見からトランシーバーで連絡が入る。

「えー、われわれは、現在そちらがいる河原からみて、東に見える稜線を乗り越して、次の稜線におります。ここからはクリヤシャンコウ（克里雅山口）から流れる川までのルートが見通せます。これ以上ジープだけで進んでも無意味なので引き返すかも知れません。どうぞ」

ルートは展望がでてきた。

15時5分トラックの修理もできた。前方に丘のような地形がある。先行車両はこの丘を右側から回り込んで進んだ。先行車両からは

「トラックは丘を大きくトラバースするように」

と指示が入る。ところが中国側隊員はそのルートは「不好」で行けない、という。中国側独自の判断で丘を右側から上り始める。途中の地面に先行車両の残した立入禁止のマークを確認する。先行車両に再度連絡を取る。

「先行車両の通ったルートはトラックでの通過は無理だから、左手のゆるいところを通るように」

「われわれの中国語ではその内容を中国側隊員に伝えられないから、直接、張連絡官から今の話を繰り返してもらってくれ」

しかし、中国語での話は日本側の話と食い違っていた。

張連絡官は「先行車両はトラックのルートを探しに戻る」と伝えたようだ。この食い違

いを説明する連絡が日本側には伝わらなかった。また地形の関係でその後、数十分間交信が途絶えてしまった。そのため日本側隊員には手際の悪さに感情を悪くする者もいた。

16時ころ先行車が視界に入ってきた。

「先行の指示するルートに従って動くように」

と連絡が入る。

「後続車が独自でルートを探しながら行ってはどうか」

と再提案するが却下される。それなら、と言われるままに進むが、やはりトラックが走れない傾斜に出くわしてしまう。

17時30分、先行車と合流。コミュニケーションの不足、ずれから隊員の中に苛立ちがつのる。18時30分には雲行きが怪しくなり、雷が鳴り始めた。

このあたりの草の上には茶と緑と白を混ぜたような色をした30センチほどの塊がこちらに見ることができる。ヤクのフンである。牛のフンと同じように軟らかな便が高い位置から排泄されるために、地面に落ちるとホットケーキ状の塊となるのだ。付近には牛はもちろんのこと、飼育されたヤクもいないから、このフンの生産者は野生ヤクであろう。

20時20分には前方に崇測河のゴルジュが現れた。予定では斜面の傾斜の緩いところをつないで川底に降り立ち、ゴルジュの中を湖まで下れば先に進めるはずであった。ところがゴルジュの中は洪水の時の鴨川のような濁流が流れ、一部に不安定な雪渓も残っている。結果、源流付近まで大きく迂回することにす。崑崙最高峰のある山塊から流れでる氷河が3本確認できる。末端部分にはセラック帯が何キロか続いている。とても白くきれいな氷河である。

22時前、標高5170メートル地点で幕営する。溜り水があり飲料水が得られる。

今日の行程は距離にしてせいぜい20キロ程度であろう。トラックと共に行動しているは

機動性に欠ける。テントでは日本側隊員で打ち合わせをし、中国側にも相談した。

明日、4WDで偵察にでる。メンバーは日本側が能田、人見、伊藤、毛利。中国側が張連絡官、老王、ドライバー。ゴルジュの下降ルートの偵察と川の上流部の山裾部分での渡河の可能性を判断することを目的とする。

空を見上げると、星空である。

8月9日

9時に起きる。雪が降っている。ガスって視界が利かない。偵察できるかどうか不安な思いに駆られる。

昨日の打ち合わせの際、今後についての実質的な話も漏れた。登攀期間は既に大きく遅れている。ベースキャンプまでのルートの確定すらできていない。しかも降雪。困難な状況になってきている。

昼を過ぎても雲は低く垂れ込み、相変わらず視界は利かないままである。テント地近くの雪は融けたが偵察に行ける状態ではない。

1人で散歩に出る。30分程度歩いて氷河から流れる水を集める川のほとりまで行く。川は濁流が渦巻く。現在の状況では川を渡することは不可能だろうと考えた。

川岸にはトラックや四駆のわだちがある。昨年の名古屋大学の調査隊のものだろうか。そのわだちはまっすぐ濁流に消えている。この濁流を見て車を突っ込む者はいないだろうから、水量の様子は時期によって、あるいは年によってかなり変化があると思ってよさそうである。

テント地に戻ると暇を利用して隊員が料理に腕をふるっている。

寺島は生肉を登山ナイフで丹念に細かくしてミンチをつくり、肉団子入りスープをつくってくれた。陸好は駅の売店などで売っている酢昆布（これは行動用食料としてもってきいたものなのだが）を水でもどして、マヨネーズで和えて海藻サラダをつくってくれ

る。海岸から遥か離れたこんな所での海藻サラダは意表を突かれた感じで楽しくなる。私も食糧箱からするめを見つけて、昆布とするめを細く切って醤油をからませ「松前漬」を提供した。

夕方からは雷雨のちみぞれとなり、風も強くなってきた。

チオン・ムズターグ峰から6903 m 峰へ

8月10日

雲が低く垂れ込み、ちらちらと雪が舞う。気温は摂氏2度。

1時に偵察に出る。テント地から2、3キロで崇測河に突き当たる。岸は沼状で、人の足で踏み込んでくるおしくらいまで潜る。川、岸ともに車では踏み込めない。このような状態が氷河の末端から下流のゴルジュまで続く。それでも氷河の末端付近をノロバが駆けて行く姿を見る。

川岸にて日中双方の隊員で今後についての会議をもった。

日本側「この事態をどう考えていますか」

中国側「登山の時期についてわれわれ双方の配慮が足らなかったと思う。自然条件の困難さについてここまで思い至らなかった。日程については日本側が決めた。中国側はそれについて何のアドバイスもしなかった、ということ」

「われわれはユーティエンから、ラクダ・ロバを使ってアプローチしようとしたのを、中国側から山の南側からアプローチするように変更をさせられたのです」

「それはどういう理由だったのですか。中国側が同意しなかったのですか」

「北回りでは荷物が運べないと言われたのです。南側からならトラックを使ってBCまで荷物と共に行けると言われたのです」

「それは水が少ないという条件のもとで行けると言うことだったのでしょうか。現在は水が多くて通れなくなったのです」

「しかし時期は日本側が決めたと言うが、早い時期であれば雪のために通れないでしょう」

「6月末から7月初めならその心配はなかったでしょう」

「四駆、トラックを使ってチオン・ムズターグ峰へ近づくことは、極めて困難を伴うことがいずれにせよはっきりしています。いま現在、どの時期がベストかを論じるよりも、(川が渡れないという)現状をみて、登山協会の連絡官としてどうお考えになりますか？」

「個人として言わせてもらいます。今日はこれからもう少し偵察を続けてもよいと思います。明日も偵察しても良いだろう。しかし、一昨日のルートでもトラックは通れないでしょう。無理に通れば危険を伴う。日本側がそこを強行するかどうかは別にして。能田隊長としてはクリヤシャンコウまで前進したいだろうと私は推測します。人見・伊藤・毛利・睦好としてはむしろ高い山へ登りたいという思いが強いと思います。しかし、現在の状況ではそれは大変困難であると思います。今回ここまで来るにあたっては、中国側参加者の努力がなければ、ここまで来ることはできなかっただろう」

「それについては、皆一所懸命にやってくれたと私たちは思っております」

「いま私が思うことは、責任追及ではなく、明日からどうするのかです」

「全くその通りです」

「この会議を開くからには目的があるはずです。ひとつは能田隊長を含め学術隊が研究をすることだと思います。(今となっては行ける可能性がほとんどなくなった)クリヤシャンコウに行くことを思えば成果は落ちるとは思いますが。もうひとつは登山に関して、チオン・ムズターグ峰へは行けないが、高度・難度のある山にアタックしてみるべく努力してみたいということです。3つめは、で

きるだけ時間を無駄にしないことです。4つめは、これからのそういった行動を行うときの安全を確保しなくてはならないということです。この付近の山は未踏峰ばかりだから、車でアプローチが可能で、意義のある山へ登ってはどうか。その後、時間があれば近くにあるはずの火山にいつてみたいと思います」

「地図もないのにそこへ行けるのですか」

「地図はないし、真水もないだろう。イエチェンで中国科学院の人から話を聞いた。崑崙最高峰の西側からそこへ入る。もちろん付近の山を登ってからということですが。私がいま考えているのは以上です。皆さんの意見を聞きたい。一番考えなければいけないことは、これまで計画してきたことと、これから得られる成果の差を少なくすることです。だからできるだけ元来の目標に近いような大きな目標を選ぶことです」

「張さん。たとえばの話ですが、1台の自動車を買おうとして一所懸命貯金をしました。そうしてお金をクルマ屋に払い込んだ。しかし『ある、ある』といていた例の欲しかった車はなく、中古の車を買わされた。そういうときはどうしたらいいのでしょうかね」

「私にも言わせてください。人見の言う通り、金を払ったのに、買おうとしたものが買えなかったのはまさにその通りです。しかし、隊長がいま言った通り、これからどうするかを話すことが肝心だと思います。人見の言ったことはまさにその通りですが」

「だから、中古の車を新車が来るまで乗ることはできます」

「それならば、私はチオン・ムズターグ峰をほかの登山隊には譲りません。クリヤシャンコウに関しては中国科学院にも意思決定権があるので保証はできないが。登山に関しては私に決定権があります。私としては京大のためにチオン・ムズターグ峰を譲らないことを保証できますが、次回も自然条件のことが

あるので、ベースキャンプまで行けるかどうかについては保証はできかねます」

「登山協会に私たちがチオン・ムズターグ峰に固執していることが分かって頂けたことはうれしく思います。隊長として、今回われわれが数日のうちにチオン・ムズターグ峰のベースキャンプに着くことは不可能であり、全隊員が無念に感じることはどうしようもありませんが、今後も中国登山協会と協力して行きたいと思います。われわれはこのエクスペディションが始まって以来、張さんが頑張ってくれたことは十分に分かっていますが、準備段階において不十分さがあったことは明白であり、今後十分な準備をしてチオン・ムズターグ峰のエクスペディションを行いたい」

「次回、チオン・ムズターグ峰へ行くときにはお互いに時期についてより検討しましょう。日本側は名古屋大学の調査隊の資料を検討いただき、こちらは蘭州氷河凍土研究所などに問い合わせをします。車両の数についても検討します」

「そのときお金の問題はどのようなのでしょうか」

「人見はどう考える？」

「これは実際にあったことなんだが、ブータンでアメリカ隊が同様のことを経験していて、現在訴訟になっている。かれらはブータンで使った金以外に本国でも多額の金を使っている。私自身はそうならないことを希望しますが」

「ブータンの状況と言うのは今回と同じですか？」

「今回は一つには自然条件の問題であると思う」

「ブータンでも中国でも登山協会は山に登る権利を売って、ベースキャンプまで連れて行くのが仕事だと思うが、それができないときにはお金をとることができないのではないのでしょうか」

「われわれはどちらも互いの組織を代表する者ではないから、いまそのたぐいの話をしたくはありません」

「あなたは中国登山協会の代表としてきています」

「この話は帰りの道以降にしてください」

「俺は、張さんを兄のように思っているし、まして食ってかかっているのでもないのです。でももっとわれわれの状況を分かって欲しい」

「人見の気持ちは良くわかる。私自身次回来るときに考慮する話だと思うが、詳しくは北京です話です。繰り返しになりますが、私は人見たちと知り合えて良かったが、いま人見の言ったことは、北京で総隊長を交えて話をするようになると思います。私たちはナムナニ峰で角谷氏が倒れたとき、あるいは今回白井が倒れたときに、詳しく話をする前に、まず行動をしました(だから今はまず行うべきことを行おう)。いま私の言ったことは、人見の言ったことを否定するものではありません」

「われわれはこの氷河の上流にある6903m峰を目指したいと思います」

「ここから見えないと言うことはかなり遠いですね」

「チオン・ムズターグ峰登山への練習として、あたかもクディから高所順応のトレーニングとして行動したように、訓練として捉えています。この6903m峰が完結した登山ではないと考えます」

「OK」

「具体的には氷河近くに2週間ほど定着できるベースキャンプを設営してはどうか？」

「OK。ベースキャンプ予定地を偵察に行こう」

こうして、対象の変更が決定され、四駆で偵察を行いベースキャンプを選定した。

8月11日

未明には雪が降るが、朝方には雲間から青空がみえる。

ベースキャンプ（BC）建設地は雪の上ではない。氷河のサイドモレーンの外側で、岩屑の原っぱに草が生えたような平地である。歩いて行ける場所に小川もある。飲料用の水はここで確保できる。標高は約5300メートル。

寝泊まり用テントと本部テント、食堂用テントを設置する。

本部テントには八重洲無線株の無線機を据え付け、ホンダ株の発電機をセットする。小型で駆動音が大変静かである。高所では酸素が薄いために発電機のエンジンの燃焼効率が悪くなる。つまり燃焼させるときのガソリンと空気の量の混合比が低地と同じだと、空気中の酸素が少ない分だけ、高所では燃焼室での酸素が少なくなってしまう。そこで今回は混合比を調節するメインジェットという部品の高所用のものをホンダ株に用意していただき持ってきている。こういった細かいところに至るまで多くの協力者に助けていただいている。

人工衛星から送信される各地の気象情報を受信するため、気象ファクシミリも取りつける。

人見と伊藤はこの間、ルートの偵察にいった。

登攀開始

8月12日

本日から早速荷物を運び上げる。偵察と荷揚げとを並行して行う。

昨日偵察メンバーが定めたデポ地点（荷物を一時的に蓄えておくところ）まで、1人当たり10～12.5キロの重さのプラスチック段ボールの箱を運ぶ。われわれには限られた時間しかない。ルートがモレーン上の岩屑の斜面なので、雪の上の歩行技術を熟知していない学術隊員にも軽めの荷物を運んでもらう。

BCからサイドモレーンの上までは2時間弱かかる。モレーンの上に立つと氷河末端部が無数の塔状のセラック帯になって目の前に広がる。足元は土が緩く、くるぶしの下まで潜るところもある。ここからは多少の起伏のある地形となり、ところどころ池があったりするものの、割と平坦な地形が続きデポ地に至る。

崑崙は内陸に位置するために降水量が少ない。また気温差が激しいために山腹には岩屑の集積が多い。雪線高度も地球上で最も高い地域である。雪線高度とは、夏でも雪や氷が存在する高さのことである。西部崑崙の平均的な雪線分布は南側斜面では5800メートル、北斜面では5600メートル程度になっている。BC近くの崇測氷河の末端は標高5320メートルである。中国雲南省の横断山脈に位置する梅里雪山のナイノゴル氷河のように3800メートル付近まで末端が降りてきていて、氷河が針葉樹林の中に消えているような場所もある。

デポ地にテント1張りを建てて、その中に運んできた荷物を収める。ここまでの4時間ほどかかる。帰路は下りで荷物がなためBCまで3時間ほど。

デポ地から人見・伊藤・毛利は先のルートの偵察を行う。クレバスに注意を払い、ゾンディーレンしながら第1キャンプ（C1）予定地を決定した。標高5600メートル。

氷河下流部は傾斜が緩く、末端部分のセラック帯を除けばきれいな滑らかな氷河となっている。この地域の氷河は細長いものが多く、長さ10キロ以上のは25本を数えると言う。また蘭州氷河凍土研究所の報告によれば、西崑崙南斜面には262の氷河があり、その面積は1277平方キロになるという。

8月13日

天気晴れ。全員で荷揚げを行い、伊藤と毛利はC1にて滞在する。

「偵察をしよう」という話もあったが、C1にてテントを設営し、運んできた荷物の整理に時間を使うことにする。

この時期、氷河上には雪はほとんどなく氷がむき出しになっている部分が多い。ざくざくした10センチほどの雪の下は間違いなく氷が広がる。日中は気温が上がり氷河上に細い水の流れを見る。表面は概してきれいな氷となっている。ところでそんな氷もよく観察すると、表面に凹凸があり、へこんだ氷の部分にはなにやら黒い泥のような物が溜っている。風で吹き飛ばされてきた土が氷河の上に積もり、太陽熱を吸収した部分がそこだけ融解したと思いがちだ。ところがAAACKの会員でもあり、雪虫の研究を専門としている幸島司郎さんによると、この泥は氷河上で繁殖するバクテリアの塊で、バクテリア・コロニーと呼ばれるものなのだそうである。氷河の上を生活域とする昆虫たちは、このバクテリアを食物として一生を氷河の上で送るという。一時的に食物を得るために飛んで来たのではなく、氷河に定住しているのだそうだ。魚類学者の寺島は同じ理学部の幸島さんから出発前に、このバクテリア・コロニーがあったら持ち帰ってくれるよう依頼されていた。それで私たちはこれが土ほこりではないと知ることができたわけである。

8月14日

快晴。伊藤と毛利はC1から氷河上流を偵察する。

C1から見えていた氷河の側壁は、50メートルザイルで1ピッチ分の高さで越えられる50度ほどの傾斜の氷壁となっている。しっかりした氷となっているのでスノーバーでは歯が立たない。アイスハーケンでビレーピンをとる。

氷河上は簡単な氷歩きだ。クレバスもほとんどない。スキーのストックをゾンデ棒にして隠れたクレバスに注意して歩く。氷河の右

岸よりを登る。しばらく歩くと左から氷河が入ってきていて合流部はセラックを有して、垂壁となっており状態は良くない。セラックの下は水が溜り、青い池になっている。弱点を縫うようにしてルートをとると、3メートルほどの垂壁を登っただけで後は簡単に氷壁を抜けることができた。後日、この部分を撤収時に通ろうとしたが、氷の変化は激しく、フィックスザイルは寸断され、20メートルほどの完全な垂壁となっていた。

偵察を終え、C1経由デポ地まで戻り、10キロの小箱を2つC1まで運ぶ。

この日、人見・睦好・寺島もC1入りする。寺島は魚類学者で、学術隊員なのだが、ネパールでの調査時にピッケル、アイゼン操作も習得しており、またC1までの氷河は特に困難なところもないことからC1入りとなった。

夕方から雷が激しく轟き始めた。テント地がすっぽりと雷雲の中に包まれたようだ。ピッケルやカラビナの金属類はジーンとうなるような音がするようになる。

隣のテントから人見の叫び声があがる。テントの中で、トランシーバーのアンテナと彼の指の間を20センチほどの距離で放電光が走ったという。トランシーバーの感度をよくするために、C1のテントには八木アンテナがセットしてあり、交信するときにはアンテナとトランシーバーを接続するようになっていた。このアンテナ線の末端がテントの中に引き入れてあり、これに指を近づけたときに光ったのだという。

毛利は別のテントでどうしようもないと思いい、金属類だけを肌からはずしてコーヒーを飲んでいたが、伊藤はその隣でシュラフにもぐりこんだまま干しナマコのように身を硬くしている。

8月15日

天気晴れのちに雪。伊藤・毛利で昨日拓い

たルートを通ってC1から5人が荷揚げする。途中雪の降り方が激しくなり、ルートが見えにくくなる。3時間ほど歩いたところで荷物をデポして引き返す。帰りには再び日が射して天気は回復する。毛利・睦好はBCまでおりる。C1に泊まるのは人見・伊藤・寺島の3名になる。BCからは隊長たちが引き続きC1への荷揚げをしてくれる。

BCでは中国側スタッフがコーヒーをいれて迎えてくれた。

装備係の毛利は、学術隊のメンバーにルートの目印にする赤旗の作成を依頼するが、依頼された側からは不平不満が出る。装備の担当者としては、なんとしてでも明日C1に上がる時に赤旗を必要量もって行かねば困るので、とにかく作ってもらおう。縦横20センチ×30センチの蛍光色のナイロン布を1.2メートルくらいの細い竹に針金で結び旗を作る作業だ。京都を出るときに蛍光ナイロン布の反物を旗サイズにカットするところまでは作業してあった。

ひとつ気になり始めるといろいろなことが気になってくる。本部テントに設置してあった気象ファクシミリはこここのところの降雪の影響で水を被ってしまっているし、トランシーバーの親機も作動するものの水に浸かっている。テントの中はゴミが散らかり汚くなっている。気分を害して食欲もなくなり、カップ麺のそばだけを夕食とした。それでも毛利は出発前に収集した資料の中に次のような文章があったことを思い出していた。

「われわれはみな、死ぬほど疲労していたが、一瞬たりとも無駄にはしなかった。荷物を馬から下ろし、幕営した。われわれの隊の本当に優れた資質 (really excellent qualities) が今発揮されているのだ。彼らは13時間も深い岩原を重い足取りで歩き、尾根を登り、荷崩れを直しながら弱った馬を操ってきた後にもかかわらず、この日のキャンプ地に着くと、出来得る限りの快活さで行動した。ほとんど

の燃料や食糧、毛布が底をついているといった不満が出てくるような原因は有り余るほどあったにもかかわらず、一言の不平も聞かれなかったのだ」

著者は1902年にこの付近を踏査したC・G・ローリングで、1905年に出版された『ザ・グレート・プラトー』という書物である。ちょうどここから東に行ったところに広がる大草原にたどり着いたときの記述であった。この精神が辺境では必要となるのである。こんなことを思い浮かべてそばをすすった。

8月16日

晴れ、時々雪。この日は隊長を含めて全員がC1入りした。

8月17日

快晴のち雪、その後また回復して快晴。

8時30分起床する。

10時25分に毛利・睦好の2人が先のルート偵察に出る。昨日、人見・伊藤が偵察を行ったもののC2まで足を延ばせず、今日はその先のルートを見る予定である。2人とも快調に進む。11時10分に第3氷壁。13時には昨日コンテをした場所に出る。視界が良くないとザイルが必要だった場所も、天気が良いればなんとということのない地形である。14時に昨日の偵察パーティーが到達した地点に着く。ここから先は、踏み跡がないのでゾンデをして進む。12時からデポしてあった荷物を回収して歩く。15時、天気は急変しガスと降雪のために視界がなくなる。ツェルトをかぶって行動を休止する。場所は6903m峰から流れ出す氷河が合流する少し手前になる。

15時40分ごろにはガスが晴れたので行動を再開する。2本の氷河が合流する場所であるため、クレバス帯が現れる。初め荷物を背負ったままゾンデをして進むが、怖そうなので荷物を下ろして偵察し、ルートができてから荷物を取りに戻って運ぶという作業を繰り返

す。クレバス帯がひどくなるので、コンテをしながら進む。幅が1~2メートルほどのクレバスが幾つも口を開ける。深さは見かけ4メートルほどのものもある。緊張して歩く。スキーのストックで雪面を突きながらのゾンデをしないとヒドンクレバスに落ちる危険がある。幅の狭いクレバスだと雪が降ったときに、落とし穴のふたをしたような具合にクレバスの口が雪で閉じて、その所在がわからなくなってしまふのである。平坦な雪面にみえる所でもそこを踏み抜くとズボッと落ちることになる。したがって「転ばぬ先の杖」よろしく「落ちぬ前のストック」を使うわけである。

日本でも日本海側の豪雪地帯を山スキーで滑っていると、斜面の雪が雪の重みでずれて斜面に亀裂が入っているのを見ることがある。あるとき一緒にすべっていた男が、この亀裂にうっすらと雪が被っているのを知らずにそこを滑り、スキーを履いたまま突然姿が消えてしまうのを見た。手を伸ばしても上の雪面に届かないほどの深さにすっぽり落ちていたのである。それが氷河の上だとどこで止まるか知れない。

毛利・睦好以外の隊員は17時で荷物をデポしてC1に戻った。このクレバス帯を抜けてしまわないことにはC2のめどが立たないので2人はさらにルートを進ばす。19時、トランシーバーで氷河の入り口に達したことを報告して荷物をデポする。ここがC2予定地になろう。通ってきたルートには目印用の赤旗が幾本も立っている。肉体的にはかなり疲れてきているが、気分的にはさすがにいい。

周りの風景はガスもなく、6000メートル級の山々に夕陽が当たり、見とれてしまうほどにすばらしい。21時ごろ、氷河の表面が氷が昇華したり融けたりしたためにできたと思われる小さな氷柱が林立するのを見る。その氷柱を夕陽が朱に照らす。雪と氷と光の幻想的な風景だ。

23時30分、ほとんど暗くなったC1に帰着する。人見・伊藤が「よくやってくれたね」と出迎えてくれる。ほぼ12時間の行動だったが、自分が頼もしくなるほど体がよく動く。これまでさまざまなトラブルがあつて3500~5000メートルを行き来していたため、かえって高度順化がうまくいったのだろう。

日本人隊員全員がC1にて泊まる。

8月18日

日本人隊員は皆C1にて滞在し、休息日とする。定期的に隊員の服装を調査記録するためにヒヤリングを行った。上半身は9名のうち8名までがウールのシャツと化繊の新素材の下着を身につけ、1名が下着にもウールを使っていた。下半身は5名がウールのズボンと化繊の新素材を使った下着を身につけ、4名がウールのズボンのみである。化繊の新素材下着は(株)帝健のご好意により提供していただいたものでコンフォータルFという商品である。装備係ではこのほかにもウールの下着を揃えており、隊員は自分の好みにより快適なものを選んで着ることができのだが、この調査結果で新素材が顕著に好まれたことが判明した。

学術隊員は夕方にはBCに戻った。

8月19日

11時30分にC1を出発。20時にC2を設営した。登攀隊員4人全員がC2にて泊まる。標高は6000メートル地点である。

学術隊の能田隊長と乙藤はBC周辺で現在位置の測定を行う。かつて19世紀末から20世紀初頭の欧州の探検家たちは毎日測量を行いながら、このチベットの様子を明らかにしていた。

今日私たちは人工衛星からの電波を受信することで現在位置を測量できる。これはGPS (汎地球測位システム・Global Positioning System) とよばれる。GPSはアメリカ国防

総省の軍事用航法システムである。人工衛星と地上の電波制御局、それと手元にある受信解析装置からなる。地球表面から約2万キロの高度の軌道に打ち上げられた、周期11時間58分で飛行するGPS衛星には正確なルビジウム・セシウム原子時計が搭載され、軌道情報と共に時刻情報を発信している。衛星は6つの軌道に4個ずつ計24個が配置される計画である。地上側の受信装置では、受信時刻と発信時刻との差から衛星との距離を計算する。すべての衛星の時計は同期しているので、3個の衛星の電波を受信すれば経度・緯度・高度が決定される。

しかし実際には衛星の時計と受信機の時計は同期していないので、誤差が生じてしまう。そこで4個の衛星を使って正確な位置決定をする。衛星からは2種類の周波数(1227.6MHz・1575.42MHz)の電波が発信されている。一つは軍事専用、もう一つは一般利用可能である。一般用の精度は±30メートルで、経緯度にすると約1秒。受信機は持ち運び可能な大きさである。重さは約5キロ。最近では船舶・自動車にも搭載され始めている。こうして求めたBCの位置は

東経81度09分57.7秒±1.2秒

北緯35度12分06.1秒±0.3秒

高度5277m±16m

であった。

8月20日

天気曇り。10時にベースキャンプとのトランシーバー交信を試みるがつかない。

伊藤・睦好はC2から先の氷河のルート作りに出かける。6903m峰から流れる氷河と本流の氷河との合流点近くには幅1メートル、深さ30センチほどの小川ができていて、との連絡が入る。

人見・毛利はデポの装備の荷揚げのための回収に行く。クレバスはところどころで昨日よりも幅が広がっている。

8月21日

C3建設用の荷物と登頂用の装備を4等分して4人1日で運ぶ。ちらちらと舞う雪の結晶は5ミリほどの大きなもので、いわゆる雪印型である。結晶がいくつか固まって降ってくるのではなく、ひとつひとつ結晶のまま舞い降りてくる。北海道あたりのアスピリン・スノーのように細かい雪片が舞うのとはまた違う。

マッターホルンのような形をした6820m峰と6903m峰の中間部にC3を設営する。C3からは6903m峰の頂上はまだ見えない。

8月22日

7時30分起き。伊藤・毛利が6903m峰に登りに行くこととなる。

人見・睦好はC3西方の6820m峰に向かう。

同時に2つのパーティーで2つのピークに登ろうという計画である。

早朝からガスがかかり、雪が降っている。

C3から6903m峰の南斜面を登行し始める。コンテで登る。ゾンデをしながら登ると、比高差30メートルほどのところで幅50センチほどのヒドンクレバスが何本も走っているのにぶつかる。深さは暗いため判断できない。トラバースしてルートを探すが、同じくらいの高さのところにクレバスが口を開けているため、いったん登ったルートをそのまま下降することにした。氷河に沿って6903m峰の北面に回り込むルートを探ってみることにする。距離は長くなりそうだが斜面の傾斜はさきほどよりも緩やかである。コンテで進むため登高の速さは思い通り。

しかし、相変わらず見通しは悪く、13時ごろにはツェルトを張って視界が晴れるのを待つ。ここ数日は午前中に曇りの天気が続く、午後から夕方になると晴天になるという日周変化だったので、回復するだろうと予想していた。13時40分ごろ、ガスが薄くなってきた。

6903m峰とその西のピークとの間のコル(鞍部)を目指して登ることにする。コルからは稜線伝いに右上してピークを目指すことで2人は先のルートの確認をした。氷河の上は膝までの深さのラッセルがある。下部で曇りの天気だったときに、上部ではある程度まとまった雪が降っていたのだろうと思われる。

コルへの登りは急にはなるが、アイゼンは不要だ。前を歩く伊藤が雪を蹴り込んでつくったステップを、後ろから続いて登る毛利はそれを崩すことなく登ってゆく。雪の状態は普通思っている以上に変化するものだ。気温や湿度によって、雪の結晶の性質によって、あるいは以前に降った雪と新しく降った雪の関係で。雪でつくった足場が崩れやすかったりすることがある。ここではそういうことはなかった。雪はきめ細かく、手で握り固めれば雪玉ができあがる雪であった。

コルは広く、幅5メートルほどの平地部分がある。6903m峰から北に延びる雪の連なりが見通せる。登ってきた氷河を挟んで対岸の山は、たおやかな山容の崑崙山にあって厳しいヒマラヤひだをまとった斜面になっている。西側の山々の中には、ひときわ大きく7167m峰がそびえている。

1970年代後半に中国側の航空測量によって、崑崙山脈中で高いといわれてきた山の標高がいくつか下方修正された。私たちの当初の登頂対象であったチオン・ムスターグ峰も7723メートルから6973メートルに訂正されていた。そういった過程の中で無名峰であったこの山が崑崙山脈中の唯一の7000メートル峰であり、最高峰であることが判明した。1986年に東京農業大学の登山隊によって初登頂されている。崑崙山脈はいくつかの山塊が連なった集合体として構成されている。いま私たちが登っている山はこの最高峰と同じ山塊に属している。

稜線が上がってからは雪質が変化した。膝

近くまできめ細かいが全然ステップの決まらない雪になっている。ここからアイゼンをつける。岩稜に雪が張り付いたミックスの稜線を登る。

「岩の間の雪がえらく崩れやすいから慎重にね」

トップを歩く毛利が後ろを振り返って伊藤に声をかけて通過した。

そのあとは膝半分くらいもぐる細かい雪の稜になっていて「不安定な雪やな」と感じながら歩く。セカンドを歩く伊藤は途中一度腰あたりまで雪を踏み破った。傾斜がいったん緩くなる。その先は真っ白の雪稜になった三角錐形の山となる。ここまで登ると、くるぶしの下程度までしか雪にもぐらず、ラッセルはなくなっている。

16時すぎ、人見・睦好パーティーとのトランシーバー交信がつかない。彼らは目指していたマッターホルン形の6820m峰の北斜面で雪崩に巻き込まれたと告げている。面発生の表層雪崩だという。雪崩の規模は幅・長さ300メートル。雪崩遭遇地点は高度6650メートル。斜面を直上しているときに50メートルくらい上部から一気に幅300メートルにわたって雪崩れ、その斜面上にいた2人はコンテザイルにつながったまま200メートル流されたという。体の一部が雪に埋まったが、幸い2人とも自力で脱出できた。雪崩に巻き込まれたとき、睦好がバイルで左足腿部を少し切った。そのほかは怪我はないという。現在彼らは登頂を断念し、C3に戻っている。

この交信のやりとりのあと、伊藤・毛利パーティーは自分たちのいる雪の状態のチェックをした。現在の斜面はだんだんと急傾斜になってきており、高度計による高度は6820メートルを指している。こちらも雪崩の危険の可能性がある。さっそく雪キノコをつくってみる。雪キノコと言うのは雪の表面に直径50センチの円を描いて、その円に沿って雪を掘り下げ取り除いてできた雪の円筒のことであ

る。つまり50センチ周りを掘ると50センチの雪の筒柱ができあがる。この筒に両手で横に力を加えてみる。すると割と簡単に雪は2層にずれた。ずれたところが以前に降った雪と新しく降った雪の境目で、表層雪崩が起きるとすればこの境界面から上の雪が滑るようにして雪崩るのである。雪崩の発生仕方にはそのほかにも降り積もった雪が根こそぎ崩れる底雪崩というものもある。

2人はこの斜面の雪崩の危険性を確認しあい、登攀は続けるが、ワン・アット・ア・タイムで登ることを選んだ。先頭の一人が登っているときには後ろの者は止まってザイルで登っている人の安全を確保し、後ろの人が登るときは前の人と同様に後ろの人をザイルで確保する登り方である。登る速さはコンテよりも遅くなるが安全度はより高い。

稜線には大きな雪庇が右側にでている。踏み抜かぬよう左寄りに直径8ミリの長さ60メートルのフィックスザイルを張る。下の硬い層までステップが届くようにバイル、ピッケルでステップをつくりながら登る。2ピッチ目は更に傾斜がきつくなってきた。右に寄るとピッケルが簡単に持ち手部分までもぐってしまう。右側の雪庇が崩れれば、数百メートルは落ちてまず助からないだろう。ヘルメットをつけていると上が見にくいので、途中で外した。高所帽のつばの部分も邪魔だった。頂上近くになると表面の雪が硬くなり始めた。右手のピッケルはシャフトが深く打ち込めなくなった。左手のバイルのピックでステップをカッティングしながら、ザイルを延ばしていった。

ジッヘルをしている伊藤からは、

「強く蹴り込め」

「アイゼンだんごを落とせ」

「シャフトをしっかり打ち込め」

と、指示がかけられていた。

18時30分、ザイルを固定する前、ようやくてっぺんに着いた、と思った瞬間、鈍く低い

音が突き上げた。すぐに雪崩たことを理解した。足元がすくわれたときバランスを崩したのか、からだは仰向けになって左に傾き滑落し、顔の上にも雪の塊がかぶさってくる。ピッケルのブレードを雪面に打ち込んでストップ態勢に入ろうとするが、いつのまにかピッケルと腕が離れてしまっている。体とピッケルはひもで結ばれているので頭の上あたりにピッケルがあることは分かるのだが、ブレード、ピックに触れたり離れたりして、結局自力ではストップできない。滑落斜面が下部で切れ落ちていることが分かっていたから、「これで、死ぬな」と思いつつ、「とまらな、あかん。ピッケル、ピッケル」とピッケルをつかもうとしていた。こういうときには、頭の中が真っ白になったりはしないものだ。止まろうと懸命になっている自分と、懸命になっている自分を高いところから観察するように認識している自分、そして登ってきた山の地形を思い浮かべてあまり落ちると崖からダイビングすることになる、などと実にいろいろなことを思うものだ。

伊藤が「あと5メートル」とザイルの残りの長さを連絡したすぐあとで毛利は流されている。8の字環でジッヘルしていた伊藤自身もジッヘル・ピンごと2メートル飛ばされて、落ちたところで運よくしりもちをついて、ザイルを腰がらみで制動し、毛利を止めた。100メートル余りを振り子のように流れて止まったことになる。

停止後すぐに（と毛利は思っている）、伊藤から名前を呼ばれるので、元気であることを知らせるために手を振る。ずっと口で息をしながら登っていたためか声が出せなかったのである。

「ザックを外して、歩けるか？」

との問いに、ステップをつくって立ち上がる。ピッケル、バイル共に顔のすぐ近くに止まっており、よく怪我をしなかったものだと驚いた。

「2、3歩、そこを歩いて見ろ」

「左上にある赤いものはなんだ」

次々に声が伊藤から飛んでくる。質問の意図が、毛利が大丈夫かどうか試されているのだと分かったので、言われた通りに答え動く。大きな精神的ショックやダメージを受けたときにショック症状といって、呆然自失に陥ったり正常な判断がとれなくなることがあるからだ。伊藤は毛利が雪崩で怪我をしていなくても、おかしな行動を取らないかを確かめていたのである。幸い自我は失っていなかったが、気がつくとき指先がぶるぶると震えていた。あたりにはB4サイズの雪のかげらが散らばっている。

雪崩は点発生の表層雪崩であった。不安定な状態の雪の上で行動していた毛利の足元からそれは発生した。それまでは、不安定な雪の上で聞くことのあるズンという地鳴りを2人は聞いていない。いきなりであった。

伊藤のいるところまで戻って、

「頂上には着いたものの、頂上の証拠写真は撮れてない。クルンパさん登ってないし、もう一度、登り直しませんか」と提案した。

「これまで撮った写真と、ここから撮った写真で雪崩た跡を見れば登ったことは証明できるやろう。アオスジ1人でも登ったんやから、十分や。もうやめよ」と伊藤から答えがあった。

毛利は自分の考えが、動揺からきているものかもしれない、正常な判断がついていない可能性があるかもしれない、と考えた。ここは伊藤の判断に従うことにした。

雪崩の危険が十分に予想されたところにあえて踏み込んでいった点について、私たちの行動は賢明ではないはずである。死なないためには、危険がある程度はつきりしたときに引き返せば済んだからである。少なくとも危険率を減らせたはずだ。ところで私たちの行った行動は「登頂をめざそう。できるだけ安

全に」である。結果、希望していた登頂は成功し、予想していた最悪の状況、つまり雪崩に遭遇した。

「退却を恐れるな。一旦戻って態勢を立て直して、再度やりなおせばよい。そうして成し得れば、それが前進なのである」

こうした教訓は貴重なものである。その上で、文字通りすぐ目の前に登頂という希望がぶら下がり、そのチャンスは登山期間の遅れのために今日を逃したらまたとはなく、でき得る安全は確保した上で、やっぱり危険があるからといって中止できたのだろうか。自らの責任において、登るのは自分である。

人の行動決定の判断の問題とは別の次元の問題がある。すなわち大陸内部の気象と雪の状態が、私たちの日本、ヒマラヤでの山岳地帯での認識とは異なっていたことである。人見・睦好が雪崩に遭遇した斜面は斜度30度台で技術的には問題のないところであった。雪崩そうもないところでの雪崩である。不安定な雪のできあがり方、乾燥した環境の中での雪の融解と昇華の関係といったことは今後の調査研究が必要と思われる。

C3に戻ると人見と睦好が熱い紅茶で迎えてくれた。

8月23日

C3からC2まで下山。

8月24日

C2からC1まで。

8月25日

C1からBCまで。短く、濃度のこい登山活動はほぼ終了した。

8月26日

BC撤収し、渡河地点まで。

8月27日

新蔵公路に入り、三十里営房まで。これでようやく安全地帯に入り、疲れがいきに出てきた。

6903m峰登攀概要

人見五郎

8月10日、私たちは崇測河の増水により渡渉を阻まれた。日程も大幅に遅れており、私たちに残された時間はあまりに少ない。しかも車両のコンディションは悪く、さらに新たなルート求めて機動力を発揮することも期待できない。もはやチオン・ムズターグの計画は崇測河の濁流を前に断念せざるを得なかった。日中双方で協議した結果、チオン・ムズターグへの登山は今回見送り、残された日数を利用して、崇測氷河源頭にある6903mの無名峰にアタックすることとなった。

残された日数は2週間。ルートもまったく未知である。幸い名古屋大学から見せていただいた資料に崇測氷河の詳しい資料もあり、遠望する限り技術的に困難もなさそうである。ルートは傾斜の緩い、しかし長大な崇測氷河をひたすら源頭に向かって歩き、6903m峰から流れる氷河右俣に入り、最後にピークを踏むというものである。体力勝負になりそうだが、三十里営房での長期休養もあって隊員の体調はすこぶる良い。高度障害で途中帰国した白井のためにも成果をひとつ残しておきたい。以下行動の概要を記す。なお時間記録は北京時間のため、実際の現地時間とは4時間の差がある。

8月11日 晴

標高5300mの崇測氷河末端のサイドモレオンにBC建設。人見・伊藤で氷河の右岸沿いにルート偵察。氷河取り付け点にデポ地点決定。

8月12日 曇→アラレ→晴

登攀隊員・能田隊長・乙藤・寺島学術隊員・浅野通訳・三輪医師・張連絡官でデポ地

点まで荷揚げ。人見・伊藤・毛利でC1予定地偵察。下部の荷揚げは隊員総出で行う。氷河の取り付けにフィックスロープ50m。

8月13日 晴

全員で荷揚げ。伊藤・毛利C1入り。

8月14日 晴

伊藤・毛利C1上部ルート工作。

人見・睦好・寺島C1入り。

C1上部氷河のセラックにフィックス50m工作。夕方猛烈な落雷に遭遇し、C1の外部アンテナが青白く光りだすセントエルモ現象が起こる。

8月15日 曇ときどき小雪

人見・伊藤・毛利・睦好・寺島C1から上部デポ地へ荷揚げ。毛利・睦好荷揚げ後BCへ。能田・乙藤・三輪・浅野C1へ荷揚げ。

8月16日 曇

人見・伊藤C2予定地ヘルート工作。

能田・乙藤・三輪・浅野・毛利・睦好 C1入り。

崇測氷河はいくつかのセラック帯はあるものの非常になだらかな氷河で、アイゼンを履かずに歩行ができる。ただしセラック帯に入るとクレバスを避けつつ、さながら迷路の中を行く有り様となり非常に時間がかかる。崇測氷河右俣の入り口をC2地点と予定しているものの、見えているのになかなかたどり着けない。

8月17日 晴

毛利・睦好C2予定地ヘルート工作。

人見・伊藤・能田・乙藤・寺島・三輪・浅野C1上部へ荷揚げ。

若手の頑張りで、C2へのルートが確定する。氷河上の天候は登山期間中おおむね晴れであったが、午前中はガスや小雪でしばしば視界が遮られた。午後は快晴となり、夕刻雷が鳴り出す毎日であった。

8月18日 晴

登攀隊員休養。

能田以下BCへ。

8月19日 晴

登攀隊員C2(6000m)入り。

8月20日 晴

伊藤・睦好C3ヘルート工作。

人見・毛利C2下部デポ地より荷揚げ。

8月21日 晴

登攀隊員C3入り。

C3は崇測氷河右俣が東へ屈曲する地点の6500mに設営された。ここはピークこそ見えないが6903m峰と氷河を隔てて6820m峰に挟まれた地点である。どちらも指呼の位置にある。ここで明日以降の計画について話し合われた。技術的に登攀には問題なく、どちらのピークも登れそうである。隊員の間でふたつとも登ってしまおうと言うことになった。問題はその方法である。6903m峰を登って翌日6820m峰を登ることも考えられたが、日程的に明日中にやつけた方が後の日程に余裕もてる。特に6820m峰はピークの周囲を半周してC3に来ているのでルートは良く分かっている。そこで明日は6903m峰に伊藤・毛利がアタックし、6820m峰に人見と睦好がアタックし、のち伊藤らのサポートにまわるという計画を決定した。

8月22日 小雪→晴

伊藤・毛利6903m峰アタック。

人見・睦好6820m峰アタック。

10時にC3出発。昨晚の積雪はC3で3cmくらい。伊藤らははじめC3から6903m峰

にダイレクトにのびている南斜面に取り付いたが、ヒドンクレバスが何本も走っており、結局いったん下って氷河を源頭までつめ、北側に回り込むことにする。人見らはC3から1時間ほど下ってピークから直接氷河に降りている南東のリッジに取り付こうとしたが、斜面が氷化しており手持ちのアイスハーケン等が少なかつたためC3からの北面の斜面を登ることにする。人見らはガスの晴れるのを待っていったんC3に戻り、14時から再出発する。

最初に人見らの行動を述べる。C3からピークの肩までは上部で35度程度の傾斜はあるもののなだらかな斜面である。その斜面を左のリッジ寄りに登る。斜面に取り付くとくるぶしぐらいのラッセルでアイゼンが団子になって歩きづらい。6500mごろから膝下のラッセルになり雪質が軽くなる。16時、6650mに達したと思われる地点で、50mほど上部から表層雪崩が発生する。人見、睦好とも約200m流され、腰まで埋まって止まる。雪崩は幅200mにわたって発生した面発生雪崩で厚さ10~20cmほどであった。幸い傾斜が緩かったため、デブリが1ヶ所に集中しなかったことから事なきを得る。睦好がバイルで左足太ももを2cmほど切ってしまった。この時点で行動を打ち切り、C3へ引き返す。16時30分、C3帰着。

伊藤・毛利は氷河を忠実に詰め、15時30分ごろ氷河源頭のコルに達する。コルから稜線づたいにピークを目指す。16時30分すぎの人見との交信で雪崩の危険性を確認し、コンティニューアスからワン・アット・ア・タイムに切り替える。18時30分、毛利がピークに到達。と同時に足元から表層雪崩が発生し、100m流されて伊藤の確保で停止する。毛利がピークに到達したということで行動を打ち切り、C3にもどる。21時C3帰着。(伊藤らの行動の子細については毛利の記録に詳しい)

C3にて上部の雪質が非常に不安定であ

チオン・ムズターグ偵察行

乙 藤 洋一郎

り、また雪崩に遭遇した動揺もおさまりがたく、6903mのピークをとにかく踏んだということで下山を決定する。

8月23日 晴
登攀隊員C2へ。

8月24日 晴
登攀隊員C1へ。
能田・寺島BCよりC1へ。

C2を経てC1に至る下山はひたすら歩を進めるというものだったが、C1手前の氷河の地形が入山時と大幅に変わっており、氷河の降り口を決めるのに手間取る。結局かぶり気味のセラックの氷壁を40mアブザイレンしてC1に帰着。能田隊長、寺島に出迎えられる。

8月25日 晴
能田・登攀隊員・寺島BC帰着。

私たちに与えられた2週間の登山期間でもかくにも6903mの未踏峰に初登頂できたことは、今回の遠征隊を構成した全隊員の献身的な協力があつたが故に成し遂げられた成果である。にもかかわらず、登攀隊員は登頂日に相次いで雪崩を誘発してしまい、非常に不本意かつ反省材料の多い結果を作ってしまった。

何より崑崙の雪質を十分に把握しきれていなかったことが挙げられる。傾斜自体は特に問題となるような斜面ではない。私たちも登りながら急に雪が軽くなって「何かいやらしい雪やなあ」と感じつつ、傾斜にだまされて突っ込んでしまったのである。この「いやらしい雪」が内陸部の高山である崑崙の場合、日本国内やヒマラヤとは異なった雪質を形成しているのかも知れない。私たちは崑崙の雪を科学的に考察する能力を持たないが、今後崑崙で登山をする場合、この崑崙の雪を十分検討する必要があると思われる。

またこういった危険性があつたにも関わら

ず、パーティーを2つに分けて2峰にアタックした点は私たちのまったくの勇み足だった。キャラバンの大幅な遅れ、対象の変更によって私たちは非常に大きなフラストレーションを抱えていた。しかも悪いことに隊員のコンディションは非常に良く、6500mのC3に居ながら、あたかも5月の室堂から立山と大日岳にアタックするがごとき感覚で2つのピークを見ていたのである。より確実にかつ安全にという登山の基本セオリーを今後肝に銘じたい。

最後に、チオン・ムズターグを念頭において今後の崑崙登山について私たちの経験を踏まえて述べるなら、まず登山の成否を決定するのはいかに確実なキャラバンルートを見つけるかにかかっている。甜水海から先は道も人家もないまったくの原野である。大きく分けて3つのルートが考えられる。ひとつは崑崙山脈の南麓を東進するルートである。これは私たちが中国登山協会のアドバイスをえて採用したルートであるが、山麓故にルートの起伏が大きく、しかも何度も渡渉せねばならないのでトラックの走行に問題がある。もう一つは、崑崙の北面からロバ等で徒歩で崑崙を越えていくものである。私たちも当初このルートを考えていたが日数、ロバ、ポーターの手配の問題がある。3つめは公道沿いに大きく南に迂回して北上するルートである。地形的には十分トラックで走行できそうであるが、周辺には塩湖はあるが、飲料水がはたして途中で確保できるか問題である。崑崙山脈の南面は今日に至るまでほとんど手つかずの状態、中国側にも十分な情報もなく、まさに「辺境」と言う名に値する地域である。

また私たちの辿ったもっとも順当なルートを考えた場合、帰りも含めてキャラバン中の増水を避けつつ登山中の好天を期待するとなると、遠征を行う時期の選定が難しくなる。この点について現地の気象、気温等について今後十分な検討が必要である。

偵察への意欲

8月18日夕、能田、三輪、寺島、乙藤、浅野の5人は、登攀隊が登頂するまでの間の計画を立てた。寺島と浅野は19～21日の2泊3日でゴーツァ湖の魚をサンプリング。能田と乙藤はベースキャンプ周辺で“小春峰”の測量と岩石採取。21日以降は登頂成功を見届けるため5人はC1とベースキャンプで待機、とする。

19日14時半、寺島、浅野の2人をゴーツァ湖まで送る。

20日は午後から測量を予定していた。しかし、中国人隊員は前日の疲れからか起きようとしなない。能田隊長もややお疲れのようで、個人テントで朝寝坊。何か焦り気味の気配があり、最大の美点である用意周到さがなくなってきた。

その晩、能田隊長の焦りの秘密が分かった。

「チオン・ムズターグを見たい。いやクリア山口（峠）への道だけは偵察したい。明日、寺島たちを迎えに行くまでに、少し偵察しておこうか」

チオン・ムズターグをあきらめていなかったのだ。学術活動と偵察活動のどちらを大切にすべきか、長いこと迷っていた事柄に決断を下した。

第1回偵察（8月21日）
名大隊ルートを求めて

テルモスにお茶を詰めて、11時半にクリア山口への道を探しに出発。偵察隊員は小王とヘイニーチャンを除く日中隊員全員である。

ベースキャンプ南の湿地を抜け、1つ丘を越えると広い場所に出る。干上がった池底の

平坦面だ。東に進むと水が少しずつ現れ、そして大きな池になってしまう。私たちは池の東端から流れ出している川に沿って東へ進んだ。その川は氷河の水を集めたやや大きい川と合流し、南東に向かって流れる。両岸はやや侵食が激しく、ゴルジュになっている。車は川沿いにはいけず、合流地点から南の丘に登り川下に向かう。丘を下り、川岸に近づくとジュレットティが川の向こうを指して何か叫ぶ。「ロン（狼）」。見ると、対岸を狼が歩いていて、ロバのように毛のふさふさ長いしっぽを持っている。悠然と川向こうの丘に登り、姿を消した。

この付近では川幅は約60メートルあるが、水は川床一面に流れているわけではない。10日の偵察時もこの地点までやってきたが、その時は川幅いっぱい流れていたという。水量は数キロ上流の氷河の氷の融ける量に支配され、気温の変動で水位は大幅に変動するのだろう。

昨年名古屋大学隊は、ゴーツァ湖に出るために、この川をここから下っていったという。しかし、水位が高すぎ、とても無理だ。川を下ることは断念し、対岸に渡ることにした。川床に降り、水の深さを測りながら、飛石づたいに歩いていく。川原には幅5メートルくらいの流れが4筋ほどある。手前の3つの流れは深いところでせいぜい30センチ、幅も5メートルを超えない。渡河は簡単そうだ。張さんの指示で、車は川を横切り始めた。

川原を歩いていた私たちは、最後の流れまでやってきた。あと8メートルで対岸だ。しかし、いままでの流れとは勢いが違う。白い波まで立っている。大人の頭ほどの石を投げ

入ると、流されていく。深くて速い。老王や張さん、能田隊長はがっかりした表情だ。あと8メートル、あきらめることはない。急な流れに沿って、徒渉できる地点を探してさかのぼる。さかのぼるにつれ、川原の石が大きくなっていく。徒渉地点が見つからないだけでなく、直径が50センチを超えるような石が増えてきた。もう車は入れない。張さんはこの川原からの撤退を運転手に告げた。

もっと水量の少ない地点、特に合流する前の川なら一つずつ越えることはできよう。全員そう思ったのだろう。すぐさま車に飛び乗り、合流地点の上流に戻り始める。

上流で渡河

再び丘の上。北西には白い三角の7167m峰がひととき高くそびえ立つ。6903m峰から流れ出す氷河など3つの大きな氷河が目の前に広がる。合流地点のやや西側で川岸に出た。川原には石がなく、黒い細粒の砂でできた川床である。氷河から融け出た水が、多量の氷河砕屑物を運んできたのだろう。川幅は20メートルあるが、流れは8メートルだけだ。

老王は車を川岸で止め、車から降りておそるおそる砂地の川床を歩く。もちろん、人間の重さで沈んだりしない。車でも大丈夫と判断したのだろう。車を川床に乗り入れ、意を決したように流れを横切った。水位はホイールの中程まで。トラブルもなく渡りきる。ジュレットの車もあとに続いた。

東に見えた氷河を正面にみすえてしばし走ると、再び川岸に出た。1本目より幅が広く、50mはあろうか。しかし、流れは幅12~13メートルくらい。徒渉2本目となるかと期待を込めて見ていると、流れの前で老王は車を止め、車を出る。やおら流れの端に座り込み、考え込んでしまった。張さんが老王の横に座り、2人で何やら話している。肩を抱いたり、タバコを勧めたりする張さん。何とか徒渉するよう口説いているらしい。

30分たった。コックがやおら靴、ズボンで脱ぎ、真っ赤なトランクス姿で、深さを探りに川の中に入っていった。水が冷たいのか顔をしかめる。流れはそんなに速くなく、半分まで行っても水位は膝が隠れるくらい。トランクスを濡らすことなく対岸まで渡りきった。車も発進。ホイールの半分以上が水没するが、まだ余裕を感じる。

川また川

2本の川を渡ったので、私たちはてっきりさっき徒渉できなかった川を越えたと思じた。あとはクリヤ山口へ簡単に行けると思い込んだが、残念ながら再び川が現れた。老王は川岸に車を止めて、再び座り込む。川幅は15メートルと狭い。しかし、川岸から急崖なので、川を渡っても、対岸の丘の上まで車は上がることはできないだろう。張さんも川岸に座り込み、20分ほど。2人の話がまとまったのか、車は下流に向かう。この川沿いにゴーツァ湖へ向かおうというのか。傾斜の緩やかな丘の上に出て走る。

丘が緩やかに下がりだした。川原に降りれると思った矢先、いま沿って走ってきた川は、4倍の幅を持つ川と合流していた。右からの流れは、最初に渡ろうとした川の下流であった。老王と張さんは3度車から出て、しゃがみ込んでしまう。何の話をしているのか、時間だけが経っていく。

あまりにも動きがないので、私はまばらに生える草の上に寝ころんでしまった。ひとり徒渉地点を探していた能田隊長がやってくる。次の指示かと思ったが、何のことはない、ただグチを言いにきただけだった。老王と張さんの軟弱ぶりを非難する。彼らにクリヤ山口を偵察する意欲がない、と感じるといふ。

隊長と私は、足元に転がる石の種類をあてっこをやった。黒くて重い石が結構多い。どうも火山岩みたいだ。どうしてこんなところにあるのか。もしかしたらチオン・ムスター

グに分布する火山岩はこの辺りまできているのだろうか。ますますチオン・ムスターグに行きたくなる。川岸の2人は何か決心したのか、車に向かった。

今度は、いま下ってきた川を再びさかのぼり、徒渉できる地点を見つけようというのだ。一度渡ろうとした地点よりもっと上流を目指していた。前方には三角山が2つ。火山のようにみえる。さっき隊長と見た火山岩を噴き出した火山かもしれない。

三角山は標高差100メートルくらい。山の東のふもとを巻くように川は流れる。川幅は10メートルくらいで、川向こうには広い平坦地がある。高さは川の水位より少しだけ高く、水量が多くなると、調節用の池のようになるのだろう。結構広い平坦地である。

三角山より上流では川はゴルジュになる。渡河するならここしかない。老王は一度川床の硬さを確かめ、車に戻ると、渡河を開始した。車を川上に向けて川に入り、途中で川下に方向を変えて対岸へのし上げた。ジュレットも続く。

偵察最前線

川の南側にある広い平坦面は、明らかにかつての湖底面だった。スランプの跡がよく観察できる。あるところはスランプで傾いた地層が盛り上がり、車は直進できない。そうした個所を避けながら南へ向かう。湖底面の南端には草の生えるなだらかな丘が見えている。近づいてみると、丘は急傾斜。中国人の運転手は、水は怖がるが急斜面は平気だ。

急斜面を登りきる。車の先、南方には同じような丘がずっと続いている。進路を東にとり、丘の一番高いところを目指す。とにかく高いところから、周りの様子を見て、次の進路を決定しようとする。偵察の原則だろう。

丘の東端から下を見ると、結構険しい斜面が延びている。斜面の終わりは南北に延びる谷で、谷底は平ら。U字谷にしては幅は広く、

3~4キロはあろうか。谷の向こうは高い丘となっている。その丘に車1台で行く。谷の中は草の生えかたが減り、砂地が顔を出す割合が多くなる。

丘は南北に連らなっている。一番高い丘の南は峠状になっていて、丘を横切って越せそうなどころだと判断した。しかし、峠に向かうと地面は砂地となり、車は走れなくなる。むしろ一番高い丘を目指した方が、堆積物の地層があらわになっているので、地面は硬そうに思われる。

丘の東側の景色は、一つ前の丘からのものとよく似ていた。違いは、いま見えている谷と丘がこれまでより乾燥していることだろうか。正面の丘は砂山のように見える。砂山の手前の南北に延びる谷を走れば、ゴーツァ湖の東端に出られそうである。砂山を越えて東へ向かうのは難しい、というのが偵察隊5人の総意であった。今後は下の谷を南に向かう、との結論を出し、きょうの偵察を終えることにした。

ベースキャンプへ転進

戻るとなると速いこと。あつという間に湖底跡が真下に見える丘の上に着いた。6903m峰は見えないが、氷河などが全部望まれる。双眼鏡で見るとBCが見え、氷河をたどるとC1も。6903m峰周辺を眺める最高の見晴らし台だろう。

私たちがテント地に着いた時、寺島と浅野は既に帰りの用意に取り掛かっていた。偵察隊員は寺島の獲物のとれ具合に興味があったが、寺島は笑うばかりで漁獲量には触れない。テントを片付け、最後に網をしまう時、寺島は苦笑いしながら獲物の量を教えてくれた。「4羽」。魚を「羽」とは数えまい。三枚網にカモが4羽かかっただけで、魚はすんでいなかったという。

BCへ戻る。能田隊長は、もっと先の偵察が可能と思ったのか、強気だ。一方、他の隊

員は元気がない。食後、寺島からゴーツァ湖の話聞く。水鳥は魚ではなく、水辺に集まる虫を食べにくるようだ。私たちは偵察の様子を伝える。

「渡河となると、中国人が途端に弱気になる。どうも張飛が一番だらない」と私が言うと、浅野は、

「最大のピンチは運転手だろう。車が壊れ、この荒野で野たれ死にするのを恐れるのではないか」

明日からの予定を、能田隊長を囲んで相談する。隊長が極めて焦っているのがよく分かる。焦りは、明日からの自分の身の振り方にある。登攀隊員は登山活動をしている。一方、チオン・ムズターグへの偵察はぜひともやらねばならず、一度は自ら見てみたい。もし、偵察の間に遭難でもあったら……。迷いが表情に現れている。結局、隊長と寺島はC1に入り、登攀隊の動きを把握する。三輪はBCで待機。乙藤と浅野は偵察に行き、少なくともクリヤ山口まで行って、チオン・ムズターグを見てくる、と決まった。

第2回偵察（8月22～24日）

8月22日

出発

テントの入り口から入ってくる光は、まぶしいほどに明るい。寝袋を抜け出し、外に出ると、昨夜来雪が降ったらしく少し積もっていた。朝日を反射する雪の明るさだったのだ。食後すぐに、三輪ドクターと寺島がゴーツァ湖で捕まえた4羽のカモをくん製にする準備にかかった。お湯を沸かし、羽毛をむしる。内臓を取り出す作業はドクターのおてのものである。

浅野と私は偵察の準備にかかった。できるだけチオン・ムズターグに近づくことにしたので、やや長期になるかもしれない。5日分の食糧を持って行くことにした。元気をつける薬も忘れずに……。テントの中を散々捜し

回ってやっと見つけ出した。寒いところでは強い酒がよかろうと、クルバジュのナポレオンに決める。ところが、瓶を持ち出すところを、ベースキャンプに1人残るドクターに見つかり、半分わけとなった。

13時30分、予備のガソリンを積んで、ベースキャンプを出発。老王の車には張さん、小春、そして浅野が乗り込み、ジュレットティの車には私が乗り、食糧、テントを積み込んだ。天気は昨日ほどではないが、なかなかよい。もしかすると帰れないかもしれないという気持ちも吹き飛ばすくらいだ。

一度偵察した場所は、運転手や張さんにとって気が楽なのか、昨日悩んだ末に渡った川も、立ち止まることなく、すいすい渡る。昨日到達した地点の峠までわずか1時間で着いてしまった。

きらきら光る白い山

14時30分、峠から東に向かう。いままでより乾燥が進んでいる。わだちと見まがうワジの中を走る。周りは砂漠の様子を呈していた。しかし、ワジは流れの跡がゴーツァ湖の方へ変わると、幅は広がり、川床の砂もしまってきて、車が埋まる危険性は減ってきた。東の白い色をした山のふもとのやや高いところを走る。ゴーツァ湖が眼前に広がってきた。

白い山の高度はゴーツァ湖に近づくと低くなり、15時には山の南面を回り込むことができた。白い色は、大量の石英か大理石のれきが黒色のスレートの岩片に混じっていることが原因だと分かった。石英か大理石の結晶に光が反射すると、きらきらと光るのだろう。

南面の傾きがなだらかになり、その先に大きな河口が見えた。でっかい。河口には無数の砂州が見える。とても車では渡れない、と直感できた。川の南側の山は同じように白い。さらに南側には赤い山が広がっていた。恐らく鉄鉱物をたくさん含む赤色砂岩だろう。1億年前にできたジュラ紀の堆積物だろう。

15時10分、次の進路は、白い山の南面を高巻くようにとった。高度を上げていくと、砂地になっていく。野生のヤギの足跡がある小さな谷に入り込む。砂に少し埋もれながら進むと、突然谷はなくなり、スパッと切れた崖の上に出た。50メートルから100メートルの落差がある。その下は広い広い川が流れている。さっき見た川だ。この低地は甜水海から東西に延びる盆地の東方延長である。崖ぶちから東を望むと、盆地ははるか東まで幅を変えずに延びている。地平線が見える辺りに山がポツンと一つ。クリヤ山口だろうか。

砂の谷

車は白い山の南面を川にはほぼ平行に、少しずつ高度を上げていく。砂地は白い石のれきの散乱する山肌が変わる。川はもう200メートル近い眼下。山の傾斜は南に25度傾いている。前を走る老王の車は傾いて後輪が滑っている。私の乗るジュレットティの車も同じだ。ちょっとしたアクシデントで簡単に滑るか転がりそうだ。車の中で力が入る。

再び砂地が変わってきた。川沿いの崖の上を走るのをやめ、北の山側の谷に入る。谷は急な上り勾配が変わる。砂地のくぼんだ谷だ。時計を見るとまだ15時40分。

前を走る老王の車の車輪が突然空回りを始めた。それを見たジュレットティが止まり、再び発進しようとすると同じように空回り。運転手を残して全員降りる。一度バックして前進するが、やはり途中から空回りを始める。バック、前進を何度繰り返しても同じこと。車を押ししてみるようになったが、5500メートルの高地ではしんどい。張さん、浅野、私で老王の車を押す。私はあきらめの気持ちでいっぱいだったが、何度目かの押しで少し前進して空転を始めた。一度動き出すと押す方も力がわいてきて、車は砂地を脱出。ジュレットティの車は、一度思いっきりバックして前進すると、空転することなく、谷を上りきった。

尾根の上に出て、全員がホッとする。しかし、力を使い果たし、しばし声も出せず。16時。あの10メートルばかりに20分も費やしたことになる。西に広がるゴーツァ湖を見ると、もう帰れないかもしれないという気がしてきた。

車を止め、浅野は東へルートを探しに行った。私は北側の谷の方を偵察。谷に入ると砂地になる。この谷は下り気味にやや北から東に方角を変え、その先は丘の陰になり様子は分からない。砂地はこれまでより少し湿り気を帯びている。この谷は先の方まで偵察してからでないと、進むのは危険だと判断した。その時、浅野が東の小さな尾根の高みから大声を出しているのに気がついた。車に戻り、浅野の待つ尾根に走った。

尾根からの景色は雄大だった。南に見えていた東西に延びる窪地が、はるか東まで何の邪魔もなく望むことができる。東の端には地平線。緩やかに窪んだ地平線で、しばらく前までゴーツァ湖のような東西に長く延びた湖があったに違いない。近くを見ると、これから取るべきルートがよく分かる。もっと奥地へ安全に行けそうだ。尾根からルートを少し北東に取り、明るい砂の谷に入った。谷は高度にして200メートルほど下のワジの河原まで続いていた。

車のわだち

降りたところは川の自然堤防の上。16時20分だ。堤防にはまばらながら草が生え、やっと砂地から解放された。川幅は50メートルくらい。しかし、水が流れているのは数メートルであり、浅く、川床も硬い。案ずることなく渡りきり、しばらく草原を走る。南面の景色も雄大になった。すぐ南はゴーツァ湖に流れ込む川、対岸が500メートルほど向こうに見える。さらに南にはジュラ紀の赤い山がそびえる。尾根が鶏のとさかのようだ。

16時25分、再び行く手を阻む南北に流れる

川が現れた。川床に降り、水量の少ない流れを横切る。北側の山は低く、氷河はないし冠雪も少ない。自然堤防に登る緩い斜面が見つからず、進路を川下にとって本流へ出ることにした。

16時30分、合流すると、いま下ってきた川の自然堤防の斜面は確かに緩やかになっていたが、砂地だった。本流に目を移すと、上流は北へ少し回り込んでいる。自然堤防に上がっても、再び本流を渡らねばならない。それなら、ここで一気に本流を渡った方が得だ。車は本流の北側の河原を走り、川が少し北に曲がり始めたところで、水量の少なさを確かめてから東へ渡った。本流は小川の集合体で、一番深くても車輪の中程どまり。

自然堤防に上がると、そこは東西に延びる大規模な窪地の底だった。あの白い山は東に見える。甜水海から続く地溝に到達したのだ。これから先は、乾燥した地溝の底を東にまっすぐ走るだけだ。

16時35分、老王の車がいきなりブレーキをかけた。横滑りして止まる。再びゆっくり走りだし、地面を見ている。私にも見えてきた。車のわだちなのだ。人跡未踏と思われた高原の奥に、だれかが既に来たことがあるのだ。

昨年、名古屋大学水圏科学研究所を中核とする氷河調査隊が、崑崙地域に入って、ゴーツァ湖の東に至り、さらにクリヤ山口に到達してチオン・ムズターグの写真を撮っている。わだちの製作者は水圏科学研究所の人たちだろう。このわだちについて行けば必ずクリヤ山口に至る、とかなりの確信が持てる。わだちを追って前進を始めた。わだちは地溝の底を走るルートをとっていなかった。北に少し回り込む本流に沿って延びていた。クリヤ山口は地溝の東の水平線に見えた山ではなく、本流の源流のようだ。

クリヤ山口へ

川を左手に見ながら走る。川の向こうは灰

白色の山。右手には地溝を隠すような北西に延びる丘が現れた。地面には草がまばらに生え、わだちははっきり見える。突然右手に南西に延びる岩脈が現れた。高さは10メートル近くある。幅15メートルくらいの安山岩の立派な岩脈である。岩脈は南に延びて丘の頂上を越え、見えなくなっている。崑崙に来て初めて見る火山岩だ。帰りがけに探ろう。

わだちがなくなった。少し慌てるものの、よく探すと左手の川の中に入っていた。16時45分、川幅は約30メートル、川床は地表から10メートル下にある。水量は少なく、深いところで20センチくらい。走るのにそれほどの危険は感じない。本流は北側に急激に曲がった。東から支流が流れ込んでいる。よく見ると支流の方にわだちがあった。

合流地点での支流の幅は10メートルくらい。さかのぼると川岸の崖が低くなっていく。17時、2メートルくらいになったころ、川幅は予想に反して少しずつ広がってきた。川は北に曲がり始め、17時10分には水がなくなってしまう。17時15分、左手に白い雪を頂く、南北に連なる大きな山脈が見え始めた。

さらに進むと、川幅がとてつもなく広がった。湖と呼んでもよいくらいだ。老王の車が止まった。小春さんはこの地点をクリヤ山口だという。砂の谷を乗り切ってからは、驚くほど順調だった。

左手前方には、氷河を抱く山々が南北に連なっている。右手やや遠くには3つのピークが見える大きな山塊。小春さんは、山塊の東端に見えるのがチオン・ムズターグだと言った。距離にして20キロもないだろう。いやに簡単に会えたものだ。ただ、地図にあるチオン・ムズターグと位置や方角が合わない。あの山がチオン・ムズターグでないのか、ここがクリヤ山口でないのかどちらかだ。

今日のテント地を探しに北へ向かう。川をさかのぼると、水が現れ、川底から岸に上がる。川沿いに走り、小山を回りきったとき、

正面に氷河の末端が見えた。谷を埋める氷河ではなく、平坦な丘全体を覆う氷冠のような氷河である。幅が広く、丘を下りきったところでいきなり終わっている。

氷河に向かって車は走る。地面はこぶし大の石で覆われ、走りやすい。よく見ると、石は連なって何かの模様をつくっている。幅、長さがそれぞれ2～3メートルの亀の甲のような模様をしている。寒いところでしかできない構造土である。模様はずっと続き、氷河の末端になかなか近づかない。

やっと氷河の末端に触れることができそうなどころまでやってきた。車を降り、末端まで歩いて行く。末端では氷河は垂直の壁になり、高さは20メートルはあろうか。真っ白な氷の壁だ。長いつらの先から水がしたたる。西を向くと、ほぼ東西に並ぶ氷河末端の壁と、ちょうど西にある太陽の光が平行になり、壁とつららがシルエットになって美しい。太陽の光を反射したり透過する様子は宝石のようだ。

老王、張さん、浅野の会談が始まった。浅野によると、予備タンクを考えなければ、ちょうどガソリンは半分になったところだ。最初の目的であるクリヤ山口に着いた。ここで偵察は終える。きょうはここにキャンプを張り、明日は付近を偵察、近くの山に登って、チオン・ムズターグの写真撮影と接近ルート探しをする、と決まったという。氷河末端から流れ出る川の岸にテントを張った。

ここは高度5750メートル。北側は氷河末端、南側は構造土のある広い平地、2キロ四方はゆうにある広場だ。東を見ると小川の向こうに標高差150メートルくらいの小山。西には1キロ先に小さい氷河を抱く山が見える。きょうは浅野と2人で東側の山に登ることにした。

山は火山岩ではなく堆積物、特にスレートでできている。氷河の残したモレーンではなさそうだ。5750メートルのところでは、時間

ばかりかかり、高さが稼げない。ようやく達した頂上から、いま来た方角を望むと、テントと車が広い盆地の中にポツンと見える。構造的につくられた盆地ではなく、氷河が後退してできた広場のようだ。氷河の上流は北に延び、少し先で西側に曲がっている。幅は奥の方がもっと広いように見える。西側の山の西の谷には200分の1くらいのチビッコ氷河ができていた。こちらは谷氷河だ。その南には盆地からの標高差が400メートルくらいの山があり、この辺りでは一番高い。

大きい氷河の末端面は、車のところから東に500メートルほど延び、向きを南北に変えていた。北の端は見えない。氷河の北側には北北東に延びる山脈がずっと連なっていた。氷河末端の東側からも川が2つ流れ出ている。この大きい氷河が水源となって、一方は南に流れゴーツァ湖へ、もう一方は北に向かいタクラマカン砂漠へ流れていくのだ。まさにここは崑崙の中、分水嶺、そして水源地なのだ。大きな鞍部である。

氷河の東の末端、2筋の小川が流れる辺りをよく見ると、わだちが見える。大きな円弧を描いている。さらに先には進んだようには見えない。わだちの見える分水嶺から北に向かって流れる川を見る。細い源流の両側は平らで広い。氷河が運んできた粘土からできているようだ。川はやがて幾筋にも分かれ、扇状地のように広がっている。湿地になっているのは、大地が粘土なので、川の水がどこにも吸い込まれずにあふれるからだろう。名古屋大隊もこれより北には行けなかったに違いない。この道はチオン・ムズターグへの道の有力候補の1つに違いないのだが。

東には大きな山がすぐそこに見える。恐らく7～8キロ先にあるのだろう。雪をかぶっている。独立峰ではなく、東に向かって延びる山脈の西端である。地図で見ると明らかにチオン・ムズターグではない。山脈はここからチオン・ムズターグまで延びているのだら

う。

目を南に向ける。南東に雪をかぶるのっぺりとした、しかしでっかい山が見える。6500～7000メートル程度の標高はあるのだろう。きっと未踏峰に違いない。さらに南には、かなり遠くに東西に連なる山脈が見える。50キロは離れているだろう。浅野はカラコンロンだという。でっかい山脈だ。

ここは崑崙地域の山の中のまん中であり、すべての分水嶺であることが分かった。きょうの偵察はこの小山からの遠景で終わりにする。とにかくクリヤ山口までやってきた。残念ながらチオン・ムズターグはまだ見ることができないが。

夕食後、浅野とクルバジェをなめながら、テントできょうの行程の反省と明日の計画を立てた。浅野が時折、閉口するような巨大な音のおならをする。静寂が支配する崑崙の山の中に響きわたる。人跡未踏の地にいる緊張感と不安感をBooの音が取り除いてくれた。

8月23日

昨晚の夢に陸好が出てきた。陸好が何をしたかははっきりしなかったが、顔だけは鮮明だった。こんなに鮮明な顔が出てくる夢は崑崙にきて初めて。陸好に何か不吉なことが起こったのだろうか。

10時に隣のテントの中国語で目が覚めた。テントから顔を出す。外は曇り、雪がちらちら降る。10時30分ころから急に雪が降り始める。ほとんど水ばかりの重たい雪である。一面真っ白になり、一時は積雪が5センチを超える。やむ気配はない。どんどん積もる雪を見ていると、ベースキャンプに戻れなくなって、崑崙のまん中で遭難するのではないかと次第に不安になってくる。とにかく心細い。

食事を終えるころ雪もこやみとなる。12時を過ぎると、ゆっくり東の方から気圧が回復してきた。雲が薄くなり、雲が高くなって、待望の青空が出てくる。中国人たちは青空の

出現とともに分水嶺の東側へ偵察に出かけた。地面の雪もとけ始めたものの、強い風が吹きだす。無人になった中国人用テントが飛ばされそうになる。浅野と2人で支えるが、テントは倒れてしまった。風の息をききながら、テントを建て直す。中に重石を放り込み、飛んでいかないようにした。

15時10分、強風との戦いに勝利した後、分水嶺の西側の山に登ることにした。名大隊の伏見氏が昨年、写真を撮ったと思われる山である。テントを出て、ゆっくり西の山のふもとまで進む。15分ほどで山にかかる氷河の末端から発する3メートルほどの小川に出合った。西の正面に谷の入り口が見える。それほど広くなく、せいぜい30メートルくらい。その上部には谷氷河がかかっている。氷河は谷の入り口を三角形の頂点として、上に向かって広がった形である。三角形の底辺は数百メートルにもなっている。氷河の左に登りやすい山。きょうの目的の山だ。北斜面はやや傾斜がきつい、すぐに尾根にあがれそう。尾根は250メートルほど上部で鞍部になっていて、そこからもう一段高いところに頂上がある。

氷河の左端に上がるように谷に入り、さかのぼると谷は二股になっていた。左手の氷河がない小さな谷に入り込み、水がなくなったところで左側の斜面に登り始めた。足元は泥岩の地層で、湿ってはいない。しかし、泥岩は少し変成していて、スレートのように薄い地層が一枚一枚はがれる。地層は北側に傾斜し、登るたびに地層がはがれて、ずるずると滑る。登れども高度が稼げない。6000メートルに近くなると一歩体を上げるのがしんどいのに、滑るとしんどさが一層募る。30分ほどかけて尾根の上に出た。

尾根に出ると視界がぐっと開けた。東方の遠くに丸い3つの頂を持つ山塊が見える。さらに向こうに、雲ともつかぬぼんやりした、でっかいものが見える。目を凝らすと山なみ

のようである。あれがチオン・ムズターグだろうか。ひと休みして写真を撮る。

尾根伝いに登る。足元は硬い砂岩の塊で歩きやすい。尾根は明るく、景色もよく、気分は快調。右手の氷河が少しずつ低く見えてくる。後ろを振り返ると、伏見氏が写したと思われる光景が目の前に大きく開けてきた。彼の写真は、3つの頂の山塊の少し北側からさらに北を写している。さらに登ると、右手の谷氷河の向こうに、昨日テントを張ったところから見えていた大氷河の背後が見えだした。大雪原とっていいだろう。景色は伏見氏の写真とは明らかに変わり始めた。私たちの方が高いところを歩いている。30分でコルに着いた。

再び東側を望む。3つの頂を持つ山塊のやや北側に明らかに山と分かるものが現れた。3つの頂よりずっと遠くにある。50キロは離れているのではない。しかも比較できないくらい大きい山塊なのだ。

雲のように見えていたのは山塊の頂を覆う大冠雪であった。大冠雪の左下には雪のない岩肌らしいが見える。山の形はおわんを伏せたようなならかななものではなく、単独峰でもない。たくさんのピークを持つ連峰である。長く稜線の続く連峰の左右両端は、急峻な2つのスカイラインになっている。かなりの急角度でそそり立ち、2つのスカイラインとそれをつなぐ峰々は堂々たる山を形づくっている。3つの頂の山塊の端から端までと同程度の幅があるように見える。ここからの距離を考えると、すごく大きい山脈とってよからう。

あの山は、そう多くない人しか見ていない。急に思いついた途端、すごい感動を覚えた。背筋に小刻みな震えがくる。感動は浅野にもやってきたらしい。彼の顔にも感激が浮かんでいる。

頂上まで登ってさらに写真を撮ろうと、登り始めたときだった。西の方から雷の音と

もに真っ黒い雲が西の山頂を越えて、私たちの頭の上にやってきた。手が届きそうなところに黒い雲がある。雨が降ってきた。東の方ではまだチオン・ムズターグは見えている。ここで雨をやり過ぎれば、すぐにも再び登山が開始できるだろう。しかし、雷の音はどんどん近づいてくる。すごい音だ。私たちをめがけてやってくるようだ。「これはやばい」と、2人して雨の中、尾根の南斜面を駆け下り、身を隠す場所を探した。

標高差にして100メートルほどを、身を伏せつつ駆け下りる。ちょうど2人で身を隠せる窪地を見つけ、飛び込んだ。雨はさらに強くなり、雷の音はますます大きくなる。窪地で小さくなって、雷雲が近づくのを待つ。テントを張った場所は、雷雲の来襲とともに見えなくなる。崑崙に浅野と2人、文明世界と隔絶されている。

雷の音が頭上から少し東に聞こえ始めた。そろそろ通りすぎるのだろうと思ったそのとき、あられが降り始めた。かなり強い勢いで降る。息を潜め、無言で待つ。あられがやむと、西の空が明るくなり始めた。そして突然、チベット特有の深い青さの青空が、西の空に現れた。

写真を撮ろうと、もう一度、尾根に登ることにした。浅野はややばて気味だが、ゆっくりと登り始めた。下りるときの速さに比べて、時間がかかる。あんな短時間によくこんなに下りられたものだ。雷雲から速くに離れようと必死だったが、雷雲が去ってしまうと、もっと上で持ちこたえればよかったと思う。恐怖が去れば、勝手なことを考えるものだ。

尾根まで達し、さらにコルまで登る。東の方角には、いま去ったばかりの雷雲が陣取り、遠くが見えない。しばらく待たばまた見えるだろうと、チオン・ムズターグの方を向いて座る。雲はすごい速さで去っていく。しかし、東に飛んでいくので、チオン・ムズターグが見えるまでかなり待たねばならないだろう。

もう少し待てば見えるようになるのかなと思つたとき、再び西の方からゴロゴロという音が聞こえてくる。しかし、今度は私たちのいるコルよりかなり南の方を通り過ぎた。

3度目の雷の音が西から聞こえてきた。西の山を越えて、頭の上に雷雲がやってきた。雨が降り始める。雷音が頭のすぐ上でとどろく。再び下山を開始した。今度は山を下りることに決めた。先ほどの窪地も通り過ぎ、どんどん下りる。雷が激しくなった。ついに窪地に飛び込んで雷を避ける。もし雷が金属好きなら、私たちしか落雷するところはない。怖いと思ひながら、雷雲が通り過ぎるのをじっと待った。

雷雲は去り、私たちは山を下りた。テントにたどり着いたのは17時。約4時間の偵察だった。浅野はかなり疲れがひどい。ココアを飲むと少し元気を取り戻した。中国人テントに行くと、小春さんが寝袋で寝ている。どうも高山病らしい。他の3人は元気で、氷河の東の方へ偵察に行ったという。東の方に大きな山が見え、それがチオン・ムズターグと思つたとのことだ。私たちが見た山かどうかは帰ってからである。

ジュレットティに、きょうの行動を聞かれた。西の山を指して、あのコルまで登つたというと、彼は「6000メートルには到達しただろうね」。こんな高いところ、人が住んでいるところからこんなに離れたところには、そう何度もこられないだろう。そしてチオン・ムズターグにこんなに接近した人間もそういないだろう。何かを記念に持って帰ろうと決め、テントを出て石を拾った。

8月24日

9時30分、「センヤン（浅野）」と呼ぶ張さんの大きな声で起こされた。昨日の偵察で疲れていたのか、浅野とともにぐっすり寝ていたらしい。きょうの目的は、新しいルートを探りながら、安全にベースキャンプにたどり

着くこと。その間に車で行けるピークに登つて、クリヤ山口周辺の写真を撮る。もしできるなら、もう一度、チオン・ムズターグに会いさつしたい。

食事を終えると、すぐにテントをたたんだ。大氷河末端のテント地ともお別れだ。11時10分に出発。氷河末端の前の広場を南に向かう。ところが、どうもおととい見た風景とは違う。正面に小山が現れ、行く手を阻む。いきなり迷ってしまったらしい。この広場をどのようにして出るのか、急に分からなくなった。

少し氷河の方に戻る。氷河末端から流れ出た水が川をつくっている。川は広場の中ほどから西に向かい、大きく流れを南に変えて、広場の南の山をう回している。川の中を走ってきたことを思いだし、車は水の少ない川の中に入った。川とともに山をう回すると、一昨日見た風景に出合った。山の中のかれた湖である。東には「クリヤ三山」が大きな姿を現した。湖の東に緩やかな丘があり、車で登ることにした。湖底面を南東に横切り、丘に近づくと、斜面には野生のヤギの群れが2頭、3頭、そして10頭と見える。

丘に登ると、クリヤ山口を眼下に、周辺を360度見渡すことができる。まず西はゴーツァ湖の方向だ。ゴーツァ湖の南にある赤いごつごつした山がかすんで見える。少しずつ目を北の方へ移すと、山脈が北に延びている。雪をかぶっていないピークを4つほどすぎると、山なみの奥に大きな氷河が見えてくる。谷筋に流れ出た氷河の中で最も大きなのが、テント地にあった氷河だ。さらに北に目をやると、山脈は北の方に向かって小さくなっていく。その山脈の下の方には丘陵が発達している。丘陵は山脈から離れて西に延び、私たちのいる丘陵との間は広い窪地になっている。これがかれた湖だ。

目を北から東に向けると、起伏のない丘陵が続き、そして雪をかぶらないどっしりした山が現れる。私たちが最初に「クリヤ三山」

と呼んだ最も近くにある山だ。その東には、やや離れて雪をかぶったひとときわ立派な山が見える。これらの連山は東北東に延び、恐らくチオン・ムズターグの山脈の始まりだろう。さらに東には雪をかぶる山は見られない。このクリヤ山口は、北に延びる山脈とチオン・ムズターグに続く山脈の合流点であることが分かった。

丘陵で心ゆくまで景色を楽しんだ後、12時15分、ベースキャンプに向かう。広い湖底面を横切り、ゴーツァ湖に流れ込む川の中に入る。快調に下流に向かって走る。13時ごろ、車は川床から段丘上に出る。しばらく走ると先日見つけた岩脈。年代用に20キロの試料を採る。古地磁気用試料を採りたかったが、そのための時間を割くように隊員に申し込める雰囲気はなかった。13時15分、名古屋大隊のわだちを初めて見つけた地点に着く。未知の地域に入るのには途方もない時間を要するのに、知っているところに引き返すと何と簡単なのだろう。

この地点まで戻ると、全隊員に余裕が出てきた。名古屋大隊がどのようにしてこの地点に到達したのか知りたいと、再び偵察の機運が生まれる。しばし彼らのわだちを追っかけてみようということになった。わだちは南の方に向かっていて、赤いトサカのような頂を持った赤い山がすぐ左手にある。わだちはその山の西側を巻いている。南に向かうと、わだちは赤い山と西側の丘陵との間の谷を流れる小川に続いている。谷は上部では水がなくなり、赤い川床が現れる。赤い山は東西に延びた小さな山塊である。さらに谷をさかのぼると、谷はなくなり、やや赤い色ののっぺりとした緩やかな登り斜面になった。

谷を出たところで、明瞭なわだちがなくなっている。南に行っているようにも見えるし、西側を巻いているようにも見える。13時45分、斜面はますます緩くなり、コル状の平原になった。南に湖が見え、全員、「ゴーツァ湖だ」

と声を上げた。車を降り、地図を見る。南には湖などない。ゴーツァ湖はもっと西だ。実はゴーツァ湖の東南東にあるハンナ湖である。

ハンナ湖まで行ってみようかということになった。しばらく前進したが、すぐにジュレットティが張さんたちに叫ぶ。2台の車は止まり、ジュレットティは大声で何か文句を言い出す。そして、いきなり車をUターンさせ、もときた谷の方に向かった。谷には入らずに、谷の西側の斜面に向かって駆け上がり始める。何がどうなっているのか。分かるのは、ジュレットティがかなり興奮していることだ。もう偵察などしたくなく、とにかく帰りたい一心のようである。車は横転しそうになりながら、丘陵の側面を疾駆する。中の人間はたまったものではない。後ろを見ると、老王の車が追い、ジュレットティの車は追いつかれまいとするかのようだ。

だんだんジュレットティの表情が穏やかになってきた。車は丘陵東斜面の中腹まで登って止まる。ゴーツァ湖に東から流れ込む大きい川が目の下に見える。ジュレットティ、張さん、老王の3者会談で、もう偵察はやめ、2日前のルートを使ってベースキャンプに戻ることにした。

丘陵を下り、ゴーツァ湖へ流れ込む川岸に出る。車を川床に乗り入れる。川床はしっかりした砂地。川幅は広いが、水は30以上の小さな流れに分かれている。1つずつ流れを渡り、北岸を川床に沿って走る。14時20分、北側から川が流れ込んでくる。そこにわだちを見つけた。2日前に私たちが刻んだものだ。後はわだちに沿って走るだけ。これは楽だ。

砂の丘陵の登り口は、下りてくるときに思っていたように、かなり急だ。車は砂の坂の途中で止まった。運転手を残して車を降りる。砂地が少ないところ、わずかな草が生えているところへ車を走らせる。砂の丘陵地に上がり、来るときに難渋した砂の谷を下りた。下

りは楽にいける。青いゴーツァ湖が見える。もうすぐ帰り着く。丘陵地の斜面を車は西にとり、ベースキャンプに向かって走る。

ついにゴーツァ湖に出た。往路はこの地点まで北側の谷を下りてきたが、復路は湖沿いに走る。湖岸は砂地で、水をやや含み硬く、車を高速で走らせるのに最適だ。どんどん東に走る。北側から出てきた2つ目の大きな谷で、車は左折し、谷に入った。谷は幅広く、やや砂地で水を含んでいないため、走りやすい。

広い谷が急に狭くなり、ゴルジュとなる。ゴルジュの中を通過しようとしたが、狭すぎた。車はゴルジュの右手をう回して、谷の奥に進んだ。車は左手に向きを変え、丘を登りきったところで進路を北にとる。しばらくすると、3本の氷河群を望むことのできる展望所にたどり着いた。みんなの顔に安どの表情が現れる。

丘を下りる。枯れ池の底を通過し、1本目の川を越えると、三角山のふもと。遠目に見ると、きれいな三角錐をしている。火山の疑いがある。ここで車に待ってもらって、私と浅野はこの山の頂まで登ることにした。浅野は北側から、私は南側から登る。山のふもとに転がる石は火山岩のようにも見えるが、山は砂岩の層で、走行30度東60度北西落ちであった。私の方からは順層で登りやすく、浅野より速く登頂した。山からの景色の中では、やはり北側の氷河群がいい。写真を撮り、下を見ると、老王の車が出発した。慌てて山を下りた。

ベースキャンプへと急ぐ。2つ目の川は少し水かさが増えていた。老王もジュレットイも水量を気にせず、川に入っていく。渡りきると、後はベースまで走るだけ。16時30分に3日ぶりにベースキャンプに帰り着いた。

三輪ドクターがにこやかに迎えてくれる。この3日間、私たちにはいろんなことが起こった。ドクターのいるベース、登山活動をし

ている山でも同様だった。それぞれの出来事を報告するため、三輪、浅野、私がテントに入っていったとき、クリヤ山口への偵察行は幕を閉じた。

帰路のキャラバンと学術班のホータン旅行

能田 成

8月28日

今朝7時45分に私の夜行軍のトラックは三十里営房に着いた。倒れ込むようにベッドに入ったが、10時30分には起きてしまった。今日も快晴で気温は低い。トラックの整備に時間がかかり、出発は14時30分。あざやかに晴れわたり気分がよい。黒い岩肌と白い雪の対照に迫力を感じる。これが崑崙山の見納めか。秋を思わせる景色である。

今日もすさまじい強行軍である。クデイの茶店で例の焼きうどんを大量に食いアカズ峠へと向かう。今日中にイエチェンまで帰るのだ。アカズ峠にさしかかると、折からほぼ満月が山々を照らし出し、黒い岩峰が無気味にさえている。明るい月に負けず多くの星が輝いている。峠から平野部へと下りてくると、ポプラ並木と河岸段丘がおりなす風景が面白い。下界では薄雲がかかり、月と木星だけがぼんやりとかすんでいる。これもまた砂漠らしくて良い気分だ。現実と幻覚とが昨夜同様再び混然となり始めた頃、夜2時45分イエチェンに着いた。

8月29日

終日何もせずに昼寝と食事のみで1日が暮れた。

8月30日

荷物のパッキングに1日を費やす。日本へ直送するもの、船便で送るもの、その他に仕わけして、ひもかけ、あて名書きに1日が終わる。

現在この町ではコレラが流行している。

そのため、なぜか地区共産党の委員が、私たちにパスポートを提出せよとやって来た。何のことだかさっぱりわからぬが、いずれにせよこのような無理難題をきくわけにはいかない。断然「ノー」というと、今度は病院の風景の写真を撮ったのは違反であるから、フィルムを出せという。それは同宿のヨーロッパ人のやったことで私たちとは何の関係もない。どうやら彼は共産党の権威を示したいようだ。張連絡官とつかみ合わないばかりの口論となったが、どうやらこの見せ物もおさまってしまった。

8月31日

今日から約1週間の予定でホータン(和田)ーユテン(于田)を経て、崑崙山脈北麓の火山岩を中心にした調査と試料の採集の旅に出る。本来はユテンの南方、プル村から更に南に入り、1956年に噴火したという火山に近付きたいのだが、これは日程的に無理なので、やむなくの転戦である。乙藤と急きょ作戦を立て直して、このプル村の北にある火山岩の古地磁気分析によってアルティンターク断層の影響を調べることにした。当然化学分析や年代測定、同位体分析も行う予定である。同行は乙藤の他に生物班の寺島、中国側は科学院の王曉春女史、ドライバーの王氏である。

イエチェンーホータンの旅は、パンクで一時手間どったが概して快適なものであった。地平線を目標に走る旅は、気持ちを伸びやかにしてくれる。どんなに単調でもやがていつかは何かが起こる。そんな感じを抱かせてくれる。無限に続くと思われる砂

丘の単調さを破るのは、崑崙山脈から流れ出る川に沿って展開する緑と、そこに点在する集落である。おそらくこれらの集落の生活形態は、数百年の昔からそれほど大きな変化はないのではないか。ここをはるかな昔から多くの隊商が、兵士たちが列をなして通過したのかと思うと、感無量である。

ホータンの近く、カラカシュ川で寺島は魚とりにトライするも、気の毒なくらいに小さなものばかりであった。悠然と釣り糸をたれる地元の人たちは、まさかこんな小さな雑魚を狙っているのではあるまい。

ホータンのホテルは、なかなか上等の造りで、気分の良い所であった。新疆の地質調査所の人が出て、プル周辺の事情についていくつかの情報を得た。この人はフランスのクルティエヨやMITのP. Molnerらとも面識があるらしい。

夕食は羊のカバブ、野菜いため、スープとナン、ヨーグルト・・・いかにも中央アジアの感じがする食事である。イエチェンの招待所の食事も良かったが、この方がよりローカルな雰囲気があった。ビールは甘粛省のものであった。特段うまくもまずくもない。さりとして淡々として水のごとくでもなく、どうも評価しがたい味であった。

食後散歩に出るも町は暗く、人の集まる場所は映画館である。ひとつ明るい所があったので入ってみると若者が集まるダンス場であった。すべてが北京や上海その他の大都市を中心に展開している現代の中国では、このホータンは明らかに超辺境の地といえよう。この地のダンスホールに集う若者たちは文化大革命以降の中国の現状をどう考えているのだろうか。人民日報的、教科書的、優等生的でない生の声を聞きたいところだ。

学術—地球科学班の目指すもの

さて明日からの試料採集の旅の本番を控えて、私たちの目的を簡単に説明しておこう。

それには、まず崑崙の地の成り立ちをどう私たちは考えているか。そしてなにをすれば、その考えを証明することができ、また新たな問題点がでてきそうか?といったことについて、話そう。

インド亜大陸はかつて2億年も昔、南半球のはるか南方にあった。そして年間数センチの速度で北上し始めたのが、中生代のジュラ紀(約1億8千万年前)のことで、やがて新生代の後半3千万年前にはユーラシア大陸に衝突し、ヒマラヤ山脈を形成した。これは1912年にA・ウエゲナーが発表した大陸移動説のヒマラヤ山脈の成因についての一部分である。

ウエゲナーの大陸移動説は当時の学会に熱い論争をまき起こした。しかし大陸移動の原動力について、十分な説得力のある議論がなされなかったために、1930年ウエゲナーのグリーンランドでの遭難を契機にこの論争は下火になってしまった。

今にして思えば、そもそもその当時の地球科学の最前線に対して、大陸移動の原動力の説明を要求する方が無理な注文というべきだったのだ。ウエゲナーの当時、インド亜大陸がユーラシア大陸に衝突したと考えるべき地質学的状況証拠は、現代でも通用するものだが、今ひとつ迫力にかけるところがあった。その点でいえば1950年代に古地磁気学で理論武装して再登場した大陸移動説は、大いに説得力に富むものがあった。

大陸を動かす原動力についても、第2次大戦中に、イギリスのA・ホームズがとなえたマントル対流説は、その当時は仮説の域をでなかったが、戦後、海洋底の研究が盛んになるにつれて、現実味を帯びてきた。

大陸移動の事実については、古地磁気の研究から動かしがたい強力な支持を得た。大陸を動かす力は、マントル対流説によって説明しようとすると、それは必然的に海洋底拡大説へと発展していく。1960年にアメリカのヘスとディーツによってそれぞれ独立に発表されたこの仮説を理解するには、地球の断面図を考えるのが一番だ。(図1)

海嶺で湧き出した海洋底地殻は年間数センチの速度で遠ざかって行く。やがて、冷えて重くなった海洋底地殻は地球内部へ沈み込む。そこには日本列島や伊豆、マリアナのような島弧ができていく。大西洋中央海嶺は最近の2億年くらいの間、一定の活動を続けている。アメリカ大陸の東岸やアフリカ、ヨーロッパの西岸では、海洋地殻が沈み込んでおらず、その上に大陸が乗ったような状態であるらしい。するとこの状態を過去へ戻してやると、中央海嶺を軸にアメリカとアフリカ、ヨーロッパの距離はどんどん縮まってゆき、ついにはくっついてしまう。そこでこのビデオテープを再生しよう。2億年間の地球表面の動きを再現するのだ。

南北アメリカ、ユーラシア、アフリカなど現在はそれぞれ独立した大陸であるが、かつてはひとつの巨大な大陸・パンゲアであった。そこに何か所か大きな亀裂が生じ、やがてそれらの亀裂は拡大してゆき、それぞれの大陸へと分裂していったのだ。このような運動は何も1回限りのものではなく、地球上に大陸の先祖が現れて以来、何回も繰り返してきたものらしい。

さてパンゲアが分裂し、インド亜大陸はジュラ紀に北上を始め、新生代第三紀末にはついにユーラシア大陸に衝突し、ここに大ヒマラヤ山脈が形成したのだ。ところで衝突の少し前の状況を想像してみよう。おそらくインド亜大陸の先頭部分にあった海洋地殻が、ユーラシア大陸の下に向かって

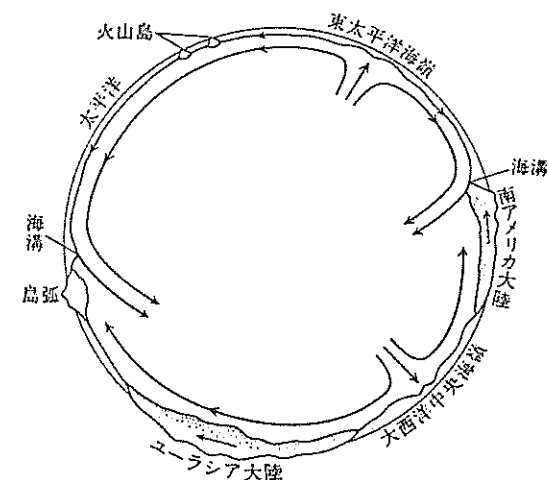


図1 海底拡大説の模式図

沈み込んでいたであろう。このような状態は、現在の日本列島をめぐる状態、あるいは南米のアンデスなどと何ら変わりはないのだ。

ヒマラヤと南米、日本との共通点は、地震がしばしば発生する点にある。地震の発生原因も共通で、沈み込むプレートの運動に求めることができる。相違点の第1は、火山活動だ。現在ヒマラヤ山脈の周辺には火山は存在しない。南米や日本では火山は、沈み込むプレートと大いに関係があることがわかっている。

ヒマラヤには現在活動中の火山は存在しないが、インド亜大陸の衝突直後にはチベットに、多くの火山が活動したことが知られている。また、ヒマラヤ地域の大きな特徴は、平均高度4000メートルの大チベット高原の存在だ。これはユーラシア大陸の下側に沈み込んだインド側のプレートが、ユーラシア大陸の地殻を打ち上げているためと考えられている。

ところで人工衛星から撮ったこの地域の映像をみると、今述べたような大地質構造がよく分かって、大変面白い。チベット高原の北縁は再び山岳地帯となっている。こ

こが崑崙山脈だ。その北側には、海拔高度がマイナスになるタリム盆地が広がる。崑崙山脈とタリム盆地の間にはアルティンターク断層という大断層があり、これはヒマラヤ山脈をめぐるプレート運動を解く上で、重要な鍵をにぎっているとされるものだ。

中国科学院の地質研究所は長年にわたって中国全土の地質を研究してきた。それらの成果を私たちが知ることができるようになったのは、文革終了後、いわゆる改革開放政策以降のことだ。

プレートテクトニクスによって全地球の地質構造を理解しようとする研究がなされた1970年代においては、ヒマラヤ周辺は大いに注目を集めた。その時、最も活用された研究資料は人工衛星のイメージと中国科学院発行の地質図であった。この地質図を子細に検討すると、崑崙山脈には、第四紀火山が点在していることが分かった。

第四紀火山とアルティンターク断層、この2つが今回の私たちの研究テーマである。前者はこの地域の内部の情報を、後者はこの地域の地質体の運動の様子を私たちに発信しているのだ。

再び日誌を続ける。

9月1日

ホータンからユテンに移動するはずだが、いっこうに出発しない。ドライバーの王さんがどこかへ出かけたまま戻ってこないのだ。やむなくホテルの外で人間観察を行う。国家の政治体制がどうであれ、ここはイスラムの人たちの地だ。女性がよく働くのはここでも例外ではなく、自転車でさっそうとオフィスへ出かける一方で、男どもは朝から玉突きに興じ、あるいは私たちが飽かず眺める。日中の人間観察合戦だ。この人たちに日本人流のマナジリを引きつらせた生き方に対するコメントを聞きたいところだ。

ユテンはホータンに比して、更に何も無いところだ。ウドン屋が街の唯一のレストランのようだ。そこの定番のメニューである焼きウドンを食する。ウドンの上にかかっている具の成分は、羊の肉とトマト、なす等の野菜を炒めたものだが、単純な醤油の味でもなく、存外に微妙な味わいである。食後にガソリンの調達に出かけた王さんは約2時間も戻らない。かくして、ユテンを出発したのは19時20分であった。たちまち道はデコボコで左手の川は、グランドキャニオンの如くである。

目的地のプルにはいっこうに着かぬ。疲労もピークに達したので、プルの手前の牧場小屋に一夜の宿を得たのは夜半1時30分であった。情けないことに実に汚い小屋であった。これ以上に汚いものを想像するのはいささか困難である。暗さに紛れて訳がわからぬままに、茶を大量に飲んで寝たが、原料の水の性質について検討するのを忘れた。どうせろくなものではあるまい。

9月2日

徒歩で採集目標の1つであるジュラ紀の地層を観察にかけた。残念ながら古地磁気の試料としては不合格な状態であったので、採集を断念した。ここらあたりの感覚が面倒なところだ。2度と来れないところだから何でも採集したくなるのだが、現地での観察結果の思わしくないものを取ると、それから得たデータの説得力も乏しいものになる。したがって今回の採集岩石は、プルからユテンへ流れる川の左岸に分布している第四紀火山岩だけになってしまった。

明日から試料採集にかかることにして、まずはテント地を決めた。河岸段丘の平坦面のひとつで、火山岩の露頭にも近い。下の川まで10分ほど歩いて水を汲みに行かねばならないのが難点である。対岸には遊牧民がテントや穴ぐらで生活をしているよう

だ。夕方になると羊をつれて大勢が戻ってきた。こういう人たちにも、共産党は何らかの影響力を持っているのだろうか。

9月3日

朝食の後、直ちに岩石の採集を始めた。昨日の偵察によると、この溶岩は2層に分かれている。いまのところその年代差は不明である。川に沿って約10キロ以上に分布している。双眼鏡で観察すると、対岸にも同様な溶岩があるように見える。溶岩の年代は不明だが、第四紀の中ごろとすると、この川の浸食、段丘堆積の速度はかなり速いように思われる。それはまた山地の上昇速度が大きいことを示している。

仕事にかかったときは少々肌寒く感じたが、やがて炎天下での仕事になった。脱水症状を呈し始めた。乙藤と冷えたビールの話をしながら、それでも10か所以上で試料を採取した。夕方テント地に帰りついた時には、足がもつれそうであった。疲労にも負けず、夕食はたっぷり取り、薬用アルコールをボカリスエットで割った変な味のことを2杯以上は飲んで寝た。

9月4日

朝から夕方まで約10時間石を叩きまくった。7時すぎテント地へ戻り、荷作りした後、一路下界を目指す。わずか4日間の岩石試料採集の旅ではあったが、山登りよりきついものがあつた。ユテンの招待所には風呂はなかったが、バケツの水で体を洗い、雑巾の如くに変色したTシャツを新しいものに替えて、ようやく人間らしくなった。

夕食に相変わらず焼きウドンを大量に食う。これ以外に外食はないのだ。ビールがないのは残念だ。食後にハミウリを試みるも、熟成度を判断するのが困難な食物だ。

採集した岩石試料の分析結果については稿を改める。

崑崙山脈北麓、アルティンターク断層に沿って分布する第四紀火山岩の特徴

能田 成、乙藤 洋一郎、王 曉 春

崑崙山脈の北麓、アルティンターク断層に沿って第四紀火山岩が分布している。この存在そのものが特異なものであることは既に述べた。私達が採集した火山岩をここでは便宜上プル火山岩と呼ぶことにする。プル火山岩の化学分析値からどの様な成因が推定できるかについて述べる。

プル火山岩の主要構成鉱物は単斜輝石と斜長石である。蛍光X線分析装置によって測定した主要元素の存在度を第1表に示した。その組成からみて、アルカリ岩系列の安山岩に分類できる。

微量元素濃度

微量元素の組成のほとんどは主要元素と

同様に、蛍光X線分析によって測定したが、稀土類元素については同位体希釈法によって測定したものである。微量元素の存在度を中央海嶺玄武岩 (MORB) の元素濃度で割った (規格化した) ものを第1図に示した。MORBで規格化するのには、この岩石が地球上の火山岩のなかで上部マントルの部分融解によって直接地表へ運ばれたと考えられるからである。言い替えれば、MORBは地球上で最も始源的な岩石ともいえる。

この図で注目すべきはプル火山岩の全ての微量元素濃度が、JG-1 (日本のカコウ閃緑岩)、JA-1 (箱根山の安山岩) (いずれも地質調査所の標準試料) のそれよりも高い

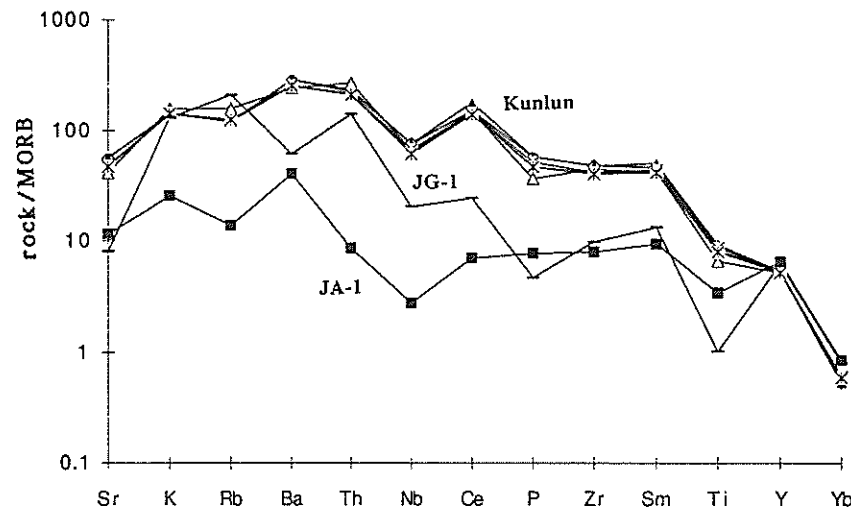


図1. プル火山岩の微量元素存在度。各々の元素濃度を中央海嶺玄武岩の元素濃度との比で示した。参考のために日本の箱根安山岩 (JA-1)、群馬県産白亜紀末カコウ閃緑岩 (JG-1) の存在度を示した。これらは工業技術院・地質調査所が

ことである。JA-1は島弧の安山岩としても微量元素の濃度は低いほうなので、プル火山岩の微量元素濃度が高いのは当然かもしれない。しかしK,Rbを除く全ての微量元素がJG-1よりも著しく高い。

また濃縮度については、島弧や海洋島の安山岩ではSrからNbにかけての濃縮度は高く、ZrからYbではほとんどMORBに等しいのが一般的である。プル火山岩の濃縮度が

全体に緩やかに上向きに凸型を示すことも特徴と考えてもよい。

稀土類元素 (Rare Earth Elements, REE) の存在度は図2に示した。REEはコンドライト隕石で規格化する。JG-1のEu (イウロピウム) がMORBよりも低いのは斜長石の効果である。JA-1がほとんどMORBに等しいパターンを示すことは、この岩石とMORBとの緊密な関係を示唆している。

表1. プル火山岩の主要元素組成

sample No.	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅
KN13(u)	53.67	2.05	15.75	8.33	0.11	4.19	5.92	3.64	4.27	0.97
KN14(u)	53.99	2.03	15.78	8.35	0.11	4.3	6.02	3.57	4.26	0.97
KN15(L)	52.35	2.32	16.17	8.63	0.11	3.97	6.02	3.81	4.33	1.19
KN16(L)	52.65	2.30	16.15	8.59	0.11	4.04	6.04	3.80	4.31	1.19
KN22(L)	52.41	2.34	16.25	8.67	0.11	3.90	6.10	3.86	4.33	1.20
KN25(uu)	57.23	1.67	15.79	7.23	0.10	3.81	4.83	3.64	4.79	0.76
KN26(u)	53.36	2.19	15.99	8.52	0.11	3.94	5.89	3.60	4.34	1.07
KN27a(u)	54.15	2.03	15.90	8.32	0.11	4.21	6.07	3.65	4.31	0.97

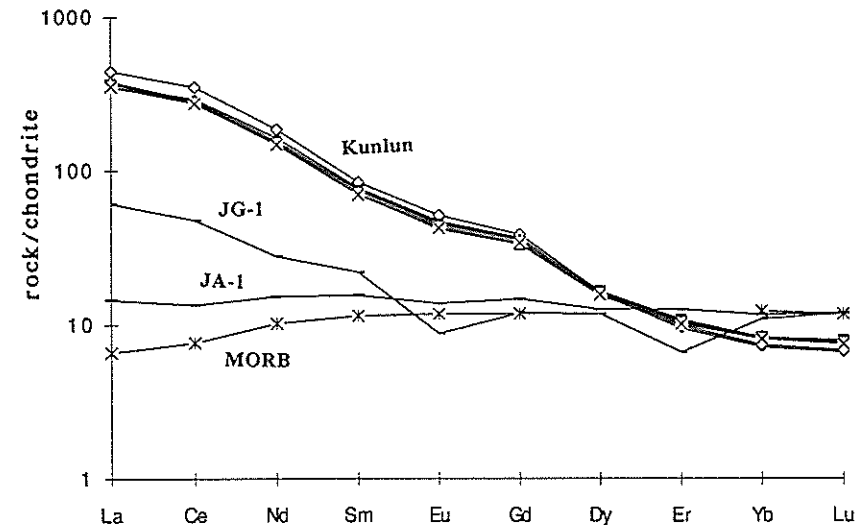


図2. プル火山岩の稀土類元素存在度。試料の各々の元素濃度をコンドライト隕石 Leedyの元素濃度との比で示した。図には中央海嶺玄武岩 (MORB)、JA-1、JG-1の存在度も示した。

プル火山岩では、軽希土類元素 (LaからSmまで) から重希土へと原子番号の順番に従って、濃縮度が規則的に低下している。La,Ceでは濃縮度は著しく高い。Er (エルビウム) 以上の重希土ではMORBよりも濃度が低いことは注目に値する。

Sr, Nd同位体組成

プル火山岩のSr (ストロンチウム) とNd (ネオディミウム) の同位体組成についても測定した。⁸⁷Srは⁸⁷Rbの、また¹⁴³Ndは¹⁴⁷Smの放射壊変生成物である。これらの同位体量は、各々の元素の安定同位体である⁸⁶Srと¹⁴⁴Ndの比で示す。これらの同位体比の意味の基礎的な解説は他にゆずるが、元素濃度がマグマ発生時の部分融解の程度やマグマの分化程度によって大きく変化するのに比べて、同位体比はそれらのマグマ諸過程では変化しない。火成岩のSrやNd同位体比は

その原料物質の地球史的履歴についての情報を与えるといえよう。プル火山岩のSr,Nd同位体比の特徴は、JG-1と同様にBE (Bulk Earth, 全地球) よりも高いRb/Sr比、低いSm/Nd比を、少なくとも数億年間以上保っていたことを示している。このことは上部マントルの分化物であるMORBやJA-1の同位体比とは明確に異なった性質であるといえる。JG-1やプル火山岩のSr,Nd同位体比は典型的な地殻物質の値である。

微量元素とSr,Nd同位体比から推定されるプル火山岩の成因

これまでに述べてきた微量元素の存在度、およびSr,Nd同位体比の特徴から、プル火山岩のマグマはMORBのように、マントル物質の部分溶融液とは考え難い。また島弧火山岩のように、部分融解液に水 (海水や堆積物に含まれる水) が関与して形成したと

は考え難いことも容易に推察できよう。これらの点について希土類元素の存在度パターン (図2) から検討する。

MORBの起源物質である上部マントル物質がすべて溶融したときの組成は元のマントルの組成に等しい。一部分が融解するとき、分配係数にしたがって液相に濃集しやすい元素がマグマに集まってくる。REEではLa,Ceなどの軽い元素ほどその傾向が大きい。ちなみにREEでは原子番号が小さいほど、イオン半径が大きいことが特徴である。MORBのREEパターンはマントルのそれにほとんど等しいと考えられる。この点からみて、箱根火山岩 (JA-1) はいかにマントルのパターンに近いかが理解できる。

マントル物質を僅かに部分融解させると、LaやCeに富む液ができる。しかし部分融解の程度が低いと、液は固相から分離できない。そこで部分融解を繰り返しおこなって軽いREEを濃集させる。具体的にはマントルの部分融解で玄武岩ができる。玄武岩組成をもつ下部地殻を融解させてLaやCeに富んだマグマを作るのである。このような機構でプル火山岩のREE存在度を説明できたとして、その他の微量元素はどうであろう。

JA-1 (箱根火山岩) のREEパターンはMORBに酷似していたが、他の微量元素はほとんどがMORBよりも高い存在度を示している (図1)。一般的な島弧の火山岩ではJA-1よりも更にその傾向は顕著で、特にSrからNb, Ce, P辺りまでの濃縮度が高い。これらの元素はイオン半径が大きく、液相に濃集する傾向にある。またSr, K, Rb, Baなどは水にも溶解しやすい性質がある。ここに島弧火山岩の成因に水の関与が主張される理由がある。

プル火山岩ではYbを除いて全ての微量元素存在度が高い。このことはREEパターンから想定した下部地殻の部分溶融という機構と矛盾しない。しかしSr,Nd同位体比の値

からは、そのような下部地殻の化学組成ができたのは、少なくとも数億年以前であることが要求される。プル火山がマントルのSrやNdの同位体比と大きく異なった値を持つためである。

そのような機構とは異なって、マントルから分化したマグマに、高いSr同位体比、低いNd同位体比をもつ古い地殻物質を混入させて、プル火山のようなREEパターン、微量元素存在度、Sr,Nd同位体比をもつマグマができる場合も検討されるべきである。しかし観測されるSr, Nd同位体比を満足させるために必要な地殻物質量は、安山岩組成を維持することを不可能にさせる。したがってプル火山のマグマは玄武岩組成の下部地殻が溶融したものと考えられる。近年、この地域の火山の成因を、タクラマカン小プレートの崑崙側への沈み込みによるとする興味ある仮説が提案された。

現在、筆者らはプル火山岩の鉛同位体比をも測定している。その結果はこの岩石の成因についてさらに多くの情報をもたらすことが期待される。

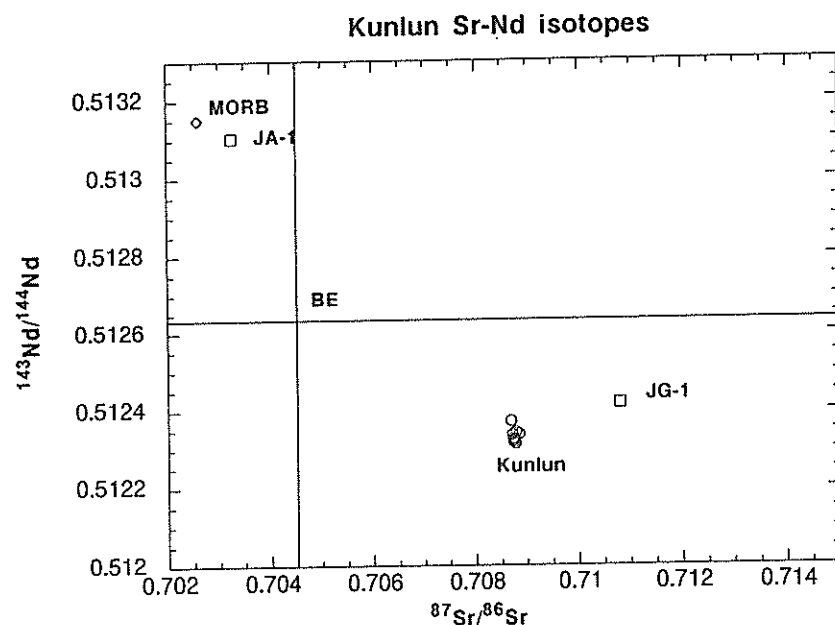


図3. プル火山岩のSr,Nd同位体比。すべての分析値が一点に集中することから、マグマが組成的に等しく、また安定していると考えられる。BE: Bulk Earth, 図の交点は現在の地球全体が持っていると考えられている値。

¹⁴³Nd/¹⁴⁴Nd=0.512638, ⁸⁷Sr/⁸⁶Sr=0.7045

チベット高原北縁のアルチンターグ大断層に沿って 分布する更新世の火山岩の年代学と古地磁気学的研究

乙藤 洋一郎, 板谷 徹丸
王 曉 春, 能田 成

アルチンターグ断層はチベット高原の北縁に位置し、東西に2,000kmの長さに伸びる断層です(図1)。チベット高原とタリム地塊の境界でもあります。第四紀の氷河のモレーンや侵食地形などのずれの様子から、この断層は 30 ± 20 mm/年のはやさで、左横ずれを運動をおこなっていると推定されています。アルチンターグ断層は世界でも規模と運動において有数の大断層なのです。

大断層の周辺では地殻はどのような変形をおこなうのかを探るのが私たちの研究目的です。

私たちは1988年9月1日から9月4日の4日間、プル村(36° 08'N; 81° 26' E)に近くことができました。この村は、大断層の北4kmのところにあります。プル村の北には、更新世の2枚の溶岩が露出しています。溶岩の上下に分布する堆積層が水平で

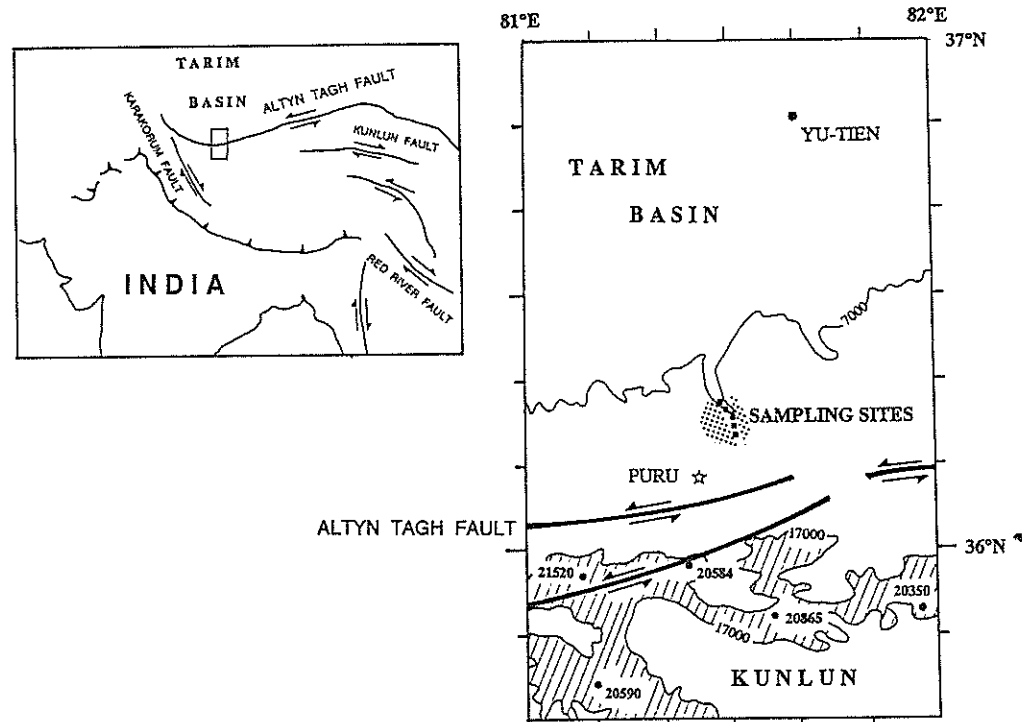


図1. アルチンターグ断層の位置と、試料採取地点(■)。火山岩分布域は点々でしめしています。プル村は☆で示しています。地図中の数字は高度です(フィートで示しています)。矢印は断層のずれの方向です。

あることから、この溶岩は流れて以降傾くような運動を被っていないことがわかりました。そこでこの火山岩を研究対象にしました。

断層に近いところでは地殻の変形は大きいと予想されますし、離れると変形はしないでしょう。火山岩は、断層から13kmから18kmの間で観察できました。断層から13kmの地点から、約500mおきに18kmの地点まで、13地点で古地磁気試料を91個採取しました。年代測定用試料を2枚の溶岩から5個採取しました。

岩石の年代はK-Ar法を用いて求めました。上部溶岩の年代は 1.05 ± 0.11 Maの年代値を、下部溶岩は 1.44 ± 0.06 Maの年代値を示しました(Maは百万年)。

岩石の古地磁気はスピナー磁力計を用いて測定しました。熱消磁装置で岩石の持つ新しい時代の磁化の消磁を行い、古い時代の古地磁気方位を見いだしました。上部の溶岩に注目します。断層から14km以上離れた9地点の火山岩の残留磁化はほとんど同じ残留磁化方位(偏角 $= -166.3^\circ$ 、伏角 $= -50.8^\circ$ 、95%信頼円半径 $= 2.2^\circ$)を示しました。ところが13km地点の火山岩だけは偏角 $= -173.7^\circ$ を示しました。このことは、13km地点だけが、断層から14km以上離れた地域より、 $7.4^\circ \pm 5.2^\circ$ だけ反時計回り回転運動をしていることを強く示しています。

一般に断層にそった地域の反時計回り回転運動は、断層の左横ずれ運動が引き起こした地殻変形に帰因されます。今回の古地磁気学と年代学の研究から、アルチンターグ断層の運動によって、断層から13kmの地点は過去105万年間に $7.4^\circ \pm 5.2^\circ$ の反時計回り回転運動をおこなったと結論しました。

従来の断層運動に伴う剛体物質の変形についての経験則や理論的研究によると、左横ずれの速度が30mm/年で運動する断層か

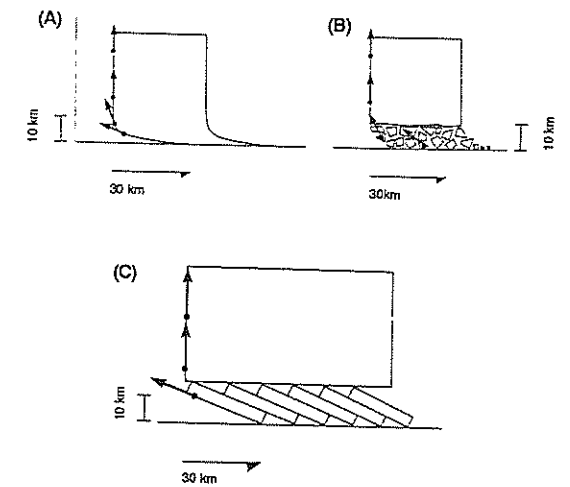


図2. アルチンターグ断層周辺の地殻の変形のモデル。断層が100万年で30kmずれたときの様子です。(A)断層近傍の地殻が非ニュートン流としてふるまった時、(B)断層近傍が破碎しやすい物質としてふるまった時、(C)断層近傍が剛体としてふるまった時のモデル。アルチンターグ断層周辺では自然はモデル(C)を採用せず、(A)や(B)のような非剛体の変形のふるまいを見せたようです。

ら13km離れた地殻は、約 60° の反時計回り回転運動を被ることが予想されています。ところが今回の結果は、大規模変形がアルチンターグ断層の近傍ではおこななかったことを物語ります。アルチンターグ断層の断層運動によってひき起こされた地殻に変形を起こす力は、タリム大陸地塊のなかには入り込まなかったことを示唆します。このことは、アルチンターグ断層のごく近傍の地殻が十分柔らかく力を吸収するような非剛体物質であったか、あるいは断層に働く応力が大きくなくスルスル滑る断層であったかのいずれかで説明できます(図2)。

(この結果は、ヨーロッパの学術雑誌Geophysical Journal Internationalで印刷中で、近日掲載される予定です)

崑崙魚捕り紀行

寺島 彰

チベット高原には多くの湖があり、その数は面積1km²以上のものに限っても約500といわれている。

こうした湖や川には高地という厳しい環境にあるにもかかわらず、様々な生き物が生活している。そこに生息する魚の種類は、温暖な日本と比べれば確かにその多様性に乏しいが、それでも予想以上にたくさんいるという印象を今は持っている。

この魚であるが、その多くは中国名で裂腹魚と呼ばれているコイ科の魚で、いくつかに分けられているグループは、いずれもチベット高原を中心とする地域にだけ生息していて、日本には分布していない。また裂腹魚と共に生活している魚として、日本でもおなじみのドジョウがいるが、日本に分布するグループとは別のものが多い。

私は、これまでこの裂腹魚の進化に興味を持ち、ヒマラヤ山脈南面のネパールやインド、パキスタンの渓流域で野外調査を行ってきた。しかし、中国それもチベットのものに関しては、中国各地の研究所に保管されている標本を検査したり、遠征隊に採集を依頼して手に入れた標本を検査しただけで、その裂腹魚が最も多様に種分化し進化を遂げているチベットには一度も足を踏み入れたことがなかった。

こうしたことから、チベット高原には機会があれば是非とも訪れてみたいと願っていた折り、幸運にもこの崑崙遠征に参加することができたのである。

崑崙遠征では、行き帰りのルート途上にある河川で魚捕りを楽しむことができたが、崑崙核心部での採集は残念ながら出来な

かった。更に不運なことには、標本が北京で足止めを食らってしまい、中国側窓口であったT氏に標本の半分を送付してもらうよう何度も依頼したが、全くなしのつぶてで対処のしようがなかった。

しかし1993年、ガンジス川の分流でヒマラヤ北面沿いを流れるヤルンツァンポ流域の調査の際、中国科学院動物研究所に立ち寄り標本検査を行った後、同研究所の研究員張春光の配慮と尽力により、ようやく、崑崙の標本も日本に持ち帰ることができた。

このような経緯から、崑崙の遠征で採集した魚に関する詳細な検討記載はまだ終わっていないため、ここでは当時の日記を元に、遠征で立ち寄った湖と川のあらましを2部構成にまとめてみた。

[1] 湖にて

遠征における主な調査地点としては、青藏高原にあってキャラバン途上で出会う2つの湖、アクサイチン湖とゴーツァ湖を選んだ。それは、チベット高原に点在する多くの湖沼と同様、これらの湖からも生物学関連の調査報告がなかったからである。その一方で、アクサイチン湖からは興味深い情報も得られていた。それは、AACK会員の幸島司郎さんが、1987年に実施された西崑崙氷河調査隊に参加した際、アクサイチン湖でカモメのダイビングを観察し、また湖畔からコイ科特有の、それも裂腹魚亜科のものに酷似した咽頭歯（コイ科の歯は、口腔にはなく、喉にある）を採集していたのである。

これらのことから、アクサイチン湖に

はチベットの他の湖から報告例のあるような、固有の裂腹魚が生息している可能性が高く、日本出発時より、崑崙遠征で行う調査の最も重要な採集ポイントとしてアクサイチン湖を位置付けていた。

さて、崑崙遠征で初めて湖に出会ったのは、7月23日18時30分、車の右手前方の淡いブラウン系統の色彩が支配する大地に、一筋の筆で色付けしたような濃紺のアクサイチン湖を見た時だった。だがこの時は、湖を初めて見たという感激に浸る間もなく、四駆はひたすらBCへの道程を稼ぐために走り続け、ほんの一時の邂逅に終わってしまった。

しかしその翌日には、ゴーツァ湖のすぐ近くにキャンプを設営したため、初めて湖水に触れることが出来た。

それまでの私にとって、チベットの湖とは論文に載っているモノクロ写真であったり、そこを訪れた人からの一片のカラー写真だけだった。そんな写真を眺めながら、一体どんな風が吹いているのだろう、どんな波音がしているのだろう、とイメージを膨らませてきた。それが今、キャンプ地から湖畔へと続く緩やかな斜面を、サクサクと小石をゆっくり踏み締めながら下り、その波打ち際に立つと、ディープマリブルーに染まった沖合から足元へと、波が打ち寄せてくる。憧れの湖。湖岸沿いに散歩をするうちに、何とも嬉しい気持ちで一杯になった。

水を一掬い口に含む。が、塩湖のため、多少苦い。波打ち際の水の中を良く見ると、ヨコエビがたくさん泳いでいる。何かやりたいところだが、荷物を積んだトラックの到着が遅れ、ゴムボートは行程日程の関係で降ろせない。それはともかく、万一に備えて取り出しやすいようにと、トラックの荷台最後尾に積み込んでおいた調査用具一式を収めた箱がない。調べると、その前日

中国側が大紅柳灘でトラックを3台から2台にした際の積み替えで、その箱は荷台の奥深くに入ってしまった、結局取り出すことが出来なかった。

ところで翌日からの3日間は、BCへのルート偵察を行うためにゴーツァ湖畔からほど遠くないTBCに滞在していた。しかし、湖のすぐ近くにいながら何も出来ないどころか、5000mを越えてから急に出てきた高山病のため顔がむくんでしまい、全くどうしようもないという感じ。ただラシックスの服用で顔のむくみはとれたものの、なんとなく腫れぼったい倦怠感で、ひたすら寝ていた。

もっとも、時折TBC付近に出没するチベットノロバやチベットガゼルの群れに、匍匐前進で近付いて写真を撮ったりもしたが、敵もさるもの、なかなか近付かせてくれない。しかし何よりも素晴らしかったのは、夕方。地平線ぎりぎりにまで落ちる太陽からの水平光線が、TBCを囲む平原と山々を夕焼けで染め上げ、その色彩と黒々と延びる影のコントラストが織り成す光景は、立ち尽くしてしまうほど美しかった。

こうして、ゴーツァ湖との1回目の遭遇は、湖畔を歩いただけで終わってしまったが、2度目のチャンスは荷揚げを終えてBCに戻った8月19日から21日にかけてのことだった。

8月19日はGPSによる位置測定が終わるのを待って、BCよりゴーツァ湖に接する小さな湖へ、ルート選定に手間取りながら移動。ここはBCに向かう時に丘の上から魚の群れによると思われる動きを双眼鏡を通して見ていたので、こことゴーツァ湖をセットにして調査しようと考えたのである。そこで、初日はここで調査し、翌日はBCから来る四駆でゴーツァ湖に移動する合計3泊4日の調査を計画していた。

ところがテント設営後、隊長、張連絡官、

寺島、浅野で打ち合わせを行った際、BCから湖畔まで時間がかかりすぎるとの理由から、翌日BCから来るはずの四駆の便がなくなり、また3泊の調査が2泊になった。

寺島・浅野以外のメンバーがBCに引き返した後、ゴムボートを膨らませたりブイの組み立て等々の細々とした準備を済ませ、まずは投網を試みた。が、何も捕れず。しかし、この場所のように岸辺から浅瀬が続くような湖沼では、半ば織り込み済みの結果でもあり、あまり気にしないようにして、ボートを出した。

ところがこの水深はえらく浅い。深いところでも、せいぜい1.5mしかないうえ、透明度は40cm。しかし、1985年のタングラ遠征隊が裂腹魚を採集したのも水深約1.5~2mで透明度30cmという浅い湖であったから、まあ良いだろう。とにかく設置するしかない。ということで、いよいよ三枚網を設置し始めたが、風が強く、2人でボートを操りながらの網入れはなかなか思うようにならない。しかし、何とか薄暗くなる前までに設置完了。

この三枚網は網丈1.5m長さ30mという刺網の一種で、大きな網目の網地二枚で、小さな網目の網地をサンドイッチにした構造になっている。これを夕方から一晩設置しておく、そこに網があるとは知らずに突っ込んで来た魚のうち、両側の網目を通り抜けられる大きさから、中網の網目を抜けられない大きさの魚までが、あるものは首を引っ掛け、あるものは自ら作った袋の中に閉じ込められて捕獲できるという、効率のよい漁具である。

さて、翌朝。期待に胸ふくらませて網揚げに出た。まずボートをブイに寄せ、ブイから網を手繰り始めるが、手繰れども手繰れども手元にくるのは網地だけで、何も掛かっていない。丘の上から見たのは一体何だったのかと、だまされたような感じすら

受けたが仕方がない。湖盆形態や網の設置状況なども考え合わせると、やはり、ここではゴーツァ湖に移動したいところだが、もとより車は来ない。結局、三枚網を再度設置し、明朝の結果待ちということにする。

残りの時間は、生産力測定用のボトル吊り下げ、そして採水やプランクトン採集を行った。このプランクトン密度は極めて高く、ボートからプランクトンネットを降ろすまでもなく、水を一掬い採りさえすれば、そこには10匹ほどの巨大な褐色のミジンコがピピッと泳ぎ回っているという有り様。また、波打ち際の小さな溜まりが赤いので近付いて見ると、それは真っ赤なプランクトンの群れだったりする。そしてまた、岸辺にはユスリカの蛹の抜け殻が無数に打ち寄せられている。

つまり、これほどまでいろいろな動物プランクトンが大量に発生しているということは、魚にとっての餌が無尽蔵にあると言っても良い状態だ。しかしながら、投網による再度の魚捕りも前日同様成果がなく、一番網目の細かい投網でも、何も捕れてこない。また、ここに魚が生息しているのなら、夏のこの季節、稚仔魚や幼魚の群れが岸辺にいても良さそうだが、注意深く水中を見ても、それらしきものも見えない。

翌8月21日、早朝から最後の網揚げに出発。ボートが網に近付いて行くと、何やら浮子ラインがところどころ盛り上がっているのが見えた。あれは一体何だ。大形の魚が網地に絡め取られて浮き上がっているのだろうか？ 胸の鼓動を静めながら、まずブイをボートに取り込み、ラインを手繰りながらゆっくり近付いていくと、えらく黒々とした色のものが掛かっている。魚なら、いくらなんでも腹は白い。良く見ると、何ということはない。この大きな魚ではないかと思ったのは、何と水鳥。結局5羽のカモが収穫のすべてだった。

ともかく網を揚げ、午前の生産力測定ボトルを吊り下げ、キャンプサイトに戻ってカモをはずし網の整理、そして前日固定した水の処理作業などに追われる。早くしなければ迎えの車が来てしまうと気ばかり焦るが、そうこうするうちに、とうとう迎えの車がやってきてしまった。皆に手伝ってもらってあたふたと撤収し、1時間でBC着。

あつという間の2泊3日で結局ゴーツァ湖にも行けず、魚も捕れずじまいということではあったが、この標高で、これほど“いのち”に満ち溢れた環境に出会えるとは、予想もしていなかった。

つまり、標高約5000mという高所にある水域ということからは、どちらかと言えば貧栄養的な水域生態系を思い浮かべるし、実際ティリツォ湖を始めとするネパールの高山湖沼の調査でも、そのような結果を得ていた。ところが、崑崙山のこの地では、魚こそ生息していないものの、栄養塩類に富む水域には多くの微少なプランクトンから、大形で色彩もきれいなアカツクシガモを始めとする実に多くの水鳥に至るまで、共に生活していた。そして岸辺の泥地の表面には、水を飲みにも来たのだろうか、これまた無数のカモシカ類の足跡もついていたのである。

青蔵高原の一隅にある小さな一つの水域を巡って、多様な生き物の共存する生態系が成り立っている。また、これまでチベット高原にある水域から断片的に得てきた情報を考え合わせても、このことが最も印象的で確信できたことだった。

ところで魚網で捕れたカモはといえば、翌朝たっぶりの湯を沸かして羽根や内臓の処理をした後、テントの間に張ったロープにぶら下げて風乾。そして浅野に丸ごと薫製にしてくれるよう依頼した後、登攀隊員を迎えるためC1に向かった。それにして

も、魚がたくさん捕れた時にとりあえず用意した薫製器がこのような形で役に立つとは・・・。

そして8月25日、登頂を終えた隊員と共にBCに下る。2週間前のBC設営時には周囲にたくさん咲き乱れていた高山植物の花も、今や殆ど見掛けない。もう夏が終わろうとしている。BC付近にたくさんいるナキウサギも、冬ごもりの準備に忙しくなりそうだ。

さて、その夜の登頂祝賀パーティーでは、“北京ダック”ならぬ“崑崙ダック”となった例のカモがメインディッシュになり、ビールで乾杯。他のメニューは中国人コックの作ったスクランブルエッグとジャガイモ薄切りいため、カモシカとジャガイモのスープ、そして軍用ブタ角煮缶詰というささやかなものではあったが、楽しいパーティーだった。

しかし、明日からの撤収と調査に向けた準備をしなければならず、そこそこにヘッドランプを付け資材置き場に向かう。日程的にゆとりがないということなので、アクサイチン湖1泊での調査は三枚網設置による魚採集だけに絞り込み、荷造りを行う。

結局使わずじまいの蒸留水や滴定液などは捨てるを得なかったが、荷物をコンパクトにするためには仕方がない。随分いろいろなものを持ってきたものだといながら感心しながら、それでもアラレの降りしきる中、1時頃までには何とか大方の移動と再梱包のめどを付け、寝る。

翌日は、朝から目の回るような忙しさの中で撤収作業を終え、せきたてられるようにしてBCを出発(13時)。そしてゴルジュまで約2時間、勝利大坂には16時20分、18時40分にはTBC通過、そして美しい夕焼けの中、一気に渡河地点を越え(20時15分)、車のヘッドライトを点灯した中でキャンプ設営という、とんでもない行程の一日。も

つとも、ゴルジュを通過している時にはオオカミを間近に見るといふ、ラッキーな一幕もあった。

さて、8月11日にBCを設営して以来何とも慌ただしい日々ではあったが、当初のBC撤収予定日(26日)よりも1日早く出発でき、さらに28日に幕営予定だったTBC地点をも通過して一気に渡河地点まで来たということは、終盤の日取りに余裕が出来たことにもなるはずだった。

夕食も終わって一段落した時、テントの外で隊長、張連絡官、寺島、浅野で今後の日程・行程について打ち合わせ。ここで隊長から、地質班の調査と湖での調査はスケジュール的に両立しない、と伝えられた。いろいろ検討したものの、結局アクサイチンでの魚採集は諦めざるを得ないことになった。

今回の遠征で最も期待していたのは、アクサイチン湖での採集だった。その波が打ち寄せる湖畔を、白井の移送時も含めると2往復したことになるのだが、湖畔で一泊のキャンプを張ることも出来ずに終わってしまった。遠征の中では、複雑な諸事情が錯綜し、時にはこうしたことも生じ得る、ということなのだろう。極めて残念ながら、致し方ない。

渡河地点での夜は、これほどにまで澄み切るのかと思わせるクリスタルな冷たい大気が、凄まじいような満月の光で溢れ、崑崙のスカイラインがくっきりと照らし出されて浮かび上がっている。三十里営房へと下る前夜に、こんなに美しくも身震いするような光景に出会えるとは……。

[2] 川にて

1. イエチェンからBCへ

今回の遠征で初めて魚を手にしたのは、標高2880mのクディに高度順化のために滞在した時だった。その高度順化トレーニン

グの日の朝、兵舎の横を流れる溪流に向かった。

そこは典型的な溪流型河川であったにもかかわらず水は茶色く濁っていたため、正直言って魚にはあまり期待していなかった。ところが投網を何度か打ち込んだ時、網地の内側に一瞬、白くうねるものが見えた!!

この白さは“いぶし銀色”とでも表現できる色で、私は裂腹魚特有の色だと思っているのだが、さて、慎重に網を引き寄せると、まぎれもなく裂腹魚。それも裂腹魚亜科に含まれるグループの一つ、中国名で重唇魚属(*Diptychus*)と呼ばれるグループの魚だった。

この重唇魚にお目にかかるのは、かつてインドのラダック地方を流れるインダス川支流で採集して以来のこと。水系の異なる所での比較資料にもなり、遠征における第1回目の漁獲としては、幸先がいい。ここでは、結局朝夕合わせて約30個体を採集できた。

さて、翌18日にクディからセラク峠を抜けてマザに出ると、そこには、まるでチョコレートと思わせるようなドロリとした感じの水を湛えるヤルカンド川が流れていた。夕飯を終えてから魚捕りに出掛けたものの、川にはポイントが少ないうえ右岸からの打ち込みになり(右利きの場合、右岸に立ち、下流から上流に向けて打つのは難しい)、さらに小枝が多く沈んでいて、成果はドジョウの仲間が1匹だけという、いい加減消耗する結果になった。ヤルカンド川では、その翌日も別の場所で魚捕りを試みたが、結局成果はなし。

ところで、チベットのように乾燥した地域を流れるような河川は、小さな支流を除くと、その水は濁っている場合が多く、そのような河川での魚捕りに釣りはあまり役立たない。つまり、魚影がよほど濃いとこ

ろでもない限り、魚の視覚を当てにした釣りは餌釣りであろうとルアー釣りであろうと有効ではない。

そして、実際にそのような所に生息している魚は、水中の岩などの表面に付着している藻類を餌にしているものが多く、餌では釣りにくい。一方、水生昆虫を餌としている魚は、どちらかといえばドジョウの仲間や胸に吸盤を持つ特殊なナマズの仲間のような底生生活を送るものが多い。したがって、足音を忍ばせ水面に影さえ落とさないように注意すれば、この程度の水深の川における浮き魚対象の漁法として投網は有効な手段であり、崑崙の河川での採集は結果的にすべて投網による採集になった。

さて、マザから1日行程で移動した三十里営房での魚捕りは次項にまとめるとして、その上流側にある大紅柳灘までの様子について見ると、三十里営房より上流約40km地点では、ドジョウの仲間が数匹のみ。峠(4120m)を越え、再び出合ったカラカシュ川の2か所では、全く何も捕れなかった。一体、何が原因なのか。河相は良く、ポイントも明瞭で見逃していない。特に支流では、ここで入らなければおかしい、と思えるポイントにピタリと打ち込んだでも、何も捕れない。下流側の三十里営房付近ではいろいろな魚が捕れたことを考えると、同じ川とは思えないほどの信じられない結果だった。

ところが、三十里営房から1日行程で移動した大紅柳灘沿いの川幅の広いカラカシュ川では、裂腹魚亜科に含まれるグループの一つで、中国名で裸裂尻魚(*Schizopygopsis*)属と呼ばれるグループの魚が、その淀みや浅い早瀬から面白いようにたくさん捕れ、さらに一番小さな網目の投網を使うと、ドジョウの仲間も効率良く捕れてきた。

一方、大紅柳灘よりも上流側のカラカシュ川での魚捕りは、登頂を終えての帰路、

奇台大坂を下ってからの道すがら何度か試みたのだが、これまたどうしたことか、再びいずれも全く成果なし。初めこそ、同じ車に乗っていたメンバーが見物に出て来たが、あまりに何も捕れないのでいい加減飽きてしまったか、最後は1人で降りては投網打ち。しかし、打てども打てども、何も捕れずでは、こちらも消耗してくる。

このように、カラカシュ川でのサンプリングを繰り返すうちに分かってきたことは、その採集結果に大きなムラがあること。それはたくさん捕れたとか少ししか捕れなかったとかいう話ではなく、殆ど“捕れる”か“捕れない”に近い差が出てくる。

何故、このような、あたかも魚の不連続分布を思わせるような結果が出てくるのか。魚の自由な移動を妨げるような、地形的な障害があるとも思えないような範囲でさえ、この結果である。

もちろん、このようなテーマを検討するには、まだまだデータが足りないのは分かっている。しかし、ただ一つ気になるのは、行き掛けに魚捕りをした場所の流れ筋が、約1か月後の帰り掛けには驚くほど大きく変化していたという河川形態の変動の激しさである。

これは、濁流となって細かな土砂が移動するため、その浸食と堆積作用が大きく、したがって川の様相の変化していくスピードが予想以上に大きいことを示しているのだと思う。そして、そのような環境変化の大きさが、魚の集まり易い場所を刻々と変化させ、そのことがあたかも魚の分布の不連続性を思わせるような、奇妙な分布様式を作ることに大きな影響を及ぼしているのかもしれない。

2. 三十里営房での魚捕り

三十里営房(3540m)には往復だけでなく、白井の移送中は留守隊が滞在すること

にもなり、すっかりなじみの深い場所になった。そして三十里営房滞在中は、毛利のにも詳しくあるように留守隊総出の川干しなど、いろいろ楽しむことができた。

その結果、三十里営房近辺からはドジョウの仲間以外に3つのグループに属する裂腹魚が捕れた。すなわち、裂腹魚属 (*Schizothorax*)、重唇魚属 (*Diptychus*)、そして裸裂尻魚属 (*Schizopygopsis*) の魚達である。これら3つのグループは、裂腹魚亜科における様々な形質の比較検討から、他のグループとの間における系統分類学的な位置関係、つまりはグループ間における進化の過程が考察されている。

それによると、これらのグループは裂腹魚属→重唇魚属→裸裂尻魚属という順序で進化してきたと考えられている。そして、裂腹魚亜科に見られるこのような属レベルの進化は、チベット高原が隆起するにしたがい、その高地環境に適応しながら生じてきたのだと考えられている。

つまり、高地に行くほど進化したグループが生息している、ということになる。実際、ヒマラヤの南斜面に当たるネパールの溪流では裂腹魚属だけが分布し、インダス水系でもスリナガルからラダック地方のヘミスまで、またヤルンツァンポ水系でもラサ近郊から源流域までの採集結果でも、裂腹魚属の魚は裂腹魚亜科の中でも最も下流側に分布し、より進化したグループは上流側に分布していた。そしてチベット高原のほぼ中央に位置するタングラ山脈近郊からは、裂腹魚亜科のなかで最も進化していると考えられている赫氏魚属 (*Herzensteinia*) の魚が、タングラ遠征隊によって採集されていた。

そして、今回の崑崙遠征ではクディからは重唇魚属だけが、また三十里営房宿舎付近では重唇魚属と裸裂尻魚属が混生するものの前者が多く、それよりも上流約9km地

点ではこの結果が逆転して殆どが裸裂尻魚属になり、さらに上流の大紅柳灘ではすべて裸裂尻魚属であった。これは、裂腹魚亜科の中では、進化した属のものほど高地に分布している、というセオリー通りの分布パターンの変化といえる。

ところが、三十里営房から上流約10kmの地点で採集をおこなった時、多くの裸裂尻魚属の魚に混ざって、3個体の、それも結構大形の裂腹魚属の魚が捕れてきたのである。

裂腹魚属しかないネパールの源流域とは違い、やはり高地環境に対応した属レベルの分布パターンが見られてきた、さすがにチベットだ、と満足気に思っていた所へもってきて、いきなり裂腹魚属である。

これは、チベット地域とその周辺地域において、これまで知られている裂腹魚亜科の属分布様式に関する生物地理学的な観点からしても、ここに裂腹魚属が分布していることは、奇妙で不思議な現象といえる。裂腹魚亜科に含まれるグループ間の進化と分布を考えていく上で、この3個体の裂腹魚は貴重な標本になった。

さて、裂腹魚の「味」はどうか、というと、キャラバンが始まってから三十里営房に一度もどるまで、それを口にしたのは中島総隊長だけだった。つまりクディから引き返す中島総隊長に1匹の *Diptychus* を塩焼きにして謹呈した例外を除いて、捕れた魚はすべて標本用のフォルマリン浸けになっていたのである。

しかしそれ以来、魚がまとまって捕れるたびに、「さあ今度は、食べられるのか・・・?!」という隊員からの有言無言の眼差しがあり、それがだんだんシビア(?)になってきていた。私にしても、もちろん魚がたくさん捕れたら食べようと、その時のために小形の蒸製器と数種類のチップさえも用意してきていた。ところが、なか

なかそんなに多く捕れなかったので、仕方なくフォルマリンに入れてきたのである。

ところが三十里営房にきて標本が集まるにつれて、ようやくゆとりも生まれ、また毎日続く中華風軍隊食に変化が欲しくなってきたこと、また白井を送っていったメンバーが戻るのをひたすら待ち続ける生活に変化も欲しい、というような諸事情が重なり、ついに、ある日、3匹の *Diptychus* を塩焼きにして食べることにした。

味は、泥臭さや癖もなく旨い。しかし肉質は柔らかいので、これはもっと時間をかけて、おき火でとろとろと焼き上げれば、より旨いのではないか。ということで、別の日には、15匹の *Schizopygopsis* を食用に回すことにした。三十里営房での生活は暇なので、塩焼きは、約40分かけじっくりと遠火で焼き上げ、また台所から油を借りて唐揚げも作った。夜、これらの魚を“あて”にしてビールで乾杯。味のほうは、塩焼きは苦勞した甲斐があり実に旨い。しかし唐揚げについては、遠征にはサラダ油も持参したほうが良いのではないかと、いう結論になった。

ところで、これら食用に回した魚はただ全部食べてしまうのではなく、一匹ずつ体長を記録し、取り出した内臓はフォルマリンで固定してから調理したことを、念のため付け加えておきます。

3. プルにて

イエチェンープル間は、日をおって記録する。

8月31日

イエチェンで本隊と別れ、地質班(能田、乙藤、王)と共にホータン(和田)に向け出発。町はずれから始まるタクラマカン砂漠の中、一直線に延びる舗装道路を四輪駆動車で飛ばす。ウルムチからイエチェン間

の砂漠は、どちらかというとも岩がゴツゴツした、いわゆるゴビのイメージであったが、このプルに至るルートの砂漠は巨大な砂丘が立ち並ぶという訳ではないものの、いわゆる砂漠らしい砂漠で広大だ。砂漠の真ん中での休憩時に、タクラマカンの記念にと、砂時計にも使えそうな微細な砂を一掬いビニール袋に詰めた。

そして、炎天下の空気をかき分けるようにして疾走する中、ところどころで会うオアシスは視覚的に本当にみずみずしいと感じるだけでなく、緑の香りのする空気が何とも気持ち良い。

夕方通過したカラカシュ川にて、1時間15分のサンプリング。ドジョウの仲間を含めて5種類採集したが、裂腹魚は捕れず。再びホータンへ向け出発し、約30分後、樹木が生い茂り、花壇の美しい和田賓館に到着。

9月1日

オアシスを抜けた砂漠の中で、何を踏んだか車がパンク。炎天下でスイカを食べながら約2時間、パンク修理が終わるのを待つ。ようやく修理を終え、たどりついた于田にて食べたウイグル風焼きうどんと肉パイはなかなかの味で、これまでのキャラバン中に立ち寄ってきた食堂の中でも最高に旨いのではないかと思えた。

ここでのガソリン補給にはやたら時間を取られたが、その間、交差点に座り込んで道行く人達を眺めることにした。街にはポプラ並木がうっそうと茂り、何と涼しいことか。そして日の光が立ち並ぶポプラの幹を照らし出す明るさは、美しい縞模様となり、実に爽やかだ。そんなポプラ並木の間の道を、カラフルな衣装をまとった美しい女性が身を翻し、自転車やロバ車が行き交う。

交差点角の路上で買ったヒマワリの種を

手に、約2時間後出発。やがて道はクリヤ川沿いを走るようになるが、日暮れ近くになって見る川は深いゴルジュを形成し、両岸は絶壁。川に降りる道を見付けるのはなかなか難しそうだ。真っ暗になった中、ようやくプル近くの種畜牧場の長屋風宿舎に到着。簡単な夕食を済ませ早々に寝る。

9月2日

岩石サンプリングに出る地質班と共に、プルの村に入った。ここは貧弱なポプラ並木の一本道が村のメインロードの小さな村で、何となくほこりっぽい感じのする村だ。そして、どの家も土塀の平屋根一階建て。土塀に囲われた広場には数頭のラクダが座り込み、口をもぐもぐさせながら冥想している。村の小さな店で買ったブドウは、小粒だが甘くおいしい。

村はずれからクリヤ川に降りると、人通りのまばらな村と思っていたのに、どこからともなく大人や子供達が物珍し気に集まってきた。魚の情報を入れようと尋ねてみるが、大人も子供も全員「魚はいない!!」とえらく自信たっぷりに答える。

クリヤ川の水はやや白濁してはいるものの、河相もいい、裂腹魚が生息するには持ってこいの溪流だ。本当に魚はいないのか？ 張連絡官は、プルで魚捕りをしてはどうか、とアドバイスしてくれたのだから、何もいないということはなかろう。第一、これまでイエチェンからの道すがら通過したカラカシュ川にも、魚はいた。ということで早速投網を取り出して“試し打ち”をすることにした。布袋から投網をザラリと取り出すと、何事が始まるのかと見守っていた人達がざわめく。

とりあえずは、絶好のポイントだけに的を絞って慎重に打ち込む。完璧に決まった。川底の状態も良く、ゆっくりと引き揚げる。だが、網地を震わせるような手ごたえはな

く、何一つ捕れない。場所を上流側へと移動させながら幾つかのポイントに打ち込んだが、やはり何一つ捕れない。

確かに波打ち際や水中の岩の表面などを注意深く観察しても、その付着藻類の表面には藻類食性魚類による“食み跡”は一筋もない。しかし、水中の石を取り上げてじっくり返すと、多くの水生昆虫がいる。藻類食性はともかく、雑食性ないし昆虫食性の裂腹魚がいても、いや、それ以外の魚でもいいから、何か生息していても何等不思議ではない。

土地の人は、やや遠巻きにして投網を打つ時こそ息をひそめたように黙っているものの、何も捕れてこないと大笑い。初めこそ「いない!」という村人の話に半信半疑で、ややゆとりもあり、あまり気にも掛けていなかった。

しかし、裂腹魚は基本的に上流域に分布するため、今回の遠征ではここでの採集が裂腹魚を捕る最後のチャンスになる可能性が高い。崑崙にきて以来、ここぞと思うポイントで何も捕れないことに多少慣れたとはいえ、何度やっても捕れないうちに、ここで捕れなかったらどうするんだという焦燥感が募ってくる。半ばやけくそ気味になりながらも、しばらく投網を続けたが、ついにここでの魚捕りをあきらめ、キャンプ設営のために移動する。

夕方前、クリヤ川の段丘上(標高2300m)に、テント設営。周囲は乾燥した砂漠というよりも粉漠というにふさわしい所で、微風でもすぐに粉砂が舞い上がる。その滑らかな粉漠の皮膜上に、うねるような帯と小さな足跡を残しながら、体長約10cm~15cmの2種類のトカゲが走り回り、所々に点在する樹高約50cmの灌木の根元に身を潜める。

そして、こもるような低音を響かせるクリヤ川の深い谷を隔てた対岸の緩やかな斜

面には、約300頭ものヤギの群れが張り付くようにしてゆっくりと移動し、数頭のラクダが、ぶらりぶらりと散歩している。

9月3日

地質班がサンプリングに出掛けるのを見送った後、テント場下のクリヤ川で魚捕りを開始。今度は、観客は誰一人としていないため静かだ。まずは、釣り竿を取り出して石の下にたくさんいる水生昆虫を餌にしばらく釣り上がるが、当りは全くない。やはり釣りでは無理か、ということで次に投網を取り出して、下流側から打ち上がるが、打てども打てども、ポイントに丁寧に打ち込み続けても、網を懸ける側の腕がだるくなるほど打ち続けても、何も捕れてこない。

これでは、「魚はいない」と判断せざるを得ない。これは土地の人の情報からしても、時期的なものというより、少なくともこの地域には生息していないのだろう。しかし水生昆虫が多く生息していることからしても、水質に問題があるとは考えにくい。ならば、どこか下流側に地形的な障害があって、流域の魚が分布を拡大できなかったのか。確かにクリヤ川の下流部では、その水量の殆どがオアシスへの配水システム水路へと導かれていた。しかし、そのような人為的な水管理を受ける前に、流域の魚は上流域へと生息域を広げられたはずで、配水システムそのものに問題はないはずだ。

それともカラカシュ川上流のように、奇妙な不連続分布をしているのだろうか。しかし、クリヤ川はカラカシュ川のように短時間で流れの様相が変化してしまうような川ではなく、その河相は安定している。

等々いろいろな理由を考えてはみたが、いずれにしても、本来ならここで場所を移動して魚捕りを続けたいところだ。しかし、他の人が全員四駆で岩石採集に出ている状

況では、それもできない。

9月4日

地質班は朝からサンプリングに出発。再び川に降り、再度魚捕りを試みるが、やはり何も捕れてこない。夕方地質班が戻り、キャンプ撤収。往路を于田へと戻る。

于田では、バザールが開かれていたらしく、大変な人出。街はずれには駐ロバ車場があるが、ここでは、車体部分だけ並べて立て掛け、ロバはロバで駐ロバ場にまとめてつないである。帰る人達は自分の車体とロバとを組み合わせてロバ車を仕立て、そのロバ車に乗って、次々と郊外に向け帰っていく。

道端でハミウリを2個買う。大勢の人が“あーでもない、こーでもない”と選んでくれたのだが、一つは未熟、しかし一つは果肉が白いものの熟していて旨い。例のウイグル風焼きうどん屋で夕飯を食べ、夜は招待所からしばらくの所にある映画館近くの露店まで散歩をして、シシカバブをつまむ。

9月5日

例のウイグル風焼きうどん屋で朝の食事を済ませてから、ホータンに向け出発。ホータンの東を、かなりの川幅を保ちながらゆったりと流れるユルンカシュ川で約1時間のサンプリング。砂地の岸辺にやや足をとられながらも、2種類のドジョウの仲間を採集したが、裂腹魚は捕れずじまい。やはりここまで標高が下がると、裂腹魚は分布していないと考えたほうが良さそうだ。地質班に頼んで分けてもらった採集時間だったが、思うような成果の上がないのが、心苦しくも悔しい。

しばらくの走行後、砂漠の中でスイカを食べながら一休みしていると、道端で1匹のハリネズミが車にはねられて死んでいる

食糧報告

睦好正治

のを見つけた。その背中に生えている多くの針のお陰か、外傷は見当たらなかったが、タクラマカン砂漠での交通事故とは運の悪い奴だ。

ホータンには17時着。玉工場をまわって、和田賓館泊。

9月6日

ホータンよりアクス経由のフライトでウルムチ着。ウルムチにて本隊と合流。

ところで崑崙遠征の学術班には、中国側から2人のメンバーが参加した。1人は地質班の王晓春さんで、最後のプル地域の調査に至るまで私たちに同行し大変お世話になったが、もう1人の参加メンバー中国科学院動物研究所で魚類学を専攻している張春光さんは、この崑崙遠征では思うような活躍が出来ずに終わってしまった。

例えば、私が短パン、地下足袋スタイルで採集をしている時、張さんは長ズボンに運動靴姿であるために付いてくるが出来ず、他の中国人と共に見物をしていた。何故それなりの格好をして採集に来ないのだろうか、中国の研究者は自ら採集をしないのだろうか、確かにインドやネパール、パキスタンではそうだった、などと思い出しながら彼の行動をいぶかっていたのだが、ある日その理由が判明。

要するに、張さんはチベット地域での野外調査が初めてということもあり、クディ以降ずっと続いていた高山病の症状が、三十里營房では発熱してダウン。魚捕りどころではない状態になってしまったのだ。しかし幸運なことに、ここには軍の病院もあり、とりあえずはここで体調の回復を待って北京に戻る、ということで張さんと本隊とは7月21日に別れることになってしまった。

彼にとっての崑崙遠征は何とも残念な結果になったが、張さんはその後、東崑崙地

域の調査(1990)やチベット調査(1992, 1993)に参加。そして、私も参加した1993年のチベット調査には、張さんは全く高度障害に悩まされることなく、自らも投網を打ち、湖では共にゴムボートを操り、三枚網を設置して一度に300匹を超える大漁に歓声を上げ、さらには通訳や地元との交渉等々に大活躍していたことを付け加えて置きます。

ところで私にとっての崑崙遠征は、魚に関しては崑崙核心区に向かう途中の河川やホータン付近で約300個体の魚が採集できた。もっとも、出発時より採集地点として特に希望していたアクサイチン湖で網を入れることも出来なかったことは、返す返すも残念ではあったが、それよりも何よりも、一度は訪れてみたいと切望していたチベットの地、その初めて見る青藏高原の広い大地とそこに生活する野生の動物達に直に触れることのできた喜びは、何にもかえがたいものだった。

その後、1993年にヤルンツァンポを遡り、マナサロワール湖やラカス湖などの湖を訪れるチャンスにも恵まれたが、チベット高原にはまだまだ多くの湖が未知のまま残されており、これらの河川や湖沼生態系の成り立ちには、非常に興味深いテーマが眠っている。そしていつの日か、そうした側面にも目をむけた調査を是非やってみたいと張さんとも話し合っていることを報告して、この「崑崙魚捕り紀行」を終える。

食糧計画と準備

最下級生が食糧係をする習慣にしたがい、私がこの係を担当することになった。幸い私は食べることに興味があった。日常の食事は、貧乏学生で独り者なので凝ったことはしないが、ほぼ毎日自炊していたし、高校時代はスーパーマーケットでアルバイトをしていたので、市販されている加工食品については良く知っているつもりであった。山岳部の現役の中では、食事に対し最も創意工夫をしていたほうだと自負していた。さほど、この係を担当することについて心配はしていなかった。

とはいうものの、私にとって初めての遠征隊である。科学的根拠をもって準備にあたらねばならないし、なにより他の隊員に受け入れてもらえなければならない。過去の遠征隊の食糧係を担当した先輩の話を聞いたり、遠征隊の食糧に関する資料やスポーツと食事に関する文献を調べ、過去の事例に準じ私なりの工夫を多少加えた食糧計画を立案してみた。

検討がすすみ、隊員会議を経るごとにわかかってきたことなのだが、私が一番美味しいものを知らないようなのである。他の隊員は皆、海外登山や研究のおかげか舌が肥えているのである。私の、若さのせいなのか育ちのせいなのか学生だからなのか、ときどき他の隊員の要求を勘違いしていたり、理解していないこともあったようだ。他のメンバーが私について最も心配していたのは、私に貧乏学生根性がしみついておりそれが食糧計画に反映してしまうことだったのである。

皆人がいいので最初は「ボンロク、僕は何でもいいよ」と言ってくれる。荷物を送り出す直前の梱包の段階で、「ボンロク、××はないの?」なんて言ってくる。「準備してないんだけど……」とこたえたと厳しい視線。指摘されたものはできるだけ買い揃え、食糧の梱包が終わっても装備の隙間にこっそり挟むなどしてなんとか送り出した。

現地調達した食糧

基本的に登攀活動や学術調査のための食糧は日本で用意した。現地で調達したのは、果物の缶詰、ビスケット、生野菜、西瓜やハミ瓜、干し海老等の乾物である。果物の缶詰は、日本で購入するのと同等の品質のものが得られるということだったが、味はかなり甘ったるい。また、無印良品のような無愛想なラベルなので、中国語のわからない私には中身がなんなのかさっぱりわからなかった。ビスケットはカシュガルで購入した。これは、トラックに積載した荷物がキャラバン中に取り出せないため、キャラバン中の間食として購入した。中国製のビスケットは油が酸化したような匂いと味がし、あまり美味しくない。中国人も日本製のビスケットを好んで食べていた。生野菜はBCにおける日本人の自炊用に購入した。結局、中国人コックに渡すことになったが余って困るということはなかった。7月上旬のカシュガルのバザールは色とりどりの野菜が豊富にある。真っ赤なトマト、深緑のピーマン、どの野菜も野趣にあふれている。西瓜やハミ瓜は、ちょうど旬なの

か甘くてたっぷり水分を含んでおり、乾燥した体には絶好の水分補給源となってくれた。干し海老、干しあわび、干しなまこなどの乾物は、コックへのお土産用として上海で購入した。

食糧関連では、中国製の圧力釜をウルムチで購入した。

また、中国人コックは2頭の生きた羊を食用として購入していた。

カシュガルまでの食事

私自身は、体調さえよければ何でも美味しく食べられるのだが、ときおり日本食が恋しくなるときがある。中国では、ザーサイで朝粥を食べる習慣がある。このお粥に、佃煮、塩昆布、梅干しを入れると日本の朝粥に変身するのである。また、昼食としてマントウが出されることがある。中国人はこれをザーサイと一緒に食するのだが、日本人には向かないようだ。チューブ入りのコンデンスミルクやジャムを付けて食べる方法を発明した隊員もいた。

兵站での食事

朝、兵站で出される麺は半煮えのまま軟らかくなったものである。気圧の低いところで、数十人分を一つの鍋で茹でているのだからしかたがない。美味しそうに食べようと努力していても体が拒絶反応をおこしている。すると乙藤がよってきて、「ボンちゃんウマイ～ネ～、ウマイ、ウマイ！」と話しかけて来る。つられて「ウマイ、ウマイ！」と言っているうちに本当に美味しくなってきた、お代わりまでしてしまう。それ以降、乙藤にならって「ウマイ族」に仲間入りすることにした。

夕食はチャーハンなどの米食だったり麺だったり様々である。朝食と同じく高所で大量の調理をしているので、料理としてはいま一歩である。隊員の食がすすむよう、

漬物や佃煮昆布を添えるようにした。

キャラバン食

現地ではキャラバン食を使える態勢が組みなかったことが反省点の一つとしてあげられる。BCまでは中国側が用意するという取り決めだったし、車で行けるからと安易に考えていた。京都では、ビスケット、あられ、各種カップラーメン、レトルトご飯等を用意した。ところが、キャラバン中に荷物を自由に出し入れできるスペースがジープの荷台しかなく、この狭い空間を個人装備や学術器材と分けあわなければならない、わずかのキャラバン食しかジープに積載することができなかった。京都で準備したキャラバン食の大半はトラックに積んだままで取り出すことができなかった。

新蔵公路を離れてからは、朝食夕食とも取り決めどおり中国側が用意できない事態がしばしばあり、ベースキャンプ用のレトルト食品やフリーズドライ食品を取り出して日本側で食事を作る場面がしばしばあった。

さらに、この状態で病人が出てしまい、長時間働いてくれたドライバーなどに対し労をねぎらう茶菓子を出せなかったのも残念である。お茶やビスケットが速やかに出せればもう少し雰囲気が和らいだかもしれない。

BC食

日本からは、コシヒカリ100%の白米20キロ、学校給食用の無洗米20キロ、スパゲッティなどのパスタ類、レトルト食品、調味料、カップラーメン、各種缶詰などを用意した。基本的にはベースキャンプの食事は中国側が準備するということだが、日本人の隊員が独自に調理できるような材料を一応準備しておいた。実際には中国人コックのつくる食事ですべてあり、消費された

のはカップラーメンと酒の肴といったぐらいだった。

中国側は実際には登攀活動に従事しないので、朝食の準備が遅いのだ。BCからC1までの荷揚げ期間の朝食の準備は、食糧係の私の仕事となった。BC用の予備として準備しておいたフリーズドライおにぎりで雑炊をつくった。

お米については、全量中国人コックに渡すことにした。こちらは日本の米だから、真っ白でふっくらと粘り気のあるご飯がでてくるものと期待した。ところが、できたご飯は白いがパサパサである。ふっくらとしていないのは、高所で圧力釜をつかっておりいたしかたないが、パサパサなのはいただけない。原因は炊き方にあった。彼らは最初やや多目の水を入れて炊き始め、沸騰すると重湯を釜の外に捨ててしまうのである。それでも日本の米はうまかった。中国人も日本の米のほうがよいと言っていた。

学術調査隊員用食糧

学術隊員がベースキャンプを数日離れて調査にでかける際の食糧として、各種のレトルトご飯や缶詰、ビスケット類を準備した。車での移動が主体なので特に軽量化は考えなかった。

高所食

AACKの1982年のカンペンチン、85年のナムナニ、山岳部の85年のマサコン、などを参考にした。どれも似たようなもので大雑把に言って高所食はラーメンとジフィーズの組み合わせである。

今回は登攀隊員の人数が少ないこともあって、軽量化を第一に考え、レトルト食品などの使用は控えた。缶詰などの重量物は食糧計画には入れず、体力的に余裕のあるメンバーがボランティアで荷揚げするとい

う方針を採用した。

過去の遠征同様、朝夕は実績のあるジフィーズ（日本ジフィー食品）を主体にインスタントラーメンなどと組み合わせた。ジフィーズ以外にも、今まで京大の遠征に使われていないもので軽量かつ簡便と思われる食品をメニューに採り入れた。

行動中のレーションはカロリーメイト（大塚食品）を主体にビスケット、チョコレート、チーズ、サラミ、各種アメ玉を適宜組み合わせた。

高山病の予防という点で、水分補給も重要である。ポカリスエット（大塚食品）などのスポーツ飲料、お茶やコーヒーなどもなるべくバラエティーに富んだものを準備した。

重量は、12人日分の食糧が詰まった小箱が10キロ以内におさまった。

今回工夫した食糧

・各種ジフィーズ（日本ジフィー食品）
ご飯ものは過去の遠征で好評だったものを主体に各種取りそろえた。お米自体はアルファ化米なので、調理時間はかかるがコンパクトである。また粘り気があって食感もよく、腹もちもよい。たらこ、納豆、ジャコ、小海老、イチゴなどを特注でフリーズドライにしていた。なかでもイチゴは秀逸で、真っ赤な円錐形の形が保たれたまま水分が抜かれ発泡スチロールのようになっている。水で戻すとシャキッとはいかないまでも、生の甘酸っぱい風味がしっかりのこっているのである。これには感動した。

・カップライス（日清食品）

これはカップラーメンのご飯版で、「ドライカレー」や「エビピラフ」などの種類がある。市販の製品は発泡スチロールのカップに入っている。米粒自体はひなあられの

ような形状をしている。今回は高所食に用いるため、特別にアルミ蒸着のパックに入れてもらった。パックの際にできるだけ空気を抜いてもらった。これは、外気圧が低くなった場合、袋が膨張して破裂するのを防止するためである。アルファ米と比べ体積があるのが難点である。

山での調理方法は簡単で、沸騰したお湯に投入するだけである。調理時間は短く、高所の70度程度の沸騰水でも約5分で戻る。燃料の節約にもつながる。米粒の食感はパフパフした感じで粘り気がほとんどない。腹もちが若干悪いと訴える隊員もいた。夕食より朝食向きである。今後の遠征でも使えると思う。

・フリーズドライおにぎり (宮坂醸造)

これは三角形の小穴が無数にあいたポリ袋にフリーズドライのお米が入っている。沸騰したお湯に入れると中の米が膨らみ、自動的におにぎりになる仕組みになっている。味付けは梅とシヤケがある。米粒は同じくひなあられ状で、表面は粉を吹いている。これも体積がある。また輸送中の衝撃で粉々になりやすい。市販の製品は海苔と組み合わせる缶詰や小袋にパックされている。

今回は、海苔を省き、おにぎり本体のみを100個単位にて袋詰めしてもらった。京都で使いこなしが思い浮かばなかったのも、ベースキャンプ用の予備食として準備した。

70度程度の沸騰水では粘り気がでず、高所ではおにぎりにならない。開き直って雑炊にすると大変好評だった。これも約5分ほどで戻る。高所食として十分使えたと思う。

・プラスチック缶詰各種

実をいうとこれは不評だった。なにが不評かというと、中身のポテトサラダやカニサラダがいまいちなのだ。外パッケージは

プラスチックとアルミの多層構造で上部はプルトップなので開けるのも簡単、重量も軽い。焼却も可能である。5000mの気圧が低い状態でもプルトップがやや膨らむ程度で破裂の心配はない。せめて、中身が蟹や鮭だったら評価が違っていたと思う。

「鰻」と「蟹味噌」

マサコンの食糧係だった菅野さんによると、「どうせ食糧係は文句しか言われぬ。10回のうち9回は聞き逃しても、1回は誰もがうなるような切り札を用意しろ」ということだった。

私なりに考えた末、「レトルトの鰻の蒲焼き」と「蟹味噌の缶詰」を用意した。前者は登頂祝いにでもと思って準備していたのだが、かなり早い段階で発見されてしまい、「ボンちゃん鰻まだ〜」という声がかかってきた。結局、登攀活動中にベースキャンプに滞在しているメンバーに食べられてしまった。食べた乙藤によると、鰻はレトルトの袋の中でペースト状になっていたという。後者はキャラバン中に何度か切り札として活躍してくれた。蟹味噌がなければ、もう少しポロクソに言われていたに違いない。

日本食の味

登攀が始まり、準備した高所食を食べ始めてから非常に気になることがあった。それは、日本で用意した加工食品はどれも、強いグルタミン酸ソーダの味がすることだった。しばらくは舌がしびれてしまい、なにを食べても同じ味がした。日本ではあまり気にならなかったが、一月半ほどの異国の食生活で味覚が鋭敏になったに違いない。聞いたところでは、中国でも大量のグルタミン酸ソーダを消費しているそうだが、付き添いのコックのもつ調味料や兵站の厨房ではグルタミン酸ソーダらしき粉末はみかけなかった。

ガスカートリッジについて

過去の例にならい、E P Iの代理店であるミヤコスポーツに頼み、ボタンとプロパンの混合比が1:1のガスカートリッジを特注した。プロパンの混合比が高まると、寒冷でも火力が衰えない。当時、消防法によりこのようなカートリッジの使用は日本国内では禁じられていた。

用意した230グラム入りカートリッジ360個のうち実際に使用したのはたった60個であった。当初の見積もりが1個=1人日でかなり多めであったこと、C1で氷河上の水が確保できたことによる。

最後に

C3から撤収し、12時間近く行動し真っ暗になってから戻ってきたC1で、懐石のように丁寧に盛られた料理が次々と出てきた。寺島が腕を奮ってくれたのだ。腹ぺこだったので申し訳ないけどバクバク口にいれた。ほうれん草のゴマ和え、小海老のマヨネーズ和え、すき焼きの卵とじ、フリーズドライとは思えない見事な出来栄えだ。

他のほとんどの隊員が海外登山や研究を重ねた経験者なので、注文も多かったが、僻地や高所という限られた状況でよく我慢してくれたと思う。

京都における予想が大きくはずれたのはキャラバン中の食事である。車でBCまで入れるといいながらも、これほど大変だとは想像していなかった。食事というのは危機的状況において雰囲気や和らげる重要な役目がある。今回の遠征では食糧係がそういう役目を果たさなければならぬことがしばしばあったが、十分対応できたとはいえなかったのが残念でもあり、若さに免じて許していただきたいところでもある。

装 備 報 告

毛 利 尚 樹

装備全般

装備類は、中国側と日本側とで分担して調達した。中国側では、BC用会食テント、中国側スタッフ用テント、BCでの炊事用具、酸素ボンベ関係装備を、日本側は高所装備を分担した。個人装備については双方自らが調達することを原則とした。

装備内容については、これまでの高所登山の経験で信頼のあるものを使用し、特筆すべきことはないが、対象とする山の登攀ルートが未定であったために、全般に多めに用意した。

個人装備

BCより上部で登山活動するのは日本人隊員のみということになっていたため、中国側スタッフには防寒のための手袋等の小物を適時使用できるように備えた。

日本の冬山装備に比べて特別な防寒対策は必要ないものと推測されたため、軽量化、機動性、快適性をはかった。合繊新素材のアンダーウェアは肌触りがよく、暖かく、登山期間中の隊員アンケートでは9名中8名が着用していた。アウターのヤッケはフードをこれまでのものよりも一回り大きくし、袖口部分を防風のために二重にした。オーバーズボンを履いたときの動きやすさを高めるために補強用パッチをつけず、腿から下の部分を細めにするなどの改良が図られた。

登攀装備

当初目標としていたチオン・ムズターグ峰を直接近くから撮影した写真がなかった

ため、登攀ルートは未確定であった。周辺地域での調査・登山記録と人工衛星からの写真解析により、氷雪主体のルートになると推測された。登攀具はこれに対応して、スノーバー、アイスハーケン等を多く取り揃えた。フィックスロープは必要予想量よりも多めに用意した。登攀対象はチオン・ムズターグ峰から6903mの無名峰に変更されたが、実際の登攀でも氷雪部分が大部分を占めた。

コンティニューアスで行動する場所が多く、フィックスロープの多くは未使用である。

幕営装備

BCでの会食テント、中国側スタッフのテントは中国側にて用意した。日本側の居住用・高所用テントはエスペースのドーム型テントを使用した。耐風性を高めるために、ポールは安全性の高いイーストン社製のφ9ミリのマキシム用のものを使用した。

酸素ボンベなど

医療用として酸素ボンベなどをBCにのみ用意することにした。レギュレーターを含めて中国側が一切を用意した。ボンベはフランス製高圧ボンベにくらべると大型であった。今回、中国側スタッフと日本側隊員が高度障害に見舞われた際には役だった。

通信関係

キャラバン中の車両間の連絡用、BCと上部キャンプの連絡用として用意した。BCには自動車用の中型無線機(YAESU FT212L)を設置し、上部キャンプでは小型

軽量のトランシーバー(YAESU FT23)を携行した。交信は当初BC-C1間で尾根を挟んでいたために感度不良であったが、C1にランドプレーン型アンテナを設置することで良好に受信されるようになった。C1-C2間では良好であった。

故障したものは1台もなかった。

BCでは発電機(HONDA EX-300)により12ボルトバッテリーを充電し、それを電源として使用することで安定電圧を得て、通信機、気象ファクシミリを作動させた。この発電機は軽量・低騒音で大変使い心地のよい優れたものであった。

装備一覧 <登攀>

品目	規格	数量	備考
ザイル	φ9ミリの40編 編み	5	
ナイロンロープ	φ8ミリの50編	33	
ナイロンロープ	φ9ミリの60編	8	
テープシュリング	幅20ミリの100編	100m	
すてなわ	φ6ミリの200編	200m	
カラビナ	カジタSL型	150	
アイスハーケン	パイプ(スナーク・長)	10	
アイスハーケン	パイプ(スナーク・短)	15	
アイスハーケン	スクリュウ(サレワ)	5	
アイスハーケン	U字(EXP. OF JAPAN)	5	
ロックハーケン	よこ	5	
ロックハーケン	たて	5	
ロックハーケン	兼用	5	
ジャンピング		2	
ボルト		7	
スノーバー	40型	50	
スノーバー	60型	50	
スノーアンカー		2	
ワイヤー梯子		2	
滑車		3	
ユマール		3セット	
スキーストック		8組	
スキー		5	
スキー・シール		5	
アイスバイル		3	
あぶみ	フリーサイズ	3	
背負子		10	
標識用布	蛍光布	350	
標識用ポール	竹製	350	

装備一覧 < 個人装備 >

品目	規格	数量	備考
ヤッケ	ゴアテックス	1	
オーバーズボン	ゴアテックス	11	
セーター	東洋紡績(株)製	15	
ウールベスト	東洋紡績(株)製	15	
下着(上)	(株)帝健・東洋紡績(株)製	35	
下着(下)	(株)帝健・東洋紡績(株)製	35	
その他、冬山個人装備一式			

装備一覧 < 暮営 >

品目	規格	数量	備考
BC用会食テント		1	
中国側スタッフテント		1	
日本側テント	エスパース4~5人用	7	
テント修理パイプ		10	
ベグ		100	
雪用スコップ		2	
雪用ノコギリ		3	
テントマット		11	
ツェルト		5	
養生シート		3	
シュラフ		11	

装備一覧 < 通信記録 >

品目	規格	数量	備考
無線機	YAESU. FT212L	1	
トランシーバー	YAESU. FT23	12	
アンテナ		2	
高度計		5	
双眼鏡	7×50 トロピカル1F	5	
単眼鏡		1	
ハンドレベル		2	

装備一覧 < 炊事・生活 >

品目	規格	数量	備考
ガスコンロ	EPI/BP型	7	
ガスボンベ	EPI/寒冷地用	360	
ランタン	EPI	7	
コッヘル	M寸	3	
食器	5組セット	10	
黒ポリ袋	融雪用		
ポリタンク	5㍗用	3	
ポリタンク	1.5㍗用	10	
ポリタンク	1.0㍗用	10	
テルモス	0.5㍗用	10	
乾電池	単1	500	
乾電池	単2	50	
乾電池	単3	1000	
ガソリンコンロ	中国製など	3	
ガソリンボトル	2.0㍗用	2	
トイレットペーパー		70	
南京錠		30	
包丁		1	
まな板		1	
強カライト		1	

装備一覧 < その他 >

品目	規格	数量	備考
発電機	HONDA/EX300	1	
バッテリー	12ボルト用	1	
気象ファックス	JAX-2	1	
G.P.S		1	
酸素ボンベ		2	
レギュレーター		1	
修理用工具セット		1	

品目	規格	数量	備考
コンパクトカメラ	ニコン・ピカイチカリブ	5	
一眼レフカメラ	ニコン・F A	2	
その他、個人所有のボディ			
レンズ	20mm ⁵⁵ 、F2.8S	1	
レンズ	24mm ⁵⁵ 、F2S	1	
レンズ	200mm ⁵⁵ 、F4S	2	
レンズ	35-75mm ⁵⁵ 、F3.3-4.5	2	
レンズ	80-200mm ⁵⁵ 、F4S	2	
レンズ	1000mm ⁵⁵ 、F11	1	
レンズ	71mm ⁵⁵ F2.8S	1	
オート接写リング	PK-13	1	
テレコンバーター	TC201S	1	
テレコンバーター	TC301S	1	
フィルター	円偏向52mm ⁵⁵	1	
フィルター	円偏向62mm ⁵⁵	1	
レリーズ	AR-3	1	
レリーズアダプタ	AR-8	1	
バッテリーケース	防寒用 DB-2	2	
ネックストラップ	AN-4B	2	
フラッシュ	スピードライトSB-22	1	
その他、個人所有のレンズ、付属品			
コダクローム	ASA25 KM135-36	20	
コダクローム	ASA64 KR135-36	270	
エクタクローム	ASA200 ED135-36	170	
エクタクローム	ASA400 EL135-36	20	
エクタクローム	ASA1600 EES135-36	5	
コダカラー	ASA100 CA136-36	60	
コダカラー	ASA200 CB135-36	20	
コダカラー	ASA400 CC135-36	30	
トライX	ASA400 TX135-36	10	
コダクローム	ASA64 PKR120	30	
ベリカラー	ASA100 VHC120	5	
バナトミックX	ASA32 FX120	15	

梱包・輸送報告

白井 秀友

崑崙隊は過去の隊に比べ少人数であるし、ベースキャンプまではトラック、その上は隊員人力のみで荷役用動物を用いないため、梱包・輸送は実にシンプルな形態を取るはずであった。

しかし、まず隊荷が2トンを超すまでに膨れあがった。その原因は、ベースキャンプでの食糧の途中補給が不可能なこと、研究調査用器材が必要なこと、そしてトラックに載せればベースキャンプまで届くとの隊員各自の甘い判断にある。

次に北京までの輸送も安全性の関係で医薬品・精密機械等は航空便、危険物（EPIガスカートリッジ）は船便のコンテナ、食糧等主要隊荷は船便の別のコンテナに3分割して発送せざるを得なかった。せめてEPIの中国国内入手が可能であったらと悔やまれる。

これら隊荷は、まず北京の中国登山協会（CMA）あてに輸送し、集結した隊荷はCMAの手で登山隊出発地のカシュガルまで陸送された。カシュガルにて隊員が荷物をチェックの上、再度トラックに積み込んで出発となった。なお、ベースキャンプ到着まで基本的にはトラックに積み込んだ荷物は開封しない予定であった。

主要な梱包材のリストを表1に示す。従来用いてきた物と同一の物である。崑崙隊は荷物の運搬のためにヤク等の動物を用いないため、キャンバスバッグの使用量がこれまでの隊と比べて少ない。

崑崙隊の隊荷の通関は中国内ではCMAが受け持ってくれた。インド等のように隊員が直接税関と協議しなくて済むので非常に楽である。日本側としては確実にパッキングリストをCMA担当者へ渡すことに留意すればよい。今回は念のためファクシミリで1回、郵便で2回送った。

日本側の輸送の手配はすべて京都シブエージェンシーに依頼した。保険料込みで約50万円。今思えば複数社から見積もりをもらえばよかったような気もする。

帰路は隊荷の返送をCMAにまかせて帰国することとなる。当然、正確なパッキングリストが必要である。ただし、今回担当者が高山病により先に帰国していたので若干混乱をきたし、用意したフォーム用紙を用いずに、毛利がすべて再度作成することとなる。担当者として確実に連絡しておくべきであったと思う。

表1 梱包材

	大きさ	数量	用途
プラスチック段ボール	大45×76×27cm	20	食糧、装備等の運搬 小2個を中に詰め使用
	中45×61×27	65	
	小25×43×27.5	130	
プラスチックコンテナ	100リットル	12	個人装備・精密機械用 岩石標本用
	50	10	
キャンバスバッグ	長尺物用	10	赤旗用ボール等 岩石プラコン梱包用
	岩石標本用		
	個人装備用		

医療・薬品について

三輪佳宏

BCまで車で乗り入れる予定であったため、点滴、手術器材などは余裕をもって準備することにした。なお、隊員の個人判断での使用が可能と思われた薬品は個人用パックとしてそれぞれの薬の説明と症状に応じたその薬の使い方を示した文書とともに各自に手渡した。

その薬の内訳は以下の通りである。

ハルシオン	セアスG
バファリン	エバテック坐薬
トラベルミン	セスデン
PL顆粒	ダイアモックス
ラシックス	カルベタベンテン
バントシン	ノイエルS
オラドールS口内錠	センロック
新三共胃腸薬	キョウベリン
ロベミン	ブルセニド
タチオン	バンベスト
パテックスハイ	テラコートリル軟膏
ボラザG坐薬	タリビット点眼薬
リンデロンA液	リンデロンVGローション
サージカルテープ	イソジン液
リップクリーム	メンターム
ガーゼつきばんそうこう	仁丹
体温計	ザーネクリーム
	日焼け止めクリーム

隊として準備した薬剤、医療器材はおおむね以下の通りである。

ペンタジン	ヴェノピリン
メチロン	セルシン錠
キシロカイン	キシロカインゼリー
セスデン注射液	タベジール
ラシックス注	ネオフィリン(錠、注)
アダラート	メブチンエア
ムコソルバン	ナウゼリン(坐、錠)
セルベックス	ザンタック(錠、注)
プリンペラン注	ソルコーテフ

消毒用エタノール	メイバック
ソフラチュール	バナバップ
モムホット	エンベシドクリーム
ネオラミン・マルチ	20%ぶどう糖
マルトス10	生理食塩水
ポタコールR	フィジオゾール3号
サヴィオゾール	トランサミン錠
ソリタ顆粒	グリセオール
バカシル	ドルコール
セファメジン	フルマリン注射針
翼状針	静脈内留置針
輸液セット	ピンセット
持針器	縫合針
縫合糸	メス
ハサミ	手術用手袋
ガーゼ	綿球
包帯	シーネ
血圧計	心電計

カシュガルを出発してキャラバン開始後、過労や高度障害で体調不良を訴える者が多かった。食事摂取が不十分な者には積極的に点滴を行い、利尿剤(ラシックス)も併用することにより翌日には元気となっていた。マザではコレラ患者が発生しているとの風評があったが、詳しい情報はいらず、兵站でも特に対応している様子もなかった。そこで食事時に手指、食器、箸をアルコールで洗いぬいで拭き、食後は、胃腸薬、抗生物質、抗菌剤の内服をしてもらいことなきを得た。

7月24日 中国科学院連絡官がゴーツァ湖到着前より頭痛、全身倦怠感、食欲不振、発熱があり、しかも症状は徐々に悪化していた。2日間点滴、利尿剤、抗生物質投与にてもあまり改善がみられず、少量の水分しか摂取できなくなってきたため、7月26日下山してもらった。

白井隊員の肺水腫の経過について

三輪佳宏

7月18日
マザにて疲労困憊し点滴1000mlとラシックスにより翌日には、元気となっている。その後は、高度順応も特に問題なく、他の隊員と同様の活動をしていた。

7月26日 5100mキャンプにて
昼間はトラックの荷物の上げおろしや水汲みと平常の働きをするが、「大変しんどかった」と言っていた。夕食の羊の炊きこみ御飯は無理して2杯食べ、食事後「しんどい」と言って横になり眠る(0時頃)。私は隣のテントに寝ていたが、深夜咳こみやヒーヒーゼーゼー言う呼吸音が夢現に聞こえたのでおかしいなあと思った記憶がある。

7月27日
朝6時、「白井がおかしい」とのことで起こされ、白井のいる隣のテントに行く。咳をはげしく行い、呼吸困難を訴えて、呼吸数が40回/分とふえていた。聴診上は全肺野で湿性ラ音が聞こえた。体温38.1度、点滴ルートを取り抗生物質、気管支拡張剤、強心剤、利尿剤を使用した。この時点では肺水腫よりも肺炎が主であろうと考えていた。この点滴により、「呼吸は楽になった」とのことであった。念のため以後もずっと持続して点滴を行っている。午前11時、朝食に粥を食べ、その後コーヒーも飲み、トイレにも自分で歩いて行き、「頑張らないといけない」と語り回復しつつあった。しかし昼食は全く食べられなかった。この時点で隊長にこのままでは下山の可能性あることを告げた。午後4時30分、体温38.8度ま

で上昇したので抗生物質、利尿剤、強心剤をさらに追加投与した。午後6時、トイレに行こうとして立ちあがったところ転倒。このようなふらつき(運動失調)に加えて、このころより脳浮腫によると思われる意識障害が始まっている。つまり、閉眼していることが多くなり、昼と夜を間違えるようになっていた。そこで隊長に急いで下山の必要があることを伝えた。この白井の状態を見て隊員もことの重大さを十分に認識して、全員協議の上で翌朝下山を決定した。この夜呼吸数はやはり40回/分と多く、酸素吸入を1リットル/分で開始している。これにより呼吸数は、30回/分となり意識も少し回復してきたように思えたが、酸素マスクをすぐに払いのけてしまうため、1時間で酸素吸入を中止している。

7月28日
午前0時30分、突然に暴れだし点滴を抜いてしまった。呼んでも返事をしなくなりさらに目もあけないようになり、明らかに意識が低下してきた。呼吸数33回/分、この事態に対処すべく、中国側よりテントを借り、それを治療観察のために設営して白井を移した。乙藤、人見、三輪の3人で順に徹夜の見張りをすることにし酸素吸入を再開した。これによりときどき目をあけたり酸素マスクをはずす元気がでてきた。午前2時、簡単な応答ができるようになってきた。午前5時30分、尿意を訴え両肩を支えられて立ちあがり排尿をする。次第に意識は良くなってきた。午前10時食事はしなかったが、コーヒーを飲んだ。

その後大紅柳灘へ向け四輪駆動車での移動を開始した。この時の状態は自力では歩けず、何人かで両肩、足をかかえて車へ運び入れた。車中ではずっと横になっていた。途中ではスイカを一口食べたのみであり、水分や食事摂取はできていなかった。用意していた酸素は途中ですべて使い切ってしまったが、呼吸困難の訴えはなくなっていた。途中での渡渉中に私たちの乗った四駆が窓ガラスまで水につかり、シートまで浸水した。後日白井に聞くと同日の記憶は車の中で酸素マスクをはずそうとしてたしなめられたことと、ジープが浸水しておしりが水に浸ったことの2点だけであり、他は全く記憶になかった。

7月29日

午前1時過ぎ大紅柳灘(4160m)着、5100mキャンプより標高にして約1000m下降したことになる。呼吸数も26回/分とへり体温も37.5度であった。睡眠後、午前11時起床、36.8度と熱も下がり紅茶や味噌汁を飲めるようになった。三十里営房へ四駆で移動。車中では短時間であったが自力ですわることもあった。応答も今までは単語での答えであったが、文章で返答できるようになった。その結果、構音障害(呂律がまわらない)が明らかとなった。意識障害はまだ続いており、現在地を実家近くの場所と間違えていた。午後6時30分、三十里営房着。兵站の軍病院を受診する。この時発病以来初めて人手を借りずに歩いてみた。廊下はふらつきながらも何とか伝い歩きができしたが、階段ではふらついて危なく背負われた。この時点でもまだ運動失調が明らかに残っていたことになる。病院では非常に古めかしい器械で胸部レントゲン撮影を受ける。このあと夕食に流動食とおにぎり1個を食べている。しばらくして私は通訳の隊員と一緒に病院へ行き、レントゲン写

真を見る。右下肺野に斑状陰影があり“肺水腫”と診断できた。写真を譲ってくれるよう交渉したが、軍の機密ということで全く話にならず、何とか一時的に借りて宿舎でスライド撮影するのがやっとであった。白井はこの日より当日の行動を大体記憶するようになってきた。

7月30日

他の隊員を三十里営房に残し、能田、浅野、三輪の3人が白井とともにイエチェンに向かう。この日は食欲もかなり回復した。食事量としては元気な時の1/2~1/3程度は食べていた。しかし運動失調が残っており、箸でうどんが食べられなかった。歩行はかなり改善し、軽く肩を貸すのみで歩けた。この日の夕方イエチェン到着時には意識はほぼ正常に戻ったと考えられた。

7月31日

食事量はさらにふえ、朝食はパン2個、粥1.5杯を食べたが、まだスピードは遅くこぼす量も多かった。歩行も何もつかまらずに一人で歩けるようになったが、まだ横についていないと危ない状態であった。イエチェンよりカシュガルに移動中も長時間すわっていられるようになった。午後6時30分着。夕食もとらずに、そのまま翌朝まで眠り続けている。

8月1日

ホテルと食堂間の300mぐらいを介助なしでふらつきながらも一人で歩けた。朝食も十分な量を摂取、階段も手すりにつかまって昇り降り可能となっていた。これらの状況から判断して、意識は回復し、一人で日本へ帰れると最終的に決定した。そこで帰国の決定を伝えると本人も納得して帰国準備のためにザックの中身を自分で整理した。さらに自分が今までどうなっていたのかと

の質問もしている。この日、ウルムチへ飛行機で一人向かった。ウルムチ空港には、当登山隊の同行記者の福島氏が迎えに来る手はずになっていた。8月2日ウルムチから北京、8月3日北京から大阪へ着き、そのまま斎藤惇生先生の新河端病院に8月13日まで入院している。脳波ではまだ異常が残っていたとのことであった。白井と別れたあと、私たちは8月4日に三十里営房に戻り全員合流。以後5300mのBC建設、登頂、BC撤収、9月12日大阪着までの間は全員の体調はすこぶる良く、医者としての仕事は全くと言ってよいほどなかった。

7月26日深夜5100m地点での肺水腫発症、27日夕方には意識障害になるという、24時間以内に脳浮腫を合併するという急激な進行であった。幸いなことに低地に車で移動できる場所であったため28日には4160m、29日には3670mへと短期間に下降できたため重症とならず、回復できたものと思われる。

9月12日本隊が大阪空港に到着した時には元気な顔で出迎えに来ていた。

高山病発病と経過

白井秀友

チオン・ムズターグ峰に向かうトラックによるキャラバンは、チベット高原の広さと無機質に驚く楽しい旅であったが、あいにく7月26日より重度の高山病を発病。私は行動不能に陥り、隊員の手によりカシュガルに下ろされ1人帰国した。

以下はその記録である。

7月15日

カシュガル(1325m)→イエチエン(1400m)

王トラックに同乗

途中、インジシャ手前で人見の乗るトラックが故障、私の乗るトラックでインジシャまで牽引し修理する。修理工場わきの住宅は興味深く、炎天下を歩き回った。19時ごろ修理が終わり出発。ガス欠もあり夜1時ごろイエチエン着。昼間の行動により少し脱水気味だった。

7月16日

イエチエン→アカズ峠(3310m)→クデイ(2879m)

能田四輪駆動車に同乗

ガソリンの手配に手間取りゆっくり出発。クデイでは兵站の汚さに閉口する。特に食堂、トイレの臭いには吐きそうになった。中島総隊長との最後の夜であったが、疲れて早く休む。

7月17日

クデイ→高所順応散歩(3560m)

吐き気のする臭いに包まれて朝食をとる。食後、少し頭痛があった。だが日本を出て以来、運動不足であり、体を動かした

くバスケットに汗をかく。かなりだるさを感じ、終わりにして寝ようかと思ったが、中島総隊長のビデオを撮る。昼から順応散歩に行く。山岳部での数年来のリーダー業務から解放され、トップを歩け楽しい。急いで登る。帰路軽い頭痛と疲れを感じた。

夜不調のため、1人部屋で休んでいた。トイレに立つと隣室に隊員が集まり、ルートの説明をしている。見ると、スポット(衛星)の写真上にいくつか見えるピークのうち最高ピークの位置が分からず迷っている。無能ぶりを示す登攀隊長に暴言を吐いた(この事実はいまだに信じがたい)。このほか、この夜は不調ゆえかふだんにも増して攻撃的であった。ビデオの運搬も人見に押し付ける(もともと日本での計画段階では人見が管理すると言っていたと記憶する)。

7月18日

クデイ→マザ(3755m)

朝、四駆の中で眠るつもりで睡眠導入剤を飲んで出発。途中セラク峠(4900m)まで少し歩く。能田隊長による休憩の指示を無視。マザで点滴、ラシックスの静注を受けて回復。おかゆを食べた。ただし昨日来の下痢は続く。この日、トラックドライバーの王氏も不調。おう吐し、同じく点滴を受けた。

7月19日

マザ→三十里営房(3670m)

下痢は続いたが、元気であり快調。

7月20日

三十里営房→高所順応散歩(4000m)

下痢も復調し、体調は良いと感じた。散歩は先日の病気もあり、指示を受け最後尾より写真を撮りながらゆっくりついて行く。

7月21日

三十里営房→大紅柳灘(4155m)

皆が昼寝する中、1人カラカシュ川見物をするほど元気。眠るのには惜しい景色である。毛利、伊藤の点滴に深夜までつき合う。

7月22日

大紅柳灘→高所順応散歩(4500m)

ついに、隊で一番の健脚の寺島と歩を並べるほどに復活。帰りは駆け下る。夕方、寺島の漁につき合う。

7月23日

大紅柳灘→甜水海(4735m)→第一徒渉川手前(4850m)

王トラックに人見と同乗

奇台大坂(5070m)でスイカを食べるころからひどい頭痛。いったん甜水海で休憩しても治らず、のちテントサイトまで続く。途中、予定の水場が枯れており、23時30分まで行動。

7月24日

テントサイト→ゴーツァ湖西岸(5080m)

徒渉に手間取りゆっくり出発。ゴーツァ湖は塩湖であった。水は辛く、茶はまずい。この日朝より科学院連絡官の劉氏が発熱(約38度)。頭痛を訴える中国人多し。夕方、劉氏の点滴を手伝う。

7月25日

ゴーツァ湖西岸→偵察→真水の川(TBC、

5100m)

早朝息苦しく、テント入り口を開けて呼吸した。真水を求め、湖まで1、2キロ歩く。バケツ1杯の水を睦好とともに運んだが、息苦しく短い距離で睦好と交代を繰り返した。睦好もしんどそうであり、5000メートルの高所なのだから当たり前と考えていた。

午前中、能田隊長とともに湖北側の湖岸ルートを偵察。無意味な行動であった。午後から真水を求めて移動(この川岸のテントサイトは後TBCと名付けられた)。劉氏は相変わらず不調。点滴を繰り返し、酸素を1時間ほど吸う。またドライバーの化氏も発熱。肺の不調を訴え、点滴する。ほかにも頭痛を訴える中国人が多い。この夜、劉氏が回復しないので、下ろすことを決定した。すると、高所環境に嫌気がさしていたドライバー3人も帰ると主張、押し切られる。これを受けて、隊員全員が4人用エスパースに集まり話し合う。明日以降、乗り物がトラック2台のみになっても進むことを確認。前途を思うと気が重かった。このとき皆、狭いエスパースに入っていたが、私は息苦しく、入り口に座り、外の空気ばかりを吸っていた。この日、劉氏に徒渉点まで付き添うため、トラック1台を空にする。カシュガル以来初めて個人装備を開くと、タバコ、酒が出てきた。イエチエン以来のタバコを5、6本吸い、酒はごくごく薄いお湯割りをなめる。

7月26日 TBC 休養日

朝、頭痛を感じていたが、排便後解消する。

劉氏らを見送った後、休養日となった。科学院の王女史の発言のお陰で科学院の四駆は残ることになり、ほっと安心、王女史に感謝する。朝から寺島、浅野の顔は膨れ上がり思わず笑ってしまった。日本人用に

ポリタンクに水をくむ。さんざん皆でお茶を飲んだ後、能田隊長と洗濯をした。さらに王女史、イエチエンの王氏を手伝い、水くみ2回、米とぎ1回。少し息が切れたが、やはり5000メートルだからと気にしていなかった。

夕方、羊がと殺された。しょう油を捜すように言われ、陸好と捜すが、トラックの荷の奥の方にありなかなかなか出てこない。荷のあげおろしが大変しんどく、このとき体の異常を自覚した。羊の解体を見物した後、テントで少し眠る。夕食に起こされ、気持ちが悪かったが参加。羊肉の炊きこみご飯というごちそうであり、中国人がうれしそうだったため、つられて不快感（高山の影響）いっぱいながらも、たくさん食べた。食事でも早々に切りあげ、だれかの助言でラシックスを飲んで寝る。

就寝時刻は24時。

以下は後日、隊員に聞いたことである。

この夜、三輪ドクターは隣のテントから変な音を聞いている。私の呼吸音である。またテント内で隣に寝ていた陸好によると、私は寝つけない様子で2、30分に一度起き上がり呼吸をし水を飲んでいて、その間隔は徐々に短くなり、6時ごろには起き上がって（半身を起こして）ゼイゼイと苦しそうだった。繰り返しになるが、この事実は私の記憶からは消えている。

7月27日 TBC 発病日

この日、記憶はほとんどない。三輪ドクターに聴診され、自分のラ音を聞いた記憶があるが、この日のことだろうか。

後日隊員に聞いたところでは、早朝、息苦しいとか頭痛を訴えていたらしい。ただ、私が早朝息苦しさを訴えるのはこの日に始まったことではないし、皆頭痛を感じていたようで、しばらく放っておかれた。

6時、やはりおかしいとのことで三輪ド

クターが呼ばれ、肺水腫と診断。午前中は意識はしっかりしていたらしいが、午後からおかしくなり、運動失調も始まっている。18時より毎分1リットルの酸素吸入を受けている。

この日、私は不調の寺島とともにテントに寝かされていた。夕方、トイレに立とうと寺島の肩を借りて起き上がる。しかし、テントを出たところで転倒、点滴の針が外れ血が噴き出る。寺島は非常に驚き、これを機に私の病状が認識される。

7月28日

TBC→大紅柳灘(4155m)

この日もほぼ記憶はない。はっきりするのは2つのみで、四駆の中で酸素マスクを外そうとして三輪ドクターにたしなめられたこと、四駆が浸水し、おしりが水に浸かったこと（冷たいとは思わなかった）。

陸好によると、徒渉点(4850m)に至り少し高度が下がった辺りで、多少意識がしっかりしてきたという。私の記憶も幻想と入り交じりながらもこの辺りから始まる。

7月29日

大紅柳灘→三十里営房(3670m)

朝、お茶や味噌汁を飲まされたことを覚えている。次の記憶は三十里営房になる。レントゲンを撮るため病院に行くとき、最初はふらふらと歩き出したのだが、階段を降りようとしたところで張氏が見るに見かねたのかおぶってくれた。このころから皆に迷惑をかけるのが心苦しいと感じるようになった。レントゲンを撮られるのが大変しんどかった。三輪ドクターがレントゲン写真を見て、肺水腫の跡があると言っていたような気がする。三十里営房では少し回復していたようで、他にも人見や毛利からの励まし、夜の小便時の乙藤、伊藤との会話、寝返りを打つたびにしかられたことを

覚えている。

7月30日

三十里営房→イエチエン(1400m)

後日知ったことだが、三十里営房で隊員と別れ、能田隊長、三輪ドクター、浅野、張連絡官、イエチエンの王氏、科学院のドライバー王氏とともに科学院の四駆でイエチエンに向かった。

車の中では、揺れるたびにひどい頭痛がしていた。この日、言語障害により、うまく発語できないことを自覚した。移動中、漠然とした安心感を感じていた。昼飯を能田隊長に食べさせてもらう。情けなかった。うどんのトウガラシ炒めだった。

クデイはまだかまだかと周囲の景色を見ながら頭痛に耐えていると、アカズ峠らしきところを通り、イエチエンに着く。先に劉氏とともに帰った人たちと会う。最初2階の部屋に入ったが、バス、トイレがなく化氏の部屋と替わってもらった。

夕食はおかゆを独力で食べたが、だいぶんこぼしていた。三輪ドクターに風呂に入れてもらった。

この日の記憶はだいぶん正常に思われるが、後述するように、実はとんでもない幻想とともに四駆で移動していた。

7月31日

イエチエン→カシュガル(1325m)

四駆で砂漠を走り抜けカシュガルへ。頭痛は続き、セデスを飲む。この日は疲れていたのか、到着後すぐ夕食もとらずに寝てしまった。

後日聞いたところでは、能田隊長に向かってとんでもないことを言っただけらしい。

8月1日 カシュガル→ウルムチ

この日は食事も、ふらふらと歩いて食堂に行き、独力でとることができた。食後は

皆が京都への連絡、切符の手配で忙しい中、1人眠り続けた。このころはほんの少し行動すると、すぐに眠ってしまう状態だった。頭痛は続いており、セデスを飲む。

能田隊長から日本に帰ることを伝えられた。以前から周りの人の会話を聞いて薄々理解していたし、幸いにして高度の感情機能までは脳が回復しておらず、何の感慨もなかった（発語機能は侵されていたが、聞く方はそんなにおかしくならなかったらしい）。

ウルムチ、北京に迎えにくる人を聞かされ、手紙を渡された。私の持つ荷物は能田隊長らが整理してくれる。

飛行機乗り込みの安全検査で苦勞する。飛行中はひどい頭痛を感じた。

ウルムチでは福島記者と孫氏が出迎えてくれ、福島記者の部屋に泊めてもらう。食事をとるが、深夜のためカステラぐらいしかない。普通の人にはあまりおいしくない中国製カステラであるが、ペプシコーラとともにたくさん食べる。

この日午後、昼寝から覚めると言語障害がだいぶん回復し、話しやすくなった。また食欲も回復。

ウルムチでは福島記者の手により、京都（中島総隊長）に連絡がとられた。

この日の精神機能はほぼ平常だったと考えられる。

8月2日 ウルムチ→北京

中国登山協会の李氏に迎えられ北緯飯店へ。北京は雨だった。途中JALの切符を買う。ホテルから京都の中島総隊長宅、ACK留守本部に電話し、明日1人で帰る旨伝える。この日、久しぶりに機中でビールを飲んだ。ひどく酔いそうで怖かった。飛行中の頭痛は続く。

8月3日 北京→大阪

税関でビデオを持っていないことをとがめられ、補償金として5000元とられた。飛行中は相変わらず頭痛が続く。大阪の免税店で酒でもと思うが、不謹慎とやめた。出迎えにきてくれた人たちとコーヒーを飲み、やはり日本のコーヒーはうまいと思う。会員の月原さんの運転する車で新河端病院に入院。この夜、37度の微熱があった。

8月4—13日 入院生活

種々の検査の結果、脳波に異常があり13日まで入院。当初は会話もスムーズでなかったが、2、3日で回復した。ただし、26日まではごく軽い頭痛は続いた。また退院後7日ほど愛知県豊橋の実家に帰ったが、ひどい夏バテのような症状が出てしんどかった。

以上が行動についての私の目から見た報告である。なお7月26—28日には様々な幻想を見ており、半ば夢の中に生きていたようなものである（この報告は8月26日に私の記憶と三輪ドクターが書いた症状に関する手紙をもとにして書いた。その後、帰国した隊員から話を聞き、10月27日に訂正追加した）。

前記したように、り病後低所に移動する際、傾眠状態を続けたが、いくつかの連続する幻想、夢を見ていた。この幻想は外部の現実と密接に関係しており、病状を理解する上で有効と考え記述しておく。

恐らく7月28日のことだと思う。私は実家近くの大清水なる町で中学生時代の友人とともに酒を飲んでいて、卓球部の仲間である。かなり深酒をしたようで、翌朝二日酔いの中、四輪駆動車に乗り大清水駅前より西に向かう。周りの景色は新蔵公路のものとよく似ていた。

そして本来存在しない空港に着く。そこか

ら中国に飛んだ。直行はせず、途中どこかタイかビルマ辺りで1度着陸する。この町で泊まったところは中国の賓館によく似たホテルである。数泊したのだろうか。遠山、福島記者も一緒であった。

ここからコクピットが科学院の四駆そっくりの軽飛行機に乗る。操縦士は科学院のドライバー王氏。この飛行で中国に到着した。場所は新蔵公路風。ここでは兵站風のところに泊まる。

どうやら日本、北京、カシュガル間の旅行、新蔵公路が入り交じっていたらしい。徒渉点にて三輪ドクターに「ここはどこか」と尋ねられ「大清水の土産物屋前」と答えている。

30日、イエチエンに向かう四駆に揺られながら頭痛に耐えていた。四駆の前席に金属講座を退官された川野名誉教授がいる。「諸君ボーキサイトを発見したよ」と語っていた。川野先生は白髪であり、同じく白髪の能田隊長を見て、空想を膨らませたと思われる。

また同日、アカズ峠付近より内戦が始まったと思っていた。銃火の中、四駆は突っ走り、最後は滑走路の中を走って不思議と平穏なイエチエンの賓館に着いた。この幻想については理由が思い当たらない。私の想像癖といったところか。

1985年 日中友好ナムナニ峰合同登山隊報告

日中友好ナムナニ峰合同登山隊の成立について

齋藤 惇生

1. はじめに

AACKは1985年にナムナニ峰初登頂と言う輝かしい成果を上げた。これには多くの会員達の長年にわたる賢明な努力と献身的な苦勞があった。そしてまた筆紙に尽くし難い数々の思い出が残っている。ここでは、「合同登山」と言う、AACKにとって全く初めての登山形式が、どのようにして誕生、成立、実現したかを、少しく冗長になるかもしれないが、私なりに記録を書き留めておきたいと思う。

2. AACKは創設以来、グルラマンダータを登山目標としていた

時報10号の巻頭言にあるように、AACKは、K2、カブルーと同時に、グルラマンダータも、登山対象の一つとして考えていた。このことを、ナムナニ峰壮行会の席上で、今西錦司元会長が、私達に、「グルラマンダータは、AACKができた頃から、一つの目標であった。自分の目の黒いうちに登れるようになるとは思ってもよらなかった」と、感慨深げに語られたのだった。私達の世代は、それまで遺憾ながら、はっきりとは知らなかった。先輩達の長い熱い思いに接して、AACKの伝統に身のひきしまる感動を覚えたのであった。

1978年当時、AACKの若手は、カラコラム、ネパール遠征の後、次の目標として、中国の山を研究していた。第一目標はグルラマンダータ、第二にナムチャバルワ、第三がウルグムズターグであった。そして第一目標に狙いを絞り、中国事情に詳しい友好旅行社を通じて、関係書類を中国関係先に提出したり、

また、乏しい登山情報の収集に努めていた。この辺の事情は、時報9号とカンペンチン報告書に、西山孝が詳しく述べている。

3. 中国登山協会との最初の接触 (1979年春)

思いがけなく中国に入る機会が訪れた。それは、1979年春の、杜甫研究者として名高い、吉川幸次郎名誉教授を団長とする京都中国文学研究者訪華団であった。桑原武夫先生は、副団長で、私に、付き添い医として参加を求められた。私は1964年から2年近く台湾の病院で技術指導をした。それまでは台湾へ渡航したことのある日本人に対し、中国政府は入国を許可していなかった。しかし、1979年3月から方針が軟化して、中国政府は台湾渡航の経験のあるものにも入国を許可するようになった。それで私も団に加えて貰えたのであった。私の肩書には、面映ゆいことだが、中国文学愛好医師としてあった。

出発前に、西山孝から、グルラマンダータの許可を取るべく中国登山界の中心人物である史占春に会って、交渉して欲しいとの大役が託された。当時は、中国登山界との接触の方法が判らず、暗中模索の状態であった。中心人物で鍵を握るのは1960年、1975年の中国チョモランマ隊の登山隊長である史占春でないかとの認識であった。私はと言えば、台湾に関係した者は大陸に行けない政治情勢であったため、あまり中国の山には関心を持ってなかった。しかし託された一枚のグルラマンダータの写真には大きく心を動かされた。

この写真は北大隊が、1963年に西北ネパールの山ナラカンカールを目指して遠征した時

に撮ったグルマンダータの東南面の写真である。北大隊は結局ナラカンカールを同定できなかったのだが、調査中に越境してしまい、地元民がニヤイモナニールと呼んでいるグルマンダータに接近して写真を撮ったのである。このことは、JACの山岳59号に報告されている。私が託されたのは、北大に依頼して、提供してもらったものであった。

この山岳59号の巻頭にはグルマンダータの東面の写真がある。また、この59号には、同志社のサイバル遠征の報告もあり、平林克敏さんが撮ったサイバルから見たグルマンダータの写真が掲載されている。

中国はこの頃、文化大革命がやっと終焉して折から雪解けムードであった。国賓待遇の吉川先生が団長であったので、中国側から精一杯の歓迎と接遇をうけた。北京から汽車で洛陽、西安、成都、重慶、そして長江の三峡の険を抜けて武漢までの船下り、そして北京に戻って来るという、吉川先生の積年の望みであった杜甫の足跡を辿る旅であった。団員も中国文学、歴史の専門家、途中いろいろと教えてもらって楽しかった。

私は通訳として同行された葉卓如先生（東京女子医専出身の女医）に北京についてから、桑原先生と私は登山協会（CMA）の史占春に会いたい旨を申し出ておいた。北京に帰ると、嬉しい回答がもたらされたのだった。

ここで桑原先生について一言。フランス文学者の先生は、中国文学、歴史に対する造詣も深かった。成都では四川大学の教授連相手に三国志のことが話題になった。それに登場する人物など、私のほうが詳しくと得意そうであった。実は、東洋史学者の父上から、いつも寝物語に三国志を聞かされていたのである。

1979年4月26日、桑原先生に同行して、体育総会の一室を訪問した。先方はCMAの当時副主席であった史占春と、国家運動体育生理研究所の翁慶章医師であった。翁医師は登

山隊にしばしば同行している高所生理学の研究者であった。私は、チョゴリザ、ノシャック、サルトロカンリなどの報告書を贈呈して、AACKの活動を紹介した。そして、グルマンダータの写真と概念図を示し、登山希望を申し入れた。この時、史占春は、最初「グルマンダータ」と言っても、ピンと来ないようだった。中国人は外国語を全て似た発音の漢字に置き換える。それで外国語の本来の発音とは、相違してくるのである。

史占春は、中国は登山についても門戸開放の機運にあるが、今ははっきり言明できない。しかし将来は外国隊の受け入れは必ず行うであろう。その時また相談しようとは回答した。これぐらいの回答しか貰えないだろうとは思っていたが、AACKの存在と希望をしっかりと認識してくれたようで、強力な楔を打ち込んだ記念すべき日となった。

4. 史占春に再び会うことができた (1979年秋)

同じ年の1979年8月6日に、当時JAC会長だった西堀栄三郎先生から、突然の電話があった。「中国が先ず二つの山を開放した。チョモランマは日本、シシャバンマは西独に決まった。JACは、今秋偵察隊、そしてその結果に基づいて、来春本隊を出す。については今秋の偵察隊の隊長として行って欲しい」と、一方的な強い要請であった。

文化大革命中、対外的に閉鎖的であった中国とのスポーツ交流は、それまで卓球だけで、ピンポン外交と呼ばれた。1979年日本の各スポーツ団体の代表が、新たな交流を求めて中国を訪問した。西堀先生はその機会に訪中して、話をつけてこられたのである。許可は来たが、JACには中国の事情に詳しい人がいないのが実状であった。西堀先生は、ヤルンカンで一緒だった私に、白羽の矢をたてられた。私が最近中国に行つて史占春に会ったこと、また少しは中国語ができることを知って

適任と判断されたのだろう。

それまで私は、あまり熱心なJAC会員でなかった。そしていくらチョモランマが世界最高峰といえ、未登頂の山でなかったのに、この話には、あまり気が進まなかった。しかし、岩坪五郎のアドバイスもあり、最初の日本代表の偵察隊長になって、中国に印象づけることが、将来のAACKの中国登山にプラスになると考え、受諾を決心した。

参加の条件の一つにAACK会員一人を入れてほしいと要望し、受け入れられ、横山宏太郎が参加した。1979年9月、偵察隊は北京に入った。再会した史占春は、多分、私を見て、「この春はグルマンダータで現れ、秋にはチョモランマでやってきた」と、びっくりしたに相違ない。この辺の経過は、時報9号の「チョモランマ登山をふりかえって」の中に既に報告しているので参照されたい。

この偵察隊で、後でナムナニ登山にも参加して、重要な役割を演じた人物と、知り合うことになった。現CMA常任副主席の曾曙生である。彼は湖北省出身で、中国語を私にわかり易く喋ってくれる。私は彼に、AACKのグルマンダータ登山の願望を、とくとアピールしたのであった。彼もグルマンダータを詳しく知らなかった。山の高さ7728（チーチーアルパー）で覚え、協力を約してくれた。私は彼に瓜拉曼達塔（漢字でクオラマンタアタと発音）と説明したことを覚えている。この漢語を何時、どこで覚えたか、もう一つ記憶が定かでないが、多分、史占春に始めて会った時、教えてもらったものと思う。写真は例の北大隊のものだったが、地図はどれを使ったか思い出せない。1979年12月印刷の初版の青藏高原地図には納木那尼（ナムナニ）7766mとなっている。それまでの資料は、英国統治時代のインド測量局測量の7728mであった。1983年に日中合同登山の話が具体化しだした時、CMAは、名称は納木那尼、標高は最新の測量で7694mであることを宣言し

た。

チョモランマの偵察を終え、帰国するとき、北京は、チョモランマ、シシャバンマ、コングール、ボゴダ、ムスターグアタ、コングールチュビエ、アムネマチン、ミニヤコンガの8山を開放した。

私と横山は引き続き、1980年のJAC本隊に参加した。それに甲斐邦男が新たに加わった。西堀先生は総隊長であった。そして北東稜ルートと、北壁正面ルートの登頂に成功した。

このチョモランマ本隊の連絡官は、王富洲（1960年の北東稜初登攀者で、現CMA主席）であった。副は張俊岩であった。私はBCで二人にグルマンダータのことを頼んだ。彼等は理解を示し、賛成はしてくれたが、実現に向けての助言は何等得られなかった。この時横山が成都で、CMAがAACKにミニヤコンガを許可する用意があると聞いて連絡してきた。行くべきかどうか、少し検討を重ねたが、結局、北海道山岳連盟が許可を取った。

5. 中国登山協会代表団の来日 (1980年9月)

チョモランマの成功を祝い、その御礼もかねて、チョモランマの主催の3団体、日中文化交流協会、日本山岳協会、日本山岳会は、CMAの関係者を招聘した。西藏自治区人民政府副主席で、CMAの主席の喬加欽を団長として、史占春、王富洲、張俊岩、羅則、通訳の李有林の6人が来日した。代表団は、東京より上高地をまわって、9月12日に京都にやってきた。私は関係者の一人として、また、老朋友として、上高地へ行き、そして京都の接待を引き受けた。不自由があったらいけないと思い、彼等が宿泊した京都ホテルに泊まり込んだ。

京都では、既に京都山岳会がボゴダ、小谷隆一氏の京都カラコラムクラブがコングールの許可をとっており、この二つと京都府岳連、

AACKが、昼、夜に分けて、接待、招宴した。それまでに各種団体代表で委員会を作り日程を調整した。

AACKは13日夜、祇園すえひろにて、しゃぶしゃぶの宴会をした。宴の前に、近藤良夫会長が挨拶され、グルラマンダータの登山許可をお願いされた。史、王、張の3人は中国で私から話を聞いていたが、喬主席は聞くのは初めてだった。彼は地図を見て熱心に山の位置を確かめ、この山はチベットのアリ地区にある。アリ地区はチベットの中でも最も僻遠、不便の地で、開発が遅れている。ラサからヤールツァンポ沿いに行く道と、チャンタン高原を走る二つのルートがある。ヤールツァンポ沿いは、夏の増水期はしばしば道が壊れる。チャンタンのほうは、夏は草が茂って道が分からなくなる。冬は両ルートとも凍結して危険で、いずれにしろ交通が大変困難なところだなど説明された。当時は、チベットの最高責任者でもこれぐらいの知識であった。いずれにしろ宜しく申し上げますとすることで、宴になった。しゃぶしゃぶは、肉が美味しいと大変好評であった。

翌14日は午前中同志社訪問、昼は京都山岳会の招宴であった。最初同志社は接待の委員会に加わっておらず、訪問、接待のスケジュールに無かった。後で同志社より申し入れがあり、また是非と平林克敏さんから私に直接電話があったりした。相談の結果、休養の時間にあてていた最後の日の午前を同志社訪問にあてた。喬主席に休養の時間がなくなって済まないと言ったら、彼は、客は主人の意向に従うものだと、中国の格言を言い、「没関係（メイクワンシー、心配要らない）」と一笑した。

同志社に着くと、現役、OBが門前口から並んで拍手、大歓迎である。先ず茶室でお点前の一服、大原教授より同志社と中国との交流の様子の説明があった。その後アーモスト館へ案内され、ミーティングが始まった。平

林さんが戦後のアピ、サイパル、ドウラギリと続く同志社の登山を語り、最後に次の目標として、アピ、サイパルから望んだグルラマンダータに登りたいので許可をお願いしたいと結んだ。私はこれを聞いて驚き唖然となった。一瞬間の中が真っ白になった感じがした。同志社はAACKがグルラマンダータを望んで動いていることを十分承知しているはずだ。それに後で無理に頼んできたのをやり繰り返して訪問を実現させたのに、これでは無礼でないかと思った。その時、私は、グルラマンダータは、絶対どんな手を使ってでも同志社には渡さないぞと心に誓った。申し出に答えて史占春が、少し長い演説をしたが、内容はこれまでと特に変わったものは無かった。昼の京都山岳会の招宴は京都ホテルの中華料理、桃寿であった。遠藤京子さんが長い挨拶をしたが、私は同志社でのことが頭の中に繰り返し思い出されて、少しも聞いてなかったし、中華料理もさっぱり美味しくなかった。その日の午後2時、代表団は京都駅を立った。

同志社のこの一連の動きは、吹田佳晴の四姑娘峰の報告、『遙るかなり白き姑娘の微笑み』に詳しい。同志社は1979年の夏ごろより、日中友好協会を通じて、中国にたいし運動を開始している。そのころゴングールの許可問題をやっていた日中友好協会の吉田和興を通じて、1980年6月にグルラマンダータの計画書を提出していた。この後同志社とAACKの熾烈な許可獲得の戦いが始まるのである。

6. カンペンチン遠征 1982年4月初登頂

中国が外国隊に対し登山許可をするのに二つの大きな条件があると思う。一つは交通が確保されることである。中国は外国よりの入国者を原則としてお客と見る伝統がある。客人が旅先でウロウロしたり、不自由があったりすることを嫌う。これから先はあなた方勝手に行きなさいなどは考えないようだ。もう一つは政治軍事上に問題のある所は、外国

人の立ち入りを解放軍が嫌う。これは当然のことだろう。グルラマンダータは、チベットでも最も交通の不便な僻遠の地だし、崑崙を越えアクサイチン高原を通過して、グルラマンダータの南のプラン（普蘭、タクラコット）に至るインドとの紛争地帯に近い。新疆からの新蔵公路は人民中国が成立後直ぐ突貫工事で作った軍用道路である。グルラマンダータはこの二つの条件の面から、許可が出るまで相当の年月、5年、10年という単位が要るのでないかと思われた。この間AACKは手をこまねいているわけにいかない。ヒマラヤの経験、遠征の経験が薄れては、いざと言う時、困る。

1976年秋、井上治郎がまとめ役となってランタン谷の奥の中国国境にあるランタンリのアプリケーションがネパール外務省に提出された。当時中ネ国境は確定していない部分があつて、両国は交渉を重ねており、ランタンリも直ぐに許可がくるとは思えなかった。翌1977年9月、横山宏太郎以下3名のランタンリ予備調査隊が派遣された。この調査と、後の1981年秋の中国側からの偵察については、横山が時報9号と『カンペンチン』に報告している。また、幻に終わった1980年のミニヤコンガ峰学術調査隊と、雲南学術登山隊の報告は、『カンペンチン』に、西山が報告している。

1981年4月25日、訪中している平井一正より、AACKがランタンリをチベット側から登るならCMAは許可するだろうとの連絡が入った。早速会議して、ネパール側からの許可は何時になるか分からないから、中国側から登ろうと意見は一致した。1981年秋偵察、1982年春本隊と計画し、打ち合わせのため、5月下旬、西山と私が訪中することになった。ところが、5月20日ネパールより、ランタンリを日ネ合同で許可するとの連絡が入った。ネパール側から、中国側から、いや両方とも同時に、意見が闘わされた。が、これまで

と、将来の関係を考えて、ネパール側より登ろうと決定された。私達の訪中は、このことを中国に釈明し、了解を取り付けるためにと、変更された。5月31日北京に到着。早速、ネパールよりランタンリの許可がきて、これまでの関係よりAACKは、ネパール側から登りたいと申し出た。史占春は、「老朋友だ、遠慮は要らない、ネパール側より登ったら良いだろう」と、答えてくれた。翌6月1日午前、今後の中国での活動について話し合っておこうと会談した。その時史占春は、最近決定されたい国境線を明記した地図を持参した。多分解放軍の未公開地図だったと思う。そしてランタンリはネパール側から登れば中国領を通らないと登れないと言う。地図を見ると、東はランタン谷を取り巻く主稜線を通っているのに、突然ランタンリから、真っ直ぐに人為的な線が引かれて南下し、5966m峰に達し、そしてまた主稜線を伝わっている。私達が予定しているティルマンのコルの西南稜は、完全に中国領になっている。これには仰天したが仕方がない。帰って相談し直すことにした。CMAはランタンリを、1982年秋と、1983年春はAACKのためにとっておこうと好意的であった。二人が帰国して早速ヒマラヤ委員会が開かれ、AACKとしては、ティルマンのコルが中国領と分かったからには、これを無視して登ることは出来ない。もう一つの東稜は取り付きが極めて困難と考えられる。ネパール側は諦めて、中国側より登ることに決定し、ネパールと日本山岳協会にその旨打電した。そして秋に、横山宏太郎、牛田一成、中川潔の三名を偵察に派遣することになった。9月29日、偵察隊は京都を出発した。その一ヶ月ほど前、AACKが諦めたネパール側よりのランタンリを、山形の岳人長井がポストモンスーンにネパールと合同で登ると言うニュースが出た。（8月20日の新聞）。西山は、これについては、大変気になるニュースだったが、計画は予定通りに進め

られたと『カンペンチン』に書いている。そして10月28日、ランタンリが登られたとの報道があった。彼等は越境して登ったに違いないのだが、登られたのは事実である。

早速ヒマラヤ委員会が招集された。新しい未踏峰について論議された。前回の西山、斎藤の訪中での感触では、新しい山群の開放は未だ難しいと思われた。ランタンリの近くの同じ山群のカンペンチンが取り上げられた。この山は平井が地図上で見付け、すでにCMAから神戸大にとの約束を取り付けていた。しかし、神戸大はカラコルムで遭難があり、その対策のため1982年は、見送ることになっていた。平井と交渉し、1982年春にAACKが登っても良いとの了解を得た。

この交渉と、偵察隊の出迎えをかねて、上尾、斎藤が、10月26日北京に赴いた。最初この申し出に、交渉相手になった許競副主席は、すんなりと納得しなかった。平井よりの手紙を見せ、また、会談の場から神戸大に電話をした。幸い繋がり、日本語の達者な許競さんは、直接平井に話をして確認した。そして、他に登山申請の無いことを確認して、許可をした。この時、同席の李舒平医師が、ランタンリの許可状の、ランタンリに二本棒を引き、康彰欽（カンペンチン）と書き直した。これでいいのかなと少々呆気にとられたことを覚えている。

偵察隊の行動は、決して順調でなかったが、幸いカンペンチンの写真も撮ってきていた。その報告は、『カンペンチン』に、横山が書いている。

翌27日の会談は、偵察隊の現地費用についてであった。会計の牛田が粘り、中国側のマネージメントの不備だった点について値切った。許競さんも根負けして成功した。しかしその後、値切った分ぐらい、カンペンチンの登山料が値上がりした。初登の山の登山料が改訂されたのだと説明された。中国と交渉していると、しばしば予告無しに突然の登山料、

人件費、交通費の値上げがある。社会主義体制だと、この様なことは普通なのだろうが、予算が大幅に狂ってきて困るのである。

牛田は、腹痛、下痢が続いていた。大阪の検疫を通るとき、活をいれ、胸を張らせ、頑張らせた。そのまま新河端病院へ送り入院し、治療した。幸い赤痢などでなし、疲れと、腸炎で、すぐ回復した。

カンペンチンは、近藤良夫隊長が、シガツェで高所肺水腫を発症し、急遽、日本に帰られるという事件はあったが、1982年4月21、22日、登攀隊員は全員登頂し、大成功であった。連絡官は、チョモランマ偵察以来おなじみの大男で気は優しい張俊岩、コックは、やはりチョモランマで腕も人格も見込んだチベット人のタットー（達東）であった。タットーは是非と頼んで派遣してもらった。協力隊員四人の中の、ツーレントーチとジャブーは、その後ナムナニにも参加し登頂隊員となり、チョモランマ、ナムチャバルワと活躍、中国の代表的登山家に成長している。

7. 両大学、合同登山への動き (1983年に入って)

同志社は1981年に、四川の未踏峰である四姑娘山への許可を取り、7月に登頂した。既に述べたように、AACKは1982年にカンペンチンに登頂した。双方とも互角にならんで、機を見てはCMAにグルラマンダータをアピールし続けた。

今西寿雄、梅棹忠夫先輩が、1982年9月コングール・トレッキング（京都日中友好協会の企画）で、シルクロードへ行かれたときも、CMAに接触をお願いした。梅棹さんは北京で、直接史占春に会われ、CMAは京大と同志社の合同なら、グルラマンダータを許可するかもしれないと言う感触を得て帰ってこられた。

このトレッキングは、吉田與和→史占春ルートで企画実現したもので、旅費は2週間で

97万円という高額であった。

1983年1月30日、顔繋ぎ、根回し、情報収集のため、松林公蔵と一緒に訪中した。ビザの発給を頼むとき、何のためにくるのか、グルラマンダータの話なら進展はないと言われた。老朋友に会って、カンペンチンの医学調査の結果を報告したいのだと答えた。北京に着くと、史占春は私達の意を察して、31日午前中、許競、陳尚仁と共に、会談してくれた。グルラマンダータの開放は、恐らく3年ぐらい先になるだろう、同志社との合同は必須でないとの答えだった。梅棹さんの感触とは違った答えだったのでほっとした。『カンペンチン』の報告書の序文を史占春に依頼して承諾してもらった。2月1日には未開放の盧溝橋の見物をし、2日午前、運動生理研究所で、松林がカンペンチンでの研究を発表した。その日の午後、帰国した。

その後暫く動きはなかったが、7月29日CMA一行8人が、日山協、日中文化交流協会の招聘と言う形で来日した。团长史占春、副团长許競、そして西藏、四川、新疆の登山協会のメンバーであった。中国の山の紹介が目的と聞いた。

京都では、8月6日AACKは京都ホテルのグレースで、フランス料理で接待、更に翌日、近藤良夫会長が私宅に、昼食を招待された。これはカンペンチンで、現地発病され、CMAに世話になった御礼をかねていた。グルラマンダータに関しては、結局、希望を述べただけで、進展した返事は聞けなかった。CMA訪日団は8月11日帰国した。

同志社の意を受けた吉田與和は、1982年5月に日中友好協会30年記念事業として、1983年4月には日中国交回復5周年事業として、グルラマンダータ登山をCMA、その他中国の関係団体を通じて、中国政府に要請している。7月の打ち合わせ会議で、京都大学からも要請があり、留意してほしいと言われ、両大学の合同を示唆されたらしい。（以上、吉田メ

モによる）

1983年8月30日に、日中友好協会の吉田與和より、史占春に頼まれたことがあり、伝えたいので会ってほしいと、電話があった。承知して、その夜、指定の小料理屋「いよべ」に行った。私は彼に会うのは三度目だった。1980年CMAが来洛した時と、1981年の上尾庄一郎との北京での時以来であった。

先方は吉田と、初対面の佐々木哲男だった。佐々木は、京大文学部出身で日中友好協会の仕事をしているとだけ紹介があった。また、毎日の斎藤清明も来ていた。一杯飲みながら雑談の後、本題に入った。「先般来日したCMAとの話し合いでわかったのだが、グルラマンダータの許可を中国の國務院などの上部機関から取ることは、軍事的、民生的に問題の多い場所なので大変困難である。この壁を破るには、何か大きなインパクト、例えば日中ネ三国、日中合同のような国際性を加味する必要がある。その前に京大と同志社が個別に折衝するのを止めて一本化して欲しい」と、初めて合同隊の案が披露された。

私は、「これまでの経過、情報から、これは史占春が吉田に合同の仲立ちを依頼したに違いない」と、思った。そして、「無理に京大単独を主張しつづけると、喧嘩両成敗で、第三の他の隊にグルラマンダータをさらわれるかも知れない」と判断した。そこで、私個人の意見だがと断って、「合同に賛成、そしてこの方針でAACKのメンバーと話し合ってみよう」と、答えた。

吉田の「してやった」とばかりにほっとした顔付きになったのが印象的であった。

一週間後の9月6日チベット委員会でこのことを協議した。当然紛糾した。「吉田某などの意見は無視しろ」など、強硬な意見も出た。吉田がどんな人間か知っているものはいなかった。こうなることは覚悟していたが、結局のところ、もう少し、特に北京からの、情報を得てからにしようと言うことになっ

た。このことを吉田に伝えると、彼も少し焦ったようだったが、一応了解し、訪中してCMAの意向をよく確かめて両大学に伝えたいと言った。その後、彼は訪中し、次のようなCMAの意向を伝えてきた。

- ① グルママンデータは、チベット側現地の呼び方のナムナニ（納木那尼）峰とする。
- ② 隊は全日本と全中国の合同。
- ③ 日本は、京大と同志社の合同隊を望む。
- ④ そして、この合同隊を全日本と格付けして対応したい。

10月18日吉田より連絡があり、斎藤清明と一緒に会った。佐々木が同席した。「通訳の于再清が来洛し、史占春がナムナニについて京大、同志社の合同を希望し、仲立ちを吉田に依頼した。ナムナニは中国の上部機関に知られていないので、チョモランマの国際隊の前線として、位置付けたらどうか、と言っている」とのことだった。そして、「同志社、AACK両代表と吉田が北京に来て話し合うことを希望している」と伝えた。

史占春の頭には、その頃より1988年の日・中・ネ三国合同チョモランマ登山隊の構想があったようだ。

10月22日「ふかお」という小料理屋で、同志社と初めて会談した。同志社は平林克敏、松村多四郎、AACKは上尾、斎藤清明、私、それに吉田、佐々木だった。上尾を呼んだのは、上尾と松村が同志社高校の同級生だったので、話が通じ易いだろうと考えたからである。

同志社側の発言を聞いていると彼等も何とかして同志社単独でと考え、吉田に一任して努力してもらって来たが、この情勢では仕方無い、合同を考えてもよいとのことであった。両者とも持ち帰って協議することになった。

10月24日、チベット委員会が開かれ、私よりこれまでの経過を報告、CMAがまず京大と同志社の合同を希望しており、同志社も

渋々ながら同意していると伝えた。

次の11月6日チベット委員会が開かれ、遂に正式に合同隊案を可決した。以後前向きに急速に走り出した。同志社も正式に合同隊案を決定した。

8. 胡耀邦総書記の来日、対等合同の大事業に発展（1983年11～12月）

第一回の合同訪中は11月11日に出発、14日帰国した。平林、吉田、佐々木、私の四人であった。史占春は、「ナムナニは、京大と同志社の合同になれば開放しやすい。日中の二国、または、日中ネの三国の国際隊になれば更にとりやすいと思う。若し開放されたら、色々な面で希望に添うようにしたい。中国は来年はナムチャバルワを登る」と話した。吉田、佐々木から、日中ネ三国でやることは意義深いとの意見が述べられたが、私はこれまで国際隊の失敗例が多いので反対し、気心の分かった日中合同でやるべきだと言った。平林も三国合同には消極的な意見を述べた。

史占春から、「近く胡耀邦総書記が訪日される。京都に行かれたとき、機会をとらえて、この計画が彼の耳に入るようにしてほしい」と、言われた。

これは京都で実行され、ナムナニ計画が大きく前進するきっかけになったのである。この訪中後漸く合同隊として一致した行動が始まったのである。

1983年11月22日、第一回の正式三者会談が、京都ホテルで開かれた。AACK（岩坪、西山、斎藤清明、私）、DAC（松村、平林、大日、岩田）、日中友好協会（吉田、佐々木）。テーマは、「京都にくる胡耀邦に対し、登山許可を得るため、政治的働き掛けを行う」であった。その結果、林田京都府知事を通じてお願いすること、随行の筆頭顧問である張香山（早大出身）に知己の吉田が予め根回しすること、ナムナニ計画書を作成すること、その他関係の人々に理解を求めると手筈を決

めた。

11月28日、国賓として来日の総書記が京都を訪問され、そのおり、林田知事から、私達の願いを申し出て、計画書を渡していただいたのである。

総書記は、言下に、「大変良いことである。これからは青年が活躍する時代である。是非実現できるようにしましょう」と、嬉しい言葉が出てきたのであった。総書記は、帰国後直ちに指令されたらしく、CMAより、12月になって間もなく、「ナムナニ計画が正式に上部機関の批准を得た。協議したいので代表が訪中してほしい」と、通知してきた。

12月12日、第四回三者合同会議は、日中友好会館で、開催。中国よりのナムナニ許可通知を確認した。AACK（井上、斎藤清明、私）、DAC（松村、角谷）、協会（吉田、佐々木、大元）。

第五回の際は、隊の構成問題で難航した。「総隊長はだれにするか?」「首脳陣はどうするか?」で、丁々発止の議論が続いた。DACの某君が、突然土下座して、「平林を総隊長にして」と言う一幕もあった。最終的には、日本側の総隊長は斎藤、登山隊長は平林と決まった。AACKに格を譲ってくれたので、DACには一切の登山活動の指揮を委ねることにしたのである。事務局は吉田が責任者となり、この三人が代表者となって、隊を運営することになった。

この会合の後、私達は、DAC側の疑心暗鬼を取り除くことに注意した。何事にも平等対等を原則とした。

1984年1月2～5日、再び三人で訪中し、日中友好事業の登山について、具体的に協議をおこなった。対等合同平等の思想が基本方針であった。

- ① 4月に先遣隊を出す。費用は折半。日本側9人。本隊は1985年。
- ② 名誉総隊長に中国スポーツ省の李夢華が就任。

- ③ ルートはカシュガルからの新蔵公（軍用道路）をとる。解放軍の協力約束を得る。
- ④ 学術調査を行いたい。（後程、科学院と折衝）
- ⑤ 史占春を両国合同隊の総隊長に推薦する。

1月4日、京都で総書記にこの計画を取り次いで頂いた張香山中国国際交流協会副会長を訪問し、御礼を述べた。

1月8日、AACKチベット委員会が開かれた。於、京大会館。出席者は、近藤、岩坪、中島暢、平井、中島道、堀、林、酒井、上尾、木村、福島、松林、斎藤であった。

北京の経過報告が行われ、協議決定が為された。これでAACKの内部意思統一が出来上がった。

9. ナムナニ峰日中友好合同登山隊 出発まで（1984年～1985年春）

先遣隊の隊長に井上治郎が決まった。岩坪が担ぎ出しの努力を行った。日本側は、隊員5名、報道4名であった。

以下、記述は簡単にしたい。詳細は『ナムナニ』（毎日新聞社）に譲る。

1月16日 中国領事館新年会に参加。

22日 第6回三者会議で、事務局発足、費用折半、佐々木専従。チベット語、中国語の学習開始。

29日 偵察隊の予算審議。

2月04日 両者融和を目的とて宴会を催す。斎藤清明により毎日の後援が決まる。

22日 実行委員会発足。四手井綱英京都府大学長が委員長就任。これは吉田の知恵によるもので、先生のごつくばらん暖かみのある公平な人間性が、DACを納得させる基となった。登山隊のならず、学術面においても、大きく貢献された。

この頃毎週月曜を定例会議日とし、水土を臨時とした。

3月09日 毎日新聞、毎日放送(MBS)の正式参加決まる。偵察隊に斎藤清明記者の派遣決まる。

20日 AACK理事会。偵察隊送別会。

4月06日 先遣隊出発、見送り。

この間、四手井委員長の下に代表委員として、斎藤、平林、吉田が諸問題を処理した。平等の原則を遵守して、本隊隊員は7人ずつ、プラス佐々木と決まった。当初、学術はしないと云っていたDACが、あとで国際観光学の玉村教授(山岳部長)の参加を申し込んできた。これも平等の原則により賛成した。

文部、外務両省の後援決定を見る。後援会会長に桜内義雄氏が就任。

6月08日 先遣隊帰国。ロングスタッフが試登し、中国側も考えていた、尾根ルートを止め、ザロマロンバ氷河をルートとする選定を行った。井上の輝かしい功績であった。

23日 訪中して覚書交換。

7月14日 中国側来日。正式覚書交換。

8月12日 日本隊員決定、結団式。

10. 結 び

1985年5月26、28日、遂に登頂の成功を見る。

四手井実行委員長は、「混成チームでは、成果が危ぶまれるとの見方があったが、国立、私立の違い伝統の相違は、山に入れば登頂意識で、雲散霧消するであろう」と、述べておられる。正しくその通りであった。しかし、計画の推進者だった私は、あれだけの膨大なエネルギーを消費して実現した「合同登山」については、前段階の避けて通れなかった、人間社会の凝縮した営みが、数々あったと、何故か鮮明に思い出されるのである。

納木那尼峰先遣隊報告

山 田 和 人

隊 員

<日本側> 井上治郎(副隊長)、佐々木哲男、吹田佳晴、角谷弘司、山田和人

<中国側> 劉大義(隊長)、曾曙生、尚子平、鄒興祿、聶金庭、楊建国、趙建軍

期 間

1984年4月6日～6月8日

行動概要

4月6日 空路、中国(北京)入り

4月7日～13日 空路、烏魯木齊を経て喀什へ

装備、行動計画について中国側隊員と打ち合わせ

4月1日～27日 陸路、葉城、獅泉河を経て普蘭へ

途中、庫地(2879m)、三十里營房(3670m)にて高度順化、最高到達高度は5250m(界山大坂)

4月28日～5月1日 納木那尼峰周辺偵察及びBC建設

5月2日～16日 偵察活動

5月17日～19日 日中合同総括会議及びBC撤収

5月20日～31日 陸路、喀什へ

6月1日～7日 空路、北京へ

6月8日 空路、帰国(大阪)

偵察活動

(1) ジープを使った偵察

(A) 北西面遠望

5月2日、BCを起点にして日帰り

ラカス湖南岸及び東岸より、頂上・北

西氷河・西尾根北面を確認

(B) 東面・北東面遠望

5月10日 BCを起点にして日帰り

グルラ・ラより東面へ入る谷を確認

マナサロワール湖畔より北面を確認

(C) 北西氷河遠望

5月15日～16日 マナサロワール湖北東岸に1泊

北西氷河全体を確認

頂上直下の第一クーロワールを確認

写真撮影多数

(2) 北西面遠望による偵察

5月3日 BCより日帰り

BCの裏山にあたる6512mピークを目指す。

北西氷河右岸の尾根を5200m地点まで試登。氷雪は殆ど無く、ガレ場歩きとなる。氷河舌端へ下る鞍部を確認。

5月5日 C1予定地点(5100m)への荷揚げ4900m付近までは傾斜が緩い為、ジープを使う。

5月6日 C1入り

C1建設後、北西氷河左岸の尾根に試登し、北西氷河下半分の様子を偵察。比較的、容易なルートであることを確認。

5月7日 二手に分かれて偵察

A隊：谷沿いに氷河舌端まで行く。舌端からセラックと右岸の際を5720m地点まで試登。

B隊：C1から右岸側の尾根(5月3日に試登した尾根)に取り付く。

6100m地点へ到達し、氷河上のルー

トを確認。尾根より氷河舌端へ下降してA隊と合流。

5月8日 C1を撤収してBCへ帰着

(3) 南西面試登

5月12日 C1入り

南西尾根末端の4350m付近までジープで行く。

5100m地点まで登り、C1を建設。

5月13日

C1出発後、5500m付近より雪面に取
り付き、5460mピークまで試登。

グルラ氷河を偵察し、氷河上は容易に
ルートをとれそうであることを確認。

グルラ氷河が突きあげるコルから頂上
までの岩壁については、確認できず。

5月14日 C1を撤収し、BCへ帰着

(4) 本隊計画への提言

登攀ルート：北西氷河（ザロマロバ氷河）

7000mを越えてからの難度が低く、6000m
台の核心の見通しがつく

BH（色崗4700m）、BC（氷河舌端

5600m）、AC（氷河源頭7500m）

BCまではヤクによる運搬が可能

BHからルート全体を把握しやすい

頂上岩壁の突破ルートは、第一クローワ
ールが候補

<他ルート>

西尾根：ルートが長い

頂上稜線は南北とも岩壁で、

稜線上には岩峰あり

グルラ氷河：氷河は比較的、容易

頂上直下コルより300mの岩壁
が未詳

登山日程：4月から6月の約80日間

BH建設から撤収まで約50日間

往復キャラバン約30日間

6月中旬を過ぎると、降水量が増える

日中合同登山について

本先遣隊は、2つの任務を負っていた。一つは言うまでもなく、未踏峰である納木那尼峰の最も容易な登山ルートを確認することであった。もう一つの任務は、国際混成チームによる登山活動をスムーズに行うためのノウハウを得ることであった。今回の納木那尼峰登山は、初の日中合同登山であり、更に、日本側もDAC（同志社山岳会）とAACKの混成チームであることが前提となっていた。このような形態の登山隊は、AACKにとっても初めての経験であった。先遣隊に於ける人間関係（コミュニケーション）は、本隊の成否にも影響を与え得るものであったと言える。

幸い、DACとの混成に関しては、両会とも相当な力量、経験を積んでおり、登山様式も、生活面で若干の違いは見受けられたが、技術面、基本的な登山思想等の面では大きな隔たりは無く、コミュニケーションはスムーズであった。

しかしながら、中国側とのコミュニケーションについては、注意すべき点が幾つか挙げられる。項目を追って、筆者の感じたところを述べることにする。

(1) 言葉

一般的な国際共通語である英語は、中国登山に関しては殆ど通用しない。通訳がない場面（公式会議以外では、通常、通訳はいない）では、中国語或いは日本語を使って会話を行うことになる。まず、我々の側から積極的に中国語を話す（話そうとする）態度を示すことが必要である。そのようにしていると、中国側も心を開き、日本語を理解しようと努めるようになる。最初から西洋的にGive & Takeなどとやっていると、うまく行かないことが多い。相手の言うことが理解できない時（標準中国語を勉強していても、方言が激しくて聞き取れな

いこともある）には、手帳を開いて中国語を書いてもらうことも有効な手段である。但し、初めから「漢字だから筆談ができる」と考えると全く通用しないことは、留意する必要がある。日中の登山用語対照表は、常に携えておくべきである。

国内での登山準備の中で、中国語の修得は、全員が最も時間をかけて行うべき項目の一つであろう。

(2) 食事

食習慣の差は、双方にとってあまり譲歩の余地がないとの認識を持つ方が良好であろう。基本的な考え方として、常に逃げ道を用意しておくのがよい。

C1以上では重量の面から日本食が主流となるが、できるだけ白飯の量を増やすこと（これは、日中ともにおいしく食べられる）、そして副食（おかず）は飯と分離する方がよい。また、汁物は薄味で各自での味付けができるように心掛ければよいであろう。我々が便利で旨いと感じる味付け飯の類は、中国側の口に合わなかった場合に、彼らの食べる物がなくなってしまう事態となるので、避けるべきである。逆に、キャラバン中に得体の知れないものが入っている中国式のブッカケ飯が出てくると、情けなくなってしまうことを思い起こせば良いであろう。

先遣隊の場合は、C1以上の日本食を食べる機会が少なかった（数回しかなかった）こともあり、中国側はかなり譲歩をして「これでも何とか食べられる」と言ってくれたことは、頭が下がる思いであった。長期間の場合は、以上の点を十分に考慮して食糧計画を立てねばならない。

(3) 安全意識・登山思想

これは、日中間で大きな開きがあるように感じられた。我々は、個々の状況判断を

積み重ねて安全を確保し、最小の労力で目的を達成しようと心掛けているが、中国側は、大局的にGoが出れば、体力を使って我武者羅に前進する傾向がある。また、「本日の自分に課せられた任務」を強く意識しているようである。

例えば、荷揚げの際は、一刻も早く終了する為に、余分なもの（行動食、飲料、非常装備等）は持ちたがらない。状況を判断してフレキシブルに対応しようとする我々の目には、時として安全意識が欠如しているようにも映る場合がある。彼らには彼らなりの判断基準があるようなので、現場では何故、そのようにするのかをマメに聞くようにしてコミュニケーションを取ればよいだろう。また、事前に指導部層を通じて、細かな打ち合わせを行っておくことも有効であろう。

(4) 技術レベル

中国隊員は、個人差が大きい。現地の安全な場所で合同の訓練を行うとよいであろう。先にも述べた通り、安全意識にも我々とは開きがあることも念頭に置いて行動しなければならない。

ナムナニ峰登攀記録

吹田 啓一郎

長年にわたり世界中の登山家・探検家にとって憧れのまのであったナムナニ（グルラマンダータ）峰がAACK・同志社・中国登山協会の合同隊によって初登頂されてから9年近くになる。この間、登山隊報告書をはじめ多くのメディアを通して登山活動の内容が伝えられてきたが、かなりの大人数で長期にわたる登山であることから隊員一人ひとりの行動がつぶさに記録としてまとめられる機会がなかった。ここに、登山終了直後にまとめた記録に基づき、できる限り詳細な登攀活動中の隊員の行動をまとめて記す。

1985年4月25日（木） 晴

9:10 門士発 - 14:00 BH（大本営）着

新疆ウイグル自治区のカシュガルを出発して以来12日間にわたるキャラバンの終着点は、マナサロワール湖、ラカスター湖がはさむせまい砂地をとおり過ぎた先、ナムナニ峰北面山麓の海拔4700mの平坦地に先着の中国隊員たちによって整備されたベースハウスである。すでに10張りあまりの特大テントが軍隊基地さながら整然とならべられ、日中あわせて69名の隊員・後勤部隊が一同に会す。

4月26日（金）

長旅の疲れを癒す間もなく隊荷の整理とBHの整備。井上による気象観測基地、松林による医療検査基地、MBS取材班による通信基地などが着々とできあがる。

4月27日（土） 曇時々雪

BHから正面に見える支尾根（ザロマロンバ氷河北）へ高所順応のための軽登山。中国

隊員12人とキャラバンで体調を崩していない和田、吹田佳、吹田啓、窪田、報道班5人が参加。

10:30 BH発 - 16:00 ~ 16:30 高度5630m地点 - 18:30 BH帰着

高所での経験が豊富な中国隊員の足は速く、彼らが5600m付近に到着した14:00に日本隊員は5350m付近で昼食をとり、日本隊員が5630mの最高地点に着いたときには中国隊員は既にBHに帰着。他の隊員は、装備整理に角谷、中山、岩田、食糧整理に宮崎、山田、伊藤があたる。

4月28日（日） 晴

高度順応のために休養。午後からマナサロワール湖周辺まで車で散歩。早春のチベット高原に聳えるナムナニ峰最後の未踏の姿を望む。

4月29日（月） 快晴

BC建設。

10:55 四輪駆動車に分乗してBH発 - 11:25 下車 - 16:00 BC着（標高5600m）

和田、吹田佳、吹田啓、窪田、尚、楊、陳、チーミー、曹、包の10人がBC泊、齋藤、松林、山田、角谷、中山、金の6人はBHに戻り、翌日の荷揚げに備える。

ザロマロンバ氷河末端の平坦地に予定通りBC建設。中国製大型テント2張り。右岸から崩れたガレが堆積し、1年前の偵察隊の記録よりも標高は10~20m高くなっている。

4月30日（火） 晴

BCより上部偵察とBH→BC荷揚げ

9:30 BC発 - 14:30 C1直下の標高5880m地点 - 16:00 BC着 - 19:00 BH着

前夜BC泊の吹田佳、吹田啓、尚、包はザロマロンバ氷河右岸の尾根と氷河の境界線上を試登。下部はガラ場で歩きづらいが上部はC1まで雪上の楽な登高。

ジャープー、王、宋、ツーレントーチ、李、劉の6人がBH-BC間を往復。

一旦、全員BHへ戻る。

5月1日（水） 晴

メーデー。全員BHで休息。プランの町から慰問団が訪れる。

5月2日（木） 曇・風強し

10:00 BH発 - 14:30 BC着

尚、曹を除く全登攀隊員21人と学術隊の西山、宮崎がBC入りし本格的に登山活動開始。

日差しが弱く風が強いため体感温度はかなり低く、羽毛服を着たままの行動となる。BC周辺は特に氷河から吹き下ろす風が強く、BC建設時に建てた大型テント2張りは倒壊。隊員用テント設営、食堂・医療など常駐に必要な体制を整え、荷物整理などを行うが強風のため苦勞する。

チベット登山協会隊のチョー・オユー峰登頂成功の報が入り祝杯を挙げる。

5月3日（金） 晴

C1建設：10:20 BC発 - 14:30 C1着（標高6170m）

BCから直ぐに右岸のガレに取り付き、ガレと氷河の境界沿いに登る。氷河右岸のモレーン上の平坦なところをC1とし、高所テント2張りを設営。BCよりも風が弱い日中は寒さを感じず快適なキャンプ地である。

和田、松林、吹田佳、吹田啓、宋、金、陳、ツーレントーチの8人はBC→C1荷揚げ後C1泊し、翌日のC1上部偵察に備える。また、窪田、角谷、中山、宮崎、西山、ジャープー、

チーミー、王、ツーレントーチ、楊、包、李、劉存生の13人はBC→C1荷揚げ後、BCへ戻る。

伊藤、岩田もBC→C1の荷揚げに参加したが不調につき引き返し、調整のため一旦BHへ下る。

また、BHから新たに平林、井上、佐々木、尚がBHからBC入りし、前線の指揮体制が整備される。

5月4日（土） 晴

C1から上部偵察。10:20 C1発 - 12:00 6380m地点 - 12:40 C1着、16:20 C1発 - 17:05 BC着

C1から上部は右岸の支尾根上のルートか、ザロマロンバ氷河上のルートとなる。氷河上は中央のセラックおよびクレバスが連続する氷河上に行くか、あるいは右岸の氷のルンゼを直登するかの2ルートがある。2隊に分かれて偵察。写真・ビデオ・スケッチ等により記録。一旦、全員BCへ戻り、BCでの作戦会議により右岸のルンゼルートを探ることに決定。

右岸の支尾根偵察：宋志義、陳建軍、吹田佳、吹田啓、氷河上偵察：和田、松林、金俊喜、角谷、井上はBHへ戻り、他の隊員はBCにて待機する。

5月5日（日） 晴

今日も総出でBC→C1の荷揚げ。

C1から上部のルート工作に宮崎隊（山田、尚、ジャープー）の4人があたることになり、これに佐々木を加えた5人がC1泊。窪田、中山、王、チーミー、楊、包、李、劉の8人はC1へ荷揚げ後BCへ戻る。

以後、当初の計画に従って日中2人ずつ4人でパーティーを組み、6パーティーのローテーションによりルート工作と荷揚げにあたる形で登攀計画が立てられるが、高度順応調整中の隊員が多いため人数の揃ったところから順次パーティーを形成することになる。

5月6日(月)

C1→C2ルート工作：宮崎隊4人。C1から氷のルンゼを直登し、氷河上をクレバスを迂回しながら登る。C2までの中間点までルート工作を行う。

BC→C1荷揚げ：和田隊（吹田啓、チャーミー、王）と平林、中山、李、劉の8人は荷揚げ後BCに戻る。吹田佳隊（窪田、楊、包）に宋、ツーレントーチを加えた6人がルート工作・C2建設に加わるためC1泊。

宮崎隊は今日の行動後に尚、ジャープーがBCへ戻り解体。宮崎、山田は吹田佳隊と合流する。また、角谷はBHからBC入りし、BCへ戻ったジャープーを加えて松林隊（角谷、金、ジャープー）となる。佐々木はC1からBCへ戻り、井上はBHからBC入り。斎藤、岩坪、伊藤はBHからBCを往復して体調を調整。

5月7日(火) 快晴

C1→C2ルート工作とC2建設：宮崎、山田、吹田佳隊4人、宋、ツーレントーチ

C2へのルート工作がほぼ完了してC2建設。全て氷河上にルートをとって固定ザイルは21本。吹田佳隊の楊は登山靴が足に合わずBCへ戻り吹田佳、窪田、包の3人パーティーとなりC1泊。宮崎、山田、宋、ツーレントーチの4人はBCへ戻り、後に宋隊（山田、中山、ツーレントーチ）となる。

BC→C1荷揚げ：松林隊4人はそのままC1泊。劉、中山、西山の3人はBCへ戻る。

和田隊4人はBCで休養。伊藤、報道MBSがBHからBC入り。BCで休養中の陳は調子悪くBHへ下る。計画の第1段階が予定通り終了し、明日からBC→C1→C2の荷揚げ体制に入る。不調を訴える隊員が交代で次々出てくるため予定通りのパーティー構成とはならないが、第2段階からは松林隊、吹田佳隊、和田隊、宋隊の4パーティーが核となって上部へルートを延ばすことになる。

5月8日(水) 快晴のち晴

C1→C2荷揚げ：松林隊4人はC1泊、吹田佳隊3人はBCへ戻る。

BC→C1荷揚げ：和田隊4人、伊藤、井上、佐々木、李。荷揚げ後BCへ戻る。

宋隊はBCで休養。復調した曹がBHからBCへ上がり、西山は学術調査に備えてBHへ下る。

5月9日(木) 雪のち快晴

前夜から降雪があり、BCで7cm、C1で20～30cmの積雪。C1→C2への荷揚げは中止。

BC→C1荷揚げ：和田隊4人はC1泊。伊藤、楊、曹はBCへ戻る。

松林隊はC1で停滞し、吹田佳隊、宋隊らはBCで休養。吹田佳隊は楊が復帰して翌日から4人パーティーとなる。

5月10日(金) 晴

C1→C2荷揚げ：松林隊4人は休養のためBCへ戻り、和田隊4人はC1泊。

BC→C1荷揚げ：吹田佳隊4人と伊藤、宮崎、井上、李、劉はBCへ戻り、宋隊はC1泊。岩坪と復調した岩田がBHからBC入り。

5月11日(土) 快晴

C1→C2荷揚げ：和田隊4人はC2泊。宋隊4人はC1へ戻る。

BC→C1荷揚げ：宮崎、岩田、尚、曹、劉、その他大勢。

前線への荷揚げは順調に続くがC1の物資が不足しがちで通訳、運転手などの後勤部隊も荷揚げに駆り出され、総動員でBC→C1荷揚げにあたる。松林隊、吹田佳隊はBCで休養。斎藤がBHからBC入りし、井上がBCからBHへ下る。

5月12日(日) 晴、風強し

C2→C3ルート工作：和田隊4人。C2へ戻る。C2から上部もルートはゼロマロンバ氷河

上にとりクレバス迂回しながら登る。アイスフォールが少なくフィックスザイル5本程度でC3建設地点（標高7150m）を決定してデポ。

C1→C2荷揚げ：宋隊4人。宋は体調を崩してBCへ下り、山田隊（中山、ツーレントーチ）に変更してC1泊。

BC→C1荷揚げ：吹田佳隊4人と宮崎はC1泊。斎藤、岩坪、岩田、李はBCへ戻る。

井上がBHからBCへ戻り、井上隊（曹、劉）が臨時に編成され5班体制になる。松林隊はBCで休養。

5月13日(月) 快晴、風強し

C1→C2荷揚げ：吹田佳隊4人はC2泊。山田隊3人は休養のためBCへ戻る。

BC→C1荷揚げ：井上隊3人と平林、佐々木、尚、李の7人がC1泊。

和田隊は休養のためC2からBCへ戻る。松林隊はBCで休養。

5月14日(火) 快晴、終日風強し、夜に雪

強風のため前線はほとんど行動できず吹田佳隊4人はC2に留まり、楊を除く3人で上部のルート整備。

C1→C2荷揚げ：井上隊3人、宮崎、伊藤、尚、李に平林、佐々木も同行し、C1へ戻る。

BC→C1荷揚げ：不調の角谷を欠いた松林隊3人と岩田、C1泊。

和田隊、山田隊、角谷はBCで休養。陳がBHからBCへ復帰。

5月15日(水) 快晴

C2→C3荷揚げ：吹田佳隊3人。休養のためBCへ戻る。

C1→C2荷揚げ：松林隊3人、井上隊3人はC2泊。伊藤、岩田、李はC1へ戻る。

BC→C1荷揚げ：和田隊4人、山田隊3人はC1泊。斎藤、岩坪、角谷はBCへ戻る。

平林、佐々木はC1からBCへ戻る。尚はC1休養、宋、陳はBC休養。

5班体制でC3への荷揚げが本格的に始まる。

5月16日(木) 快晴

C2→C3荷揚げ：松林隊3人、井上隊3人。C2へ戻る。

C1→C2荷揚げ：岩田はC2泊。山田隊3人はC1へ戻る。

伊藤、尚、李はC1休養。和田隊4人、吹田佳隊4人、角谷、宮崎、宋、陳はBC休養。

5月17日(金) 晴

C2→C3荷揚げ：井上隊3人。BCへ戻る。

C1→C2荷揚げ：山田隊2人と李はC2泊。伊藤はC1へ戻る。

BC→C1荷揚げ：和田隊4人と陳。C1泊。

前線の松林隊3人はC3上部へのルート開拓に備えてC2で休養。山田隊の中山は体調悪く、尚と共にC1で休養。岩田はC2からBCへ戻る。吹田佳隊4人、角谷、宮崎はBC休養。井上隊はC3への荷揚げの任務を終え解体。

5月18日(土) 快晴

C2→C3荷揚げ：松林隊3人と李はC3泊。山田隊2人はC1へ戻る。

C1→C2荷揚げ：和田隊4人、伊藤、尚、陳。C2泊。

BC→C1荷揚げ：吹田佳隊4人と斎藤、岩坪、宮崎、角谷。C1泊。

中山はC1で休養。岩田、宋、曹、劉はBCで休養。

5月19日(日) 快晴

C3→C4ルート工作：松林隊3人と李。BCへ戻る。

C3から上部も氷河上にルートをとる。積雪が多くクレバスに注意を払う必要があるが登高は容易。C3から直ちに急登が続く、氷河最上部の広いプラトーに出れば後は平坦。プラトーの最奥にC4建設地点を決定（標高

7400m)。さらに頂上稜線へ偵察に向かい、稜線へ至るクーロワールの登り口まで達し、登頂予定ルートを確認。

C2→C3荷揚げ：和田隊4人はC2泊。伊藤、尚、陳はBCへ戻る。

C1→C2荷揚げ：吹田佳隊4人と宮崎、角谷はC2泊。斎藤、岩坪はBCへ戻る。

BC→C1荷揚げ：宋、岩田、C1泊。

最終キャンプまでルートが延び、第2段階完了。明日からは登頂体制を整えるための上部キャンプへの荷揚げが主となる。宋、中山が復調して山田、ツーレントーチと合流し宋隊は4人パーティーで復活。史占春がBH入り。

5月20日(月) 快晴

C2→C3荷揚げ：和田隊4人はC3泊。吹田佳隊4人と宮崎、角谷はC2へ戻る。

C1→C2荷揚げ：宋隊4人と岩田はC2泊。曹はBCへ戻る。

松林隊、伊藤、尚、陳、劉はBCで休養。

5月21日(火) 前夜から雪、視界不良

天候悪く視界が効かないため午前中待機。井上の予報によれば悪天が続くため午後から前線退却。

C3→C2：和田隊4人。C2泊。

C2→C1：宋隊4人、吹田佳隊4人と角谷はC1泊。宮崎はBCへ戻る。

松林隊、伊藤、李、劉、陳、曹はBC停滞。史と今後の登攀計画を検討するために斎藤、平林、岩坪、井上、佐々木、尚、金はBHへ下る。

5月22日(水) 雪

降雪により全隊停滞。午後、今後の登攀計画と第1次登頂隊決定。あわせてパーティーも編成替えとなる。25日にC4建設、26日に第1次アタックの予定で、メンバーはアタック隊が松林、吹田佳、金、ジャープの4人、同サポート隊が和田、吹田啓、宋、ツーレン

トーチの4人、25日のC4荷揚げ隊が窪田、山田、角谷、王、チーミーの5人と発表される。

楊、包、中山、岩田はC1からBCへ下り、和田隊4人はC2に停滞し、吹田佳、窪田、山田、角谷、宋、ツーレントーチはC1に停滞。残りはBC待機。翌日からアタックに必要な荷揚げとアタック隊の登高が同時に進められる。

5月23日(木) 晴時々曇または小雪

アタック隊(松林、金、ジャープ)はBCからC1へ登り吹田佳と合流。他は前日と同じキャンプに待機。28日に第2、3次アタックを行う予定が発表される。

5月24日(金) 曇

アタック隊4人はC1からC2へ登る。サポート隊の宋、ツーレントーチもC1からC2へ登りC2で待機する和田、吹田啓と合流。

荷揚げ隊の窪田、山田、角谷もC1からC2へ登り、C2で待機する王、チーミーと合流。

BC→C1荷揚げ：伊藤、中山、岩田、楊、包、李はC1泊。曹、劉はBCへ戻る。

5月25日(土) 晴

アタック隊4人、サポート隊4人、C4荷揚げ隊5人がC2→C3→C4へ登りC4建設。荷揚げ隊5人はC2へ戻る。

C1→C2荷揚げ：中山、岩田、楊はC2泊。包、李はBCへ戻る。

5月26日(日) 曇ときどき晴

第1次アタック隊・サポート隊：8:00 C4発 - 11:00 クーロワールを抜け頂上稜線 - 11:40 登頂(7694m) - 14:00 C2。

中国隊員はBCまで下山。

第2次アタック隊6人(窪田、山田、角谷、楊、チーミー、王)はC2からC3へ登る。第3次アタック隊の尚、陳、包、曹、李、劉は

BCからC1へ登り、伊藤はC1からC2へ登る。岩田、中山はC2待機。

5月27日(月) 晴

第1次アタック隊の日本隊員4人はC2からBCへ戻る。

第2次アタック隊6人はC3からC4へ登り、翌日の登頂に備える。

第3次アタック隊9人(伊藤、中山、岩田、尚、陳、包、曹、李、劉)はC3へ登り、翌日はC3から一気に頂上を狙う。

5月28日(火) 晴

第2次アタック隊(楊、チーミー、王)は10:20、第3次アタック隊(陳、包、曹)は13:04、それぞれ頂上に立ちBCへ戻る。

遅れてC4を出発しようとした第2次アタック隊の日本隊員3人のうち、角谷がC4で高度障害のため一時意識不明の重体となる。第2次アタック隊の窪田、山田とC3から駆けつけた第3次アタック隊の伊藤、尚、李、劉で角谷をシュラフとテントにくるんでおろす。第3次アタック隊の岩田、中山は酸素ボンベを取りにC2へ下る。

9:50 BCからは松林、吹田佳と酸素ボンベを担いだジャープ、ツーレントーチが救援に向かう。

15:00 C3下部で救援隊と合流し角谷に酸素補給。16:55 C2まで下降し、松林の診察を受ける。19:25 C1へ帰着。松林、吹田佳、王、ツーレントーチ、李、劉、尚、中山が角谷と共にC1泊。他はBCへ戻る。

5月29日(水) 晴

全員BCへ帰着。

5月30日(木) 曇

C2撤収：チーミー、王、楊、包、曹、劉。

C1撤収：松林、吹田佳、金、吹田啓、ツーレントーチ、陳、窪田、山田、伊藤、李、

尚、中山、岩田。

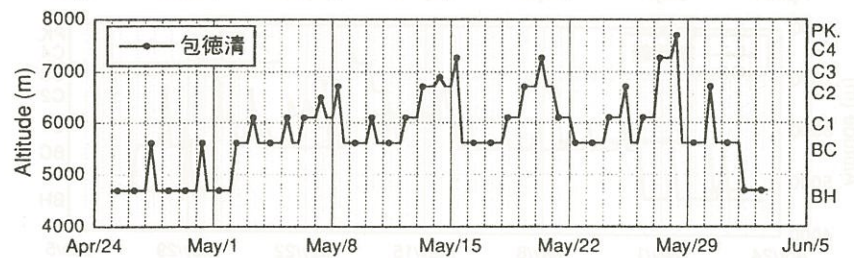
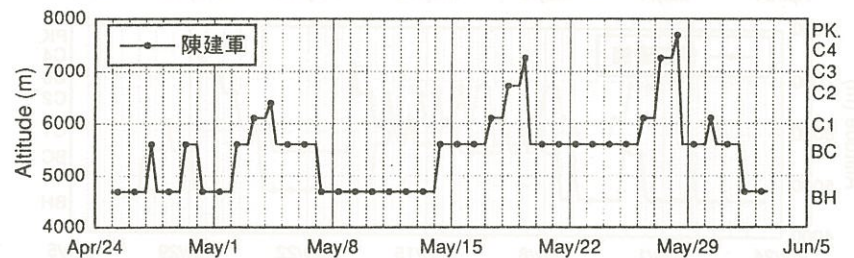
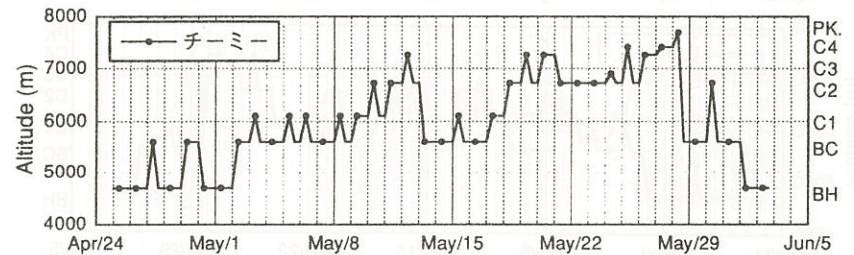
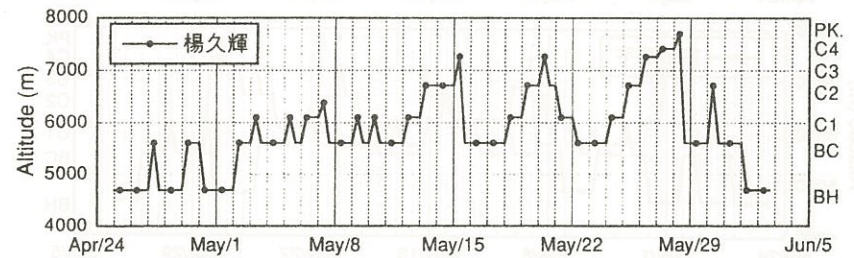
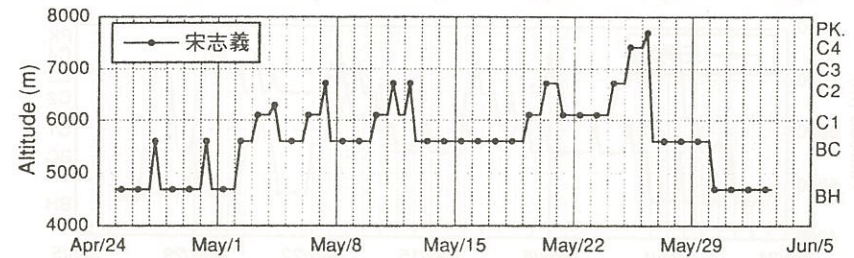
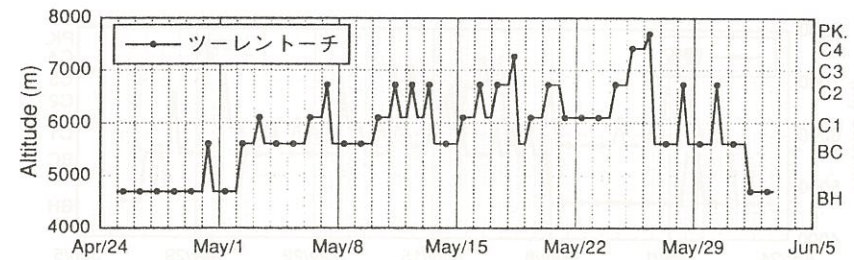
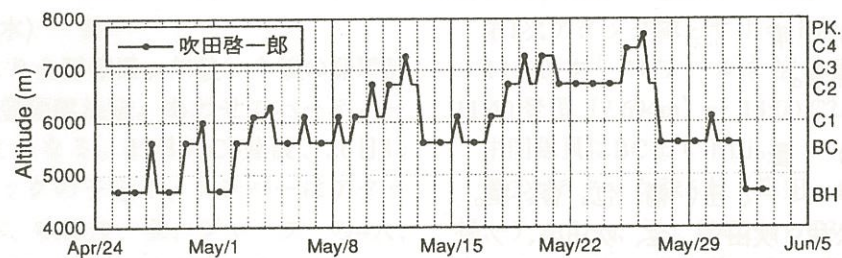
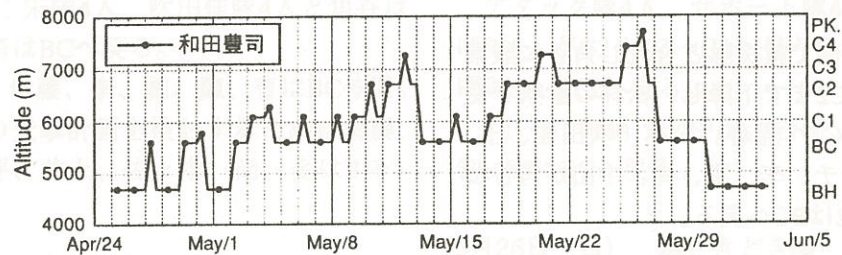
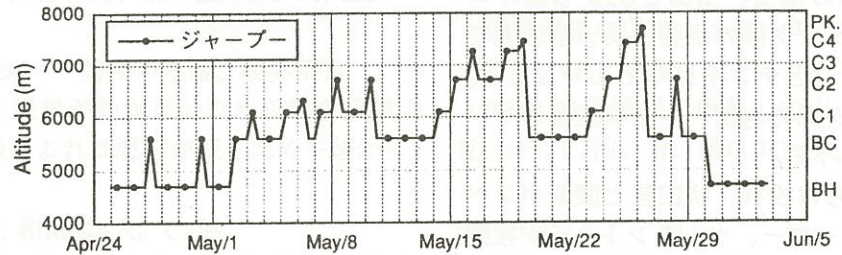
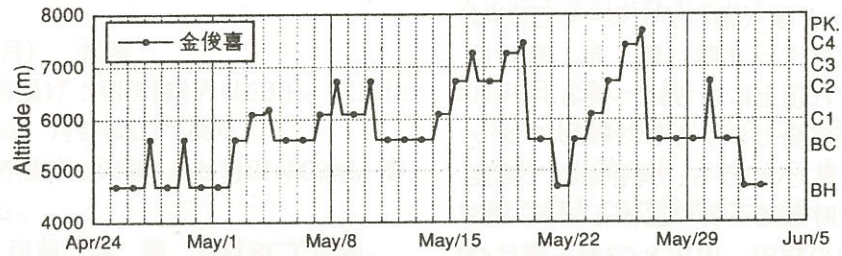
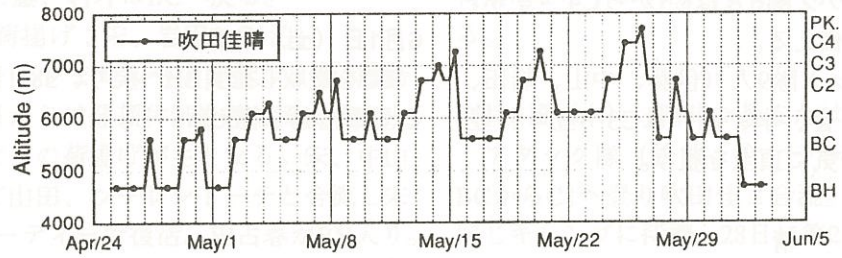
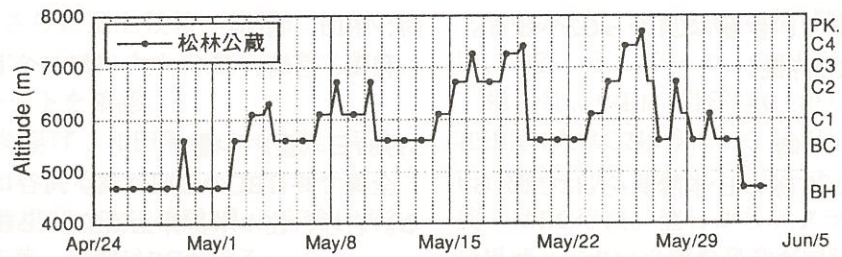
和田、宮崎、ジャープはBHへ下る。

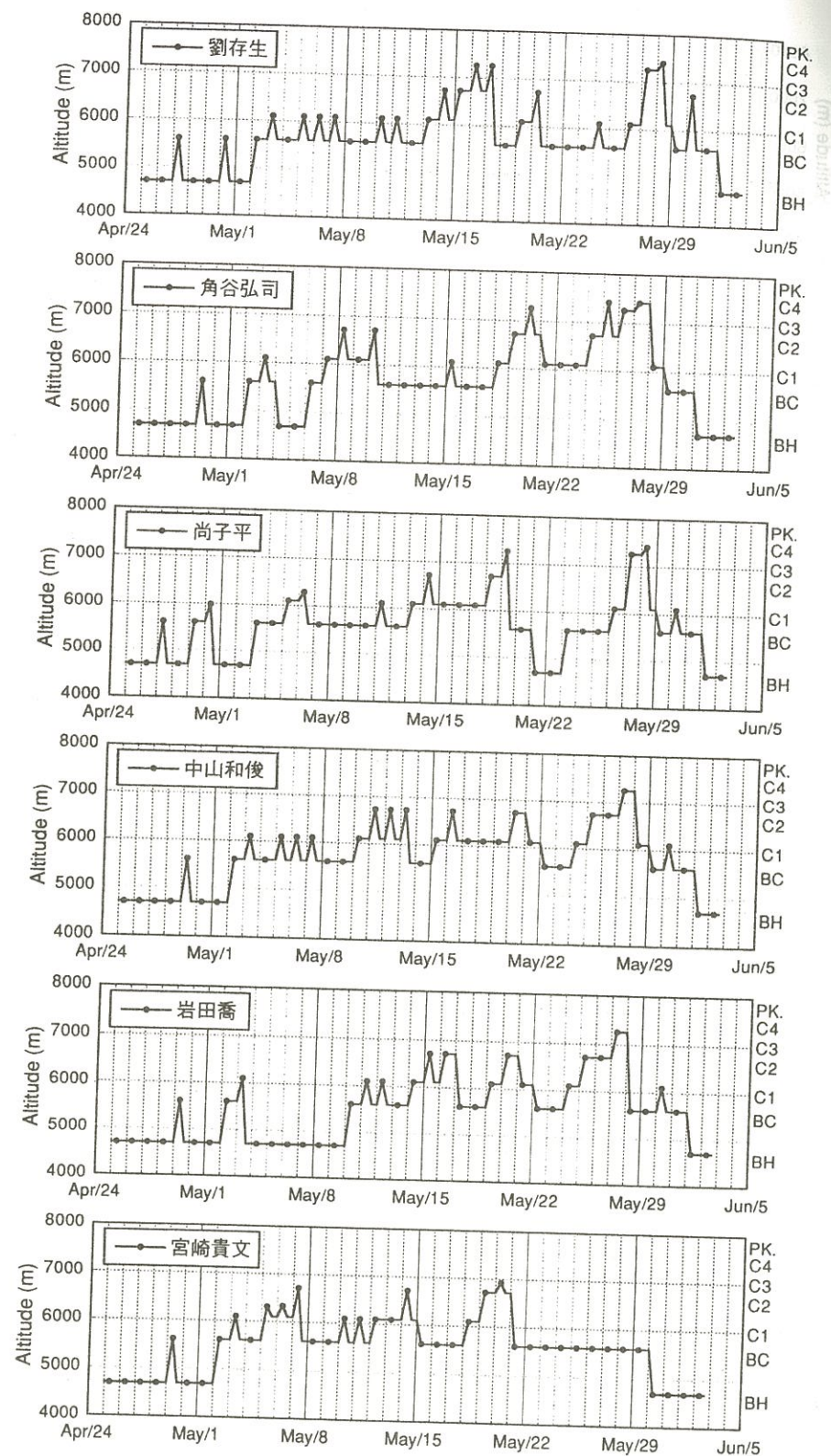
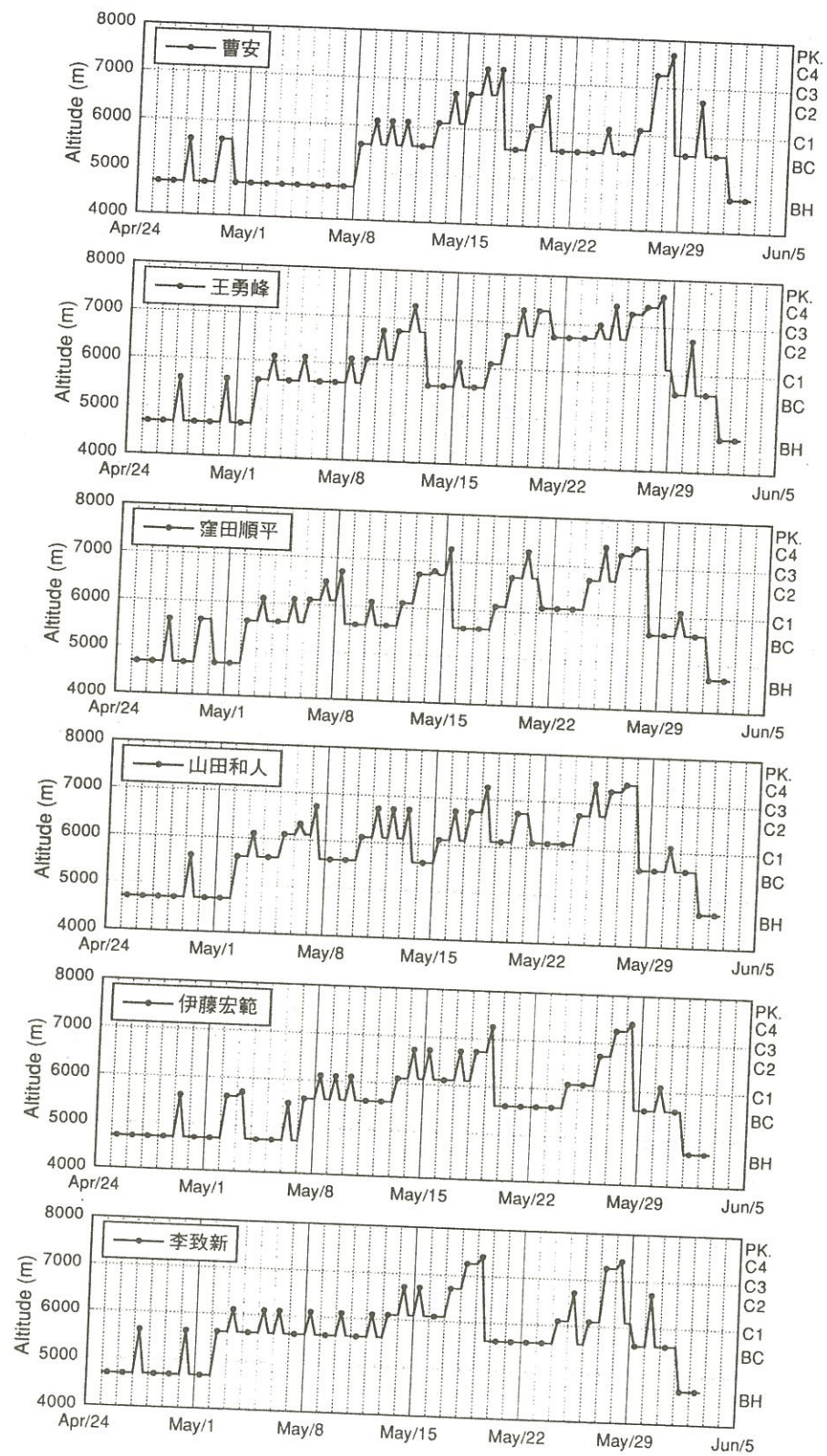
5月31日(金) 曇

全員で終日BCの撤収作業。角谷はBHへ下る。岩坪、佐々木、井上はBHからBCへ。

6月1日(土) 晴

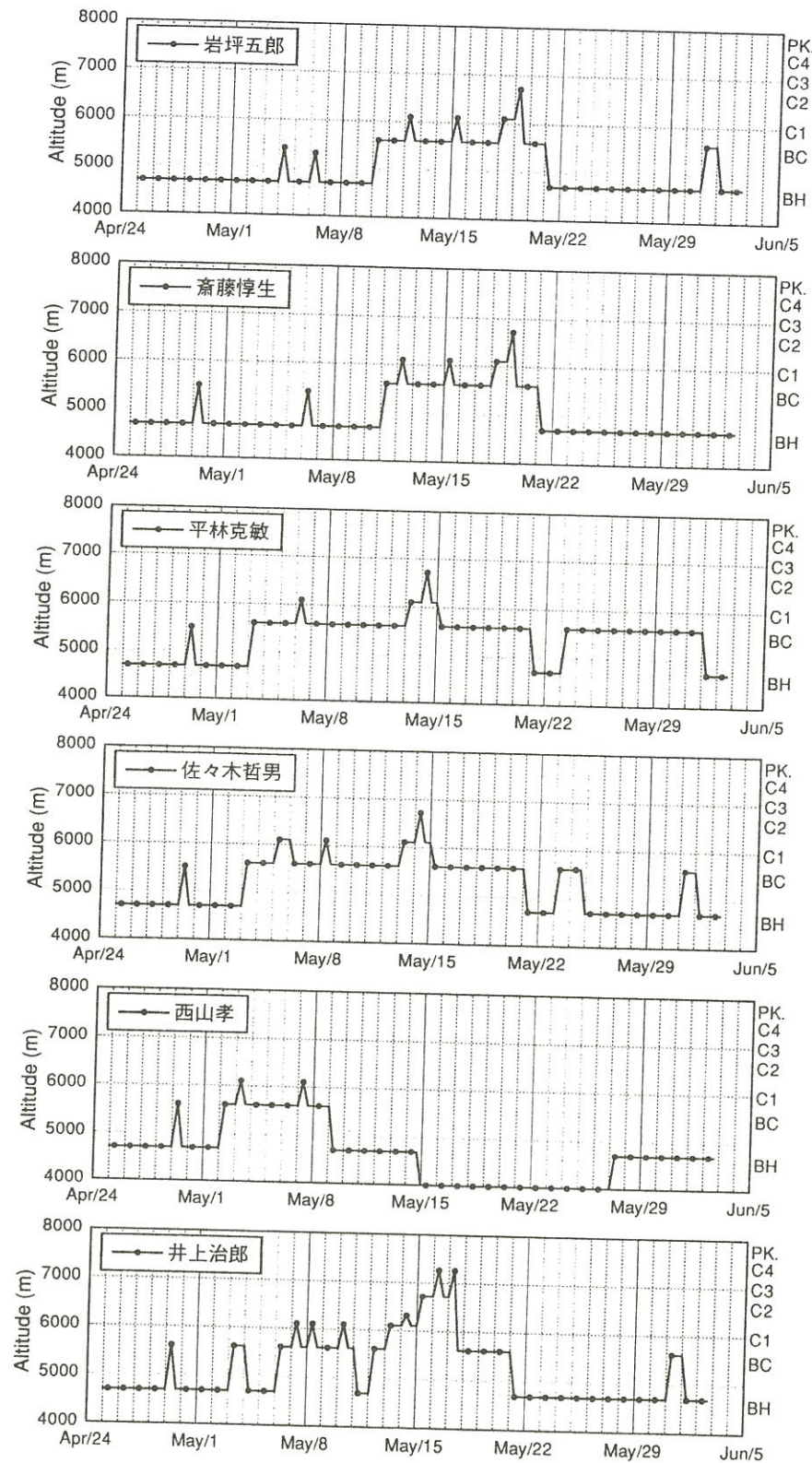
BCを撤収し全員BHへ戻り、38日間にわたる登攀活動を終える。





土壌研究調査報告

岩坪五郎



はじめに

ナムナニ学術登山隊に参加したい、と私は考えた。しかし、50歳という年齢では登山要員としては、すでに役に立たない。総隊長は中国登山協会の史占春主席であり、副総隊長は斎藤惇生さん、登山指揮をする登山隊長は同志社の平林克敏さん、秘書長は中国通で中国語に堪能な佐々木哲男さんが決まっている。私は学術隊員として立候補することにした。

私の勤務先は農学部林学教室森林生態学研究室だから、森林調査がいちばん無難な研究題目なのだが、行く手はチベット西部の乾燥高原である。1974年K12峰登山隊の時、森林調査で出張し、あとで事務の人から文句を言われた。土壌調査なら一木一草を欠くとも問題はあるまい。環境条件と生物的自然の関係を探るのが生態学なのだから。なぜ、どのような仕組みで森林が成立しないのかを探るのが私の任務である。神戸の植物防疫所で土壌輸入の許可をもらい、勇躍出発した。

残念ながら、ウルムチかカシュガルで風邪を引いたらしい。4輪駆動車によるキャラバンが始まったがまったく元気がでない。寒気がして、ただじっと座っているだけであった。大紅柳灘での夜から風邪は本格的となってきた。それに高度影響も加わっているらしい。その夜、私は遅くまでベッドのなかで、一人、歌をうたっていた。歓迎宴での白酒のせいだと思っていたが、後で考えると高度影響の可能性が高い。出発前、名古屋大学で減圧室に入ったとき、6000mの気圧で私は気持ちが高揚し、足踏み体操

の時、行進曲を高唱した。それと同じ状態だったようだ。

次の日からひどい咳が加わった。珍瑪に到着したときには、殆ど人事不省のようになり、斎藤さんは急遽、私に酸素を吸わせた。登山用の酸素を消費し、皆に申し訳なく、なんと情けないことになったと思いつつ、あの時の酸素のうまかったことはそれこそ筆舌に尽くしがたい。生まれたての子犬が母親の乳房にしゃぶりつくように、私は酸素を吸った。一度あの味を覚えると、もう理性で酸素を拒否するのは困難である。獅泉河での3日間は、ついに一度も食堂にせず、ベッドに食事をもってきてもらった。ベースキャンプに着いてからもひどい咳はおさまらず、ジステンパーの犬のようだといわれた。前進ベースキャンプまで登る許可を斎藤さんからもらったのは、ベースキャンプ到着後2週間たってからだった。

この頃になってやっとどのような調査をするか考えられるようになった。

植生と土壌の性質を決めるいちばん大きい要因は、暖かさと乾湿度である。これを変数として土壌の性質を調査することにした。同じ学術班員である井上治郎さんが気象・気候の専門家としてよく相談にのってくれた。この場を借りて彼に謝意を表し、その冥福を祈りたい。

まず、暖かさの変動要因として、標高3900m(以下すべて、私の高度計による)の普蘭からベースキャンプをとって標高5450mの前進ベースキャンプ(ここから上は雪氷と岩石の世界で土壌はない)までをとり、土壌の性質の変化を調べる。次に、

乾燥の変化要因として、ネパールヒマラヤのすぐ北面でモンスーンの影響をうける普蘭の近くからタクラマカン砂漠まで、標高4200mの地点をつなぐことで、温度条件はほぼ同じとみなし、乾湿度の土壌への影響をみることにした。

このように設定した調査地域を、吉良竜夫さんの暖かさの指数と乾湿度指数を軸にしたアジアの大生態系の気候区分図に書き込んだのがFig.1である。図中、1とある場所がベースキャンプで、ステップ生態系の最も寒冷地にあたる。そこから上へ乾燥ツンドラ帯を通して雪氷帯に向かった。この図でIIと示しているルートである。普蘭から北西へチベット高原を横切ってタクラマ

カン砂漠、ヤルカンドに向かうのが図でIと示しているルートである。寒冷砂漠を通り、タクラマカン砂漠に入って急激に暖かさが増加する。

その結果をまとめて、四手井綱英さんと中国側の学術班員である鄭錫瀾さんとの連名で次の2報文を日本生態学会誌に投稿した。Iwatsubo, G., Zheng Xilan and Shidei, T.: Ecological study of soils in the Highlands of Western Tibet. 1. Soils along an iso-altitudinal transect across Western Tibet. Ecol. Res. 4:219-231 (1989), do.- 2. Vertical change from elevation of 3900m to 5450m. Ecol. Res. 4:233-241 (1989)。

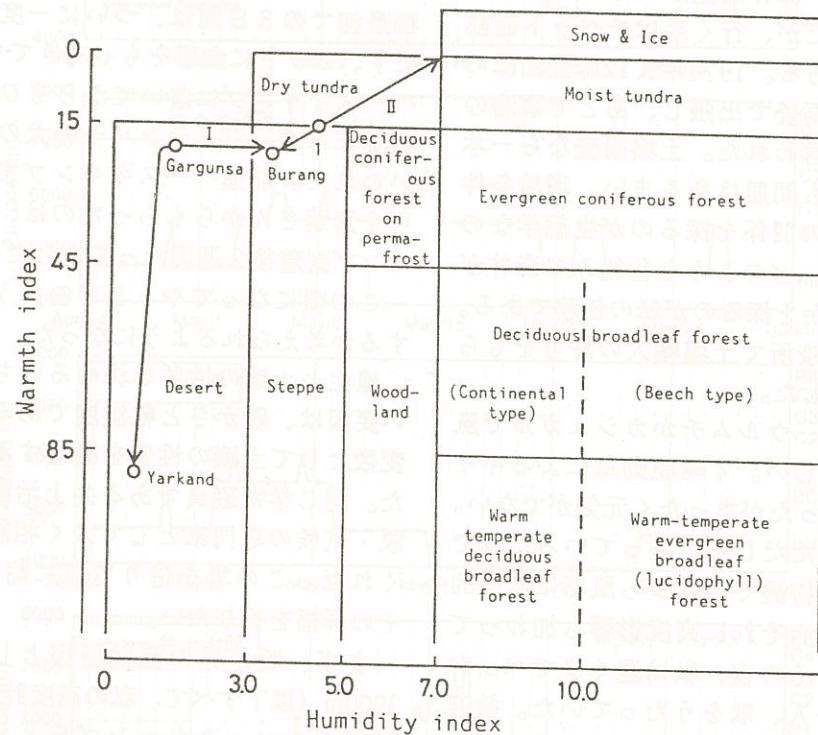


Fig. 1 Location of the study area on the climatic ordination diagram of major ecosystems in eastern and central Asia (Kira, 1945). I: Iso-altitudinal transect (ca. 4200m) northwestward from Burang to the Takla Makan Desert through Western Tibetan Highland. II: Vertical transect from Burang (alt. 3900m) to the glacier snout at 5450 m on Mt. Naimona'nyi. 1: Soil profile study site at 4700 m.

以下その要約に私の感想を交えて述べる。

標高と土壌の生物・化学的性質の関係

ベースキャンプは私の高度計で標高4700 m、マメ科の木本植物カラガナ(*Caragana* spp.)が優占し、それにメギ(*Berberis* spp.)の仲間が混じるトゲのある灌木の群落がパッチ状に分布している広い山麓斜面である。少し凹んだところには雪田が残っていて池塘があり、ベースキャンプはその水を使っている。ここから上に向かって、ヨモギ(*Artemisia* spp.)の仲間のステップを経て草本の*Carex* spp. や*Stipa* spp.が散見される低温砂漠を経、氷河の末端にある前進ベースキャンプにいたる。氷河の末端には、氷河の圧力で細粉となった岩石が礫に混じっている。

林学の立場からの土壌調査は、植物の根が利用しうる1mくらいまで断面を掘らないといけなく、病み上がりの私にその能力はなく、10cmくらいまでの表層土で辛抱せざるを得なかった。サンプル数も充分とはいえない。

Fig.2に標高を横軸に土壌の性質を表す諸項目の測定値を示した。a、b、e、hはそれぞれ有機態炭素、総窒素、アンモニア態と硝酸態窒素、陽イオン置換容量(Cation Exchange Capacity)のグラフである。陽イオン置換容量(CEC)は、植物への可給態養分を保持する能力の指数として、土壌の肥沃度の表現に用いられる。通常、土壌(細土)100g当たりのミリグラム当量で表す。ここでの数値は、わが国の森林や農地の土壌の数十分の一にすぎない小さいものである。

これら4つの分布図は、ベースキャンプ付近を最大とする釣り鐘型の分布を示した。それは気候要因の生物活性への好適度を示していると解釈できる。生物活性によって土壌に導入される有機態炭素と総窒素の含有率は、標高の高いところでは生物活性の

寒さによる制限のため当然低く、下るにしたがって大きくなる。ところがベースキャンプより低いところでは、乾燥の影響がでてきて、それが制限要因となり、含有率は低くなると解釈できる。インド西北部の畑地土壌の調査結果として、有機態炭素含有率とCECの相関が高いとの報告があるが、それとよく対応している。

これに対して、炭酸塩としての炭素と陽イオン合計ならびにカルシウム含有率は、標高が下がるにつれて、とくにベースキャンプ付近から急激に増加した(cとi)。これは乾燥度が増すにつれて、大気中の炭酸ガスがpHの高い土壌に吸収され、土壌の中で炭酸カルシウムとして蓄積されることを示している。日本のように湿潤で土壌pHの低い地域ではみられない現象である。fの総リンは、標高に応じてそれほど変化しないのに、可給態リンは標高の低下に伴って急激に減少する。これは、可給態化したリンが炭酸カルシウムと化合して不溶化するためと解釈される。

ベースキャンプ周辺の土壌

ベースキャンプでは、時間的余裕があるから土壌断面を行った。先に述べたトゲ灌木の中の土壌(乾燥プロット)と池塘のそばの土壌(湿潤プロット)の比較である。乾燥プロットは50cmで岩盤となったが、標高4700mでの鶴嘴と鍬の作業はかなりこたえた。湿潤プロットは100cmまで掘れた。これはゴミ捨て場をつくらうとしていた中国側の炊事担当隊員に掘ってもらった。

Fig.3はその測定値である。縦軸に土壌深、横軸は測定項目の濃度がとってある。温度条件はほぼ同じで、土壌水分条件が違うときの土壌の性質を比較しようとするものである。

結論から先に述べると、湿潤プロットのほうが水分による制限がないので生物活性

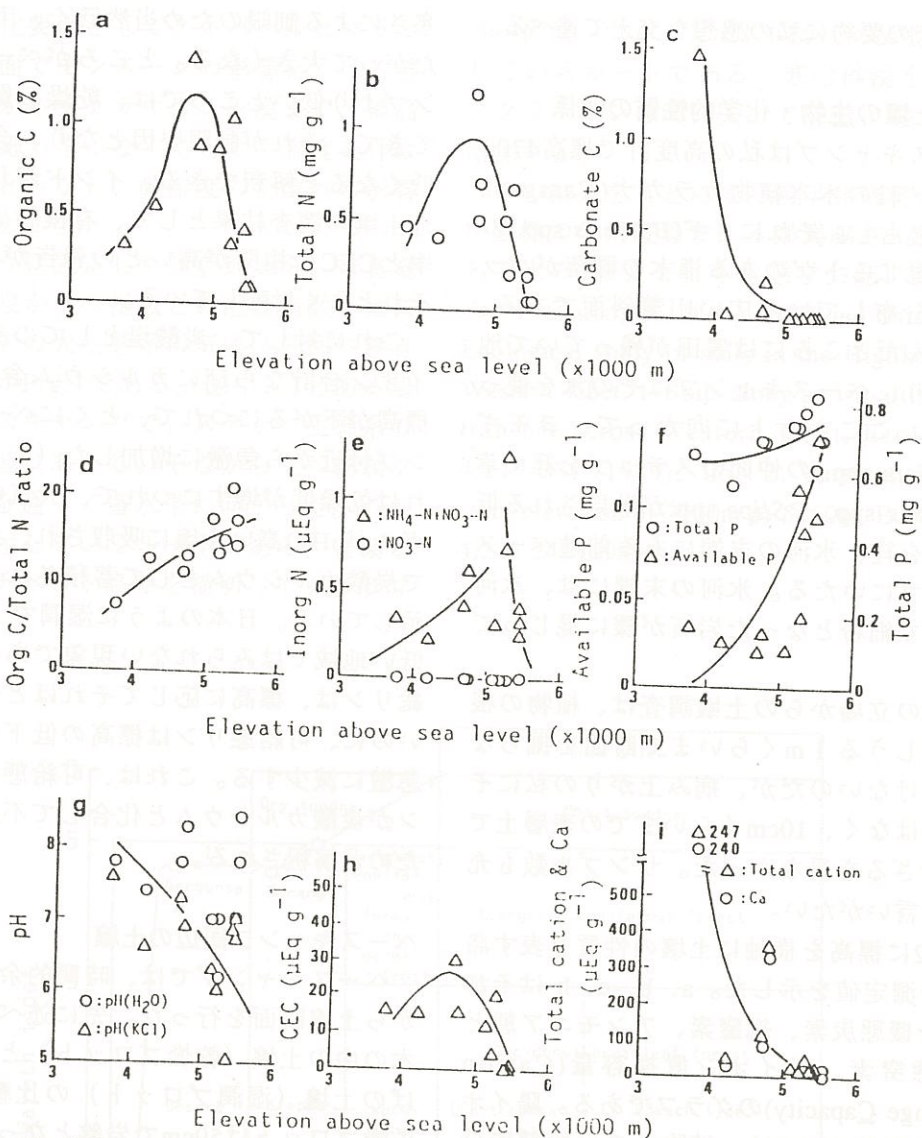


Fig. 2 Relationships between elevation and soil properties. The suggested trends in the data are indicated by hand-fitted curves.

は高い。すなわち、水際の植生のほうが土壌からの水分・養分の年間吸収量は大きく、純生産量も大きい。土壌への有機物の供給源である植物枯死量も大きい。しかし、乾燥プロットでは優占植物が木本、湿潤プロットでは草本で、水分条件に恵まれているから、湿潤プロットのほうが枯死物の分解が速く、有機物起源物質の含有率は乾燥プ

ロットのほうがおおいと解釈できる。

Fig.3 (a)と(b)の土壌有機態炭素と窒素濃度は、乾燥プロットのほうが大きい。有機物の分解が遅いからである。炭酸塩としての炭素は乾燥プロットにだけ存在し、水分移動が少なくなる土壌深部へ、濃度は高くなる。湿潤プロットでは溶脱されてしまっている。植物が直接吸収、利用する

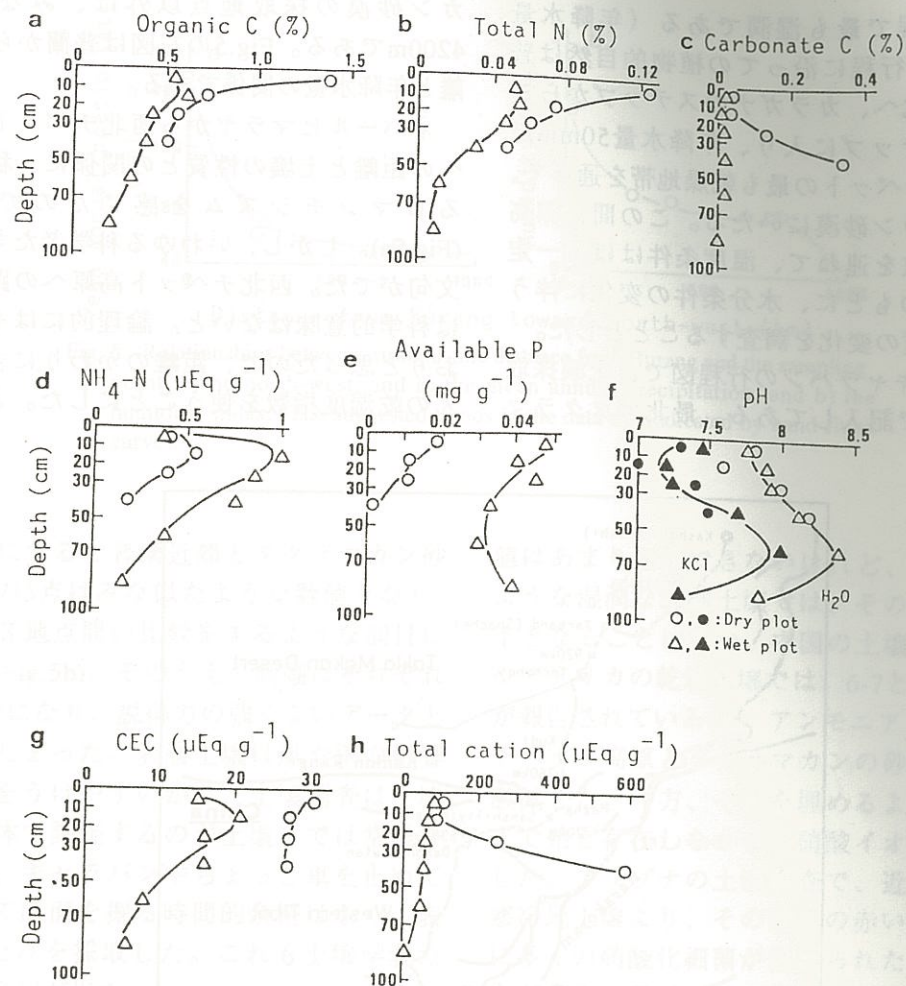


Fig. 3 Vertical depth distribution of soil parameter at 4700m above sea level. ○: Dry plot; △: Wet plot. The suggested trends in the data are indicated by hand-fitted curves.

アンモニア態窒素は湿潤プロットのほうが濃度大で、こちらのほうが生物活性が高いとする証拠である。可給態リンも湿潤プロットの濃度高く、私の説を裏付けている。これは垂直分布のところでも述べたように、炭酸カルシウムに固定、不溶化されているのである。pHについて、私は湿潤プロットのほうがやや低いことを期待したが、殆ど同じであった。CEC (陽イオン置換容量)は、粘土が雲母様鉱物のものであり、有機物量も小さいので、日本の土壌に比べれば

はるかに小さいけれども、有機態炭素濃度とよく似た分布を示した。湿潤プロットでは水による粘土の溶脱のためか、土壌は乾燥プロットよりやや砂質であった。総陽イオン濃度は、炭酸カルシウムのために炭酸塩としての炭素と同じ分布様式である。

西チベット高原の同じ標高での土壌の性質の比較

普蘭はネパールヒマラヤのすぐ北側にあり、南からのモンスーンの影響をうけて、

今回の行程で最も湿潤である（年降水量170mm）。行程に沿っての植物的自然は普蘭から西北へ、カラガナのステップからヨモギのステップに入り、年降水量50mm以下の西北チベットの最も乾燥地帯を通して、タクラマカン砂漠にいたる。この間、標高4200m地点を連ねて、温度条件はほぼ一定との想定のもとに、水分条件の変化に伴う土壌の性質の変化を調査することとした。

Fig.4はキャラバンの行程図で、土壌採取地点がxで記入してある。最北のタクラマ

カン砂漠の採取地点以外は、みな標高4200mである。Fig.5の左図は普蘭からの距離と年降水量の関係である。

ネパールヒマラヤから西北チベット高原への距離と土壌の性質との関係に、私はあるロマンチズムを感じたのである(Fig.5a)。しかし、いわゆる科学者たちから文句がでた。西北チベット高原への距離には科学的意味はないと。論理的にはそのとおりと思ったので、距離のかわりに吉良さんの乾湿度指数を使うことにした。ところ

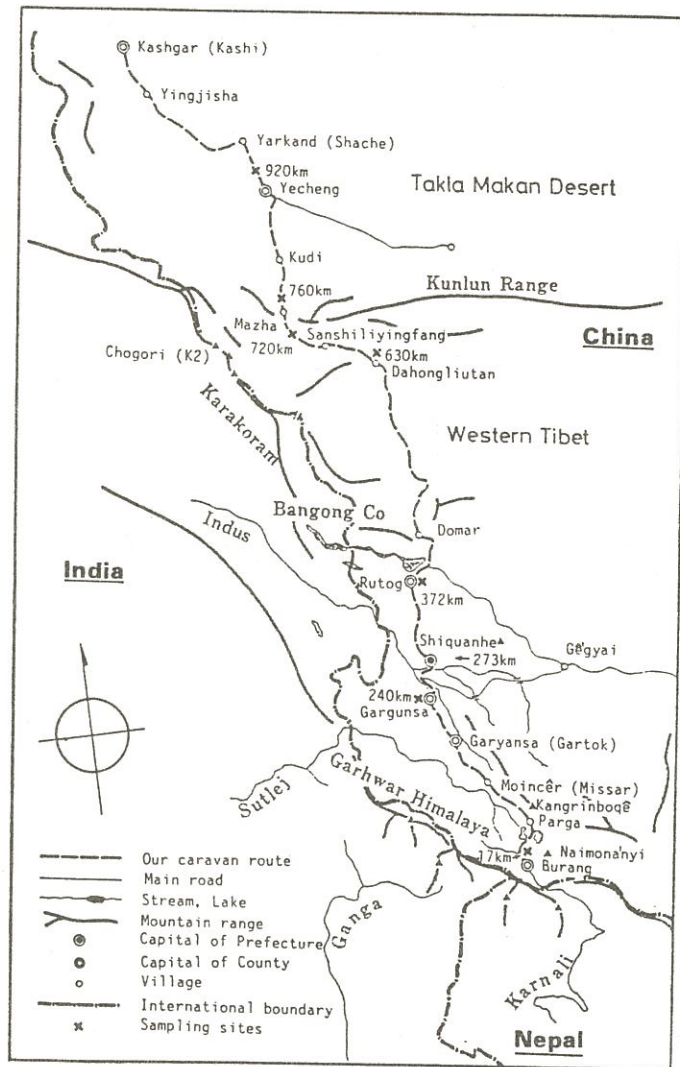


Fig. 4 Route and soil-sampling plots along straight-line distance from Burang.

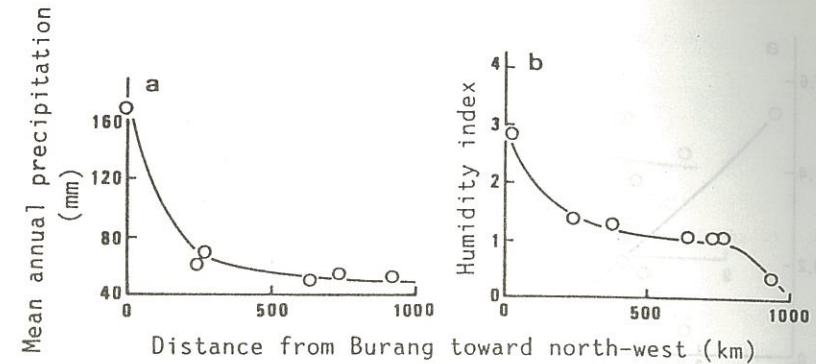


Fig. 5 Relationships between straight-line distance from Burang and the sampling point to the north-west, and a) the mean annual precipitation, and b) the humidity index. The suggested trends in the data are indicated by hand-fitted curves.

がこれにすると普蘭近郊とタクラマカン砂漠以外の5点はみな似たような数値となり、それは3地点間の比較をするような羽目になった(Fig.5b)。そのうえ、両端はそれぞれ1点だけになり、説得力の強くないデータとなってしまった。表層土壌は風や雨の影響で変化を受けやすいから、土壌調査は土壌断面全体で評価するのが土壌学では常識なのだが、キャラバン中ちょっと車を止めてもらって断面を掘る時間的余裕はなく、表層5cmだけを採取した。これも土壌学者たちから文句が出た。

Fig. 6は、その分析結果である。私の解釈を列記する。

生物枯死体を土壌への供給源とする有機態炭素含有率は、乾湿度指数の低下とともに急激に減少した(a)。一方、炭酸塩としての炭素は、砂漠に入って急増した。高いpHによる炭酸カルシウムの生成と少ない降水によるその蓄積である(b)。土壌窒素は有機態炭素のように生物の呼吸によって大気に戻らないので、植物が存在するところではその含有率はそれほど変わらないけれど、タクラマカン砂漠では急激に減少した(c)。有機態炭素も窒素もその含有率はきわめて低くて分析法の検出限界に近く、C/N比の

値はあまり信用できないけれど、わが国のような湿潤な森林土壌では、その値が10以下となることはない。中国の土壌調査報告やアメリカの乾燥土壌では、6-7といった値が報告されている(d)。アンモニアイオンは、チベット高原とタクラマカンの砂漠地帯で激減した。一方、それを埋めるようにこれまで殆ど存在しなかった硝酸イオンが増加した。アリゾナの土壌調査で、近くの湿潤寒冷地土壌より、その近くの赤い砂漠土壌に多くの硝酸化細菌が認められたという報告がある(e)。リンの分布については、わりあいきれいに解釈できる。カラガナステップからヨモギステップへ、可給態リンの土壌含有率は総リン含有率と比例して増加するが、砂漠地帯に入って可給態リン含有率は急激に低下した。それは、高いpHと高い炭酸塩濃度によって、不溶性のリン酸カルシウムなどになるからである(f)。

pH(KCl)の分布は、炭酸塩炭素の分布図とたいへんよく似ている。乾燥地帯の土壌の可溶性物質の主成分は炭酸カルシウムである。ちなみにわが国の森林土壌でpH(KCl)が5を超えることはほとんどないし、水とともに流れてしまっ炭酸カルシウムが存在することもほとんどない(g)。陽

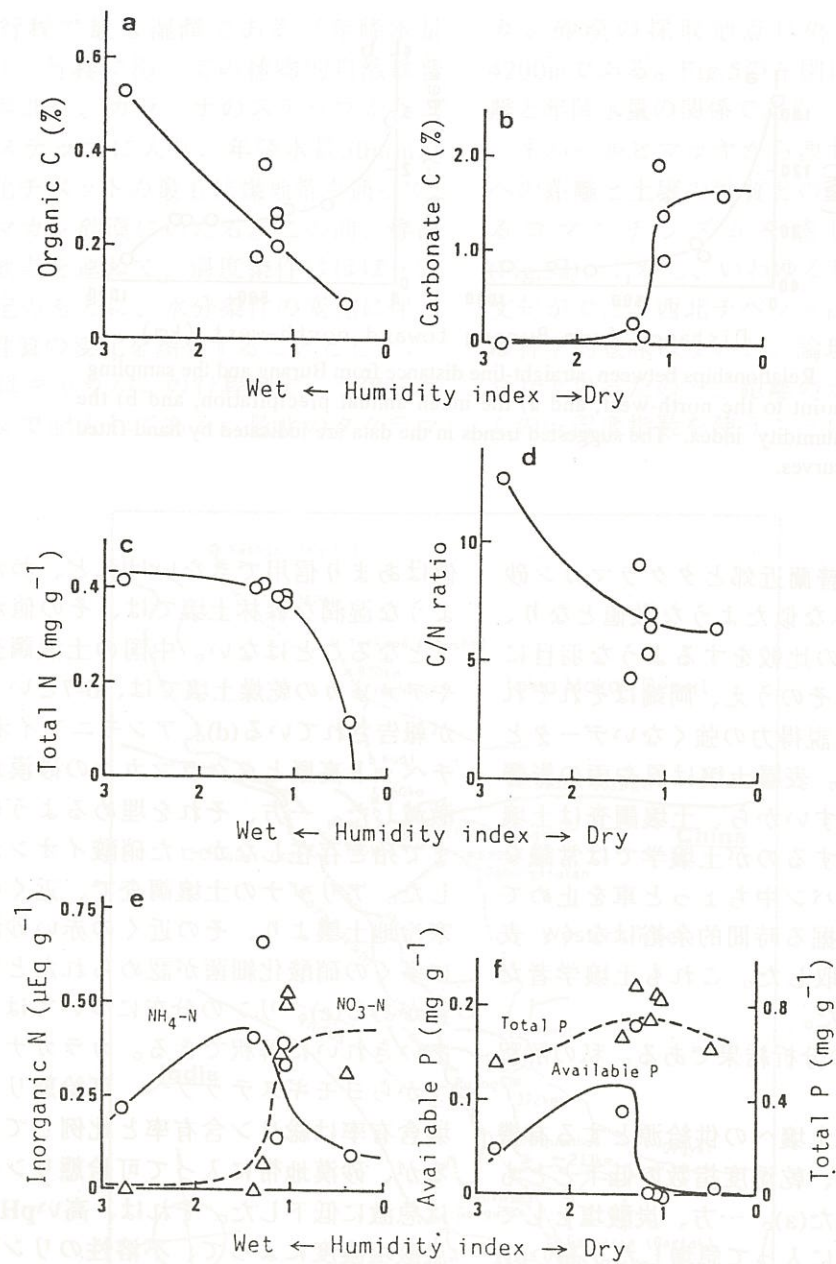


Fig. 6 Relationships between soil properties and the humidity index. The suggested trends in the data are indicated by hand-fitted curves.

イオン置換容量(CEC)について先に述べたとまったく同様の解釈ができる。ここでも有機態炭素含有率と高い相関を示した(h)。硫酸イオンがタクラマカン砂漠で急増したのは、その乾燥と温度の上昇のため、きわ

めて溶解性の高いこの物質がここでのみ生成蓄積されたものであると解釈される(j)。kとiの粘土鉱物の含有率と粘土鉱物の種類の比率の分布についてはうまく解釈できない。イライトはもっとも風化の程度の少ない粘

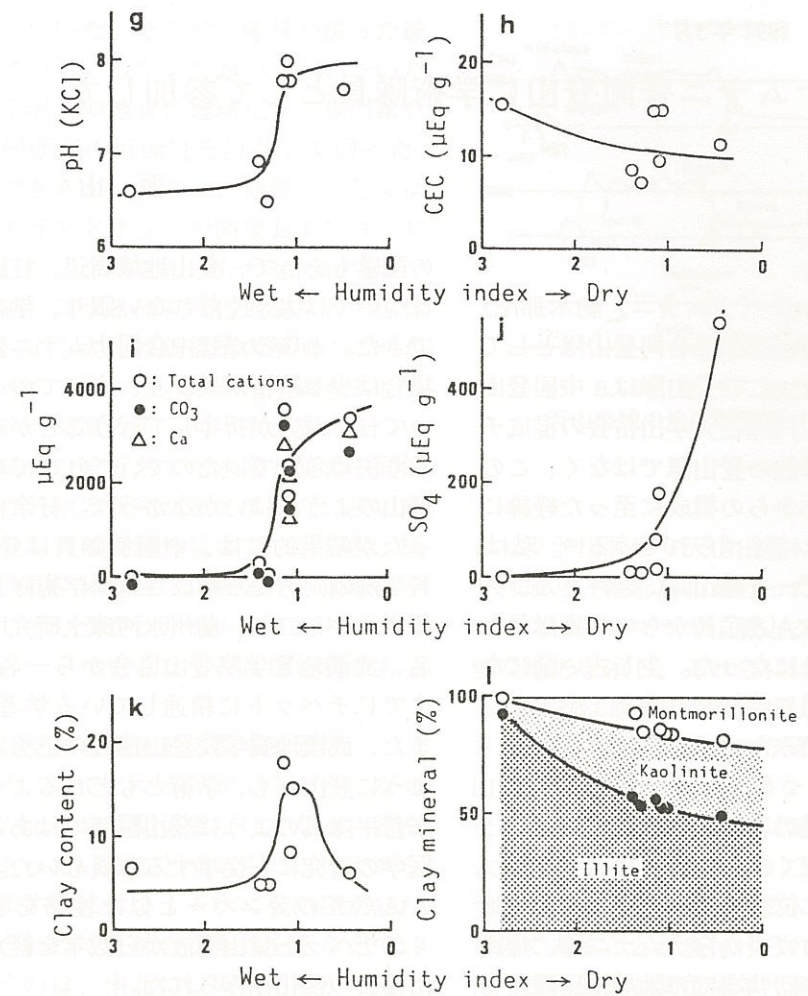


Fig. 6 (continued)

土鉱物で、風化がすすむにつれてカオリナイトやモンモリロナイトに変わるとされているが、その含有比率がなぜ乾燥とともにこの図のように変わるのか、現在の気候要因や植生要因からでは説明がつかない。地質鉱物学者に教えを乞う必要がある。

おわりに

寒くて雨の降らないところでは、あまり植物が育たず、土壤も貧栄養である。その状況とメカニズムについての調査結果である。

先に述べたように、大切なところでの調査点数が少ないのが説得力のないところである。あとで気がついてやり直しができないのが、探検の難しいところである。危険、きつい、汚いの上に、金がかかる、が加わるのが探検の特徴だろう。

もし、こんなことに興味をおもちの方がありましたら、報文のコピーをさしあげます。

ナムナニ合同登山に学術隊員として参加して

西山 孝

1. はじめに

グルマンデータ (ナムナニ, 納木那尼) 登山が日中友好納木那尼峰合同登山隊として1985年に実現した。この登山隊は、中国登山協会、AACK、同志社大学山岳会の混成チームであった。単独の登山隊ではなく、このように三つの団体からの構成に至った経緯については別途詳しく述べられている¹⁾。私は、このグルマンデータ登山に、岩坪さん、井上さんらとともにAACKからの学術隊員として参加することになった。少し古い話になるが、この遠征隊に参加し、考え、感じたことについて触れてみたい。

2. ナムナニ地域の自然科学調査

チベットの奥深く、インダス川とブラマプートラ川の源頭に位置するナムナニ峰周辺地域、往路のカシュガルからナムナニ峰、帰路のナムナニ峰からラサまでの地域は、戦後初めて外国人に開放される地域であった。未知の事柄を探索する学問と登山とは相通じるものがあり、これまでつねに学術調査を登山隊の活動の一部に含めてきたAACKにとっては今回のナムナニ登山は、初登頂だけでなく、当然学術調査もあわせてなすべきものと考えられていた。

ところが、中国では登山が主目的ならば登山協会へ、学術が主体ならば科学院へということで、厳格な縦割りの組織が確立されている。このことは、1979年に初めて中国を訪問した折に科学院外事局の崔泰山さんからきびしく言いわたされ、その後もたびたび問題になっていた。けれども、現実には、カンペンチンの時に経験したように、中国登山協会の特別

の配慮もあって、登山地域周辺、往路、帰路については大きく離れない限り、学術調査はできた。ところが日中合同ナムナニ登山隊の場合は少し事情が異なり、すべてのことについて日中双方が折半して行うことが初めから取り決められていたので、これまでの単独の登山のようにはいかなかった。紆余曲折はあったが結果的には、中国側隊員は登山協会、科学院の両方から構成され、学術隊員は地質研究所から二名、蘭州氷河凍土研究所から二名、武漢地質学院登山協会から一名となり、すでにチベットに精通している学者もいた。また、武漢地質学院登山協会の王勇峰隊員のように登山とも、学術ともとれるような隊員、李舒平隊員のように登山医師ではあるが高所医学の研究にも従事する隊員もいた。彼らはAACKのメンバーと似た性格をもっており、チベット登山開放から数年を経た中国登山協会の変化がみられた。

日本側の学術調査の分担については、自然科学をAACKが、人文科学を同志社山岳会が担当することになった。

3. ナムナニ登山における地質、地球化学調査

3.1 日本側の地質、地球化学調査

ナムナニ登山では、私は、地質と地球化学の調査を担当であった。隊員に選ばれて、あるいはこの遠征隊にながくかかわってきた者として、以前からいくつかのテーマを考えていた。与えられた期間は短く、一人の現地調査でできることは限られている。しかし、国内のもっとも最新の分析手法と現地調査とをうまく組み合わせるとかなりの成果があげら

れると思っていた。そこで、隊員が決った後にこれまでいろいろな面でおつきあいをいただいている国内の地質、地球化学の専門家を訪ね、共同研究の可能性を打診して回った。その結果できあがったのは、地質学としては現地踏査とランドサットの画像およびコンピュータグラフィクスを組み合わせたヒマラヤの造構運動に関する研究、古地磁気と同位体年代測定による大陸移動機構の解明の二つが大きなテーマであった。地球化学調査としては、チベット高原の雪、河川水、湖水について、含有成分の分析および水素と酸素の同位体比からの気団の研究がまとまった。狭い意味での私の専門は資源地質学で、岩石学、構造地質学、同位体地質学、鉱物学、地球化学などに少しずつかかわりをもっており、このような広いテーマをこなすには便利であった。

○ ヒマラヤの造構運動に関する研究

どのようにしてヒマラヤができたか、なぜ高くなったかは地質関係者だけでなく、誰もが興味をもっていることである。この大きな命題に挑戦するには、ナムナニ登山隊が訪れる地域はきわめて好都合な条件をそなえていた。というのは、南北には天山山脈からヒマラヤ山脈まで、東西にはナムナニからラサまでの広大な地域を見わたすことができるからである。1960年代後半から華々しく展開されたプレート・テクトニクス仮説は大陸の誕生、成長についての考え方をすっかり変えてしまい、この新しい仮説のなかでインド大陸とユーラシア大陸の衝突によってできたと思われるヒマラヤはもっとも注目される地域の一つとなっている。

ヒマラヤの造構運動に関する研究では、まず大先輩の藤田和夫先生に教を請い、日本列島のなかでは第四紀の活動がもっとも活発な伊那谷へ河岸段丘の巡検にも行った。また、室内作業としてアメリカで出版された地形図を格子データに換え、コンピュータを用いて

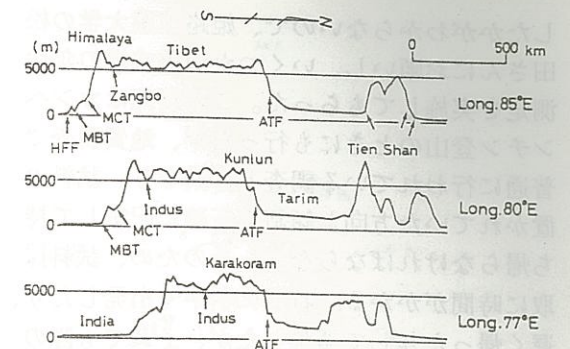


図1. 85° E, 80° E, 77° Eにおけるヒマラヤ-天山地域の地形断面図 (矢印は構造線)³⁾

ヒマラヤ山脈から天山山脈にかけての接峰面を作成し、地形解析を行った。作成された接峰面には、ヒマラヤ山脈とクンルン山脈は急峻な地形を示し、それらにはさまれるチベット高原では地形の起伏の平坦さが強調され、さらに最大傾斜面はヒマラヤ山脈やクンルン山脈にはみられない特異な構造があらわれた。これらの地形的特徴は地表踏査結果とはよく一致した。これらのことから、ヒマラヤ-天山の上昇は地質学的にきわめて新しいものであることが裏付けられた³⁾ (図1)。

○ 古地磁気と同位体年代測定による大陸移動機構の解明

ヒマラヤ山脈がユーラシア大陸とインド大陸の衝突の結果造られ、両大陸の押しあいは今も続いていることはよく知られている。それではいつ頃衝突が起り、ヒマラヤの上昇が始まったか、両大陸は衝突によってどのように変化してきたか、これからどうなっていくか、についてはよくわかっていない。この種の問題解決に近年重要なヒントを与えている学問分野が古地磁気学である。そこでナムナニ登山でもルート沿いにできる限り多くの試料を集め、神戸大学安川研究室の乙藤さんを中心にこの古地磁気を測定してもらうことになった。また、古地磁気を測定した岩石試料のできた年代が判明しなければいつ変化

したかがわからないので、姫路工業大学の松田さんをお願いし、いくつかの火成岩の年代測定を実施してもらった。この研究はカンペンチン登山のときにも行ったが、地質調査で普通に行われている調査とは異なり、試料の置かれていた方向と傾斜を正確に記載して持ち帰らなければならない。そのため、試料採取に時間がかかる。特別に朝早く出発したり、遅く帰ったりして調整したが、それでも隊の行動予定をしばしば乱し、迷惑をかけることがあった。

解析結果は大変興味のある結論が得られた。すなわち、二つの大陸が衝突し、接しているところ（縫合線）近くでは衝突の影響で、古地磁気が90度曲げられており、大陸内部とは大きく異なっていることである（図2）。この成果は、地質の分野ではよく知られている国際的ジャーナル⁴⁾ Earth and Planetary Science Letter, 92, (1989) に採択され、掲載されている。さらに、異なった鉱物種の年代測定によって、ヒマラヤに貫入してきている火成岩の冷却速度も明らかになっている。

○ チベット高原の湖沼、河川、雪、温泉水の塩濃度とイオン組成

注意深く洗浄されたプラスチック瓶を多数用意し、登山期間中、キャラバン中をとわず機会がある毎に、ときには隊への迷惑を知りつつ車を止めてチベット高原の水を採取して回った。採取された試水は、湖：27、河川：82、雪：19、温泉：7、地下水：1を数えた。

これらの試水はまず、陸水の研究に精通されている滋賀大学の川嶋さんに塩濃度とイオン組成の分析をお願いした。その結果、すべての雪と河川水は塩濃度が0.5 g/l以下の淡水で、湖水と温泉水の大部分は塩水であった（図3）。より乾燥した北部の河川水は南部に比べて相対的に高い塩濃度を示す傾向があり、北部、南部に限らず観測された湖のほとんどは閉塞湖で、すべて塩湖であった。また北部の湖沼はNa-ClあるいはNa-SO₄型、南部

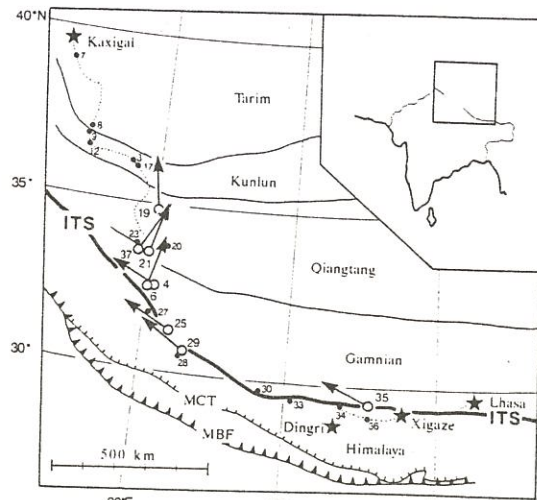


図2. インド大陸とユーラシア大陸の衝突によって縫合線（太い線）の周辺では古地磁気方向がユーラシア大陸に比べて90°近くずれている⁴⁾

はNa-HCO₃型と異なったイオン組成を示すことが明らかになった。

○ チベット高原の河川水、湖水の微量成分
河川水、湖水には微量ながら種々の成分が含まれている。これらの微量元素の分析は塩濃度とイオン組成の分析とは異なる。そこで、弘前大学の中谷さんに放射化分析法によりチベット高原の河川水、湖水中のAl, Mn, Fe, Zn, Ni, Co, Sb, Crなどの微量成分を調べてもらった。その結果、これら微量元素の含有量、元素間の相対比などからチベット高原の河川水、湖水に含まれる微量成分は岩石の風化によるものと結論された。

○ チベット高原の天然水の起源と同位体組成

チベットの降水起源には三種考えられている、ベンガル湾から来るもの、チベット高原で蒸発したもの、西方から来るものである。これらはどのように影響しあっているか、さらに、ナムナニに降っている雪は高所と低所では水の同位体組成がどのように変化しているか、興味深い問題であった。この研究は、

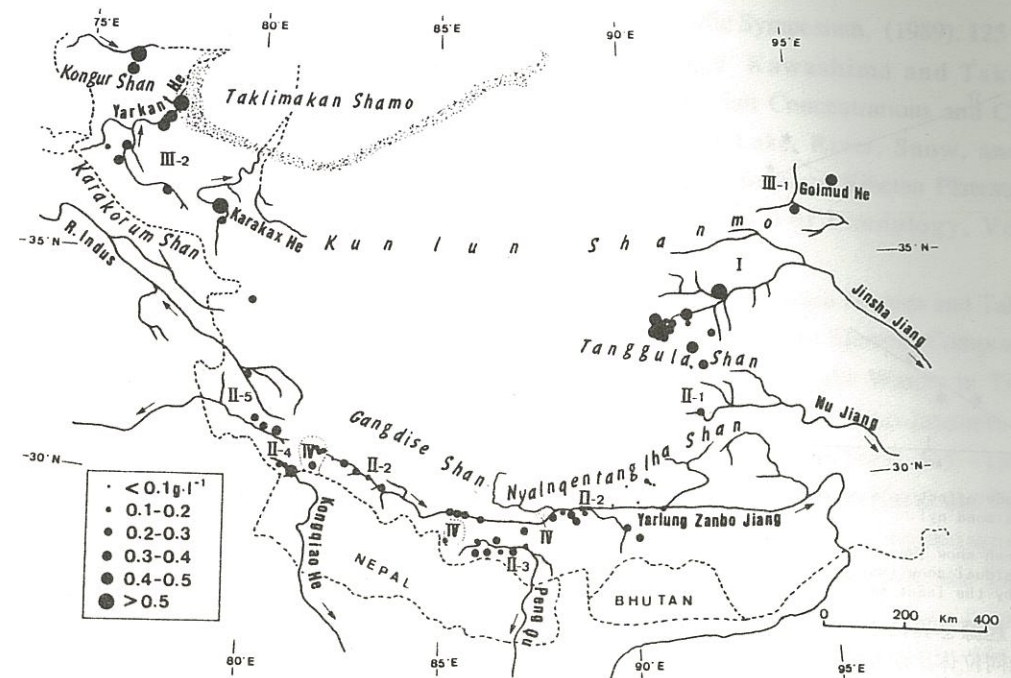


図3. チベット高原の河川水の塩濃度の分布⁶⁾

塩濃度とイオン組成の分析および微量成分の分析に用いた同じ試水の一部を使って、名古屋大学の中井先生に分析・解析してもらった。その結果、河川水の同位体組成には、三つの起源および高度による影響が表れており、なかでも、ベンガル湾からのモンスーンの影響がもっとも顕著で、チベット高原で蒸発したものは検出できない。高度に関する影響では、西の方からの影響は高度が増すほど大きくなり、逆にベンガル湾から来たものは高度が増すほど小さくなることが判明した（図4）。しかし、緯度に関する天然水の同位体組成の変化は認められなかった。

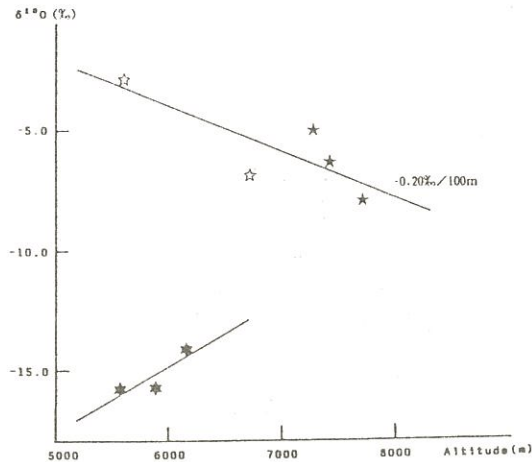
3.2 中国側の地質調査

中国側の学術隊員は種々の事情から遅れて参加する隊員が多かった。地質担当の隊員は中国科学院地質研究所の鄭錫瀾さん、漢景泰さんが中心であった。鄭さんとはよく一緒に調査に出かけ、言葉も不自由なまま二人だけで寝食をともにすることもあったが、現地を

緻密に歩き仕事をすすめるタイプの人で、少くせはあったが、野外調査に経験豊かな地質屋として尊敬できた。彼の専門は構造地質で、ユーラシア-インド両大陸の縫合部分の研究を精力的にこなしていた（図5）。漢さんは好感のもてる若者で、第四紀の研究を専門とし、堆積層、粘土鉱物の分析、花粉分析（図6）などを得意としていた¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾。ナムナニでの滞在は短かったが、鋭い議論が印象に残っている。彼ら二人は、これまでたびたびチベットを訪れ、チベットの地質についてすでに多くの研究成果をあげており、今回の調査は確認および案内を目的に参加されたようにみうけられた。

4. 日中合同チベット高原学術調査討論会

これまで、ナムナニ登山における地質、地球化学調査について述べたが、本時報にも記載されているように、この学術登山によって他の分野でも多くの成果があげられている。



Altitude effect on snow samples from the Mt. Naimona'nyi.

★: fresh snow (May.9), ☆: fresh snow (May.21), ☆: residual snow (May 25 and 26). Solid lines were drawn by the least square method.

図4. 起源を異にする気団による降水では、酸素の同位体比が高度によって逆の傾向を示す⁸⁾

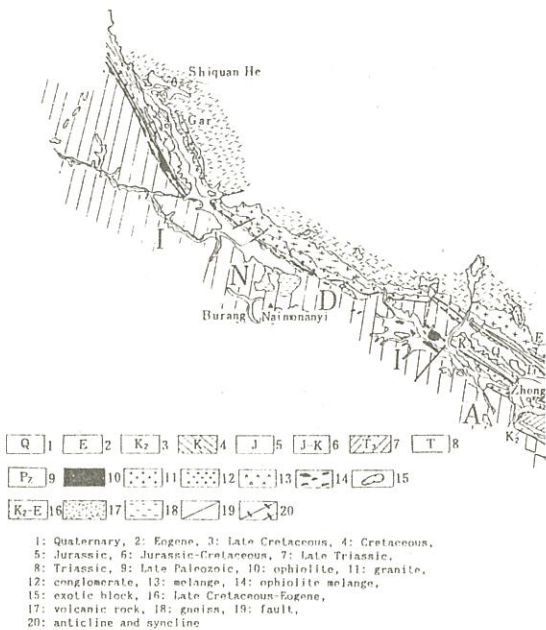


図5. ナムナニ周辺の地質図

そこで、医学、気象、氷河、地質、地球化学、社会・人文科学の広い分野にわたって、日中それぞれの立場から互いに成果を報告、討論

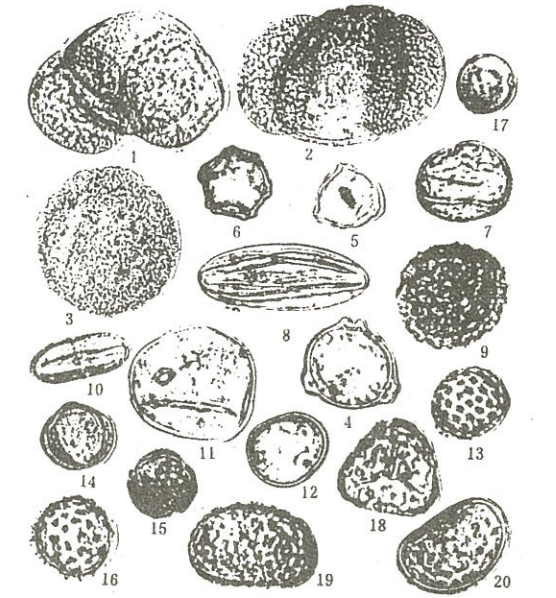


Plate I
1, 2. Pinus sp. 3. Tsuga sp. 4, 5. Betula sp. 6. Alnus sp. 7. Quercus sp. 8. Elphedra sp. 9. Polygonum sp.
10. Ulbelliferia. 11, 12. Gramineae. 13. Chenopodiaceae. 14, 15. Artemisia sp. 16. Compositae. 17. Humulus sp.
18. Selaginella sp. 19. Polypodium sp. 20. Polypodiaceae. 1-3 ×500; 4-20 ×600.

図6. ナムナニ地域の堆積物中の花粉

する場をもつことになった。日中合同チベット高原学術調査討論会と名づけられたシンポジウムは四手井綱英組織委員長のもとに、日本万国博覧会記念協会からの支援も受けて準備が進められ、1988年7月12,13日の2日間京大会館で開催された。ナムナニ登山から三年が経過していた。このシンポジウムには、中国側からは劉東生中国第四紀学会会長を団長とする一行、京大で研究中の中国人研究者が参加し、日本側からはそれぞれ関連の学者が参加した。シンポジウムの内容は後日「Proceedings of Sino-Japanese Joint Scientific Symposium on Tibetan Plateau」Vol.I & Vol.IIとして出版され、中国および日本の関係機関、学会等に配布された。

この刊行をもって、日中友好納木那尼峰合同登山隊の学術活動および成果発表は終わり、以後の研究成果は個々の研究者が属する専門雑誌への発表に移ることとなった。

5. おわりに

日中友好納木那尼峰合同登山隊は、ずいぶん打ち合わせに時間のかかった隊であったが、初登頂に成功し、予定されたコースの調査も終え、病人はでたが大事にはいたらなかった。また、四手井先生、近藤先生、藤田先生らのコンロン裾野までの出迎えもあった。AAC Kの創設当時から話題にされ、50周年記念事業ではまっさきに取り上げられたグルラマンデータは、登山班も、学術班も成功裡に終わったと思う。長かったというのが感想ではあるが、このことは同時に新しい学術登山を生み出さなければならない時期に移ったことでもある。最後に、私個人を振り返ると、一時はヒマラヤの地質をライフワークとしたいと思っていたが、この数年のうちにいつのまにかもとの研究室の雑事のなかに押し込まれてしまっている。いずれ抜け出せる機会がくることを願っている。

参考文献

1. 斎藤惇生: AAC K時報 No.11 151~160
2. 西山孝: AAC K時報 No.9 11~15
3. Takashi Nishiyama Katsuaki Koike, Makoto Omura, Zheng Xilan and Kazuo Fuzita: Characteristics of Initial Landform of the Tibetan Plateau. Proceedings of Sino-Japanese Joint Scientific Symposium, (1989) 49~65
4. Yo-ichi Otofujii, Shoubu Funahara, Jun Matsuo, Fumiyuki Murata, Takashi Nishiyama, Xilan Zheng, and Katsumi Yasukawa: Paleomagnetic Study of Western Tibet: Deformation of a Narrow Zone along the Indus Zangbo Suture between India and Asia. Earth and Planetary Science Letter, 92(1989), 307~315
5. Takaaki Matsuda, Tetsuya Itaya and Takashi Nishiyama: K-Ar and Fission-Track Ages of Igneous Rocks from Southern Margin of Tibetan Plateau, Proceedings of Sino-Japanese

6. Joint Scientific Symposium, (1989). 125~134
6. Munetsugu Kawashima and Takashi Nishiyama: Salt Concentrations and Chemical Types of Lake, River, Snow, and Hot Spring Waters from the Tibetan Plateau, The Japanese Journal of Limnology, Vol. 50 (1989), 93~104
7. Shyu Nakaya, Noriyasu Masuda and Takashi Nishiyama: The Trace Element Compositions in Snow, River and Lake Waters in Tibetan Plateau, Proceedings of Sino-Japanese Joint Scientific Symposium, (1989). 175~184
8. Toshinori Kato, Nobuyuki Nakai and Takashi Nishiyama: Isotopic Compositions and Sources of Natural Waters on the Tibetan Plateau, Proceedings of Sino-Japanese Scientific Symposium, (1989) 185~196
9. Zheng Xilan and Takashi Nishiyama: Discussion on the Tectonic Melange in Yalung Zangbo Suture Zone and Its Tectonic Environment, Proceedings of Sino-Japanese Scientific Symposium, (1989) 143~157
10. Han Jingtai: On Some Quaternary Geological Problems of Mt.Naimona'nyi Region, Proceedings of Sino-Japanese Scientific Symposium, (1989) 1~11
11. Han Jingtai: A Preliminary Study on Clay Minerals of Quaternary Sediments in Mt. Naimona'nyi Region, Proceedings of Sino-Japanese Scientific Symposium, (1989)13~22
12. Han Jingtai: Sporopollen Assemblage Features of Some Sections in Mt.Naimona'nyi Region and Their Paleogeographic Significance, Proceedings of Sino-Japanese Scientific Symposium, (1989) 23~37
13. Lui Tungsheng and Han Jingtai: The Role of Qiughai-Xizang Plateau Uplifting in the Shift of Monsoon Patterns over China, Proceedings of Sino-Japanese Scientific Symposium, (1989) 39~48

<編集後記>

- ・高村会長より本号発行について強い要請をうけ、去年11月10日から編集会議を7回も重ね、ここにやっと皆様の御手許に届くことになりました。
- ・時間の経過と共に、遠征の記憶も消えかかっている、執筆者には大変御苦勞が多かったと思います。種々の事情で今日迄延引してしまいましたが、やはり時報の発行は、素早くやらねばなりません。以後、肝に銘じたいと存じます。
- ・崑崙記事については、この分のみ別刷りして、後援企業団体に贈呈する手筈になって居り、グラビアはカラーにさせて頂きました。尚、本号より大きい活字組みに改定しました。
- ・最後になりましたが、崑崙隊の実質的な記述者である遠山仁氏に、厚く御礼申し上げます。

(新井 浩)

AACK時報11号 1994年5月20日発行
発行者：社団法人京都大学学士山岳会
〒606 京都市左京区吉田本町 京都大学内
TEL 075-771-2500 FAX 075-771-4410
代表：会長 高村 奉樹
編集：酒井 敏明, 新井 浩
印刷：株式会社土倉事務所
〒603 京都市北区小山西花池町1-8
TEL 075-451-4844

